高岡市埋蔵文化財調査報告第11冊

間尽遺跡調査報告Ⅱ

－平成13年度、能越自動車道土砂採取関連事業に伴う調査（A地区）－

2004年3月

高岡市教育委員会

序

岡尻遺跡は，高岡市西部を流れる小矢部川左岸に拡がる西山丘陵の一角に位置しております。また，今回調査が実施されました地点は，谷間にあり平野部からは奥まった立地条件にあります。しかし，調査結果はこのような土地柄に関わらず倉庫群や溝などをはじめとする連綿とした生活の証が確認されるにいたりました。ここでは，年代測定・花粉分析・珪藻分析など様々な自然科学的な方法を採用することにより地面に刻まれた往時の周辺環境の痕跡を追求し，人々はなぜこのような場所に着目し生活を営んだのであろうかとの疑問に少なからず検討材料を示すことができたのではないかと考えられます。

最後になりましたが，調査成果が多くの方々に活用され，さらには地域の歴史及び文化理解の礎となれば幸いです。また，現地調査ならびに報告書作成に際しまして格別のご配慮を賜りました皆様方に厚く御礼申しあげます。

平成16年3月10日

高岡市教育委員会
教育長　細呂木　六良

例　言

1．本書は、能越自動車道土砂採取関連事業に伴い実施した、関尻遺跡発掘調査（A地区）の報告書である。

2．当調査は、国土交通省北陸地方整備局からの委託を高岡市（担当：高岡市建設部能越自動車道対策課）が受託した事業である。

3．調査地区は、富山県高岡市手洗野である。

4．現地調査は、平成９年度に試掘調査、平成13年度に本発掘調査を実施した。

5．報告書作成は、平成15年度に実施した。

6．調査関係者は以下の通りである。

平成９年度（A地区試掘調査）

課　長：田村晴彦

課長補佐：大石　茂

主幹兼係長：石浦正雄

主　査：山口辰一

文化財保護主事：根津明義、荒井　隆、太田浩司

担　当：山口辰一、太田浩司

調査受託：有限会社山武考古学研究所（所長平岡和夫）

担　当：関宮正光、日沖刷史

平成13年度（A地区本発掘調査）

課　長：大石　茂

主　幹：天谷隆夫

主　査：山口辰一

文化財保護主事：根津明義、荒井　隆、太田浩司

担　当：山口辰一、荒井　隆

調査受託：有限会社山武考古学研究所

担　当：湯原勝美、有山径世、千葉孝之

平成15年度（報告書作成）

課　長：大石　茂

副主幹：本林弘吉

主　任：根津明義、荒井　隆

文化財保護主事：太田浩司

担　当：太田浩司

報告書作成業務受託：有限会社山武考古学研究所

担　当：湯原勝美

7．調査実務（現地調査および報告書作成）は、高岡市教育委員会の監理のもと、有限会社山武考古学研究所が実施した。

8．自然科学分野に係わる各種分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託して行った。

また、溝SD205・209・225、自然流路SD268、土坑SK119から出土した種実遺体については、御富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所の中村亮仁氏に同定していただいた。同定結果については、『関尻遺跡調査報告Ⅲ』「第５章」に掲載されている。

9．出土遺物のうち、輸入陶磁器については国立歴史民俗博物館の小野正敏氏に、近世陶磁器については佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏にご教示いただいた。

10．現地調査から本書の作成に至るまで、下記の方々及び諸機関からご教示・ご協力を賜った。

小島俊彰、西井龍儀、邑本順亮、社団法人高岡市シルバー人材センター、大成エンジニアリング株式会社　（順不同・敬称略）

11．本書の執筆担当は、以下の通りである。

第1章第1節・第2節　…太田浩司

第5章　…パリノ・サーヴェイ株式会社

第1章第3節・第4節、第2～4章、第6章　…湯原勝美

凡　例

1．遺構実測図等における方位は、すべて座標北を示している。

2．本書における遺構記号は次の通りである。

土坑SK101～、溝・自然流路SD201～、掘立柱建物SB401～、井戸SE501～、柵列SA601～、小ピットSP901～

3．掘立柱建物の記述にあたっては、柱穴に柱根もしくは柱痕跡が残っているものが少なく、柱位置を正確におさえることが困難であるため、まず、復元柱間寸法を尺単位でおさえ、1尺を0.3mとして換算した。なお、本書で示した掘立柱建物の組み立てはすべて原案である。

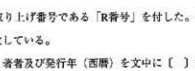
4．土層説明は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』（1996年版）によった。

5．遺物の注記は、岡尻遺跡A地区の略号「MAZ9」、R番号、出土遺構・地点、層位等を続けて記した。

6．本書に掲載した遺物番号は、種別に係わりなくすべて通し番号とし、その後にカッコで発掘調査時の遺物取り上げ番号である「R番号」を付した。本文及び遺物観察表・図面・図版の番号はすべて一致している。

7．引用文献は、著者及び発行年（西暦）を文中に〔　〕で示し、巻末に一括して掲載した。

8．図面中のトーンは以下の内容で使用した。



調査参加者

発掘　鮎幸　弘、五十嵐昭平、一宮健治、越前時男、小野田忠国、鍛治文江、金森栄治、木村健次、国沢啓二、越口辰男、烏　明、新谷松男、新保勝正、沙　小織、大門千保子、高岡信一、竹田麻美、田中あけみ、田中恵美、中沢忠暗、中野智子、永原栄治、長原順子、中村一夫、中村弘志、西田　繁、早川　清、広谷宏昭、藤井理絵、福本　繁、舟木藤夫、古吉　亨、本江富雄、本間　敬、堀　清勝、真木久二、松沢秀雄、三池泰美、水野　熙、南　弘喜、山崎勝二、山崎みゆき、山田次男、吉岡奈緒美、吉田敏夫、渡辺清三

整理　大河内瞳、大橋美代子、奥村有里子、河村公子、菅野栄子、木村春代、西山智佳子、真茅直子、三浦美穂、水口智子

目　　次

序
例言
凡例

第1章　序　説……1
第1節　遺跡概観……1
第2節　調査に至る経緯……4
第3節　調査概観……5

第2章　第1面……7
第1節　概　観……7
第2節　遺　構……8
第3節　遺　物……11

第3章　第2面……12
第1節　概　観……12
第2節　遺　構……12
第3節　第1遺物包含層……22
第4節　遺　物……23

第4章　第3面……29
第1節　概　観……29
第2節　遺　構……29
第3節　第2遺物包含層……31
第4節　遺　物……31

第5章　自然科学分析……35

第6章　結　語……58

図 面 目 次

図面1　遺跡実測図　A地区第1面全体図（1／400）
図面2　遺跡実測図　A地区第1面遺構配置図（1／200）
図面3　遺構実測図　土坑SK102・105～107実測図（1／40）
図面4　遺構実測図　土坑SK108・109実測図（1／40）、小ピットSP903～907実測図（1／20）
図面5　遺構実測図　小ピットSP908・909実測図（1／20）、道路SF701実測図（1／80）
図面6　遺跡実測図　A地区第2面全体図（1／400）
図面7　遺跡実測図　A地区第2面遺構配置図（1／200）
図面8　遺構実測図　掘立柱建物SB401実測図（1／60）、柵列SA601実測図（1／60）
図面9　遺構実測図　掘立柱建物SB401実測図（1／60）、柵列SA601実測図（1／60）
図面10　遺構実測図　掘立柱建物SB402実測図（1／60）
図面11　遺構実測図　掘立柱建物SB403実測図（1／60）
図面12　遺構実測図　掘立柱建物SB404実測図（1／60）
図面13　遺構実測図　掘立柱建物SB405実測図（1／60）
図面14　遺構実測図　掘立柱建物SB406・407実測図（1／60）
図面15　遺構実測図　土坑SK101・103・110・113実測図（1／40）
図面16　遺構実測図　土坑SK104実測図（1／40）
図面17　遺構実測図　土坑SK114～118・122実測図（1／40）
図面18　遺構実測図　土坑SK119・121・123・124実測図（1／40）、小ピットSP923・925実測図（1／20）
図面19　遺構実測図　溝平面図（1／300）
図面20　遺構実測図　溝SD203・223・224・228・231・241・242・248実測図（1／40）
図面21　遺構実測図　溝SD225・250・261・265実測図（1／40）、自然流路SD244実測図（1／40）
図面22　遺構実測図　溝SD225実測図（1／40）
図面23　遺跡実測図　A地区第3面全体図（1／400）
図面24　遺構実測図　井戸SE501実測図（1／40）、土坑SK125実測図（1／40）
図面25　遺構実測図　自然流路SD268実測図（1／200）
図面26　遺構実測図　自然流路SD268実測図（1／60）、溝SD269実測図（1／60）
図面27　遺物実測図　溝SD213、掘立柱建物SB401・403出土遺物
図面28　遺物実測図　掘立柱建物SB403・404出土遺物
図面29　遺物実測図　掘立柱建物SB404出土遺物
図面30　遺物実測図　掘立柱建物SB404、土坑SK103・104出土遺物
図面31　遺物実測図　土坑SK104出土遺物
図面32　遺物実測図　土坑SK104出土遺物
図面33　遺物実測図　土坑SK104出土遺物
図面34　遺物実測図　土坑SK104出土遺物
図面35　遺物実測図　土坑SK104出土遺物
図面36　遺物実測図　土坑SK104出土遺物
図面37　遺物実測図　土坑SK104出土遺物
図面38　遺物実測図　土坑SK104出土遺物

図面39　遺物実測図　土坑ＳＫ104・116・117・119出土遺物
図面40　遺物実測図　土坑ＳＫ124、小ピットＳＰ923・925、溝ＳＤ224・225出土遺物
図面41　遺物実測図　溝ＳＤ225出土遺物
図面42　遺物実測図　溝ＳＤ225・227・228・231出土遺物
図面43　遺物実測図　溝ＳＤ232・236・241・243・246、自然流路ＳＤ244出土遺物
図面44　遺物実測図　自然流路ＳＤ244、第１包含層出土遺物
図面45　遺物実測図　第１包含層出土遺物
図面46　遺物実測図　第１包含層出土遺物
図面47　遺物実測図　第１包含層出土遺物
図面48　遺物実測図　第１包含層出土遺物
図面49　遺物実測図　第１包含層出土遺物
図面50　遺物実測図　第１包含層出土遺物
図面51　遺物実測図　井戸ＳＥ501出土遺物
図面52　遺物実測図　井戸ＳＥ501、自然流路ＳＤ268出土遺物
図面53　遺物実測図　自然流路ＳＤ268出土遺物
図面54　遺物実測図　自然流路ＳＤ268出土遺物
図面55　遺物実測図　自然流路ＳＤ268出土遺物
図面56　遺物実測図　自然流路ＳＤ268出土遺物
図面57　遺物実測図　自然流路ＳＤ268出土遺物
図面58　遺物実測図　自然流路ＳＤ268、溝ＳＤ269、第２包含層出土遺物
図面59　遺物実測図　第２包含層出土遺物
図面60　遺物実測図　第２包含層出土遺物

図　版　目　次

図版１　遺跡写真　１．調査前遺跡遠景（東上空から）
　　２．調査前遺跡遠景（西上空から）
図版２　遺跡写真　１．調査区全景／第１面（真上から、図版右が北方向）
図版３　遺跡写真　１．調査区全景／第２面（真上から、図版右が北方向）
図版４　遺跡写真　１．調査区全景／第３面（真上から、図版右が北方向）
図版５　遺跡写真　１．調査区東壁土層断面（南西から）
　　２．調査区東壁土層断面（北西から）
　　３．調査区東壁土層断面（西から）
図版６　遺跡写真　１．調査区全景／第１面（東上空から）
　　２．調査区全景／第１面（西上空から）
図版７　遺構写真　１．土坑ＳＫ102完掘（南から）
　　２．土坑ＳＫ105完掘（北から）
　　３．土坑ＳＫ106完掘（東から）
図版８　遺構写真　１．土坑ＳＫ107完掘（南から）
　　２．土坑ＳＫ108完掘（南から）

3. 土坑ＳＫ109完掘（西から）

図版９　遺構写真　1. 小ピットＳＰ906模図め石出土状況（北から）

2. 小ピットＳＰ906完掘（北から）

3. 小ピットＳＰ907柱根出土状況（南から）

図版10　遺構写真　1. 小ピットＳＰ909柱根出土状況（南から）

2. 溝ＳＤ213-№１遺物出土状況（南から）

3. 道路ＳＦ701完掘（北から）

図版11　遺跡写真　1. 調査区全景／第２面（東上空から）

2. 調査区全景／第２面（西上空から）

図版12　遺構写真　1. 掘立柱建物ＳＢ401・402、溝ＳＤ243・246付近全景（真上から、図版右が北方向）

2. 掘立柱建物ＳＢ403・404付近全景（北から）

図版13　遺構写真　1. 掘立柱建物ＳＢ403・404・406・407付近全景（真上から、図版右が北方向）

図版14　遺構写真　1. 掘立柱建物ＳＢ403-Ｐ７柱根出土状況（南から）

2. 掘立柱建物ＳＢ403-Ｐ８柱根出土状況（北から）

3. 掘立柱建物ＳＢ403-Ｐ12柱根出土状況（北から）

図版15　遺構写真　1. 掘立柱建物ＳＢ404-Ｐ７礎盤出土状況（南から）

2. 掘立柱建物ＳＢ404-Ｐ８礎盤出土状況（西から）

3. 掘立柱建物ＳＢ404-Ｐ９土師出土状況（東から）

図版16　遺構写真　1. 掘立柱建物ＳＢ404-Ｐ12礎盤出土状況（東から）

2. 掘立柱建物ＳＢ404-Ｐ15礎盤出土状況（東から）

3. 掘立柱建物ＳＢ404-Ｐ16礎盤出土状況（北から）

図版17　遺構写真　1. 掘立柱建物ＳＢ406・407全景（南から）

2. 土坑ＳＫ101完掘（南から）

3. 土坑ＳＫ103完掘（東から）

図版18　遺構写真　1. 土坑ＳＫ104完掘（北から）

2. 土坑ＳＫ104第３・４層検出状況（北から）

3. 土坑ＳＫ104土層断面（東から）

図版19　遺構写真　1. 土坑ＳＫ104土層断面（東から）

2. 土坑ＳＫ104箸状木製品出土状況

3. 土坑ＳＫ104箸状木製品出土状況

図版20　遺構写真　1. 土坑ＳＫ110完掘（西から）

2. 土坑ＳＫ113完掘（南から）

3. 土坑ＳＫ114完掘（南から）

図版21　遺構写真　1. 土坑ＳＫ115完掘（東から）

2. 土坑ＳＫ116全景（南東から）

3. 土坑ＳＫ117完掘（西から）

図版22　遺構写真　1. 土坑ＳＫ118完掘（北から）

2. 土坑ＳＫ119全景（南東から）

3. 土坑ＳＫ121完掘（西から）

図版23　遺構写真　1. 土坑ＳＫ122完掘（西から）

2. 土坑ＳＫ123完掘（北東から）

3. 小ピットＳＰ923全景（北から）
図版24　遺構写真　1. 溝ＳＤ203完掘（南から）
2. 溝ＳＤ223完掘（南から）
3. 溝ＳＤ224完掘（南から）
図版25　遺構写真　1. 溝ＳＤ225全景（南から）
2. 溝ＳＤ225遺物出土状況（南東から）
3. 溝ＳＤ225Ｑセクション土層断面（南から）
図版26　遺構写真　1. 溝ＳＤ231全景（西から）
2. 溝ＳＤ231遺物出土状況（北から）
3. 溝ＳＤ234完掘（北から）
図版27　遺構写真　1. 溝ＳＤ236土層断面（西から）
2. 溝ＳＤ241全景（東から）
3. 溝ＳＤ243・246遺物出土状況
図版28　遺構写真　1. 溝ＳＤ247完掘（西から）
2. 溝ＳＤ259・265付近全景（南から）
3. 自然流路ＳＤ244全景（北西から）
図版29　遺跡写真　1. 調査区全景／第３面（東上空から）
2. 調査区全景／第３面（西上空から）
図版30　遺構写真　1. 井戸ＳＥ501全景（北から）
2. 井戸ＳＥ501水溜検出状況（北から）
3. 土坑ＳＫ125完掘（北から）
図版31　遺構写真　1. 自然流路ＳＤ268全景（北西から）
2. 自然流路ＳＤ268土層断面（南西から）
3. 溝ＳＤ269完掘（南から）
図版32　遺物写真　溝ＳＤ213、掘立柱建物ＳＢ401・403・404出土遺物
図版33　遺物写真　掘立柱建物ＳＢ404、土坑ＳＫ103・104出土遺物
図版34　遺物写真　土坑ＳＫ104出土遺物
図版35　遺物写真　土坑ＳＫ104出土遺物
図版36　遺物写真　土坑ＳＫ104出土遺物
図版37　遺物写真　土坑ＳＫ104出土遺物
図版38　遺物写真　土坑ＳＫ104出土遺物
図版39　遺物写真　土坑ＳＫ104出土遺物
図版40　遺物写真　土坑ＳＫ104出土遺物
図版41　遺物写真　土坑ＳＫ104出土遺物
図版42　遺物写真　土坑ＳＫ104・116・117・119出土遺物
図版43　遺物写真　土坑ＳＫ124、小ピットＳＰ923・925、溝ＳＤ203・224・225出土遺物
図版44　遺物写真　溝ＳＤ225・227・228出土遺物
図版45　遺物写真　溝ＳＤ231・232・236・241・243・246、自然流路ＳＤ244出土遺物
図版46　遺物写真　自然流路ＳＤ244、第１包含層出土遺物
図版47　遺物写真　第１包含層出土遺物
図版48　遺物写真　第１包含層出土遺物

図版49　遺物写真　第１包含層出土遺物
図版50　遺物写真　第１包含層出土遺物
図版51　遺物写真　第１包含層出土遺物
図版52　遺物写真　第１包含層、井戸ＳＥ501出土遺物
図版53　遺物写真　自然流路ＳＤ268出土遺物
図版54　遺物写真　自然流路ＳＤ268出土遺物
図版55　遺物写真　自然流路ＳＤ268出土遺物
図版56　遺物写真　自然流路ＳＤ268出土遺物
図版57　遺物写真　自然流路ＳＤ268、溝ＳＤ269出土遺物
図版58　遺物写真　溝ＳＤ269、第２包含層出土遺物
図版59　遺物写真　第２包含層出土遺物
図版60　遺物写真　鉄製品Ｘ線写真

挿図目次

第１図　遺跡位置図〔１〕（１／50,000）……1
第２図　遺跡地図〔１〕（１／15,000）……2
第３図　遺跡地図〔２〕（１／15,000）……3
第４図　遺跡位置図〔２〕（１／150,000）……4
第５図　調査地区位置図（１／5,000）……5
第６図　基本層序図……6
第７図　第１遺物包含層出土土器類の重量分布図（１／600）……21
第８図　第１遺物包含層出土の陶磁器類分布図（１／500）……22
第９図　第２遺物包含層出土土器類の重量分布図（１／600）……30
第10図　第２面Ⅰ期の遺構配置図（１／500）……60
第11図　第２面Ⅱ期の遺構配置図（１／500）……60
第12図　第２面Ⅲ期の遺構配置図（１／500）……61
第13図　第２面Ⅳ期の遺構配置図（１／500）……61
第14図　Ａ～Ｃ地区時期別遺構分布図〔１〕古代（１／600）……63・64
第15図　Ａ～Ｃ地区時期別遺構分布図〔２〕古代末期～中世前期（１／600）……65・66
第16図　Ａ～Ｃ地区時期別遺構分布図〔３〕中世前期（１／600）……67・68
第17図　Ａ～Ｃ地区時期別遺構分布図〔４〕近世（１／600）……69・70

別表目次

別表１　掘立柱建物柱穴規模表……71
別表２　遺物観察表……72

第1章　序　　説

第1節　遺跡概観

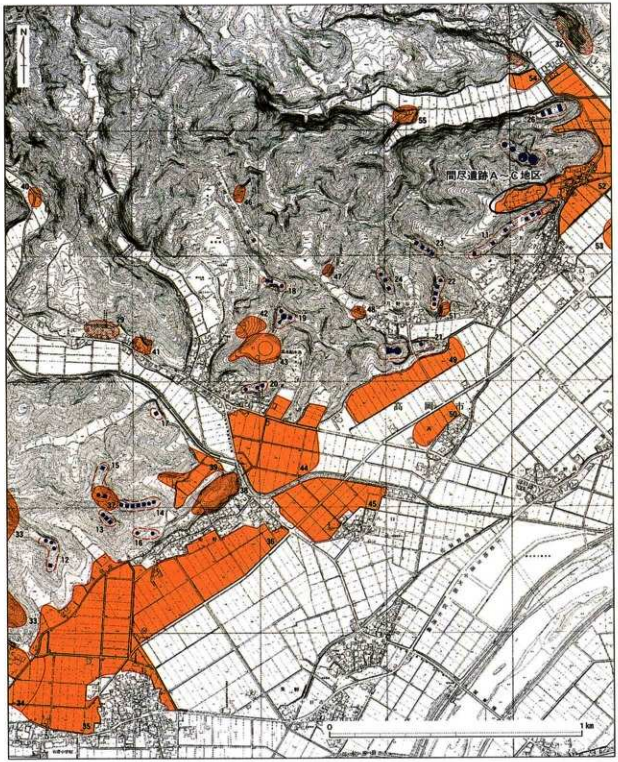
当調査区は、砺波平野西部を流れる小矢部川左岸に形成された西山丘陵の一角にある開析谷に位置している。また、土壌の性質は砂質土を主体としており木製品が遺存するなど調査時においても軟弱で湿気がちであることがみてとれ、建物を建築する上で不利な条件であったことがうかがわれる。

古代には、交通の動脈である北陸道が通り、礪波郡及び射水郡の境界が近傍にあったとされている。また、平成11年度には北東に2km程度離れた五十里地区において掘立柱建物などをはじめとして木簡や墨書土器が確認され、東大寺領荘園である須加荘ではないかと判断されている。

中世には、越中国最古とされる曹洞宗寺院国上山信光寺が造営されるなど信仰の拠点が各所に営まれた。さらには、能越自動車道本線工事に係る調査においては集落跡などの居住域の存在が確認されており、着実に往時の地域像が明らかになりつつある。また、周辺には頭川古墓や安居山城など様々な種類の生活痕跡が認められる。

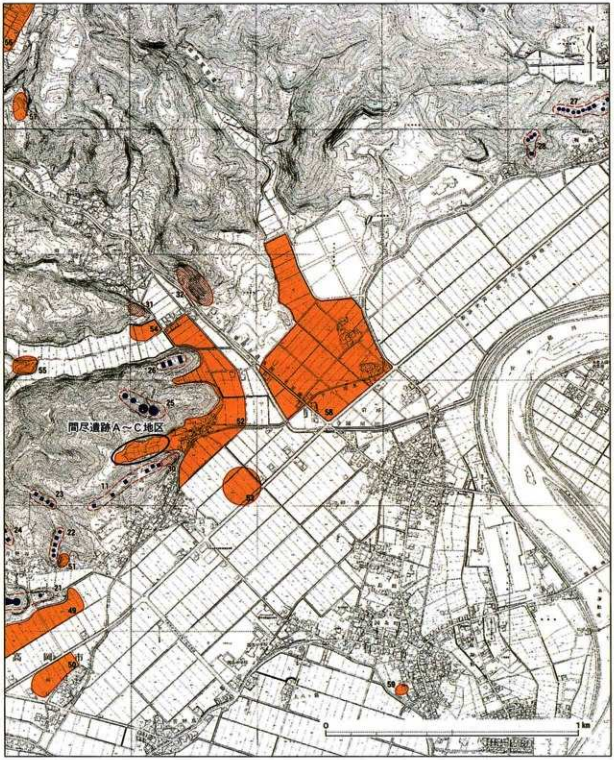
当調査区は、このような環境下においてあえて倉庫群や溝などを整備された意義を考えさせ、地勢的に比較的開鎖環境にある地域において古代から中世にかけての人々がどのような生活を営んでいたのであろうか探るうえで少なからず判断材料を与えたものといえる。

第1図　遺跡位置図〔1〕（1／50,000）



11.倉谷古墳群、12.麻生谷殿谷内古墳群、13.柴野口制Ⅰ古墳群、14.柴野口制Ⅱ古墳群、15.柴野口制Ⅲ古墳群、16.柴野口制Ⅳ古墳群
17.柴野春日古墳群、18.釈迦堂古墳群、19.男撰古墳群、20.笹八口谷内古墳群、21.立山古墳群、22.道ヶ谷内Ⅰ古墳群
23.道ヶ谷内Ⅱ古墳群、24.道ヶ谷内Ⅲ古墳群、25.四十九古墳群、26.安居山古墳群、29.江道横穴墓群、30.手洗野古墓群
31.膨川古墓群、32.膨川城ヶ平横穴墓群、33.麻生谷殿谷内城跡、34.麻生谷新生園遺跡、35.麻生谷遺跡、36.柴野遺跡
37.柴野城ヶ平城跡、38.柴野高の宮城跡、39.柴野守善寺遺跡、40.境久寺遺跡、41.円通庵遺跡、42.釈迦堂遺跡、43.篠八口砦跡
44.笹八口遺跡、45.八口遺跡、46.月野谷石飛遺跡、47.月野谷千草遺跡、48.月野谷大谷地遺跡、49.宮田遺跡、50.高辻遺跡
51.道ヶ谷内遺跡、52.開尽遺跡、53.手洗野赤浦遺跡、54.滝ヶ谷内Ⅰ遺跡、55.滝ヶ谷内Ⅱ遺跡

第2図　遺跡地図〔1〕（1／15,000）



11.倉谷古墳群、21.立山古墳群、22.道ヶ谷内Ⅰ古墳群、23.道ヶ谷内Ⅱ古墳群、24.道ヶ谷内Ⅲ古墳群、25.四十九古墳群
26.安居山古墳群、27.板屋谷内B古墳群、板屋谷内C古墳群、30.手洗野古墓群、31.頭川古墓群、32.頭川城ヶ平横穴墓群
49.宮田遺跡、50.高辻遺跡、51.道ヶ谷内遺跡、52.間尽遺跡、53.手洗野赤浦遺跡、54.滝ヶ谷内Ⅰ遺跡、55.滝ヶ谷Ⅱ内遺跡
56.頭川オスキノ原遺跡、57.頭川宮中遺跡、58.岩坪岡田島遺跡、59.佐加野ラントウ遺跡

第3図　遺跡地図〔2〕（1／15,000）

第２節　調査に至る経緯

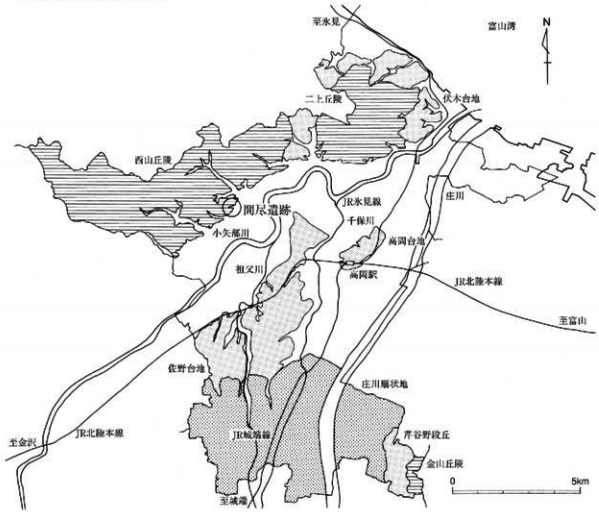
当調査は、能越自動車道土砂採取関連遺跡の調査である。

平成９年度

調査は、北陸地方建設局富山工事事務所長から高岡市建設部長を経て依頼があり、試掘調査を実施するにいたった。現地調査は、民間調査機関（(有）山武考古学研究所）により実施された。現地調査期間は、平成９年11月19日から同年12月５日である。調査成果は、古代及び中世の遺構面などが確認され、土木工事等の実施に際しては事前調査が必要であることが判断された。

平成13年度

本発掘調査（A地区）ならびに試掘調査（B・C地区）が実施された。調査に先立ち国土交通省の工事計画変更に伴い開発区域の変更が生じた旨、建設部能越自動車道対策課を経由して申し入れがあった。この計画変更により試掘調査が実施されていない箇所が認められたことから試掘調査が実施された。試掘調査の結果は、新たに本発掘調査が必要とされることが判明し、翌年度において本発掘調査を実施することが決まった。現地調査期間は、平成13年８月27日～平成13年12月26日である。現地調査は、(有）山武考古学研究所が受託し実施された。



第４図　遺跡位置図（２）（１／150,000）

第3節　調査概観

1. 調査の経過

A地区の発掘調査は平成13年8月27日から同年12月26日の約4ヶ月間にわたって実施した。本地区では遺構検出面が3面確認されており、順次、上層から調査を行った。調査区の面積は2,250㎡で、3面を合計した延べ調査面積は約6,750㎡である。

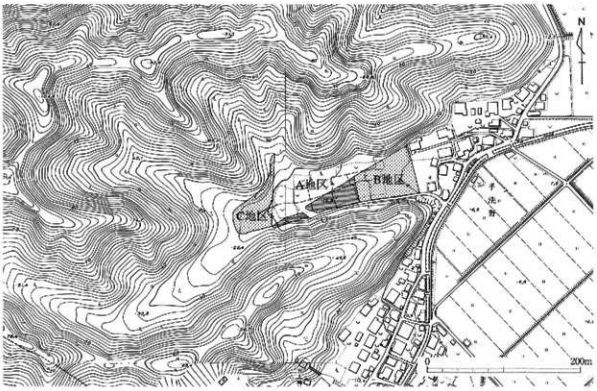
2. 調査の方法

グリッドの設定

調査区の座標は、日本測地系（第Ⅶ系）を基準に設定した。座標杭は10m間隔で打設し、これをもとに調査区上に一辺5mの正方形グリッドを設定した。座標交点には、A～C地区をカバーするかたちで、北から南へA・B・C…、西から東へ1・2・3…と仮称を付し、各北西隅部の座標仮称をそのままグリッド呼称として使用した。A地区の基点としたG9杭の座標値はX=84260、Y=18030である。また、各グリッドには、4分割して一辺2.5mの小グリッドを設定した。小グリッドには、それぞれ方位を示すNE・SE・SW・NWの略称を付し、「G9－NE区」（大グリッド－小グリッド）のように表記した。

遺構検出面と遺物包含層

本地区における遺構検出面は3面あり、便宜上、上から第1面、第2面、第3面と呼称した。また、遺物包含層は2層検出されており、上から第1遺物包含層、第2遺物包含層と呼称した。

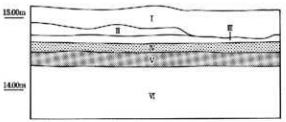


第5図　調査地区位置図（1／5,000）

3. 基本層序

Ⅰ層は盛土である。調査区内には重機による撹乱が随所にみられ、南側を中心に掘削残土が厚く盛られている。Ⅱ層は耕作土で、この上面が現地表面となる。Ⅲ層は旧耕作土と思われる。Ⅳ層は遺物包含層である（第１遺物包含層）。遺物は古代末期から中世前期のものを中心に出土している。Ⅴ層は同じく遺物包含層で（第２遺物包含層）、古墳時代から奈良時代のものを中心に出土している。Ⅵ層以下は自然流路状の乱流堆積層で一様な層序はみられない。遺物は出土していない。

Ⅳ層上面（第１面）からは近世の遺構が、Ⅴ層上面（第２面）からは古代末期から中世前期の遺構が、Ⅵ層上面（第３面）からは古代の遺構が検出されている。



第６図　基本層序図

4. 調査の概要

検出遺構

各遺構検出面から検出された遺構は以下の通りである。

第１面：土坑７基（SK102・105～109・111）、小ピット７基（SP903～909）、溝20条（SD201・202・204～221）、道路１条（SF701）

第２面：掘立柱建物７棟（SB401～407）、柵列１基（SA601）、土坑15基（SK101・103・104・110・113～119・121～124）、小ピット２基（SP923・925）、溝39条（SD203・222～243・245～250・254～256・258～261・265～267）、自然流路１条（SD244）

第３面：井戸１基（SE501）、土坑１基（SK125）、溝１条（SD269）、自然流路１条（SD）

出土遺物

出土した遺物は以下の通りである。

土器類：縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、中世土師器、白磁、青磁、珠洲、肥前磁器

土製品：管状土錘、用途不明品

石製品：子持勾玉、砥石

木製品：柱根、礎盤、箸状木製品、円形曲物、方形曲物、連歯下駄、差歯下駄、板材、角材、丸木、用途不明品

金属製品：銭貨、用途不明品、鉄滓

第2章　第　1　面

第1節　概　　観

本面は、基本層序第Ⅳ層の上面を遺構検出面とするものである。検出された遺構は、土坑7基、小ピット7基、溝20条、道路1条である。出土遺物は僅かであるが、遺構の検出状況などから判断される本面の所属時期は、概ね近世と思われる。遺構の分布は、調査区中央から東側にかけて散漫にみられる。

第2節　遺　　構

1. 土　坑

土坑SK102（図面3、図版7）

調査区中央のP25、Q25区に位置する。平面形状は長方形を呈し、断面形状は台形状となる。規模は、長軸3.70m、短軸1.10m、深さ0.09mで、主軸方位はN－0°－Eを示す。出土遺物なし。

土坑SK105（図面3、図版7）

調査区中央のO26、P26区に位置する。平面形状は長方形を呈し、断面形状は台形状となる。規模は、長軸0.90m、短軸0.65m、深さ0.17mで、主軸方位はN－70°－Eを示す。遺物は、流れ込みと考えられる土師器片が僅かに出土している。

土坑SK106（図面3、図版7）

調査区中央のO26・27、P26・27区に位置する。平面形状は長方形を呈し、断面形状は台形状となる。規模は、長軸1.35m、短軸1.00m、深さ0.20mで、主軸方位はN－7°－Wを示す。出土遺物なし。

土坑SK107（図面3、図版8）

調査区中央のO27、P27・28区に位置する。平面形状は長方形を呈し、断面形状は台形状となる。規模は、長軸2.35m、短軸1.90m、深さ0.19mで、主軸方位はN－23°－Wを示す。遺物は、流れ込みと考えられる土師器片が僅かに出土している。

土坑SK108（図面4、図版8）

調査区中央のP27・28区に位置する。平面形状は長方形を呈し、断面形状は階段状となる。規模は、長軸2.10m、短軸0.55m、深さ0.15mで、主軸方位はN－78°－Eを示す。遺物は、流れ込みと考えられる土師器、須恵器片が僅かに出土している。

土坑SK109（図面4、図版8）

調査区中央のP28、Q28区に位置する。平面形状は長方形を呈し、断面形状は弧状となる。規模は、長軸2.05m、短軸0.60m、深さ0.26mで、主軸方位はN－19°－Wを示す。遺物は、流れ込みと考えられる土師器片が僅かに出土している。

土坑SK111（図面２）

調査区東側のL28、M28区に位置する。調査区の北壁際から検出されたもので、遺構の大半が調査区外にあり、全容は不明である。出土遺物なし。

2. 小ピット

小ピットSP903（図面４）

調査区中央のO25区に位置する。平面形状は楕円形を呈し、断面形状は台形状となる。規模は、長軸0.33m、短軸0.26m、深さ0.31mである。ほぼ中央から丸木の柱根が検出されている。柱根の大きさは、現存長27.0cm、最大径7.0cmである。出土遺物なし。

小ピットSP904（図面４）

調査区中央のO25区に位置する。平面形状は円形を呈し、断面形状は台形状となる。規模は、長軸0.25m、短軸0.23m、深さ0.33mである。ほぼ中央から丸木の柱根が検出されている。柱根の大きさは、現存長34.0cm、最大径8.0cmである。出土遺物なし。

小ピットSP905（図面４）

調査区中央のO25区に位置する。平面形状は円形を呈し、断面形状は台形状となる。規模は、長軸0.38m、短軸0.34m、深さ0.41mである。中央やや北西寄りから丸木の柱根が検出されている。柱根の大きさは、現存長50.0cm、最大径11.0cmである。出土遺物なし。

小ピットSP906（図面４、図版９）

調査区中央のN26区に位置する。平面形状は円形を呈し、断面形状は台形状となる。規模は、長軸0.90m、短軸0.76m、深さ0.29mである。柱根は検出されていないが、根固め石と考えられる円礫が21点出土している。円礫の大きさは径8.0～22.5cmである。出土遺物なし。

小ピットSP907（図面４、図版９）

調査区中央のP26区に位置する。平面形状は円形を呈し、断面形状は台形状となる。規模は、長軸0.44m、短軸0.40m、深さ0.41mである。中央やや南東寄りから丸木の柱根が検出されている。柱根の大きさは、現存長41.0cm、最大径20.0cmである。出土遺物なし。

小ピットSP908（図面５）

調査区中央のP25区に位置する。平面形状は円形を呈し、断面形状は台形状となる。規模は、長軸0.32m、短軸0.31m、深さ0.46mである。ほぼ中央から丸木の柱根が検出されている。柱根の大きさは、現存長62.0cm、最大径10.0cmである。出土遺物なし。

小ピットSP909（図面５、図版10）

調査区中央のP25区に位置する。平面形状は円形を呈し、断面形状は台形状となる。規模は、長軸0.33m、短軸0.31m、深さ0.20mである。ほぼ中央から丸木の柱根が検出されている。腐朽著しい。柱根の大きさは、現存長17.0cm、最大径6.0cmである。出土遺物なし。

3. 溝

溝SD201（図面２）

調査区中央のQ22・23、R23・24区に位置する。東西方向へ緩い弧状を呈して延びる溝で、断面形状は弧状を呈する。西端は重機による攪乱によって切られる。本遺構の北側は地形的にやや低くなることから、

これに沿って構築されたものと思われる。確認された規模は、全長10.88m以上、上幅0.22～0.50m、深さ0.06mである。覆土は黒褐色土の単層である。出土遺物なし。

溝SD202（図面２）

調査区中央のQ24、R24区に位置する。南北方向へ直線的に延びる短い溝で、南端は溝SD201と接している。断面形状は弧状を呈する。規模は、全長1.95m、上幅0.25～0.30m、深さ0.03mで、主軸方位はN－9°－Wを示す。覆土は黒褐色土の単層である。出土遺物なし。溝SD201と溝SD202は、覆土の状況が近似しており、一連の遺構として機能していた可能性が考えられる。

溝SD204（図面２）

調査区中央のN25～27、O25区に位置する。東西方向へ直線的に延びる溝で、西側で「く」の字状に屈曲する。断面形状は弧状を呈する。西端は調査区外へ延びる。確認された規模は、全長8.91m以上、上幅0.20～0.55m、深さ0.05mで、主軸方位はN－78°－Eを示す。覆土は、礫φ20～30mmを含む灰黄褐色砂質土の単層である。出土遺物なし。

溝SD205（図面２）

調査区中央のO26、P26区に位置する。南北方向へ直線的に延びる溝で、断面形状は台形状を呈する。規模は、全長8.30m、上幅0.30～0.80m、深さ0.05～0.12mで、主軸方位はN－12°－Wを示す。覆土は、炭化物を少量含む黒褐色土の単層である。遺物は、流れ込みと考えられる土師器、管状土錘片が僅かに出土しているほか、種実遺体としてモモの核１点が検出されている。

溝SD206（図面２）

調査区中央のO28、P28、Q28区に位置する。南北方向へ直線的に延びる溝で、断面形状は弧状を呈する。南端は調査区外へ延びる。確認された規模は、全長9.55m以上、上幅0.30～1.05m、深さ0.09mで、主軸方位はN－23°－Wを示す。覆土は黒褐色土の単層である。出土遺物なし。

溝SD207（図面２）

調査区中央のM25、N25、O25区に位置する。南北方向へほぼ直線的に延びる溝で、断面形状は台形状を呈する。北端は調査区外へ延びる。確認された規模は、全長8.90m以上、上幅0.40～1.00m、深さ0.06mで、主軸方位はN－26°－Wを示す。覆土は、礫φ10mmを含む灰黄褐色砂質土の単層である。出土遺物なし。

溝SD208（図面２）

調査区東側のO28、P28・29、Q29区に位置する。南北方向へ延びる溝で、南側で「く」の字状に屈曲する。断面形状は弧状を呈する。規模は、全長7.80m、上幅0.20～0.46m、深さ0.07mで、主軸方位はN－10°－Wを示す。覆土は、礫φ10mmを含む灰黄褐色砂質土の単層である。出土遺物なし。

溝SD209（図面２）

調査区東側のM30～33、N27～30区に位置する。東西方向へ直線的に延びる溝で、断面形状は台形状を呈する。規模は、全長28.10m、上幅0.28～1.28m、深さ0.06mで、主軸方位はN－80°－Eを示す。覆土は、礫φ10mmを含む灰黄褐色砂質土の単層である。遺物は、流れ込みと考えられる土師器、須恵器片が僅かに出土しているほか、種実遺体としてモモの核１点が検出されている。

溝SD210（図面２）

調査区東側のJ31、K31・32区に位置する。南北方向へ直線的に延びる溝で、断面形状は弧状を呈する。北端は調査区外へ延び、南端は溝SD213と接している。確認された規模は、全長4.35m以上、上幅0.43～0.62m、深さ0.12mで、主軸方位はN－23°－Wを示す。覆土は灰黄褐色砂質土の単層である。出土遺物なし。

溝SD211（図面２）

調査区東側のI32、K32区に位置する。南北方向へ直線的に延びる溝で、断面形状は弧状を呈する。北端は調査区外へ延びる。確認された規模は、全長1.15m以上、上幅0.30～0.40m、深さ0.06mで、主軸方位はN－17°－Wを示す。覆土は灰黄褐色砂質土の単層である。出土遺物なし。

溝SD212（図面２）

調査区東側のK32区に位置する。曲線的に延びる溝で、断面形状は台形状を呈する。南側は溝SD214に切られる。確認された規模は、全長3.35m以上、上幅0.30～0.42m、深さ0.13mである。覆土は灰黄褐色砂質土の単層である。遺物は、流れ込みと考えられる土師器片が僅かに出土している。

溝SD213（図面２、図版10）

調査区東側のK31・32、L29～31区に位置する。東西方向へほぼ直線的に延びる溝で、断面形状は弧状を呈する。規模は、全長14.20m、上幅0.28～0.50m、深さ0.06mで、主軸方位はN－67°－Eを示す。覆土は、礫φ10mmを含む灰黄褐色砂質土の単層である。遺物は、溝の中央やや東寄りの覆土上層から18世紀後半に比定される肥前磁器の碗１（R208）が１点出土しているほか、流れ込みと考えられる土師器、須恵器片が僅かに出土している。

溝SD214（図面２）

調査区東側のK32・33、L32区に位置する。「L」字状に緩く屈曲する溝で、断面形状は台形状を呈する。溝SD212を切る。規模は、全長10.70m、上幅0.30～0.50m、深さ0.09mで、主軸方位はN－20°－Wを示す。覆土は灰黄褐色砂質土の単層である。出土遺物なし。

溝SD215（図面２）

調査区東側のK33、L33区に位置する。南北方向へ直線的に延びる溝で、断面形状は弧状を呈する。規模は、全長5.45m、上幅0.25～0.35m、深さ0.08mで、主軸方位はN－10°－Wを示す。溝SD214との切り合い関係は不明である。覆土は、灰黄褐色砂質土が混じる褐灰色土の単層である。出土遺物なし。

溝SD216（図面２）

調査区東側のK33、L33区に位置する。南北方向へ直線的に延びる溝で、断面形状は弧状を呈する。規模は、全長4.90m、上幅0.20～0.50m、深さ0.09mで、主軸方位はN－12°－Wを示す。溝SD214との切り合い関係は不明である。覆土は、灰黄褐色砂質土が混じる黒褐色土の単層である。出土遺物なし。

溝SD217（図面２）

調査区東側のL32、M32、N32、O32、P32・33区に位置する。南北方向へ直線的に延びる溝で、断面形状は台形状を呈する。北端は溝SD209と接し、南端は重機による撹乱によって切られる。確認された規模は、全長14.75m以上、上幅0.30～0.86m、深さ0.07mで、主軸方位はN－15°－Wを示す。溝SD209との切り合い関係は不明である。覆土は黒褐色土の単層である。出土遺物なし。

溝SD218（図面２）

調査区東側のO32区に位置する。ほぼ東西方向へ緩い弧状を呈して延びる短い溝で、東端は溝SD219に接している。断面形状は弧状を呈する。全体に不整形な形状である。規模は、全長1.05m、上幅0.15m、深さ0.04mである。覆土は黒褐色土の単層である。遺物は、流れ込みと考えられる土師器、須恵器片が僅かに出土している。

溝SD219（図面２）

調査区東側のO32区に位置する。ほぼ東西方向へ緩い弧状を呈して延びる溝で、東端は溝SD217と接して

いる。断面形状は弧状を呈する。全体に不整形な形状である。規模は、全長2.30m、上幅0.19～0.30m、深さ0.26mである。覆土は黒褐色土の単層である。遺物は、流れ込みと考えられる土師器、須恵器、青磁片が僅かに出土している。

溝SD220（図面2）

調査区東側のM33、N33区に位置する。南北方向へ直線的に延びる溝で、北端は溝SD209と接している。断面形状は弧状を呈する。規模は、全長7.07m、上幅0.25～0.48m、深さ0.09mで、主軸方位はN－17°－Wを示す。覆土は灰黄褐色砂質土の単層である。遺物は、流れ込みと考えられる土師器、須恵器片が僅かに出土している。本遺構は、北側に隣接する溝SD214の延長上に位置している。両遺構は、構築状況や覆土が近似していることから、一連の遺構として機能していた可能性が考えられる。

溝SD221（図面2）

調査区東側のN32・33区に位置する。南北方向へ直線的に延びる溝で、断面形状は弧状を呈する。規模は、全長3.72m、上幅0.14～0.25m、深さ0.05mで、主軸方位はN－14°－Wを示す。覆土は灰黄褐色砂質土の単層である。出土遺物なし。

4. 道　路

道路SF701（図面5、図版10）

調査区中央のN25、O24・25、P24・25、Q24・25、R25区に位置する。両側に側溝をともなう細長い硬化面が検出されており、谷底を横断するかたちで南北方向に延びる。北端は調査区外へ延び、南端は漸次消滅する。確認された硬化面の規模は、全長15.0m以上、幅1.10～1.84mで、主軸方位はN－5°－Wを示す。側溝の規模は、東側が全長16.00m以上、上幅0.48～1.40m、深さ0.22m、西側が全長6.40m以上、上幅0.70～0.86m、深さ0.28mである。ともに断面形状は弧状を呈する。遺物は、側溝の覆土中から流れ込みと考えられる土師器、須恵器片が僅かに出土している。

第3節　遺　物

1. 遺構出土遺物

溝SD213（図面27、図版32）

1（R208）は肥前・波佐見系の染付碗で、体部外面と見込に丸文が描かれる。また、見込は、蛇の目状に釉を剥ぎ取ったのち、さらに重ね焼きで焼着しにくくするためアルミナ砂に近いものを釉剥ぎ部分に塗っている。18世紀後半の製品と思われる。

第3章　第　2　面

第1節　概　　観

本面は、基本層序第Ⅴ層の上面を遺構検出面とするもので、上面に遺物包含層（第Ⅳ層）をともなう。検出された遺構は、掘立柱建物7棟、欅列1基、土坑15基、小ピット2基、溝39条、自然流路1条である。出土遺物から判断される本面の所属時期は、古代末期から中世前期を中心とするものと思われる。

第2節　遺　　構

1．掘立柱建物

掘立柱建物SB401（図面8・9、図版12）

調査区東側のN29～32、O30～32、P30・31区に位置する。「コ」の字状の雨切り溝（溝SD243・246）をともなう、東西5間（13.50m）、南北4間（7.50m）の東西棟の総柱建物である。桁行（東西）方向の柱間は、南から2.40m（8尺）、2.55m（8.5尺）、3.00m（10尺）、2.70m（9尺）、2.85m（9.5尺）、梁行（南北）方向の柱間は、南から1.80m（6尺）、2.10m（7尺）、2.10m（7尺）、1.50m（5尺）で、桁行方位はN－78°－Eを示す。建物面積は101.25㎡である。柱の掘方は円形または楕円形を呈する。土坑SK119、溝SD225を切る。遺物は、柱穴P9からロクロ土師器小皿2（R658）、柱穴P14・27から二段ナデの非ロクロ土師器皿3（R694）・4（R692）が出土している。

掘立柱建物SB402（図面10、図版12）

調査区東側のL30・31、M30・31区に位置する。西側に直線的な雨切り溝（溝SD245）をともなう、東西2間（3.60m）、南北2間（4.80m）の南北棟の側柱建物である。桁行（南北）方向の柱間は、南から2.70m（9尺）、2.10m（7尺）、梁行（東西）方向の柱間は、1.80m（6尺）等間で、桁行方位はN－19°－Wを示す。建物面積は17.28㎡である。柱の掘方は円形を呈する。南西隅部において小ピットSP925と重複するが、新旧関係については不明である。出土遺物なし。本建物は、溝SD225の西側に並行して建つもので、同溝とほぼ同時期の建物である可能性が考えられる。

掘立柱建物SB403（図面11、図版12～14）

調査区中央のP25～27、Q25～27区に位置する。東西4間（9.00m）、南北2間（4.50m）の東西棟の総柱建物である。桁行（東西）方向の柱間は、東から2.10m（7尺）、2.40m（8尺）、2.40m（8尺）、2.10m（7尺）、梁行（南北）方向の柱間は、2.25m（7.5尺）等間で、桁行方位はN－85°－Eを示す。建物面積は40.50㎡である。柱の掘方は円形または楕円形を呈する。このうち柱穴P2・3・5・7・8・12には柱根が遺存する。溝SD224・228・229を切る。柱根以外の遺物として、柱穴P8から管状土錘5（R592）が出土している。

掘立柱建物SB404（図面12、図版12・13・15）

調査区中央のO25～27、P25～27、Q25～27区に位置する。掘立柱建物SB403と重複して建つ、東西4間（8.40m）、南北4間（8.40m）の総柱建物である。柱間はすべて2.10m（7尺）等間で、平面形状は正方形を呈する。東西方向の主軸方位はN－77°－Eを示す。建物面積は70.56㎡である。柱の掘方は円形または不正形を呈する。柱穴P7・11・13・16からは木製礎盤が各1点ずつ、柱穴P5・8・10からは木製礎盤が各2点ずつ、柱穴P15からは木製礎盤が3点、柱穴P12からは木製礎盤2点と柱根1点、P6からは礎盤として使われた可能性のある短い丸木1点が出土している。このうち柱穴P11については、柱根と礎盤が組み合っていない状況で検出されている。本建物は、建て替えられている可能性が高い。なお、柱穴P19については明瞭に確認できなかった。本建物は、土坑SK103・104、溝SD228を切ることから、掘立柱建物SB403より新しいものと思われる。木製品以外の遺物として、柱穴P9の上層から管状土錘12（R140-6）～18（R140-2）が7点まとまって出土している。

掘立柱建物SB405（図面13）

調査区東端のL33、M32・33、N33・34区に位置する。調査区東端に建つもので、東西1間（2.10m）、南北3間（8.55m）の規模で検出されている。南北方向の柱間は2.85m（9.5尺）等間、東西方向の柱間は2.10m（7尺）で、南北軸の方位はN－24°－Wを示す。柱の掘方は円形または楕円形を呈する。溝SD250を切る。出土遺物なし。本建物の周囲からは、建物と並行して南北方向へ直線的に延びる溝SD259と、建物を「コ」の字状に囲むようにして廻る溝SD265が検出されている。双方の位置関係からみて、これらは本建物と密接な関連をもつ遺構と考えられる。なお、平成14年度に実施された隣接地区（B地区）の発掘調査により、本建物は東西2間、南北3間の南北棟の総柱建物であることが判明している。

掘立柱建物SB406（図面14、図版12・13・17）

調査区東側のP28・29、Q28・29区に位置する。掘立柱建物SB403の東側にほぼ棟通りを揃えて建つ、東西2間（4.20m）、南北1間（1.80m）の東西棟の側柱建物である。桁行（東西）方向の柱間は、東から1.80m（6尺）、2.40m（8尺）、梁行（南北）方向の柱間は1.80m（6尺）で、桁行方位はN－82°－Eを示す。建物面積は7.56㎡である。柱の掘方は円形または楕円形を呈する。出土遺物なし。

掘立柱建物SB407（図面14、図版12・13・17）

調査区東側のO28・29、P28・29区に位置する。掘立柱建物SB406の北側に建つ、東西2間（5.40m）、南北1間（2.10m）の東西棟の側柱建物である。桁行（東西）方向の柱間は、東から2.40m（8尺）、3.00m（10尺）、梁行（南北）方向の柱間は2.10m（7尺）で、桁行方位はN－79°－Eを示す。建物面積は11.34㎡である。柱の掘方は円形または楕円形を呈する。出土遺物なし。規模は異なるが、前述した掘立柱建物SB406と構造的に近似した特徴をもつ建物である。

2、柵　列

柵列SA601（図面8・9、図版17）

調査区東側のO29区に位置する。4基の小ピットが直線的に並んで検出されている。規模は、全長1.86mで、中軸線方位はN－11°－Wを示す。小ピットは円形で、径0.25m前後、深さ0.20～0.25mである。出土遺物なし。掘立柱建物SB401の西側に並行して位置することから、同建物に付随する施設である可能性が考えられる。

3. 土　坑

土坑SK101（図面15、図版17）

調査区中央のR23・24区に位置する。平面形状は長方形を呈し、断面形状は台形状となる。規模は、長軸1.30m、短軸1.06m、深さ0.32mで、主軸方位はN－8°－Wを示す。出土遺物なし。

土坑SK103（図面15、図版17）

調査区中央のP25区に位置する。平面形状は長方形を基調とする不整形なもので、断面形状は台形状となる。規模は、長軸2.61m、短軸1.93m、深さ0.32mで、主軸方位はN－13°－Wを示す。土坑SK104を切る。遺物は、珠洲片口鉢35（R1077）・36（R309・1075）が出土している。

土坑SK104（図面16、図版18・19）

調査区中央のO25・26、P25・26区に位置する。平面形状は方形を呈し、断面形状は台形状となる。規模は、長軸4.66m、短軸4.43m、深さ0.41mで、主軸方位はN－7°－Wを示す。土坑として取り扱ったが、方形竪穴状を呈する遺構である。溝SD229・231・232を切り、掘立柱建物SB401、土坑SK103に切られる。覆土は8層に分層され、このうち第3層からは箸状木製品206点をはじめとする多量の遺物が出土している。また、同層からは栽培種であるイネ、ソバ、アワ－ヒエ、メロン類などの種実も多数検出されている。このうち炭化米1点について、AMS法による放射性炭素年代測定を行った結果、14世紀頃の値を示すことが判明した（第5章参照）。遺物は、ロクロ土師器小皿37（R209-200）、非ロクロ土師器小皿38（R193）・39（R209-177・209-185）、青磁椀40（R211）、箸状木製品41（R153①）～246（R209-202）、曲物底板247（R209-148）・248（R209-207）、蓋板249（R209-37）などが出土している。

土坑SK110（図面15、図版20）

調査区東側のM29区に位置する。平面形状は方形を呈し、断面形状は台形状となる。規模は、長軸1.18m、短軸1.10m、深さ0.38mで、主軸方位はN－19°－Wを示す。出土遺物なし。

土坑SK113（図面15、図版20）

調査区中央のQ26区に位置する。平面形状は円形を呈し、断面形状は階段状となる。規模は、長軸0.74m、短軸0.69m、深さ0.31mで、主軸方位はN－40°－Wを示す。出土遺物なし。

土坑SK114（図面17、図版20）

調査区中央のQ26区に位置する。平面形状は円形を呈し、断面形状は半円状となる。規模は、長軸1.15m、短軸1.13m、深さ0.43mで、主軸方位はN－41°－Wを示す。溝SD224を切り、掘立柱建物SB404に切られる。出土遺物なし。

土坑SK115（図面17、図版21）

調査区東側のP28区に位置する。平面形状は長方形を呈し、断面形状は台形状となる。規模は、長軸1.58m、短軸0.76m、深さ0.32mで、主軸方位はN－13°－Wを示す。出土遺物なし。

土坑SK116（図面17、図版21）

調査区東側のM28・29、N28・29区に位置する。平面形状は円形を呈し、断面形状は台形状となる。規模は、長軸0.87m、短軸0.77m、深さ0.33mで、主軸方位はN－14°－Eを示す。遺物は、1層下面から箸状木製品250（R727）が出土している。

土坑SK117（図面17、図版21）

調査区東側のN32・33、O33・34区に位置する。平面形状は円形を呈し、断面形状は弧状となる。規模は、長軸1.69m、短軸1.46m、深さ0.54mで、主軸方位はN－76°－Wを示す。溝SD250を切る。遺物は、板材251

(R793) が出土している。

土坑SK118（図面17、図版22）

調査区東側のM33区に位置する。平面形状は円形を呈し、断面形状は半円状となる。規模は、長軸1.66m、短軸1.51m、深さ0.77mで、主軸方位はN－22°－Wを示す。出土遺物なし。

土坑SK119（図面18、図版22）

調査区東側のP30区に位置する。平面形状は円形を呈し、断面形状は台形状となる。規模は、長軸1.34m、短軸1.18m、深さ0.64mで、主軸方位はN－78°－Eを示す。掘立柱建物SB401、溝SD246に切られる。遺物は、下層付近からまとまって出土している。出土遺物には、ロクロ土師器小皿252（R792-3）～254（R792-5）、椀255（R792-9）～257（R792-2）、非ロクロ土師器皿258（R792-4）、管状土錘259（R792-6）、曲物側板260（R664-7）、杭261（R792-10）がある。

土坑SK121（図面18、図版22）

調査区東側のO33区に位置する。平面形状は円形を呈し、断面形状は台形状となる。規模は、長軸0.96m、短軸0.90m、深さ0.44mで、主軸方位はN－69°－Wを示す。溝SD256を切る。出土遺物なし。

土坑SK122（図面17、図版23）

調査区東側のM33区に位置する。平面形状は長方形を呈し、断面形状は台形状となる。規模は、長軸0.84m、短軸0.63m、深さ0.14mで、主軸方位はN－90°－Wを示す。出土遺物なし。

土坑SK123（図面18、図版23）

調査区中央のP22、Q22区に位置する。平面形状は長方形を呈し、断面形状は台形状となる。規模は、長軸1.53m、短軸1.22m、深さ0.25mで、主軸方位はN－22°－Wを示す。土坑SK124に切られる。出土遺物なし。

土坑SK124（図面18）

調査区中央のP22区に位置する。平面形状は長方形を呈し、断面形状は箱状となる。規模は、長軸0.73m、短軸0.52m、深さ0.27mで、主軸方位はN－20°－Wを示す。土坑SK123を切る。遺物は、ロクロ土師器小皿262（R895）、椀263（R955）・264（R895・953・954）が出土している。

4. 小ピット

小ピットSP923（図面18、図版23）

調査区中央のO27区に位置する。平面形状は円形を呈し、断面形状は台形状となる。規模は、長軸0.33m、短軸0.29m、深さ0.17mである。遺物は、北西側の壁際から口縁～体部1/3を欠損した内黒のロクロ土師器有台椀265（R696-1）が横位で1点出土している。

小ピットSP925（図面18）

調査区東側のM30区にあり、掘立柱建物SB402の南西隅部に重複して位置する。平面形状は楕円形を呈し、断面形状は台形状となる。規模は、長軸0.30m、短軸0.23m、深さ0.21mである。遺物は、一部欠損した状況でロクロ土師器小皿266（R724・742）が1点出土している。

5. 溝

溝SD203（図面19・20、図版24）

調査区中央のO24、P24、Q24・25、R24・25区に位置する。南北方向へ直線的に延びる溝で、断面形状

は弧状から階段状を呈する。北端は調査区外へ延び、南端部の形状は方形を呈する。確認された規模は、全長14.90m以上、上幅0.12～0.19m、深さ0.78mで、主軸方位はN－12°－Wを示す。遺物は、底部付近から内黒のロクロ土師器有台椀267（R146）が出土している。

溝SD222（図面19）

調査区中央のP23、Q23・24区に位置する。北西から南東方向へ弓形に延びる溝で、断面形状は半円状を呈する。本溝の南西側は緩やかな斜面、北東側はほぼ平坦な地形となっており、本溝はこの地形に沿って構築されたものと考えられる。規模は、全長8.00m、上幅0.40～0.70m、深さ0.20mである。覆土は黒褐色土の単層である。出土遺物なし。

溝SD223（図面19・20、図版24）

調査区中央のQ25、R25区に位置する。南北方向へ直線的に延びる溝で、断面形状は弧状から台形状を呈する。北端部の形状は方形を呈する。規模は、全長6.80m、上幅0.70～1.20m、深さ0.26mで、主軸方位はN－6°－Wを示す。溝SD226・227を切る。また、南端は溝SD241と接しているが、新旧関係については判然としない。出土遺物なし。

溝SD224（図面19・20、図版24）

調査区中央のL26、M26、N25・26、O26、P26、Q26、R26区に位置する。南北方向へ直線的に延びる溝で、断面形状は弧状から台形状を呈する。北端は調査区外へ延び、南端部の形状は方形を呈する。本溝は、南端部から延びる小溝によって溝SD241と連結している。この小溝は、溝SD241への排水を目的としたものと考えられ、本溝が溝SD241に先行して構築されていたものと推測される。確認された規模は、全長19.25m以上、上幅1.00～1.16m、深さ0.29mで、主軸方位はN－11°－Wを示す。溝SD227・230・231・232を切り、掘立柱建物SB404に切られる。遺物は、珠洲壺または壺268（R584）、用途不明木製品269（R862）などが出土している。

溝SD225（図面19～22、図版25）

調査区東側のK31、L31・32、M31・32、N31・32、O32・33、P32・33区に位置する。南北方向へ直線的に延びる大規模な溝で、断面形状は台形状を呈する。北端は調査区外へ延び、南端部の形状は方形を呈する。確認された規模は、全長29.30m以上、上幅2.65～3.30m、深さ0.85mで、主軸方位はN－17°－Wを示す。覆土の状況から、南側から逐次埋没していったものと考えられる。掘立柱建物SB401、自然流路SD244に切られる。遺物は、白磁椀270（R798-11）、珠洲壺または壺271（R607）・272（R605）、連歯下駄の未成品273（R798-13）・274（R798-16）、差歯下駄275（R798-14）、用途不明木製品276（R798-10）、部材277（R798-8）・278（R608）、折板279（R604）・280（R798-3）、丸木281（R798-9）、割り材282（R604）などのほか、無加工の自然木などが出土している。

本溝は、覆土の堆積状況から、山際である南側から逐次埋没していったことが判明している。出土遺物のうち、時期的にもっと新しい遺物である珠洲271（R607）・272（R605）については、西側の上層付近から出土したものであり、本溝が機能を停止したあとの最終的な埋没時期を示すものと思われる。

溝SD226（図面19）

調査区中央のQ25・26区に位置する。東西方向へ直線的に延びる溝で、断面形状は弧状を呈する。規模は、全長5.50m、上幅0.40～0.54m、深さ0.15mで、主軸方位はN－85°－Eを示す。溝SD223に切られる。覆土は、にぶい黄橙色砂質土ブロックを多量に含む黒褐色土の単層である。出土遺物なし。

溝SD227（図面19）

調査区中央のQ26・27、R25・26区に位置する。東西方向へ直線的に延びる溝で、断面形状は弧状から台形状を呈する。確認された規模は、全長6.88m以上、上幅0.30～0.48m、深さ0.10mで、主軸方位はN－89°－Wを示す。溝SD223・224・241に切られる。覆土は、にぶい黄橙色砂質土を含む黒褐色土の単層である。遺物は、ロクロ土師器小皿283（R586）が出土している。

溝SD228（図面20）

調査区中央のO26・27、P26、Q26・27区に位置する。東側が開口した「コ」の字状に延びる溝で、断面形状は弧状を呈する。規模は、全長19.03m、上幅0.20～0.40m、深さ0.06mである。溝SD231を切り、掘立柱建物SB403・404に切られる。覆土は灰黄褐色砂質土を含む黒色土の単層である。遺物は、ロクロ土師器小皿284（R799）が出土している。

溝SD229（図面19）

調査区中央のP25・26、Q26区に位置する。北西から南東方向へ弓形に延びる溝で、断面形状は弧状から階段状を呈する。確認された規模は、全長4.00m以上、上幅0.22～0.40m、深さ0.07mである。溝SD258を切り、掘立柱建物SB403・404、土坑SK103、溝SD230に切られる。覆土は、にぶい黄橙色砂質土を含む黒褐色土の単層である。出土遺物なし。

溝SD230（図面19）

調査区中央のP25・26区に位置する。東西方向へ直線的に延びる溝で、断面形状は弧状を呈する。確認された規模は、全長4.00m以上、上幅0.20～0.35m、深さ0.04mで、主軸方位はN－87°－Wを示す。溝SD229・233を切り、溝SD224に切られる。覆土は、にぶい黄褐色砂質土が薄く互層をなす黒褐色粘質土の単層である。出土遺物なし。

溝SD231（図面19、図版26）

調査区中央のO26・27区に位置する。東西方向へ直線的に延びる溝で、断面形状は弧状を呈する。確認された規模は、全長8.00m以上、上幅0.20～0.45m、深さ0.13mで、主軸方位はN－86°－Eを示す。土坑SK104、溝SD224・228に切られる。遺物は、ロクロ土師器小皿285（R588）・286（R588・794-3）、有台椀287（R794-4・795）～289（R794-1）が出土している。

溝SD232（図面19）

調査区中央のP25・26区に位置する。東西方向へ直線的に延びる溝で、断面形状は弧状を呈する。確認された規模は、全長2.60m以上、上幅0.20～0.35m、深さ0.05mで、主軸方位はN－77°－Eを示す。土坑SK103、溝SD224に切られる。覆土は、にぶい黄褐色砂質土を含む黒褐色粘質土の単層である。遺物は、管状土錘290（R896）が出土している。

溝SD233（図面19）

調査区中央のP26区に位置する。南北方向へ直線的に延びる溝で、断面形状は弧状を呈する。確認された規模は、全長1.85m以上、上幅0.20～0.22m、深さ0.04mで、主軸方位はN－3°－Eを示す。溝SD230に切られる。覆土は黒褐色土の単層である。出土遺物なし。

溝SD234（図面19、図版26）

調査区中央のN27、O27・28区に位置する。南北方向へ直線的に延びる溝で、断面形状は弧状から半円状を呈する。北端は調査区外へ延びる。確認された規模は、全長12.01m以上、上幅0.30～0.39m、深さ0.10mで、主軸方位はN－21°－Wを示す。覆土は黒褐色粘質土の単層である。出土遺物なし。

溝SD235（図面19）

調査区中央のM27、N27区に位置する。南北方向へ「く」の字状に屈曲して延びる溝で、断面形状は弧状を呈する。北端は調査区外へ延びる。確認された規模は、全長4.80m以上、上幅0.17～0.41m、深さ0.08mである。覆土は黒褐色粘質土の単層である。出土遺物なし。

溝SD236（図面19、図版27）

調査区中央のO27区に位置する。東西方向へ直線的に延びる溝で、断面形状は弧状を呈する。規模は、全長2.58m、上幅0.20～0.40m、深さ0.09mで、主軸方位はN－77°－Eを示す。覆土は灰黄褐色砂質土を含む黒褐色粘質土の単層である。遺物は、管状土錘291（R590）～293（R590）が出土している。

溝SD237（図面19）

調査区中央のO28・29区に位置する。北西から南西方向へ延びる溝で、断面形状は階段状を呈する。規模は、全長4.26m、上幅0.30～0.57m、深さ0.12mで、主軸方位はN－65°－Wを示す。溝SD238と接しているが、新旧関係については不明である。覆土は灰黄褐色砂質土を多量に含む黒褐色土の単層である。出土遺物なし。

溝SD238（図面19）

調査区中央のO28・29区に位置する。東西方向へ延びる不整形な溝で、断面形状は弧状を呈する。規模は、全長4.75m、上幅0.25～0.68m、深さ0.06mで、主軸方位はN－70°－Eを示す。西端は溝SD237と接しているが、新旧関係は不明である。覆土は灰黄褐色砂質土を少量含む黒褐色土の単層である。出土遺物なし。

溝SD239（図面19）

調査区中央のO27・28区に位置する。東西方向へ直線的に延びる溝で、断面形状は弧状を呈する。規模は、全長1.25m、上幅0.15～0.20m、深さ0.03mで、主軸方位はN－82°－Eを示す。覆土は黒褐色土の単層である。出土遺物なし。

溝SD240（図面19）

調査区中央のP27・28区に位置する。南西から北東方向へ直線的に延びる溝で、断面形状は弧状を呈する。規模は、全長1.50m、上幅0.25～0.28m、深さ0.06mで、主軸方位はN－46°－Eを示す。覆土は灰黄褐色砂質土を含む黒褐色粘質土の単層である。出土遺物なし。

溝SD241（図面19・20、図版27）

調査区中央のP30・31、Q27～31、R25～27区に位置する。東西方向へ直線的に延びる溝で、断面形状は台形状を呈する。調査区南側の山際に構築されているもので、南側約1/2は調査区外となる。東端部の形状は方形を呈し、西端は風倒木痕によって失われている。確認された規模は、全長30.72m以上、上幅1.01m、深さ0.45mで、主軸方位はN－72°－Eを示す。溝SD223・224・242・248と接しているが、新旧関係については判然としない。遺物は、珠洲片口鉢294（R627）・壺295（R628）のほか、無加工の自然木などが出土している。

溝SD242（図面19）

調査区中央のP28、Q28区に位置する。南北方向へ直線的に延びる溝で、断面形状は弧状を呈する。規模は、全長3.90m、上幅1.05～1.18m、深さ0.26mで、主軸方位はN－16°－Wを示す。南端は溝SD241と接しているが、新旧関係については判然としない。出土遺物なし。

溝SD243（図面19、図版27）

調査区東側のN29～31、O29、P29～31区に位置する。東側が開口する「コ」の字状に延びる溝で、断面形状は半円状を呈する。掘立柱建物SB401に付随する雨切り溝と考えられる。規模は、全長27.60m、上幅

0.30～0.70m、深さ0.16mである。覆土は場所によって異なるが、基本的に下層に灰黄褐色砂質土、上層に黒褐色粘質土の堆積がみられる。遺物は、ロクロ土師器小皿296（R675-1）・297（R676-2）が出土している。

溝SD245（図面19）

調査区東側のM30、N30区に位置する。東西方向へ直線的に延びる溝で、断面形状は弧状を呈する。掘立柱建物SB402に付随する雨切り溝と考えられる。規模は、全長6.30m、上幅0.20～0.45m、深さ0.08mで、主軸方位はN－17°－Wを示す。覆土は黒褐色土の単層である。出土遺物なし。

溝SD246（図面19、図版27）

調査区東側のN29・30、O29・30、P30～32、Q32区に位置する。東側が開口する「コ」の字状に延びる溝で、断面形状は半円状を呈する。掘立柱建物SB401に付随する雨切り溝と考えられる。外側を溝SD243が並走する。両溝の新旧関係については不明であるが、ほぼ同時期の所産と思われる。規模は、全長26.70m、上幅0.30～0.70m、深さ0.26mである。土坑SK119を切る。覆土は場所によって異なるが、基本的に下層に灰黄褐色砂質土、上層に黒褐色土～黒褐色粘質土の堆積がみられる。遺物は、用途不明土製品302（R735）が出土している。

溝SD247（図面19、図版28）

調査区東側のQ32～34区に位置する。東西方向へ直線的に延びる溝である。南側の山際に構築されているもので、大半が調査区外となる。確認された規模は、全長8.10m以上、上幅0.50m以上、深さ0.46mである。覆土は黒褐色砂質土を主体に堆積する。出土遺物なし。なお、平成14年度に実施された隣接地区（B地区）の発掘調査により、本溝はさらに東へ延びることが判明している。

溝SD248（図面19）

調査区中央のQ28区に位置する。南北方向へ直線的に延びる溝で、断面形状は弧状を呈する。規模は、全長2.75m、上幅0.52～0.75m、深さ0.09mで、主軸方位はN－22°－Wを示す。南端は溝SD241と接しているが、新旧関係は判然としない。覆土は灰黄褐色砂質土を含む黒褐色土の単層である。出土遺物なし。

溝SD249（図面19）

調査区東側のP30、Q30区に位置する。ほぼ南北方向へ直線的に延びる溝で、断面形状は弧状を呈する。規模は、全長3.10m、上幅0.18～0.29m、深さ0.06mで、主軸方位はN－29°－Wを示す。覆土は黒褐色土の単層である。出土遺物なし。

溝SD250（図面21）

調査区東側のM33、N33・34区に位置する。南北方向へ直線的に延びる溝で、断面形状は台形状を呈する。確認された規模は、全長6.12m以上、上幅1.25～1.60m、深さ0.25mで、主軸方位はN－14°－Wを示す。溝SD225とほぼ並行する位置関係にある。掘立柱建物SB405、土坑SK117に切られる。覆土は黒褐色粘質土を主体に堆積する。出土遺物なし。

溝SD254（図面19）

調査区東側のK30区に位置する。東西方向へほぼ直線的に延びる溝で、断面形状は弧状を呈する。西端は調査区外へ延びる。確認された規模は、全長2.15m以上、上幅0.30m、深さ0.07mで、主軸方位はN－78°－Eを示す。覆土は黒褐色土の単層である。出土遺物なし。

溝SD255（図面19）

調査区東側のO33区に位置する。南西から北東方向へ直線的に延びる溝で、断面形状は半円状を呈する。

確認された規模は、全長2.60m以上、上幅0.28～0.40m、深さ0.10mで、主軸方位はN－50°－Eを示す。溝SD225・256に切られる。覆土は、にぶい黄褐色砂質土を含む黒褐色土の単層である。出土遺物なし。

溝SD256（図面19）

調査区東側のN32・33、O32～34、P34区に位置する。北西から南東方向に緩い弧状を呈して延びる溝で、断面形状は台形状を呈する。東端は調査区外へ延びる。確認された規模は、全長10.70m以上、上幅0.60～0.72m、深さ0.19mである。土坑SK121に切られる。覆土は橙色砂質土を含む黒褐色土の単層である。出土遺物なし。

溝SD258（図面19）

調査区中央のP25区に位置する。南北方向へ直線的に延びる溝で、断面形状は弧状を呈する。確認された規模は、全長1.15m以上、上幅0.35～0.38m、深さ0.02mで、主軸方位はN－80°－Wを示す。溝SD229に切られる。覆土は黒褐色土の単層である。出土遺物なし。

溝SD259（図面19、図版28）

調査区東側のL32、M32、N32・33、O33区に位置する。ほぼ南北方向へ直線的に延びる溝で、断面形状は半円状を呈する。確認された規模は、全長17.43m以上、上幅0.28～0.45m、深さ0.22mで、主軸方位はN－25°－Wを示す。掘立柱建物SB405とほぼ並行する位置関係にある。自然流路SD244に切られる。覆土は灰黄褐色粘質土の単層である。出土遺物なし。

溝SD260（図面19）

調査区東側のM33・34区に位置する。ほぼ東西方向へ直線的に延びる溝で、断面形状は台形状を呈する。東端は調査区外へ延びる。確認された規模は、全長4.00m以上、上幅0.32～0.55m、深さ0.09mで、主軸方位はN－70°－Eを示す。西端は溝SD261と接しているが、新旧関係については判然としない。覆土は粉色砂質土を含む黒褐色土の単層である。出土遺物なし。

溝SD261（図面21）

調査区東側のL32・33、M32区に位置する。「コ」の字状に廻る溝で、断面形状は半円状を呈する。東端は調査区外へ延びる。確認された規模は、全長21.00m以上、上幅0.25～0.70m、深さ0.36mである。溝SD265を切る。出土遺物なし。

溝SD265（図面21、図版28）

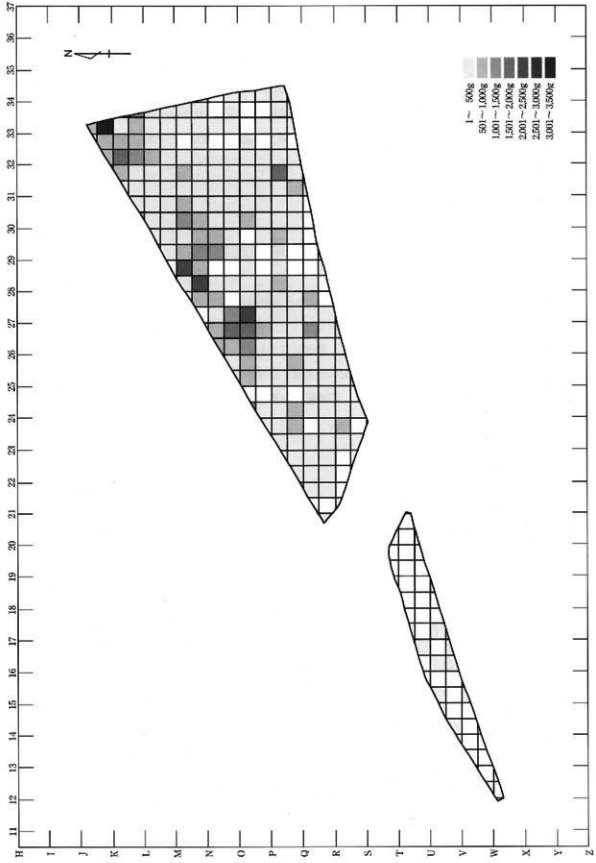
調査区東側のK32・33、L32、M32、N32・33、O33・34区に位置する。東側が開口する「コ」の字状に延びる溝で、断面形状は弧状から階段状を呈する。掘立柱建物SB405を囲むように廻っている。確認された規模は、全長18.40m以上、上幅0.35～0.85m、深さ0.12mである。溝SD261に切られる。出土遺物なし。なお、平成14年度に実施された隣接地区（B地区）の発掘調査により、本溝はさらに東へ延びることが判明している。

溝SD266（図面19）

調査区東側のL32・33区に位置する。東西方向に直線的に延びる溝で、断面形状は弧状を呈する。東端は調査区外となる。確認された規模は、全長2.65m以上、上幅0.55～0.65m、深さ0.13mで、主軸方位はN－82°－Eを示す。覆土は黒褐色土の単層である。出土遺物なし。

溝SD267（図面19）

調査区東側のN27・28区に位置する。ほぼ東西方向に直線的に延びる溝で、断面形状は弧状を呈する。規模は、全長2.09m、上幅0.20～0.30m、深さ0.25mで、主軸方位はN－81°－Wを示す。覆土は黒褐色土の単層である。出土遺物なし。



第７図　第１遺物包含層出土土器類の重量分布図（１／600）

6. 自然流路

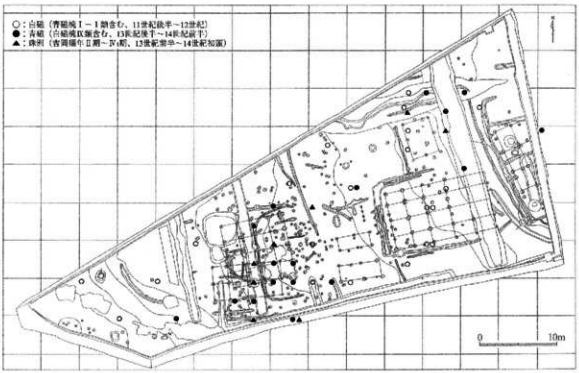
自然流路SD244（図面21、図版28）

調査区北東側のK30～33、L28～33、M28・29区に位置する。谷底中央を蛇行しながら流下する自然流路である。全体に幅広で浅い形状を呈するが、中央付近にはやや深く抉れた小流路がみられる。確認された規模は、全長25.60m以上、上幅3.48～4.00m、深さ0.26mである。溝SD225と重複して切る。遺物は、縄文土器299（R797）、ロクロ土師器小皿300（R797-1）・301（R654）、非ロクロ土師器小皿302（R735）、白磁皿303（R679・796-1）、珠洲甕304（R632）、用途不明土製品305（R735）・306（R736）、管状土錘307（R657）・308（R681）などが出土している。

第3節　第1遺物包含層

基本層序第Ⅳ層が該当する。遺物は、平安時代から中世前期にかけてのものを中心に出土している。

出土した土器類の総重量は55.83kgで、これを小グリッド単位で示したのが第7図である。また、第8図は、時期特定が可能な陶磁器類（白磁、青磁、珠洲）について、小グリッド単位で出土状況を示したものである。これによれば、11世紀後半～12世紀の遺物は、遺構が検出されている調査区中央から東側のほぼ全域にわたって分布がみられるのに対して、13世紀～14世紀前半の遺物は、掘立柱建物SB403・404および自然流路SD244付近に集中する傾向がみられる。



第8図　第1遺物包含層出土の陶磁器類分布図（1／500）

第4節　遺　物

1．遺構出土遺物

掘立柱建物SB401（図面27、図版32）

2（R658）はロクロ土師器の小皿である。底径が大きく体部は直線的に短く開く。3（R694）・4（R692）は非ロクロ土師器の皿である。口縁部に二段ナデが施されるもので、口縁端部は弱く外反する。ナデが施された底部には、微細なひび割れもしくは皺状の痕跡があり、型起こし成形によるものと考えられる。ともに内外面に範囲不明瞭な油煙の付着がみられ、灯明皿として使用されたものであることがわかる。ほかに細片のため図示していないが、柱穴P13からも同様の皿が1点出土している。

掘立柱建物SB403（図面27・28、図版32）

5（R592）は管状土錘である。長辺断面形は樽形を呈する。

6（R822）～11（R922）は柱根である。7（R924）・8（R911）は丸木、ほかは断面方形から三角形状を呈する割り材である。樹種は、7（R924）・8（R911）がクリ、6（R822）・9（R921）～11（R922）がスギである。

掘立柱建物SB404（図面28～30、図版32・33）

12（R140-6）～18（R140-2）は管状土錘で、柱穴P9の上層から7点まとまって出土したものである。形状は、長辺断面形が樽形を呈するものから丸い土玉状のものまで多様である。一括性の高い資料と考えられるが、形状および重量からは明瞭な規格性はみえない。

19（R891-1）～32（R917）は木製礎盤である。19（R891-1）～25（R894）は板状もしくは角材状の割り材を利用したもの、27（R890）～32（R917）は丸木の半截材もしくは多截材を利用したものである。いずれも斧状工具によって長辺の片端を斜めに切断している点に共通した特徴がみられる。33（R891-3）は丸木の柱根である。34（R823）は樹皮付きの細い丸木で、両端を斧状工具で切断する。柱穴P6から出土しており、ほかの礎盤とほぼ同じ大きさであることから、簡易的な礎盤として使用されたのではないかと思われる。樹種は、22（R891-2）・27（R890）・28（R912）・31（R918）・33（R891-3）・34（R823）はクリ、26（R816）はニガキ、29（R920）はハンノキ属ハンノキ亜属である。

土坑SK103（図面30、図版33）

35（R1077）・36（R309・1075）は珠洲の片口鉢である。35（R1077）の卸し目は直線で施入は疎である。吉岡編年Ⅲ～Ⅳ1期［吉岡1994］頃の製品と思われる。36（R309・1075）は内面が磨耗する。底部静止糸切り痕。

土坑SK104（図面30～39、図版33～42）

37（R209-200）はロクロ土師器の小皿と思われる。内面黒色処理が施されるもので、底部は低い柱状高台となる。38（R193）・39（R209-177・209-185）は非ロクロ土師器の小皿である。口縁部に一段ナデが施されるもので、端部はつまみ上げて断面三角形状に面取りする。内面にはハケ状工具の痕が残る。ナデが施された底部には、微細なひび割れもしくは皺状の痕跡がみられ、型起こし成形によるものと考えられる。40（R211）は龍泉窯系の青磁椀である。体部外面に繊蓮弁文を有する。大宰府分類［横田・森田1978］の青磁椀Ⅰ－5類に該当するもので、13世紀後半～14世紀前半の製品と思われる。

41（R153①）～246（R209-202）は箸状木製品である。両端を細く削るもので、断面形は多角形もしくは扁平な多角形を呈する。これら206点の内訳は、完形品64点（31%）、片端欠損品85点（41%）、両端欠損

品57点（28%）である。完形品における長さの最大値は30.2cm、最小値は11.5cmで、平均値は21.0cmである。なお、105（R156）は片端を欠損するものであるが、長さ30cmを超える大形品とみられる。樹種は、全点のうち無作為に選んだ5点について同定を行ったところ、いずれもスギであった。

247（R209-148）～249（R209-37）は円形曲物である。247（R209-148）・248（R209-207）は底板である。249（R209-37）は蓋板と思われるもので、把手を結合するための木釘孔と思われる小孔が2箇所確認できる。樹種は、247（R209-148）がヒノキ科、248（R209-207）がスギ、249（R209-37）がヒノキである。

土坑SK116（図面39、図版42）

250（R727）は箸状木製品である。両端を細く削るもので、断面形は扁平な多角形を呈する。長さは22.7cmである。

土坑SK117（図面39、図版42）

251（R793）は板材である。大半を欠損する。

土坑SK119（図面39、図版42）

252（R792-3）～254（R792-5）はロクロ土師器の小皿である。252（R792-3）・253（R792-1）は体部下端で僅かに外反し、体部は内湾気味に開く。底部は厚底となる。254（R792-5）は底径が大きいもので、体部は直線的に短く開く。255（R792-9）～257（R792-2）はロクロ土師器の椀である。255（R792-9）・256（R792-8）は底径がやや大きいものである。255（R792-9）は体部が内湾して開く。256（R792-8）は体部下端で僅かに外反し、体部は直線的に開く。257（R792-2）は体部下端で強く外反し、体部は内湾して開く。底部は厚く平高台状を呈する。258（R792-4）は非ロクロ土師器の皿である。口縁部に二段ナデが施されるもので端部は弱く外反する。253（R792-1）・258（R792-4）の内外面には油煙の付着がみられ、灯明皿として使用されたものと考えられる。259（R792-6）は管状土錘である。長辺断面形は楕形を呈する。260（R664-7）は曲物で、側板の綴合せ部分の破片である。261（R792-10）は杭と思われる。細い丸木を利用したもので、片端を半周だけ削って尖らせる。ほかに種実遺体としてモモの核1点が出土している。

土坑SK124（図面40、図版43）

262（R895）はロクロ土師器の小皿である。体部は直線的に開く。263（R955）・264（R895・953・954）はロクロ土師器の椀である。体部は内湾して開く。263（R955）の内外面には油煙の付着がみられ、灯明皿と考えられる。

小ピットSP923（図面40、図版43）

265（R969-1）はロクロ土師器の有台椀である。体部は内湾して開き、口縁部は僅かに外反する。高台は細く短い。内面黒色処理が施される。体部外面上半にはヘラ状の工具を用いたと思われる強いロクロナデが施される。

小ピットSP925（図面40、図版43）

266（R724・742）はロクロ土師器の小皿である。体部は内湾気味に開き、口縁部は外反する。体部内面に粉殻圧痕がみられる。

溝SD203（図面40、図版43）

267（R146）はロクロ土師器の有台椀である。体部は内湾気味に開き、口縁部は僅かに外反する。高台は断面三角形状を呈する肉厚のものである。内面黒色処理が施される。口縁端部を除き、体部外面上半から内面上位にかけてヘラ状の工具を用いたと思われる強いロクロナデが施される。体部外面に粉殻圧痕が

みられる。

溝SD224（図面40、図版43）

268（R584）は珠洲である。甕または壺の胴部片で、外面は平行叩打、内面は押圧具痕が施される。269（R862）は用途不明の木製品である。一見して柄振に似るものであるが、全体に腐朽しており本来の形状は不明である。片面には焼け焦げがみられる。

溝SD225（図面40～42、図版43・44）

270（R798-11）は白磁碗である。高台は厚く、削り出しは僅かである。高台付近は露胎となる。体部の内面下端に沈線状の段をもつものと思われる。大宰府分類の白磁碗Ⅳ－1・a類に該当するもので、11世紀後半～12世紀の製品と思われる。271（R607）・272（R605）は珠洲の甕または壺である。271（R607）は胴部外面に右下がりの平行叩打、272（R605）は綾杉状の縦列叩打が施される。

273（R798-13）・274（R798-16）は一木から作り出す連歯下駄の未成品である。両者は割り面での接合が確認されており、一足分であることが判明している。樹種はクリである。本資料から理解される連歯下駄の製作工程については、概ね次のように考えられる。①伐採した木を約25cmの長さに切断する。切断箇所の幹径は23cm前後。②切断された短い丸太を半截して一足分の素材とする。③内側の割り面を台とし、樹皮付きの外側から鉈状工具により歯を削り出す。歯の削り出しは、歯と歯の間から開始する。275（R798-14）は差歯下駄の歯である。下端接地面は磨耗する。276（R798-10）は用途不明品である。断面楕円形となる細長い棒状の製品で、片端は「く」の字状に屈曲する。277（R798-8）・278（R608）は部材である。277（R798-8）は断面方形の角材で、片側を薄く作り出す。278（R608）は細い角材で中央に小孔が1箇所穿たれる。ともに片端に焼け焦げがみられる。279（R604）・280（R798-3）は折板と思われる。薄く細長い板状を呈する。281（R798-9）は樹皮付きの丸木である。斧状工具により片端は斜めに切断する。282（R604）は割り材である。断面三角形となる棒状を呈するもので、部分的に斧状工具による加工痕がみとめられる。片端に焼け焦げがみられる。樹種は、275（R798-14）・277（R798-8）・280（R798-3）がスギ、276（R798-10）がカエデ属、281（R798-9）がマツ属複維管束亜属、282（R604）がヤマクワである。

ほかに種実遺体としてモモの核1点が出土している。

溝SD227（図面42、図版44）

283（R586）はロクロ土師器の小皿である。

溝SD228（図面42、図版44）

284（R799）はロクロ土師器の小皿である。体部は内湾気味に開き、口縁部は弱く外反する。

溝SD231（図面42、図版45）

285（R588）・286（R588・794-3）はロクロ土師器の小皿である。285（R588）は体部が内湾気味に開き、口縁部は弱く外反する。286（R588・794-3）は体部が内湾して開くもので、口縁端部は丸くおさめる。内外面に油煙の付着がみられ、灯明皿と考えられる。287（R794-4・795）～289（R794-1）はロクロ土師器の有台椀である。287（R794-4・795）・289（R794-1）は内面黒色処理が施される。287（R794-4・795）は体部が内湾して開き、口縁部は弱く外反する。高台は細く短い。体部外面はロクロナデ、内面は横位ヘラ磨きが施される。289（R794-1）の高台は断面三角形状を呈する肉厚のものである。289（R794-1）は体部が内湾してやや浅く立ち上がるもので、口縁部は外反する。高台径が大きい。内外面はロクロナデが施される。

溝SD232（図面43、図版45）

290（R896）は管状土錘である。長辺断面形は樽形を呈する。

溝SD236（図面43、図版45）

291（R590）～293（R590）は管状土錘である。長辺断面形が樽形を呈するものと丸い上玉状のものがある。

溝SD241（図面43、図版45）

294（R627）・295（R628）は珠洲である。294（R627）は片口鉢で、曲線文の卸し目をもつものと思われる。吉岡編年Ⅰ～Ⅱ期の製品と思われる。295（R628）は壺と思われる。外面に綾杉状の縦列叩打、内面に押圧具痕が施される。

溝SD243（図面43、図版45）

296（R675-1）・297（R676-2）はロクロ土師器の小皿である。296（R675-1）は体部下端で外反し、体部は内湾気味に開く。口縁端部は細くおさめる。底部は厚く平高台状となる。297（R676-2）は体部が直線的に短く開くもので、口縁端部は細くおさめる。

溝SD246（図面43、図版45）

302（R735）は用途不明の土製品である。内面に輪積痕が残るもので、底部片の可能性がある。胎土は粗く礫や砂を多く含む。

自然流路SD244（図面43、図版45・46）

299（R737）は縄文土器である。深鉢形土器の胴部片と思われるもので、単節縄文が施文される。300（R797-1）・301（R654）はロクロ土師器の小皿である。300（R797-1）は体部が外反気味に開くものである。301（R654）は柱状高台をもつものである。302（R735）は非ロクロ土師器の小皿である。口縁部に一段ナデが施されるもので端部は丸くおさめる。303（R679・796-1）は白磁皿である。体部上位で内湾する器形となり、内面中位には沈線状の段が施される。底部はやや上げ底状となる。白磁皿Ⅵ－1類に該当するもので、11世紀後半～12世紀の製品と思われる。304（R632）は珠洲の甕である。外面は右下がりの平行縦列叩打、内面は押圧具痕が施される。頸部内面に凹線が1条みとめられる。305（R735）・306（R736）は用途不明の土製品である。内面に輪積痕が残るもので、底部片の可能性がある。胎土は粗く礫や砂を多く含む。307（R657）・308（R681）は管状土錘である。307（R657）は長辺断面形が細長い紡錘形、308（R681）は丸い上玉状を呈するものである。

2．包含層出土遺物

土師器　309（R457）は有段口縁をもつ壺形土器である。口縁帯に2個一組となる円形貼付文が付される。

須恵器　310（R301・386）～313（R100・467）は無台杯である。底部調整は回転ヘラ切りである。312（R502）の底部外面にはヘラ記号「一」と、暗褐色を呈する漆状の付着物がみられる。313（R100・467）は体部が大きく開く器形で厚底である。314（R575）・315（R242）は有台杯である。ともに高台部は内端接地である。316（R702）は杯蓋である。口縁端部は僅かに折れ、扁平な擬宝珠状の摘まみが付く。317（R386）～319（R439・500・501・609・610・743）は短頸壺である。317（R386）は口縁部が内傾気味に短く立ち上がるもの、318（R610）は直立するものである。319（R439・500・501・609・610・743）は肩部が張る器形を呈し、高台は「ハ」の字に大きく開く。肩部には2条一組となる凹線が2列廻っている。成

形後、体部内外面は目の粗い木口状の工具によって調整が施される。320（R495）は壺又は瓶類である。高台は短く「ハ」の字に大きく開く。321（R160・240・456）は双耳瓶である。肩部に断面四角形となる突帯を2条巡らし、小振りの摘まみを付加する。摘まみは、上から小孔を1箇所穿ち、正面に縦位沈線状の刻み目が施される。322（R277）～326（R89・376）は甕である。326（R89・376）の頸部には単沈線による波状文が施される。

中世土師器　327（R216・717）～359（R351・428）はロクロ土師器である。327（R216・717）～334（R470）は有台椀である。327（R216・717）・328（R257・259）は内面黒色処理が施されるものである。327（R216・717）は体部が内湾して立ち上がり、口縁部が弱く外反する。体部外面上位には強いロクロナデが施される。329（R442）～334（R470）は底部片である。330（R456）は全体に器肉が薄いものである。331（R69）～334（R470）は所謂足高高台をもつ椀である。335（R715）・336（R237）は椀である。335（R715）は体部下端で僅かに外反したのち内湾気味に開くもので、口縁部は弱く外反する。337（R712）は有台皿である。底部に低い高台もつもので、体部は直線的に開く。底部内面にハケ状工具痕が残る。338（R428）～350（R408）は小皿である。338（R428）は体部が内湾気味に開き、口縁部は外反する。339（R233）～342（R476）は体部が直線的に開くものである。343（R230）は体部が内湾して開くもので、口縁端部は細くおさめる。344（R475）・345（R363）は底径が大きく体部は直線的に短く開くものである。344（R475）の底部内面にはハケ状工具痕が残る。346（R492）～348（R240）は体部下端で外反したのち体部は内湾気味に開くものである。346（R492）は口縁部が弱く外反するもので、小さめの底部は厚くやや平高台状となる。内外面に油煙が付着しており、灯明皿と思われる。349（R482）は体部が内湾気味に開くものである。350（R408）は体部下半で強く外反し、体部は内湾して短く開く。口縁端部は直立気味につまみ上げて細くおさめる。底部は厚く平高台状となる。351（R351）～359（R351・428）は柱状高台をもつものである。小皿の類と思われるが、全体の器形がわかるものははとんどない。352（R388）は底部内面中央が凹むものである。354（R305）は小皿である。柱状高台から体部がほぼ水平に伸びるもので、体部の器肉は薄い。

360（R492）～367（R332）は非ロクロ土師器である。360（R492）～364（R322）は口縁部に二段ナデが施されるもので、360（R492）～362（R420）は小皿、363（R389）・364（R322）は皿である。360（R492）の口縁端部は僅かに外反する。360（R492）・364（R322）は底部に微細なひび割れもしくは皺状の痕跡があり、型起こしによる成形と思われる。365（R417）～367（R332）は口縁部に一段ナデが施されるもので、いずれも口縁端部は丸くおさめる。また、360（R492）・365（R417）は内外面に油煙の付着がみられることから灯明皿と考えられる。

白　磁　368（R582）～378（R309）は椀である。368（R582）・369（R86）は小さな玉縁口縁をもつものである。白磁椀Ⅱ類。368（R582）の釉色は白濁して黄味がかり、369（R86）の釉には貫入がみられる。370（R242）～374（R442）は玉縁口縁をもつものである。白磁椀Ⅳ類。375（R53）は細く直立する高台をもち、内底見込みに段を有する。白磁椀Ⅴ類。376（R47）は内底見込みに劃花文が施文される。白磁椀Ⅴ－4・b類。377（R316）は内底見込みの釉を輪状に掻きとるもので、高台付近は露胎となる。白磁椀Ⅷ類。378（R309）は口縁部内面を面取りして口先とする。白磁椀Ⅸ類。379（R375・388）～382（R311）は皿である。379（R375・388）・380（R181）は体部上位で内湾し、その屈曲部の内面に沈線状の段を有する。底部はやや上げ底状となる。白磁皿Ⅵ－1・a類。381（R97）は体部中位に沈線状の段を有する。白磁皿Ⅵ－1・b類。382（R311）は底部がやや上げ底状となる。白磁皿Ⅵ－1類。383（R38）は合子の蓋であ

る。外面に印花文が施され、釉色はややオリーブ灰色がかる。378（R309）は13世紀後半～14世紀前半、383（R38）は時期不明、ほかは11世紀後半～12世紀の製品と思われる。

青　磁　龍泉窯系の製品が出土している。384（R341）～394（R307）は椀である。384（R341）は口縁部が僅かに外反し、内外面無文となるものである。青磁椀Ⅰ－1類。385（R462）は同じく無文のもので、細く尖る高台をもち、高台端部は露胎となる。釉はやや厚く掛かり、露胎との境は赤色に発色する。青磁椀Ⅲ－1類。386（R128）はやや細長い鎬連弁文が施文される。青磁椀Ⅲ－2類。387（R251・394・1064）～394（R307）は鎬蓮弁文が施文される。高台は断面四角形で、高台端部から高台内は露胎となる。青磁椀Ⅰ－5類。389（R334）の高台端部には刻み目状の傷が全周する。395（R561）は杯である。口縁部は外反し、端部は短く直立気味に立ち上がる。青磁杯Ⅲ－3類。396（R53）は小杯である。体部に鎬蓮弁文をもち、口縁部は外反する。384（R341）は12世紀、ほかは13世紀後半～14世紀前半の製品と思われる。

珠　洲　397（R485）～399（R305・485）は片口鉢である。397（R485）は口縁端部を丸頭におさめる。398（R429）の卸し目は縦位流水状の波状文となる。399（R305・485）は直線の卸し目で施入は疎である。底部に静止糸切り痕が残る。430（R249）は中甕である。口縁部は水平に挽き出し、端部は方頭におさめる。401（R712）は甕又は壺の胴部下半の破片である。外面は右下がりの平行叩打、内面は押圧具痕の上から縦方向の指ナデが施される。402（R394）は壺である。肩部に刻文が施される。398（R429）・430（R249）は吉岡編年Ⅱ期、399（R305・485）は吉岡編年Ⅲ～Ⅳ1期の製品と思われる。

土製品　403（R482）～430（R249）は管状土錘である。形状は、長辺断面形が樽形を呈するものから丸い土玉状のものまで多様である。形状および重量からは明瞭な規格性はみえない。

銭　貨　いずれも北宋銭で、最古銭は明道元寶、最新銭は熙寧元寶である。431（R35）は明道元寶で、初鋳は明道元年（1032年）である。432（R161）は皇宋通寶で、初鋳は寶元二年（1039年）である。433（R84）は熙寧元寶で、初鋳は熙寧元年（1068年）である。書体は、いずれも真書である。

鉄製品　434（R186）は用途不明品である。平坦な面から方形に突き出た差込口のような部位が確認できる。

鉱　滓　435（R24）～438（R327）は鉄滓である。多孔質。

第4章　第　3　面

第1節　概　　観

本面は、基本層序第Ⅵ層の上面を遺構検出面とするもので、上面に遺物包含層（第Ⅴ層）をともなう。検出された遺構は、井戸1基、土坑1基、溝1条、大規模な自然流路1条である。出土遺物から判断される本面の所属時期は、古墳時代から奈良時代を中心とするものと思われる。

第2節　遺　　構

1．井　戸

井戸SE501（図面24、図版30）

調査区西側のU16区に位置する。底部に水溜を有する井戸である。掘方の平面形状は円形で、断面形状は漏斗状を呈する。規模は、長軸1.90m、短軸1.68m、深さ1.80mである。南側の山際に構築されているもので、基底部の標高は16.40mである。底部からは水溜と考えられる底板を抜いた方形曲物が1点掘えられた状況で出土している。井戸側は検出されていないが、覆土中から部材と思われる縦長の板材や細い角材が出土しており、縦板組横桟どめ〔宇野1982〕の井戸側をもっていた可能性が考えられる。掘方および覆土の堆積状況からみて、廃絶時に井戸側が抜き取られているものと推測される。遺物は、須恵器甕439（R1052）、横瓶、方形曲物440（R1073）、板材441（R1068-1）～443（R1068-3）、角材444（R1072）～448（R1071-4）が出土している。

2．土　坑

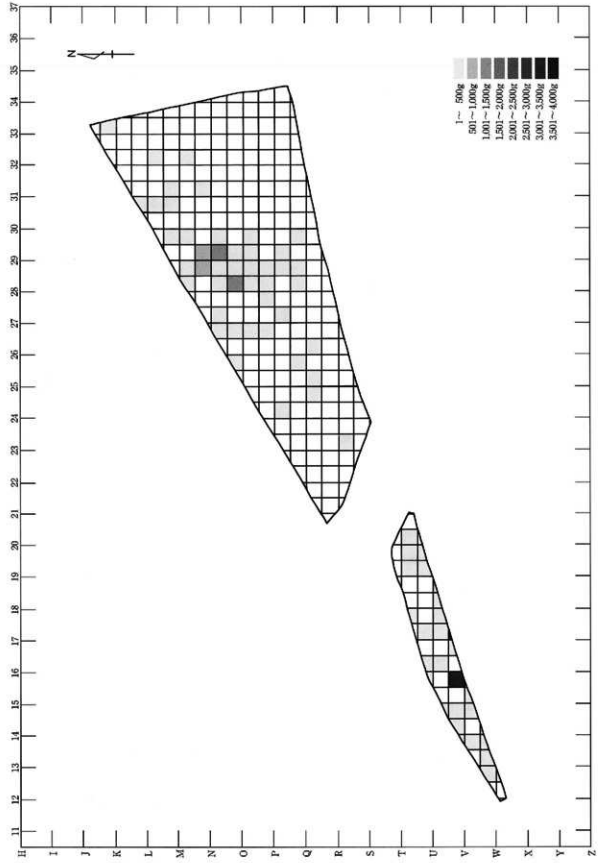
土坑SK125（図面24、図版30）

調査区西側のT18・U18区に位置する。平面形状は方形を呈し、断面形状は浅い台形状となる。規模は、長軸0.78m、短軸0.74m、深さ0.16mである。出土遺物なし。

3．溝

溝SD269（図面26、図版31）

調査区西端のV13区に位置する。南東から北西へ向かって延びる溝で、断面形状は半円状を呈する。確認された規模は、全長2.80m以上、上幅0.96m、深さ0.35mである。遺物は、土師器甕形土器512（R1067）、高杯形土器513（R1067）、鉢形土器514（R1067）、有孔鉢形土器515（R1067）、小型土器516（R1067）などが出土している。



第9図　第2遺物包含層出土土器類の重量分布図（1／600）

4. 自然流路

自然流路SD268（図面25・26、図版31）

調査区中央から東側のN28・29、O23～29、P22～29、Q24～26区に位置する。谷底を蛇行しながら流下する大規模な自然流路である。流路は途中で二股に分岐しており、南側が浅く、北側がやや深い形状となっている。土層断面および出土遺物からは明瞭判断できなかったが、構造からみて南側から北側へ流れを変えたものと思われる。本流路は、東側で徐々に浅くなり漸次消滅する。確認された規模は、全長18.00m以上、最大上幅4.50m、深さ1.02mである。流路内からは、古墳時代から奈良時代を中心とする遺物が出土している。各遺物は、時期的に混在した状況で出土しており、層位的な出土状況は確認されなかった。出土した遺物には、弥生土器449（R864）・450（R564）、土師器壺形土器451（R865・901）、甕形土器452（R975）～471（R1036）、高杯形土器472（R1000）～479（R981）、鉢形土器480（R909）～482（R969）、有孔鉢形土器483（R566）、甑形土器484（R872）・485（R1000）、椀形土器486（R996）、小型土器487（R1036）・488（R999・1018）、須恵器杯489（R957）・無台杯490（R992・996・997・1000・1016）・491（R870）、有台杯492（R1027）、杯蓋493（R957）～495（R1045）、高杯496（R870・872）、鳩497（R517）、瓶類498（R545）、横瓶499（R1027・1032）～501（R864）、甕502（R864・865・685・871・872・900・965・973）～505（R881・902・971）、砥石506（R875）、自然石507（R867）～509（R867）、刷り材510（R907）・511（R907）などがある。

第3節　第2遺物包含層

基本層序第Ⅴ層が該当する。遺物は、古墳時代から奈良時代にかけてのものを中心に出土している。

出土した土器類の総重量は13.45kgで、これを小グリッド単位で示したのが第9図である。全体に遺物の出土は希薄であるが、僅かに調査区西側と中央から東側の北寄り（谷中央）に偏在する傾向がみえる。

第4節　遺　　物

1. 遺構出土遺物

井戸SE501（図面51・52、図版52）

439（R1052）は須恵器甕である。胴部外面に擬格子状叩き、内面に同心円状当て具痕が施される。ほかに細片のため図示していないが、叩き成形の横瓶の破片が1点出土している。

440（R1073）は底板を欠く方形曲物である。側板は一重巻きで、平面形はやや台形状に歪む。内面隅部の片側2箇所にだけ緩平行線のケビキが施される。綴合せは1箇所で、1列外10段綴じである。側板の下端には底板を結合するための木釘孔が17箇所あり、一部木釘が遺存する。本曲物は容器として作られたものと考えられるが、底板を抜いて井戸の水溜に再利用されている。441（R1068-1）～443（R1070-3）は板材である。このうち441（R1068-1）の両側面には浅い切り込み加工が施されている。444（R1072）～

447（R1072）は角材である。長さは、444（R1072）と445（R1072）が50.0cm前後、446（R1072）と447（R1072）が41.0cm前後となり、二つの規格性がみられる。446（R1072）は両端を、445（R1072）と447（R1072）は片端を断面鈍い三角形状に切断する。これら441（R1068-1）～447（R1072）の木製品は井戸側の部材であった可能性がある。448（R1071-4）は細い角材で両端を欠損する。同定された樹種は、方形曲物440（R1073）がカヤ、板材441（R1068-1）がスギである。

溝SD269（図面58、図版57・58）

512（R1067）～516（R1067）は土師器である。512（R1067）は「く」の字口縁をもつ甕形土器である。513（R1067）は高杯形土器である。脚部は「ハ」の字状に開き、裾部で屈曲外反する。杯部の大半を欠損するが、割れ口には接合痕と思われる刻み目状の痕跡がみえる。514（R1067）は鉢形土器である。丸底になると思われる深い体部をもち、口縁部は僅かに「く」の字状に屈曲して外反する。口縁端部はやや内湾して細くおさめる。515（R1067）は有孔鉢形土器である。砲弾状の体部をもち、口縁端部は細くおさめる。516（R1067）は小型土器である。鉢形を呈するもので、前述した有孔鉢形土器515（R1067）に近似した器形をもつ。

自然流路SD268（図面52～58、図版53～57）

449（R864）・450（R564）は弥生土器である。449（R864）は口縁部が外反する甕形土器である。口唇部に櫛歯状工具による刻み目が施されるもので、中期の小松式土器と思われる。450（R564）は有段口縁の甕形土器で口縁帯に擬凹線文をもつ。肩部に斜行刺突文が施文されており、後期の法仏式土器と思われる。

451（R865・901）～488（R999・1018）は土師器である。451（R865・901）は甕形土器で、細い体部にほぼ直立して伸びる口縁部をもつ。内外面はハケ目調整、胴部内面はナデが施される。弥生期の長頸壺の系譜を引くものと思われる。452（R975）～458（R1037）は有段口縁の甕形土器である。452（R975）は口縁帯に擬凹線文を施すもの、453（R958・984）～458（R1037）はヨコナデを施すものである。459（R972）～461（R1000）は山陰系の甕形土器である。口縁帯の下端に断面三角形状となる鋭い稜をもつ。462（R1087）～468（R984）は能登形の甕形土器である。462（R1087）～466（R1000）は口唇部をつまみ上げて狭い口縁帯をつくるもの、467（R565）・468（R984）は口唇部を面取りするものである。ともに、頸部が「コ」の字状に屈曲するものと「く」の字状に屈曲するものがみられる。469（R864・973）～471（R1036）は「く」の字口縁をもつ甕形土器である。469（R864・973）は口唇部を丸くおさめる。470（R697）・471（R1036）は口唇部に連続指押さえが施されるもので、近江系の土器（長浜甕）〔中尾1994〕であろうか。472（R1000）～479（R981）は高杯形土器である。このうち478（R904・835）には赤彩がみとめられる。480（R909）・481（R959）は鉢形土器である。480（R909）は上げ底状となる平底をもち、体部は「ハ」の字状に開く。口縁部は折り返して有段口縁状とする。481（R959）の口縁部は内側へ僅かに「く」の字状に屈曲し、弱い有段口縁状となる。482（R696）は有孔鉢形土器である。底部に小孔を1箇所穿つ。483（R566）・484（R872）は甑形土器である。483（R566）は器高が高い長胴の形態をもつものと思われる。口縁端部は細くおさめ、内外面には粗いハケ目が施される。484（R872）は角状把手である。485（R1000）は椀形土器である。丸底の底部に浅い体部をもち、口縁部は内湾気味に短く直立する。底部外面中央には高杯にみられるような突起が付く。底部は突起を残したままヘラ削り調整が施されており、製作中のアクシデントにより高杯から椀へ転用されたものと思われる。486（R996）・487（R1036）は小

型土器である。486（R996）は壺形のもので、平底気味の底部に球形の体部をもつ。487（R1036）は「く」の字口縁をもつ壺形を呈するもので、体部外面は縦位ヘラ削り、内面はナデが施される。488（R999・1018）はミニチュア土器で、コップ状の器形を呈する。手づくね成形によるもので内外面に輪積痕を明瞭に残す。

489（R957）～505（R881・902・971）は須恵器である。489（R957）は丸底の杯で、たちあがりを欠く。底部は粗雑な回転ヘラ切りで板状圧痕が残る。490（R992・996・997・1000・1016）・491（R870）は無台杯である。底部の調整は、490（R992・996・997・1000・1016）が回転ヘラ切り、491（R870）が手持ちヘラ削りである。490（R992・996・997・1000・1016）の底部には板状圧痕が残る。492（R1027）は有台杯である。高台部は内端接地となる。493（R957）～495（R1045）は杯蓋である。口縁端部は短く折れ、扁平な擬宝珠状の摘まみが付く。494（R994）・495（R1045）の天井部内面には磨耗と墨痕がみられることから転用硯と考えられる。496（R870・872）は高杯である。脚部中位に2条一組の凹線が廻る。497（R517）は甕である。肩部に2条一組の凹線が廻り、直下に櫛描状工具による細かな波状文が施文される。498（R545）は瓶類と思われる。体部にはカキ目が施され、肩部には凹線とヘラ状工具による刻み目が廻る。499（R1027・1032）～501（R864）は横瓶である。499（R1027・1032）は片面閉塞の横瓶である。胴部はロクロナデによる成形で、底部側面付近（成形時の胴部下端）には回転ヘラ削りが施される。閉塞後、胴部全面に弱いカキ目が施される。口縁部は直線的に短く開き、口唇部直下には2条一組の凹線が廻る。500（R864・870）は閉塞側面付近の破片である。胴部外面はカキ目、内面は同心円状の当て具痕が施される。501（R864）は底部側面の破片である。胴部外面はカキ目、底部側面の外面は回転ヘラ削り、内面はロクロナデが施される。502（R864・865・685・871・872・900・965・793）～505（R881・902・971）は甕である。このうち全体の器形がわかるものとして502（R864・865・685・871・872・900・965・793）がある。丸底をもつもので、胴部の下から約1/4の位置で同心円状の当て具痕が変化しているのがみえる。底部叩き出しのため、胴部とは異なる当て具を使用しているものと考えられる。

506（R875）は砥石である。凝灰岩を素材とするもので、正・両側・下面の4面に使用による細かな擦痕がみられる。裏面は表面が薄く剥落している。507（R867）～509（R867）は細長い自然石である。同一地点（P23-NW区）から出土したもので、その形状から磨縄み石などの可能性を考慮したものである。508（R867）は花崗岩、507（R867）・509（R867）は石英斑岩である。

510（R907）・511（R907）は角材である。ともに、両端に鉈状工具による切断痕がみられ、長さは18.0cm前後と短い。

ほかに種実遺体としてモモの核1点、トチノキの種子2点が出土している。

2. 包含層出土遺物

縄文土器　517（R789）は深鉢形土器である。胴部に単節縄文が施文される。

土師器　518（R760）は「く」の字口縁をもつ甕形土器である。口縁部は外反して開き、端部は方頭状におさめる。519（R847）～522（R774）は壺形土器である。519（R847）は有段口縁をもつもので、口縁帯はヨコナデを施す。520（R774）は口唇部をつまみ上げて断面三角形状に面取る。521（R927）は「く」の字口縁をもつもので、口縁部は直立気味に開く。522（R774）は底部片である。底部外面を含め全面にハケ目が施される。523（R1062）は直口壺である。524（R787）～528（R785）は高杯形土器である。524（R787）の脚部は「ハ」の字状に開き、525（R856）・526（R854）は裾部で強く屈曲外反する。528

(R785) の脚部はやや膨らみをもつものである。529 (R856) ・530 (R781) は椀形土器である。529 (R856) は口縁端部を細くおさめる厚底の椀である。内面は指ナデによる粗い整形が施され、器肉の厚みは一様でない。530 (R781) は内面黒色処理が施されるもので、口縁端部は僅かに外反する。体部外面はヘラ削り、内面はヘラ磨きが施される。砂粒を多く含む粗い胎土である。531 (R1063) ・532 (R842) は小型土器である。壺形を呈するもので、平底気味の底部に球形の体部をもつ。531 (R1063) は内面に赤彩の痕跡がみられる。

須恵器 533 (R845) は丸底の杯である。たちあがりは内傾して短く伸びる。534 (R851) は無台杯である。底部調整は回転ヘラ切りである。535 (R840) ～537 (R1060) は有台杯である。537 (R1060) は大形品。高台部は535 (R840) ・537 (R1060) が内端接地、536 (R777) が外端接地となる。538 (R777) は杯蓋である。口縁端部は短く折れ、扁平な擬宝珠状の摘まみが付く。

土製品 539 (R698) ～543 (R932) は管状土錘である。形状は、長辺の断面形が楕形を呈するものから丸い土玉状のものまで多様である。形状および重量からは明瞭な規格性はみえない。

石製品 544 (R852) は滑石製の子持勾玉である。上下端部と腹部の子勾玉を欠くもので、親勾玉の断面は扁平である。子勾玉は、腹部に1個、背部に3個以上、脇部片側に4個付されている。背部と脇部の子勾玉は、全体を一旦帯状に削り出したのち、切れ込みを入れて分割したもので、互いに独立した台形状の突起となっている。545 (R888) ・546 (R888) は細長い自然石である。同一地点 (P24-NW区) から出土したもので、その形状から鷹編み石などの可能性を考慮したものである。石材はともに石英斑岩である。

第５章　自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

岡尽遺跡では、古代～中世の流路跡や掘立柱建物跡等の遺構が検出されている。これらの遺構からは、柱材等の構築材の一部や木製品、種実遺体等の植物遺体が出土している。

今回の分析では、A地区より検出された土坑SK104において、堆積環境、周辺植生、植物利用状況および年代に関する情報を得ることを目的として、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析、植物遺存体分析、放射性炭素年代測定を実施する。また、SK104、SE501、SD224、SD225、SB403、SB404の各遺構から出土した木製品・木材の樹種および木材利用状況に関する情報を得ることを目的として、樹種同定を実施する。

Ⅰ.SK104の古環境復元

1.試料

珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析、植物遺存体分析に用いる試料は、土坑SK104の3層および4層より採取した土壌2点である。3層は黒色土で植物遺体や灰化物を多く含む。また、後述の樹種同定を行う著状木製品が多数検出されている。4層は草本類と考えられる植物遺体が密集しており、土壌分は少ない。なお、植物珪酸体分析では、各試料から採取した土壌の他、それぞれの試料中に認められる草本類と考えられる植物遺体についても分析を行う。

2.分析方法

(1) 珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する。種の同定は、原口ほか（1998）、Krammer（1992）、Krammer and Lange-Bertalot（1986,1988,1991a,1991b）、Witkowski etal（2000）などを参照する。

同定結果は、汽水生種、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数200個体以上の試料については、産出率3.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性か判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析

は、淡水生種については安藤（1990）、陸生珪藻については伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性については、Asai and Watanabe（1995）の環境指標種を参考とする。

(2) 花粉分析

試料約10ｇについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛；比重2.3）よる有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸９：濃硫酸１の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。図中では、総数から不明化粉を除いた数を基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

(3) 植物珪酸体分析

植物体の葉や茎に存在する植物珪酸体は、珪化細胞列などの組織構造を呈している。植物体が土壌中に取り込まれた後は、ほとんどが土壌化や撹乱などの影響によって分離し単体となるが、稀に植物体そのものが残存していることがある。また、植物体が肉眼で確認できるほどではないにしても、細胞列として残存していることもある。これらの試料は、単体の植物珪酸体よりもより現地性が高いことが推定され、とくに植物体そのもので出土した場合には、植物そのものの種類を同定することができる場合がある。そのため、今回については土壌の他、植物遺体についても分析を行う。試料は植物遺体２-３本を抽出して、過酸化水素水・塩酸処理を行い、400倍の光学顕微鏡下で観察する。

土壌試料では湿重５ｇ前後を過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。

(4) 植物遺存体分析

試料300ccを水に一晩浸漬し、試料の泥化を促す。0.5mmの篩を通して水洗し残渣を集める。双眼実体顕微鏡下で観察し、同定可能な植物遺体等を抽出する。植物遺体の形態的特徴を双眼実体顕微鏡下で観察し、現生標本および原色日本植物種子写真図鑑（石川,1994）、日本植物種子図鑑（中山ほか,2000）等と比較し、種類の同定・計数をおこなう。細片を含むため個体数推定が困難である種類は、表中に「+」と、数字以上の個数が推定される種類は、「数字+」と表示する。また、100個以上が検出される種類は、「多」と表示する。分析後の植物遺体等は、種類毎にビンに詰め、アルコールによる液浸保存処理を施す。

3.結果

(1) 珪藻分析

結果を表１、図１に示す。いずれの試料からも珪藻化石が豊富に産出する。完形殻の出現率は70%以上で化石の保存状態も良く、産出分類群数は20属73種類である。

４層では、淡水域に生育する水生珪藻（以下、水生珪藻）が約50%、陸上のコケや土壌表面など多少の

表1.珪藻分析結果（1）

種類	生態性			環境指標種	SK104	
	塩分	pH	流水		3層	4層
Cocconeis scutellum Ehrenberg	Euh-Meh			C1	-	1
Nitzschia levidensis var. salinarum Grunow	Meh				-	1
Navicula veneta Kuetzing	Ogh-Meh	al-il	ind	S	24	14
Nitzschia levidensis var. victoriae Grunow	Ogh-Meh	al-il	ind	U	-	1
Nitzschia palea (Kuetz.)W.Smith	Ogh-Meh	ind	ind	S	6	1
Rhopalodia gibberula (Ehr.)O.Muller	Ogh-Meh	al-il	ind		1	3
Achnanthes lanceolata (Breb.)Grunow	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	2	2
Amphora affinis Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	U	4	7
Amphora montana Krasske	Ogh-ind	ind	ind	RA,U	37	8
Caloneis angustivalva Petit	Ogh-unk	unk	unk	RI	1	-
Caloneis bacillum (Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	1	3
Caloneis hyalina Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RA	1	-
Caloneis largerstedtii (Lagerst.)Cholnoky	Ogh-ind	al-il	ind	S	-	1
Caloneis leptosoma Krammer & Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	i-ph	RB	1	-
Caloneis schumanniana (Grun.)Cleve	Ogh-ind	al-il	i-bi		-	1
Cymbella minuta Hilse ex Rabh.	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	1	-
Cymbella silesiaca Bleisch	Ogh-ind	ind	ind	T	-	3
Cymbella silesiaca var. auerswaldii Meister	Ogh-ind	ind	ind		-	1
Diploneis ovalis (Hilse)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	1
Diploneis parma Cleve	Ogh-ind	ind	ind		-	1
Diploneis yatukaensis Horikawa et Okuno	Ogh-ind	ind	i-ph	RI	-	1
Eunotia bilunaris (Ehr.)Mills	Ogh-hob	ac-il	ind		-	7
Fragilaria ulna (Nitzsch)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind		-	1
Gomphonema acuminatum Ehrenberg	Ogh-ind	ind	i-ph	O	-	5
Gomphonema angustatum (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	al-il	ind	U	3	3
Gomphonema christensenii Lowe et Kociolek	Ogh-unk	unk	r-ph	T	-	1
Gomphonema contraturris Lange-B. & Reichardt	Ogh-ind	al-il	i-ph		-	8
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	i-ph	O,U	1	7
Gomphonema parvulum Kuetzing	Ogh-ind	ind	ind	U	1	18
Gomphonema sphacrophorum Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	ind	T	-	2
Gomphonema truncatum Ehrenberg	Ogh-ind	ind	i-ph	T	1	-
Gyrosigma procerum Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind		1	-
Gyrosigma scalproides (Rabh.)Cleve	Ogh-ind	al-il	r-ph		-	1
Hantzschia amphioxys (Ehr.)Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,U	23	16
Melosira varians Agardh	Ogh-hil	al-bi	r-ph	K,T	1	-
Navicula confervacea (Kuetz.)Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	RB,S	1	8
Navicula contenta Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	2	-
Navicula contenta fo. biceps (Arnott)Hustedt	Ogh-ind	al-il	ind	RA,T	3	2
Navicula elginensis (Greg.)Ralfs	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	3	1
Navicula elginensis var. neglecta (Krass.)Patrick	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	2	8
Navicula kotschyi Grunow	Ogh-ind	al-il	ind		1	1
Navicula mutica Kuetzing	Ogh-ind	al-il	ind	RA,S	7	9
Navicula mutica var. ventricosa (Kuetz.)Cleve	Ogh-ind	al-il	ind	RI	5	-
Navicula paramutica Bock	Ogh-ind	ind	ind	RB	2	1
Navicula trivialis Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	3
Navicula viridula (Kuetz.)Kuetzing	Ogh-ind	al-il	r-ph	K,U	1	-
Navicula sp.1	Ogh-unk	unk	unk		20	-
Neidium alpinum Hustedt	Ogh-unk	unk	ind	RA	1	1
Nitzschia amphibia Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	U	3	1
Nitzschia brevissima Grunow	Ogh-ind	al-il	ind	RB,U	-	1
Nitzschia linearis W.Smith	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	1	1
Nitzschia perminuta (Grun.)Peragallo	Ogh-ind	ind	ind	RI	1	-
Nitzschia sinuata var. delognei (Grun.)Lange-Bertalot	Ogh-ind	al-il	i-ph	U	-	1
Nitzschia umbonata (Ehr.)Lange-B.	Ogh-ind	al-il	ind	U	-	1
Pinnularia acrosphaeria W.Smith	Ogh-ind	al-il	i-ph	O	-	1
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	RA	2	2
Pinnularia borealis var. brevicostata Hustedt	Ogh-ind	ind	ind	RA	-	1
Pinnularia brebissonii (Kuetz.)Rabenhorst	Ogh-ind	ind	ind	U	-	2
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ogh-ind	ac-il	ind	O,U	-	4

表1.珪藻分析結果（2）

種類	生態性			環境指標種	SK104	
	塩分	pH	流水		3層	4層
Pinnularia lenticula var. geunina Cleve-Euler	Ogh-ind	ind	ind		-	1
Pinnularia microstauron (Ehr.)Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	S	1	2
Pinnularia schoenfelderi Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	31	15
Pinnularia schroederii (Hust.)Krammer	Ogh-ind	ind	ind	RI	2	2
Pinnularia subcapitata Gregory	Ogh-ind	ac-il	ind	RB,S	1	2
Pinnularia subrostrata (A.Cleve)Cleve-Euler	Ogh-unk	unk	unk		-	1
Rhopalodia gibba (Ehr.)O.Muller	Ogh-ind	al-il	ind		1	1
Rhopalodia gibba var. ventricosa (Kuetz.)H.&M.Peray	Ogh-ind	al-il	ind		-	2
Sellaphora americana (Ehr.)Mann	Ogh-ind	al-il	l-ph		-	1
Sellaphora pupula (Kuetz.)Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	U	1	1
Stauroneis acuta W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph		-	1
Stauroneis obtusa Lagerstedt	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	2
Stauroneis phoenicenteron fo. hattorii Tsumura	Ogh-ind	ind	ind	O	-	1
Stauroneis thermicola (Petersen)Lund	Ogh-unk	unk	unk	RI	1	-
Surirella ovata var. pinnata (W.Smith)Hustedt	Ogh-ind	al-il	r-ph	U	-	1
海水生種					0	0
海水～汽水生種					0	1
汽水生種					0	1
淡水～汽水生種					31	19
淡水生種					172	180
珪藻化石総数					203	201

凡例

H.R：塩分濃度に対する適応性
Euh-Meh：海水生種－汽水生種
Meh：汽水生種
Ogh-Meh：淡水－汽水生種
Ogh-hil：貧塩好塩性種
Ogh-ind：貧塩不定性種
Ogh-hob：貧塩嫌塩性種
Ogh-unk：貧塩不明種

pH：水素イオン濃度に対する適応性
al-bi：真アルカリ性種
al-il：好アルカリ性種
ind：pH不定性種
ac-il：好酸性種
ac-bi：真酸性種
unk：pH不明種

C.R：流水に対する適応性
l-bi：真止水性種
l-ph：好止水性種
ind：流水不定性種
r-ph：好流水性種
r-bi：真流水性種
unk：流水不明種

環境指標種群

C1:海水藻場指標種（小杉，1988）
K:中～下流性河川指標種，O:沼沢湿地付着生種（安藤，1990）
S:好汚濁性種，U:広域適応性種，T:好清水性種（以上はAsai and Watanabe，1995）
R:陸生珪藻（RA:A群，RB:B群，RI:未区分、伊藤・堀内，1991）

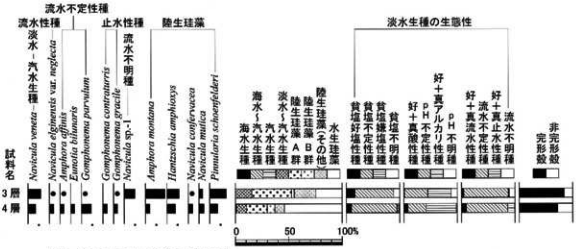


図1.主要珪藻化石群集の層位分布

海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。なお、●は3％未満の産出を示す。

湿り気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻が約35%、それに淡水～汽水生種が約10%産出する。淡水性種の生態性（塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応能）の特徴は、貧塩不定性種（少量の塩分には耐えられる種）、真＋好アルカリ性種（pH7.0以上のアルカリ性水域に最もよく生育する種）、流水不定性種（流水域にも止水域にも普通に生育する種）が優占する。産出種についてみると、塩分を含む河口域や有機汚濁の進んだ富栄養水域に生育する淡水～汽水生の*Navicula veneta*、流水不定性の*Gomphonema parvulum*、陸生珪藻の中でも耐乾性の高い陸生珪藻A群（伊藤・堀内，1991）の*Hantzschia amphioxys*、未区分陸生珪藻の*Pinnularia schoenfelderi*などが約10%産出する。また、低率であるが好流水性の*Navicula elginensis* var. *neglecta*、好止水性で沼沢湿地付着生種群の*Gomphonema gracile*を伴う。なお、沼沢湿地付着生種群とは、沼よりも浅く水深が1m前後で一面に水生植物が繁茂している沼沢や更に水深の浅い湿地で優勢な出現の見られることから、その環境を指標することができる種群のことである（安藤，1990）。

3層では、陸生珪藻が約60%と優占し、淡水～汽水生種、水生珪藻がそれぞれ約20%産出する。産出種についてみると、陸生珪藻A群の*Amphora montana*が約20%、同じくA群の*Hantzschia amphioxys*、未区分陸生珪藻の*Pinnularia schocnfelderi*が約10%産出する。また、塩類を豊富に含む水域に多産する淡水～汽水生種の*Navicula veneta*、牛態性が不明な*Navicula* sp.-1が約10%産出する。

(2) 花粉分析

結果を表2、図2に示す。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。いずれの試料も木本花粉がほとんど検出されず、草本花粉により占められる。花粉化石の保存状態は、比較的良好である。4層では、木本花粉はガマズミ属が1個体検出されるだけであった。草本花粉では栽培種であるソバ属が最も多く産出し、次いでイネ科が多く認められる。この2種だけで全体の90%を占める。その他ではヨモギ属、アカザ科などを伴う。3層では、木本花粉はハンノキ属、ガマズミ属がわずかに認められる。草本花粉ではイネ科が多産し、次いでマメ科、ヨモギ属、アカザ科などを伴う。

表2.花粉分析結果

種類	SK104	
試料番号	3層	4層
木本花粉		
ハンノキ属	4	-
ガマズミ属	6	1
草本花粉		
イネ科	124	101
カヤツリグサ科	1	-
イボクサ属	1	-
クワ科	1	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	1	-
ソバ属	2	155
アカザ科	12	5
ナデシコ科	-	1
バラ科	-	1
マメ科	47	3
ヨモギ属	15	11
オナモミ属	-	1
不明花粉	11	1
シダ類胞子		
シダ類胞子	3	1
合計		
木本花粉	10	1
草本花粉	204	278
不明花粉	11	1
シダ類胞子	3	1
総計（不明を除く）	217	280

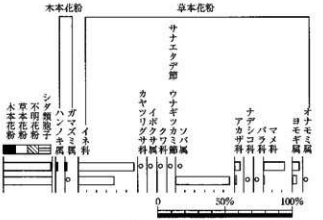


図2.花粉化石群集の層位分布

出現率は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満を示す。

(3) 植物珪酸体分析

結果を表3に示す。3層および4層の植物遺体には、イネ科植物に形成される短細胞珪酸体列が確認できる。イネ属とは異なる特徴があり、イネ属以外のイネ科植物と考えられるが、特徴的な形態が認められず、種類の特定には至らない。

一方、3層、4層の土壌試料からは、灰化した栽培植物のイネ属に由来する葉部短細胞列、葉身機動細胞列、穎珪酸体が数多く認められる。このうち、最も多く見られるのが葉部短細胞列であり、数個-十数個の短細胞珪酸体が連なる様子が観察される。また、単体の植物珪酸体では、いずれの試料からもイネ属が認められるが、他の種類は検出されない。

表3.植物珪酸体分析結果

種類	SK104 3層 植物遺体	SK104 3層 土壌	SK104 4層 植物遺体	SK104 4層 土壌
珪化組織片で検出された種類				
短細胞列(種類は不明)	+	−	+	−
イネ属穎珪酸体	−	++	−	++
イネ属短細胞列	−	+++	−	+++
イネ属機動細胞列	−	+	−	+
単体で検出された種類				
イネ属穎珪酸体	−	++	−	++
イネ属短細胞珪酸体	−	+++	−	+++
イネ属機動細胞珪酸体	−	+	−	+
想定される種類	不明	稲籾殻 稲藁	不明	稲籾殻 稲藁

+ + + : 非常に多い, + + : 多い, + : 検出, − : 未検出

(4) 植物遺存体分析

同定結果を表4に示す。種実、葉のほか、材、炭化材、不明植物（部位・種類ともに不明である植物片）、不明炭化物（木材組織を持たない炭化物で、部位・種類ともに不明であるもの）、昆虫遺体の細片なども検出された。

検出された種実・葉の種類をみると、木本類は少なく、大部分が草本類である。以下に同定された種実遺体の形態的特徴などを記す。

・マタタビ属（*Actinidia*）　マタタビ科

種子が検出された。黒褐色、楕円形で両凸レンズ形。長さ2mm、幅1.5mm程度。種皮は硬く、表面には円形・楕円形などの凹点が密布し網目模様をなす。

・オモダカ属（*Sagittaria*）　オモダカ科

果実が検出された。淡黄褐色、倒卵形で偏平。大きさ3mm程度。果皮は薄く翼状。翼の外形は欠損する。表面は微細な網目が縦方向に並ぶ。果皮は透き通るため、中の種子が透けてみられる。中の種子は茶褐色、倒U字状に曲がった円柱状で偏平。種皮は膜状で薄くやや透き通り柔らかい。表面には微細な網目があり縦筋が目立つ。

・イネ（*Oryza sativa* L.）　イネ科

イネ属

炭化胚乳、未炭化の穎が検出された。胚乳は黒色、長楕円形でやや偏平。長さ4～5mm、幅2.5mm程度。

・端に胚が脱落した凹部があり、両

表4.微細植物片分析結果

種類名	分析量 部位	SK104 3層 300cc 385.1g	SK104 4層 300cc 302.74g
木本			
マタタビ属	種子	1	-
草本			
オモダカ属	果実	2	1
イネ	果実	多	55
	胚乳	55	4
アワーヒエ	胚乳	10	2
エノコログサ属	果実	19	6
イネ科	果実	多	多
ホタルイ属	果実	8	-
カヤツリグサ科	果実	14	10
イボクサ	種子	1	-
ソバ	果実	4	多
タデ属	果実	4	1
アカザ科	種子	41	多
ナデシコ科	種子	2	2
キジムシロ属　ヘビイチゴ属—オランダイチゴ属	核	3	-
エノキグサ	種子	1	-
イヌコウジュ属	果実	1	-
ナス科	種子	1	-
メロン類	種子	1	-
タカサブロウ	果実	1	2
不明植物		+	+
材		−	+
炭化材		+	+
不明炭化物		+	+
昆虫遺体		+	+

注）多は100個以上の検出を示す。
注）+は細片を含むため個数推定が困難である種類を示す。

面には2～3本の縦溝がある。未炭化の穎は、淡褐色で厚く柔らかく、長さ6.5mm程度。特徴的な基部の果実序柄があり、穎表面は規則的に縦列する特徴的な顆粒状突起をもつ。

・アワ－ヒエ（*Setaria itarica* Beauv.－*Echinochloa crus-galli* Beauv.）　イネ科

炭化した胚乳が検出された。黒色、広楕円体でやや偏平。長さ1.5mm、幅1mm程度。背面は丸みがあり、腹面は平らで、基部に胚の凹みがある。

・エノコログサ属（*Sctaria*）　イネ科

未炭化の穎が検出された。淡褐色ないし茶褐色、半偏球形で大きさ3mm程度。穎は薄く柔らかくて弾力があり、表面には横方向に長い細胞が密に配列する。

・イネ科（Gramineae）

穎が検出された。淡褐色、狭卵形でやや偏平。長さ2mm程度。穎は薄く柔らかくて弾力がある。表面には微細な網目模様が縦列する。

・ホタルイ属（*Scirpus*）　カヤツリグサ科

果実が検出された。黒褐色、片凸レンズ状の広倒卵形。長さ2mm、幅1.5mm程度。背面はやや高く稜がある。先端部は尖り、基部から伸びる逆刺を持つ鬆状の腕が残る。表面は光沢があり、不規則な波状の横皺状模様が発達する。

・カヤツリグサ科（Cyperaceae）

果実が検出された。形態上差異のある複数の種を含んでいるものを一括した。代表的な形態は、黒褐色、両凸レンズ状の広倒皮針形。長さ2.5mm、幅1.5mm程度。先端部は尖り、表面はやや平滑。

・イボクサ（*Aneilema Keisak* Hassk.）　ツユクサ科イボクサ属

種子が検出された。赤みがかった灰褐色で半楕長楕円形。大きさは3mm程度。背面は丸みがあり、腹面は平らである。臍は線形で腹面の正中線上にあり、胚は一側面の浅い円形の凹みに存在する。種皮は柔らかく、表面は円形の小孔が多数存在する。

・ソバ（*Fagopyrum esculentum* Moench）　タデ科ソバ属

未炭化の果実が検出された。灰褐色、三稜状卵形。長さ5mm、径3mm程度。三稜と先端は鋭く、面の部分は凹む。果皮表面はやや平滑。

・タデ属（*Polygonum*）　タデ科

果実が検出された。形態上差異のある複数の種を含んでいるものを一括した。代表的な形態は黒色、三稜形で。長さ2.5mm、幅1.5mm程度。

・アカザ科（Chenopodiaceae）

種子が検出された。黒色、円盤状でやや偏平。径1mm程度。一端が凹み、臍がある。種皮は、微細な網目模様がみられ、光沢が強い。

・ナデシコ科（Caryophyllaceae）

種子が検出された。茶褐色、腎臓状円形でやや偏平。径1mm程度。基部は凹み、臍がある。種皮は薄く柔らかい。種皮表面には、臍を取り囲むように瘤状突起が同心円状に配列する。

・キジムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属（*Potentilla*－*Duchesnea*－*Fragaria*）　バラ科

核（内果皮）が検出された。灰褐色、腎形でやや偏平。長さ0.9mm、幅0.5mm程度。内果皮は厚く硬く、表面は微細な網目模様がありざらつく。

・エノキグサ（*Acalypha australis* L.）　トウダイグサ科エノキグサ属

種子が検出された。黒色、卵形で長さ1.5mm、径1mm程度。先端部はやや尖り鉤状に曲がる。頂部にはY字状の筋がある。種皮は薄く硬く、表面は細かな粒状の窪みが配列しざらつく。

・イヌコウジュ属（*Mosla*）　シソ科

果実が検出された。茶褐色、卵円形。径1.2mm程度。下端は舌状にわずかに突出する。果皮はやや厚く硬く、表面には大きく不規則な網目模様がある。

・ナス科（Solanaceae）

種子が検出された。淡褐色、歪な腎臓形で偏平。径3.5mm程度。種皮は薄く柔らかい。側面のくびれた部分に臍があり、表面は臍を中心として同心円状に星型状網目模様が発達する。網目模様は微細で網目を構成する壁の幅は太くしっかりしている。

・メロン類（*Cucumis melo* L.）　ウリ科キュウリ属

種子が検出された。淡褐色、狭倒皮針形で偏平。長さ7～7.5mm、幅3.5mm程度。基部に「ハ」の字形の凹みがある。表面は比較的平滑で、縦長の細胞が密に配列する。

・タカサブロウ（*Eclipta prostrata*（L.）L.）　キク科タカサブロウ属

果実が検出された。黒褐色。大きさは2mm程度。偏円錐形で、上面観はひし形。中心は褐色で白色の突起があり、周辺は白色である。表面はざらつく。水に浮く。

4.考察

（1）SK104の埋積環境

土坑SK104における珪藻分析の結果は、3層と4層で多少異なるが、検出される種類は類似している。検出された種類をみると、塩類を豊富に含む水域に生育する富栄養種や沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種、流水性種、止水性種、乾いた環境に適応する陸生珪藻が産出する。4層では、特定の種類が多くなるようなことはなく、いずれの種類もほぼ同様の出現率である。したがって、SK104内には様々な環境に生育していた珪藻化石が混在していることが指摘できる。こうした珪藻化石群集は混合群集と呼ばれ、氾濫堆積物等によくみられる（堀内ほか,1996）。周辺の地形を考慮すれば、土坑が掘り込まれている土壌や土坑使用時の地表面からの落ち込み等に由来する可能性がある。3層も同様の土壌に由来すると考えられるが、陸生珪藻が多いなどの点で4層とは多少異なる。これは後述する花粉分析や植物遺存体分析で3層と4層の組成が異なることとも一致し、4層よりもやや乾燥した時期があったか、乾燥した場所の土壌が混入していること等が推定される。

（2）古植生・植物利用状況

花粉分析の結果、広域の植生を反映する木本類の花粉はほとんど検出されなかった。草本類の花粉は多量に産出することから、土坑内に木本花粉が取り込まれにくかったと推測される。今回の結果から当時の広域植生に関する検討は困難であるが、少なくとも周囲の林縁や河畔などにハンノキ属、ガマズミ属、マタタビ属などが生育していたことが伺える。

花粉化石群集、種実遺体の種類構成をみると、検出された種類はほとんどが草本類である。中でもオモダカ属、ホタルイ属、イボクサ、タカサブロウなどの水生植物あるいは水生植物を多く含む分類群がみられることから、これらは周辺の低湿地に生育していたものに由来すると思われる。これらは水田雑草として普通にみられる種群であり、遺構からは多量のイネが検出されていることから、水田域に雑草として生育していた可能性もある。その他では、エノコログサ属を含むイネ科、クワ科、サナエタデ節－ウナギツ

カミ節を含むタデ科、アカザ科、ナデシコ科、キジムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属、マメ科、イヌコウジュ属、ヨモギ属などは、人里など開けた草地に普通にみられる種類である。これらは遺跡内をはじめとする人の手によって切り開かれた場所に草地を作っていたものと思われる。

栽培種についてみると、花粉化石では4層からはソバ属が多産しており、植物珪酸体では3層と4層からイネ属に由来する珪酸体が組織片の状態で多く検出されている。また、植物遺存体分析の結果からもイネ、ソバ、アワーヒエ、メロン類などが検出されており、特にイネやソバは多量に産出する。いずれの種類も栽培を目的として渡来した種類であることから、当時の植物食慢として、栽培・利用されていたことが示唆される。同じく砺波平野に立地する梅原胡摩堂遺跡では、中世の遺構などからこれらの有用植物が検出されている（パリノ・サーヴェイ株式会社,1996）。今回の結果も、当時の植物利用を考える上で、重要なデータとなり得る。

SK104の3層と4層を比較すると、花粉分析や植物遺存体分析の結果が異なる。4層では、種実遺体や花粉化石でソバが多数混入していることが確認できる。とくに、ソバ属の花粉が大量に検出される状況は、土坑の周辺でソバが栽培されており、その花粉や花序が混入した可能性がある。ソバ属の花粉と種実が同時に検出されることから、4層堆積時に最短でも花季から結実期（約3～4ヶ月）までの時間差があることが推定される。なお、植物遺存体分析でイネ以外のイネ科の果実が多数産出しているが、これは4層中の植物遺体が植物珪酸体分析でイネ属以外のイネ科植物の可能性があるとされたことと調和的である。

一方、3層では、花粉、種実ともソバ属が大きく減少する。植物遺存体分析では、変わってイネの穎や胚乳が多く産出するようになる。ただし、花粉化石では、イネ科花粉に大きな変化は認められない。したがって、4層と3層でイネ科花粉の由来がイネ属か否かで異なっている可能性もある。植物遺存体分析の結果もあわせると、4層と3層とでは堆積物や混入物などの由来が異なり、時間的にも多少の差があった可能性があると考えられる。これは、4層で植物遺体が多くを占めており土壌分が少ないことや、3層で箸状木製品が多数含まれていることも関係していると考えられる。

なお、植物珪酸体分析の結果をみると、3層と4層で同様の結果であり、違いが認められない。とくに4層でのイネ属の産出は、植物遺存体分析でイネが全く検出されなかった結果とは正反対である。3層内には土壌と共に灰白色の灰化物が多数混じっているが、同様のものが4層でも確認できる。これがイネ属の灰に由来している可能性が高い。このことから、4層堆積後から3層堆積時までの間にイネの植物細片等が多数混入するような時期があったことや、3層の灰化物が4層にも混入していること等が推定される。3層と4層ともにイネ属以外の植物珪酸体が全く含まれていないとは考えにくいが、イネ属の珪酸体が非常に多いために検出されにくかったことが推定される。

Ⅱ.木製品の樹種同定

1.試料

試料は、SK104、SE501、SD224、SD225、SB403、SB404の各遺構から出土した遺構構築材や木製品33点である。このうち、SK104からは箸状木製品が206点出土しているが、その中から肉眼で木目や形状を観察して、試料とする5点を選択した。試料の詳細は結果と併せて表5に示す。

2.分析方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

3.結果

樹種同定結果を表5に示す。木製品は、針葉樹5種類（マツ属複維管束亜属・スギ・ヒノキ・ヒノキ科・カヤ）と、広葉樹5種類（ハンノキ属ハンノキ亜属・クリ・ヤマグワ・ニガキ・カエデ属）に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属（*Pinus* subgen. *Diploxylon*）　　マツ科

軸方向組織は主として仮道管で構成されるが、晩材部付近には垂直樹脂道も認められる。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。放射組織は柔細胞、仮道管、樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となり、放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1-15細胞高。

・スギ（*Cryptomeria japonica*（L. f.）D. Don）　　スギ科スギ属

軸方向組織は、仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は広い。樹脂細胞は晩材部にのみ認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、1分野に2-4個。放射組織は単列、1-15細胞高。

・ヒノキ（*Chamaecyparis obtusa*（Sieb. et Zucc.）Endlicher）　　ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は、仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められるが、顕著ではない。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1-3個。放射組織は単列、1-15細胞高。

・ヒノキ科（Cupressaceae）

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。

表5．樹種同定結果

遺構	位置	R番号	器種	樹種
SK104		R209-6	箸状木製品	スギ
		R209-16	箸状木製品	スギ
		R209-27	箸状木製品	スギ
		R209-37	曲物蓋板ヵ	ヒノキ
		R209-148	曲物底板	ヒノキ科
		R209-156	箸状木製品	スギ
		R209-181	箸状木製品	スギ
		R209-207	曲物底板	スギ
SE501		R1068	板材	スギ
		R1073	方形曲物	カヤ
SD224		R862	用途不明品	スギ
SD225		R798-3	板材	スギ
		R798-8	部材	スギ
		R798-9	丸木	マツ属複維管束亜属
		R798-10	用途不明品	カエデ属
		R798-13	連歯下駄	クリ
		R798-14	差歯下駄	スギ
		R798-16	連歯下駄	クリ
		R601	割り材	ヤマグワ
SB403	P2	R822	柱根	スギ
	P3	R924	柱根	クリ
	P5	R911	柱根	クリ
	P7	R921	柱根	スギ
	P8	R923	柱根	スギ
	P12	R922	柱根	スギ
SB404	P5	R912	礎盤	クリ
	P5	R920	礎盤	ハンノキ属ハンノキ亜属
	P6	R823	丸木	クリ
	P10	R916	礎盤	ニガキ
	P11	R890	礎盤	クリ
	P12	R891-2	礎盤	クリ
	P12	R891-3	柱根	クリ
	P15	R918	礎盤	クリ

放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1-10細胞高。

上記のヒノキを含むヒノキ科のいずれかであるが、保存状態が悪く、分野壁孔が全く観察できない。そのため樹種の同定には至らず、ヒノキ科とした。

・カヤ（*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.）　イチイ科カヤ属

軸方向組織は仮道管のみで構成され、早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。仮道管内壁には対をなしたらせん肥厚が認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で、1分野に1-4個。放射組織は単列、1-10細胞高。

・ハンノキ属ハンノキ亜属（*Alnus* subgen. *Alnus*）　カバノキ科

散孔材で、管孔は単独または2-4個が放射方向に複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状に配列する。放射組織は同性、単列、1-30細胞高のものと集合放射組織とがある。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）　ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は1-3列、孔圏外で急激～やや緩やかに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

・ヤマグワ（*Morus australis* Poiret）　クワ科クワ属

環孔材で、孔圏部は1-5列、晩材部への移行は緩やかで、年輪界に向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-6細胞幅、1-50細胞高で、しばしば結晶を含む。

・ニガキ（Picrasma quassioides (D. Don) Benn.）　ニガキ科ニガキ属

環孔材で、孔圏部は2～3列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち漸減する。大道管は管壁は厚く、横断面では円形～角張った円形、単独、小道管は、横断面では円形～多角形で単独～塊状、年輪界付近では周囲の柔細胞と区別しにくい。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1-8細胞幅、1-40細胞高。柔組織は周囲状～翼状およびターミナル状。

・カエデ属（*Acer*）　カエデ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独および2-3個が複合して散在し、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-5細胞幅、1-40細胞高。細胞壁の厚さが異なる2種類の木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

表6.遺構別種類構成

遺構・器種	樹種 / 複維管束亜属	スギ	ヒノキ	ヒノキ科	カヤ	ハンノキ亜属	クリ	ヤマグワ	ニガキ	カエデ属	合計
SK104	著状木製品		5								5
	曲物底板		1		1						2
	曲物蓋板ヵ			1							1
SE501	方形曲物					1					1
	板材		1								1
SD224	用途不明品		1								1
SD225	茶臼下駄		1								1
	連歯下駄						2				2
	板材		1								1
	部材		1								1
	丸木	1									1
	割り材								1		1
	用途不明品									1	1
SB403	柱根		4				2				6
SB404	礎盤					1	4		1		6
	柱根						1				1
	丸木						1				1
合計		1	15	1	1	1	10	1	1	1	33

4.考察

樹種同定を行った木製品は、木製品と建築部材に大別できる。各遺構・器種別の種類構成を表6に示す。木製品では、全体的には針葉樹材が多用されている傾向があり、その中でもスギ材の占める割合が高い。スギ材が多い傾向は、隣接するB・C区でも確認されている。

針葉樹が利用されている木製品は、板状や角棒状を呈している。こうした製品は、室町時代に縦挽き用の鋸（大鋸）が渡来するまでは、楔で木を割って製作していた（成山,1996）。したがって、板や角材の加工には、割裂性の高い木材が適していたことが指摘できる。スギ等の針葉樹材は、一般に木理が通直で割裂性が高く、割る加工には適材といえる。この材質が木製品に針葉樹が多用されている背景に考えられる。さらに、大門町布目沢東遺跡の花粉分析結果では、古墳時代以降にスギ属が増加しており、周辺の低地にスギが生育していた可能性が指摘されている（パリノ・サーヴェイ株式会社,1991）。入善町には現在もスギ低地林（沢スギ）が残存しており、同様のスギ低地林が当時の本遺跡周辺でも見られたと考えられる。スギが多用されている背景には、遺跡周辺で入手が容易な条件があったことが考えられる。一方、そのような状況の中で曲物にはスギ以外の針葉樹材（ヒノキ、ヒノキ科、カヤ）が多く用いられており、意図的にこれらの木材を使用した可能性も考えられる。このうち、ヒノキは、これまでの調査でも曲物に多く利用されている樹種である（島地・伊東,1988）。この背景には、割裂性が高く薄い板の作製が容易であることや、スギよりも耐水性が高いことが挙げられる。ヒノキ科は、今回についてはヒノキの可能性があるが、詳細は不明である。ヒノキ以外のヒノキ科も基本的には耐水性が高い材質を有する。カヤは、ヒノキに比較すると重硬で加工が難しい面があるが、耐水性は高い。これらの材質から、耐水性の高い木材を曲物に利用していることが推定される。

広葉樹材では、連歯下駄にクリ、刳り材にヤマグワ、用途不明にカエデ属が認められた。このうち、ヤマグワとカエデ属については用途の詳細が不明である。連歯下駄にクリが利用されている結果は、差歯下駄にスギが利用されている結果と対照的である。連歯下駄は歯と台が一体化しているのに対し、差歯下駄は板状の台と歯を別材から製作するために割り板からも製作可能である。樹種の違いは、このような加工法の違いも反映していると考えられる。クリは重硬で強度が高く、耐朽性にも優れた材質を有する。履物としてはスギ材よりも重いが、丈夫であることが利用された背景に考えられる。富山県内では、梅原胡麻堂遺跡で中世後期の下駄について樹種同定が行われており、スギ、ネズコ、ヒノキ属、クルミ科、クリ、アオハダ、カツラ、カキノキ属、キリが確認されている（横山,1996;長谷川・塚本,1996）。クリやスギも確認されていることは、本遺跡の結果とも調和的である。富山県以外の地域では、中世の下駄は、広島県草戸千軒町遺跡で出土した全点（612点）について樹種同定が行われている（パリノ・サーヴェイ株式会社,1997,2001）。この他には、福島県いわき市久世原館・番匠地遺跡、東京都葛飾区亀西城址、上千葉遺跡、柴又帝釈天遺跡、神奈川県鎌倉市蔵屋敷遺跡、千葉地東遺跡、佐助ヶ谷遺跡、愛知県岩倉市岩倉城跡、石川県鹿島町水内モンショ遺跡、熊本県熊本市高橋南貝塚等の例がある（山内,1976,1984,1986;大迫,1978;鈴木・能城,1989;パリノ・サーヴェイ株式会社,1992,1993;鹿桜,1993）。これらの結果をみると、クリは比較的よく利用されている樹種の一つであったことが推定される。草戸千軒町遺跡の例では、連歯、差歯に関わらず針葉樹材（ヒノキ属等）の利用が多いが、広葉樹材は差歯下駄の歯にモクレン属が多く見られる他は、連歯下駄に利用が集中している。このことは、本遺跡の結果とも似ており、木材の加工性等を反映していることが推定される。

一方、建築部材は、掘立柱建物跡（SB403,SB404）から出土した柱材にはクリとスギ、礎板にはクリが

多く利用されていたことが推定される。富山県内では中世の柱材について樹種同定を行った例は少ないが、梅原胡麻堂遺跡や針原東遺跡では、本遺跡と同様に柱にクリが多くスギも検出されていることが報告されている（長谷川・塚本,1996;パリノ・サーヴェイ株式会社,1994）。これには、クリ材の強度や耐朽性に優れた材質が考慮されたこと、スギの大型材の入手が容易であったことなどが考えられる。

Ⅲ.SK104の年代

1.試料

試料は、前述の植物遺存体分析によりSK104の3層から抽出された炭化米1点である。

2.分析方法

測定は株式会社加速器研究所の協力を得て、AMS法で行う。なお、放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）である。暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4（Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、北半球の大気圏における暦年校正曲線を用いる条件を与え、計算させている。

3.結果

結果を表7・8に示す。試料の測定年代（補正年代）は、約630年前の14世紀頃の値を示す。したがって、炭化米の年代は14世紀頃と考えられる。ただし、今回は測定点数が1点であるため、今後、同遺構から出土した炭化物についてより多くの測定例を得ることで、土坑のより詳細な年代に関する情報が得られると思われる。

表7.放射性炭素年代測定結果

試料の質	誤差	補正年代 BP	δ13C (‰)	測定年代 BP	Code.No.
炭化米	1σ	630±30	-25.44±0.67	640±30	IAAA-31951
炭化米	2σ	630±70	-25.44±0.67	640±70	IAAA-31951

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。

3) 付記した誤差は、測定誤差1σ（測定値の68%が入る範囲）および2σ（測定値の95%が入る範囲）を年代値に換算した値。

表8.暦年較正結果

補正年代 (BP)	誤差	暦年較正年代（cal）			相対比	Code No.
630±33	1σ	cal AD 1,300 - cal AD 1,325	cal BP 650 - 625		0.401	IAAA-31951
		cal AD 1,349 - cal AD 1,373	cal BP 601 - 577		0.386	
		cal AD 1,378 - cal AD 1,390	cal BP 572 - 560		0.213	
630±66	2σ	cal AD 1,294 - cal AD 1,333	cal BP 656 - 617		0.386	IAAA-31951
		cal AD 1,338 - cal AD 1,400	cal BP 612 - 550		0.614	

1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV4.4（Copyright 1986-2002 M Stuiver and PJ Reimer）を使用

2) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3) 付記した誤差は、測定誤差1σ（測定値の68%が入る範囲）および2σ（測定値の95%が入る範囲）を年代値に換算した値。

引用文献

安藤　一男,1990,淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用.東北地理,42,73-88.

Asai, K. and Watanabe, T.,1995,Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom,10*,35-47.

藤根　久,1993,佐助ヶ谷遺跡出土木製品の樹種同定.「神奈川県・鎌倉市　佐助ヶ谷遺跡（鎌倉税務署用地）発掘調査報告書　－第1分冊－」,佐助ヶ谷遺跡発掘調査団,389-396.

原口　和夫・三友　清・小林　弘,1998,埼玉の藻類　珪藻類.埼玉県植物誌,埼玉県教育委員会,527-600.

長谷川　益夫・塚本　英子,1996,木製品の樹種識別.「富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告書第7集　梅原胡麻堂遺跡発掘調査報告書（遺物編）　－東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅱ－第二分冊」,財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所,49-86

堀内　誠示・高橋　敦・橋本　真紀夫,1996,珪藻化石群集による低地堆積物の古環境推定について　－混合群集の認定と堆積環境の解釈－.日本文化財科学会第13回大会研究発表要旨集,　62-63.

石川　茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.

伊藤　良永・堀内　誠示,1991,陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用.珪藻学会誌,6,23-45.

近藤　鍊三・佐瀬　隆,1986,植物珪酸体分析　その特性と応用.第四紀研究,25,31-64.

小杉　正人,1988,珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用.第四紀研究,27,1-20.

Krammer, K.,1992,PINNULARIA,eine Monographie der europaischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA, BAND 26,353p.,BERLIN・STUTTGART.

Krammer, K. and Lange-Bertalot, H.,1986,Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae.Band 2/1 von：Die Suesswasserflora von Mittleeuropa,876p.,Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K. and Lange-Bertalot, H.,1988,Bacillariophyceae,Teil 2,Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von:Die Suesswasserflora von Mitteleuropa,536p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K. and Lange-Bertalot, H.,1991a,Bacillariophyceae.Teil 3,Centrales,Fragilariaceae,Eunotiaceae. Band 2/3 von:Die Suesswasserflora von Mittelcuropa,230p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K. and Lange-Bertalot, H.,1991b,Bacillariophyceae,Teil 4,Achnanthaceae, Kritsche Ergaenzungen zu Navicula（Lineolatae） und Gomphonema.Band 2/4 von:Die Suesswasserflora von Mittelcuropa,248p., Gustav Fischer Verlag.

中山　至大・井之口　希秀・南谷　忠志,2000,日本植物種子図鑑.東北大学出版会,642p.

成田　壽一郎,1996,曲物・籠物.理工学社,205p.

大迫　靖雄,1978,高橋南貝塚出土木製品の樹種鑑定.「熊本県文化財調査報告第28集　高橋南貝塚　本文」,熊本県教育委員会,77-80.

パリノ・サーヴェイ株式会社,1991,布目沢東遺跡　自然科学分析報告.「大門町埋蔵文化財調査報告第7集　大門町企業団地内遺跡発掘調査報告（1）－布目沢東遺跡・布目沢北遺跡－」,富山県埋蔵文化財センター・大門町教育委員会,81-118.

パリノ・サーヴェイ株式会社,1992,岩倉城遺跡から出土した木製品の樹種.「愛知県埋蔵文化財センター調査報告第38集　岩倉城遺跡」,財団法人愛知県埋蔵文化財センター,119-123.

パリノ・サーヴェイ株式会社,1993,自然科学分析（花粉・材）.「いわき市埋蔵文化財調査報告第33冊　久

世原館・番匠地遺跡　第Ⅰ篇　－概要・附篇－」,福島県いわき市・福島県いわき市教育委員会・財団法人いわき市教育委員会文化事業団,74-88.

パリノ・サーヴェイ株式会社,1994,針原東遺跡から出土した木製品の材同定.「小杉町針原東遺跡発掘調査報告」,富山県小杉町教育委員会,141-154.

パリノ・サーヴェイ株式会社,1996,中・近世の古植生および植物利用.梅原胡摩堂遺跡発掘調査報告（遺物編）－東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅱ－　第２分冊,財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所,10-23.

パリノ・サーヴェイ株式会社,1997,草戸千軒町遺跡から出土した下駄の樹種.「草戸千軒町遺跡調査研究報告１　草戸千軒町遺跡出土の下駄」,広島県立歴史博物館,70-86.

パリノ・サーヴェイ株式会社,2001,草戸千軒町遺跡から出土した下駄の樹種.「草戸千軒町遺跡調査研究報告５　草戸千軒町遺跡出土の下駄2」,広島県立歴史博物館,15-34.

島地　謙・伊東　隆夫（編）日本の遺跡出土木製品総覧.雄山閣,296p.

鈴木　三男・能城　修一,1989,水白モンショ遺跡出土木製品の樹種.「石川県鹿島郡鹿島町水白モンショ遺跡」,石川県埋蔵文化財センター,102-113.

Witkowski, A., Lange-Bertalot, H. and Metzeltin, D.,2000,Diatom flora of Marine coast I Iconographia Diatomologica 7:881p.,Koeltz Sci. Koenigstein.

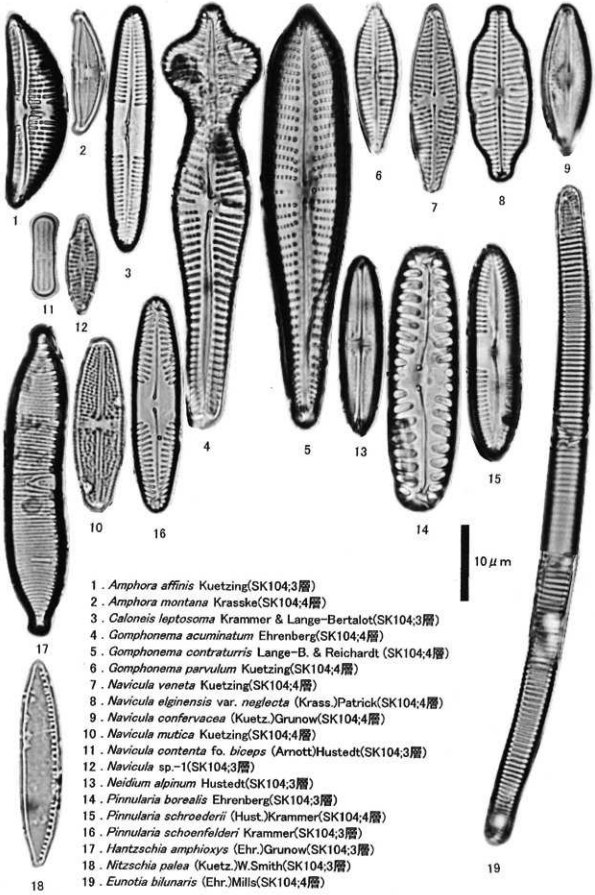
山内　文,1974,木製品および自然遺物.「青戸・葛西城址調査報告Ⅱ　東京都・葛飾区・青戸」,東京都教育委員会,122-124.

山内　文,1984,蔵屋敷遺跡出土の木製品について.「蔵屋敷遺跡　日本国有鉄道鎌倉駅舎改築に伴う鎌倉市小町所在遺跡の調査」,鎌倉駅舎改築にかかる遺跡調査会,227-231.

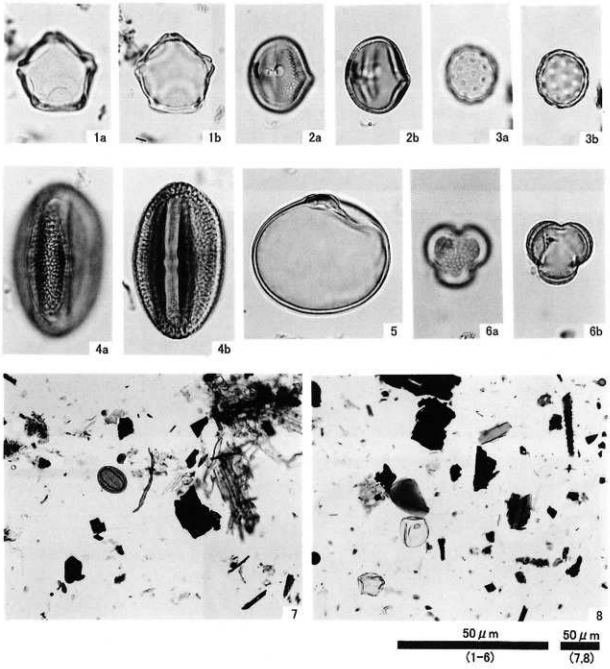
山内　文,1986,千葉地東遺跡出土の木製品の樹種について.「神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告10　千葉地東遺跡　鎌倉県税事務所建設工事にともなう鎌倉市御成町所在遺跡の調査」,神奈川県立埋蔵文化財センター,575-578.

横山　和美,1996,梅原胡麻堂遺跡出土の木製品にみる特徴.「富山県文化振興財団埋蔵文化財発掘調査報告書第７集　梅原胡麻堂遺跡発掘調査報告書（遺物編）　－東海北陸自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘報告Ⅱ－　第一分冊」,財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所,381-388.

図版1　珪藻化石

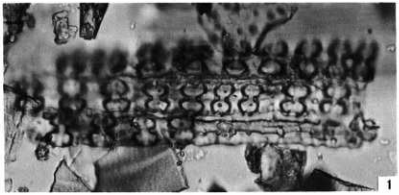


1．*Amphora affinis* Kuetzing(SK104;3層)
2．*Amphora montana* Krasske(SK104;4層)
3．*Caloneis leptosoma* Krammer & Lange-Bertalot(SK104;3層)
4．*Gomphonema acuminatum* Ehrenberg(SK104;4層)
5．*Gomphonema contraturris* Lange-B. & Reichardt (SK104;4層)
6．*Gomphonema parvulum* Kuetzing(SK104;4層)
7．*Navicula veneta* Kuetzing(SK104;4層)
8．*Navicula elginensis* var. *neglecta* (Krass.)Patrick(SK104;4層)
9．*Navicula confervacea* (Kuetz.)Grunow(SK104;4層)
10．*Navicula mutica* Kuetzing(SK104;4層)
11．*Navicula contenta* fo. *biceps* (Arnott)Hustedt(SK104;3層)
12．*Navicula* sp.-1(SK104;3層)
13．*Neidium alpinum* Hustedt(SK104;3層)
14．*Pinnularia borealis* Ehrenberg(SK104;3層)
15．*Pinnularia schroederii* (Hust.)Krammer(SK104;4層)
16．*Pinnularia schoenfelderi* Krammer(SK104;3層)
17．*Hantzschia amphioxys* (Ehr.)Grunow(SK104;3層)
18．*Nitzschia palea* (Kuetz.)W.Smith(SK104;3層)
19．*Eunotia bilunaris* (Ehr.)Mills(SK104;4層)

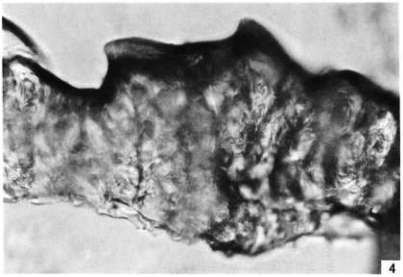


1．ハンノキ属(SK104;3層)
2．マメ科(SK104;3層)
3．アカザ科(SK104;3層)
4．ソバ属(SK104;4層)
5．イネ科(SK104;4層)
6．ヨモギ属(SK104;4層)
7．プレパラート内の状況写真(SK104;4層)
8．プレパラート内の状況写真(SK104;3層)

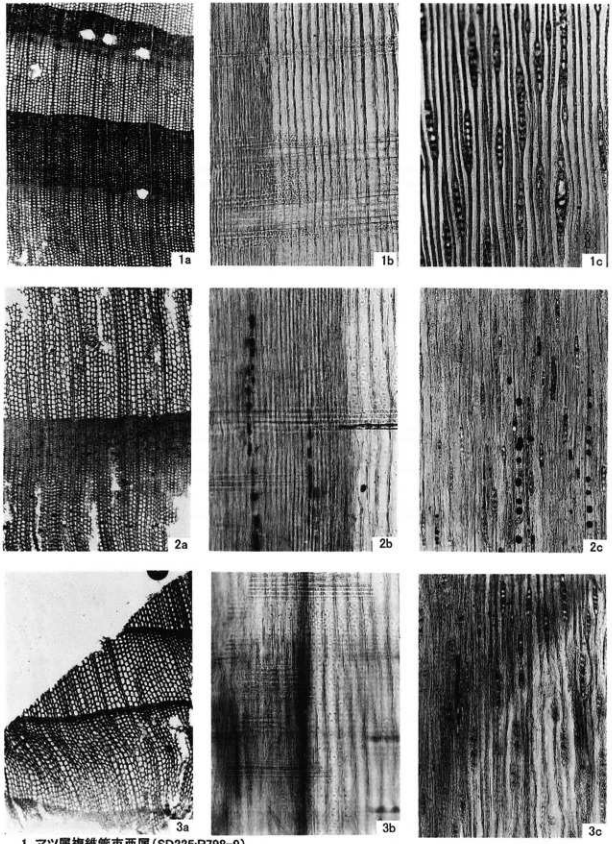
図版３　植物珪酸体



50 μm

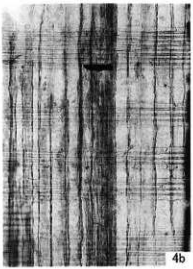


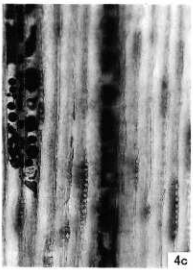
1．イネ属短細胞列(SK104;4層)　　2．イネ属機動細胞珪酸体(SK104;3層)
3．イネ属機動細胞列(SK104;3層)　　4．イネ属穎珪酸体(SK104;3層)

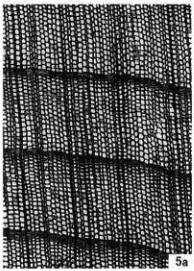


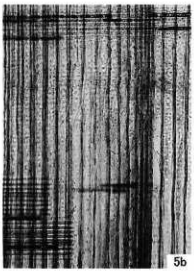
1. マツ属複維管束亜属（SD225;R798-9）
2. スギ（SB403-P12;R922）
3. ヒノキ（SK104;R209-37）
   a：木口，b：柾目，c：板目

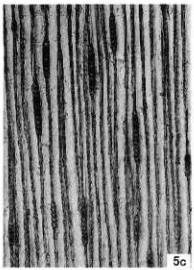
図版5　木材（2）

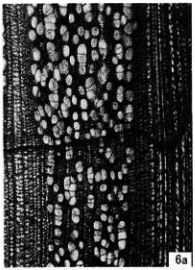


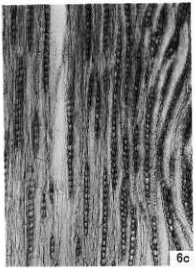






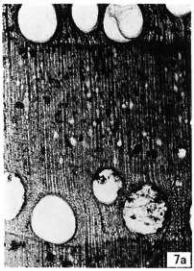






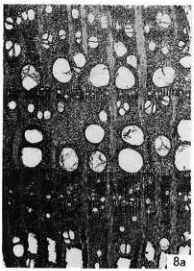
4. ヒノキ科（SK104;R209−148）
5. カヤ（SE501;R1073）
6. ハンノキ属ハンノキ亜属（SB404−P14;R920）
a：木口，b：柾目，c：板目

200 μ m:a
200 μ m:b,c


7a

7b

7c


8a

8b

8c

9a

9b

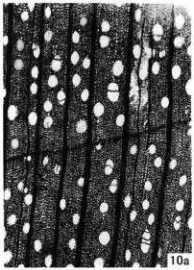
9c

200 μ m:a

200 μ m:b,c

7. クリ（SB403-P3;R924）
8. ヤマグワ（SD225;R604）
9. ニガキ（SB404-P9;R916）
a：木口，b：柾目，c：板目

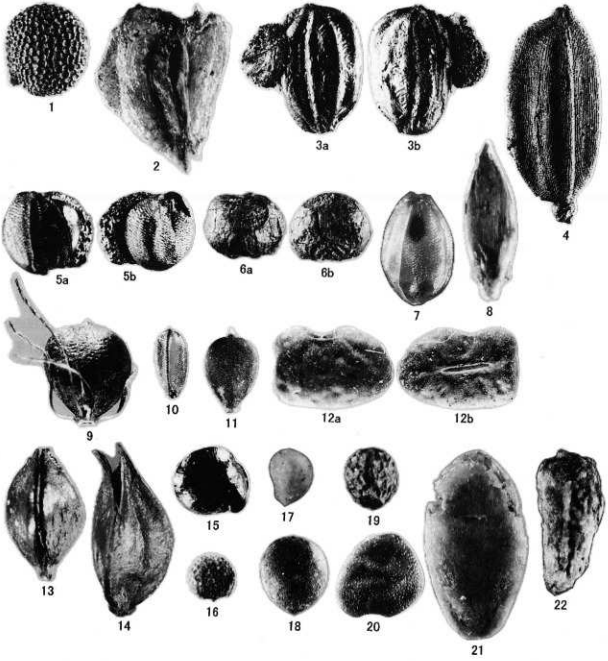
図版7　木材（4）



200 μ m:a
200 μ m:b,c

10. カエデ属（SD225;R798-10）
a：木口，b：柾目，c：板目

図版8　種実遺体



(1. 2. 5-13. 15-19. 22)　(3. 4. 14. 20. 21)

1．マタタビ属 種子(SK104;3層)
2．オモダカ属 果実(SK104;3層)
3．イネ 胚乳(SK104;3層)
4．イネ 穎(SK104;3層)
5．アワ－ヒエ 胚乳(SK104;3層)
6．アワ－ヒエ 胚乳(SK104;3層)
7．エノコログサ属 穎(SK104;3層)
8．イネ科 穎(SK104;4層)
9．ホタルイ属 果実(SK104;3層)
10．カヤツリグサ科 果実(SK104;3層)
11．カヤツリグサ科 果実(SK104;3層)
12．イボクサ 種子(SK104;3層)
13．タデ属 果実(SK104;3層)
14．ソバ 果実(SK104;4層)
15．アカザ科 種子(SK104;4層)
16．ナデシコ科 種子(SK104;3層)
17．キジムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属(SK104;3層)
18．エノキグサ 種子(SK104;3層)
19．イヌコウジュ属 果実(SK104;3層)
20．ナス科 種子(SK104;3層)
21．メロン類 種子(SK104;3層)
22．タカサブロウ 果実(SK104;3層)

第6章　結　　語

本地区の調査では、古代から近世にかけての遺構が3面にわたって検出されている。以下、遺構検出面ごとに調査成果の概要を述べる。

1．第1面（近世）

本面からは、近世の所産と考えられる遺構が検出されている。出土遺物は僅かであるが、溝SD213からは18世紀後半に比定される肥前・波佐見系の染付碗1（R208）が出土している。

調査区東側からは、細く浅い形状の溝が多数検出されている。いずれも谷の傾斜に沿って並行または直交するもので、その規模と形状からみて畑などの耕作にともなう溝と考えられる。土坑と小ピットは、この溝群と後述する道路SF701の側から検出されている。小ピットは、いずれも柱根や根固め石をともなうもので柱穴と考えられるが、規則的な配列がみられず、建物などの存在は確認されなかった。概して柱根が細いことや周辺から遺物の出土がみられないことから、作業小屋などの雑舎的な建物、あるいは、農作業にともなう何らかの施設の存在が想定される。

道路SF701は、本面から検出された遺構のうちで特徴的なものである。本道路は両側に側溝をもつ幅1.50m前後の道路で、谷底を南北に横断するかたちで検出されている。その規模と方向からみて、谷底から尾根上へ通じる道路、あるいは、谷底を挟んで対峙する尾根と尾根を繋ぐ道路であった可能性が考えられる。

本遺跡の南側に隣接する尾根上には倉谷古墳群があり、平成9～12年度にかけて発掘調査が実施されている。このうち平成9～11年度の調査区からは、同じく道路が1条検出されている。この道路SF01は、尾根上の高所を巻きながら西側の尾根基部から先端部へ向けて緩左するもので、総延長距離約225mにわたって確認されている。道路SF01が検出されたのは尾根の途中までで、その先については「（前略）急激に尾根下に向かうものと想定される。」〔高岡市教委2002〕ことが指摘されている。道路SF01の構築・機能時期については、周辺の出土遺物などから、13世紀前半から14世紀前半、17世紀後半から19世紀前半の2時期が想定されている。中世前期のものについては不明であるが、本面から検出された道路SF701は、近世段階において尾根上に延びる道路SF01に連続していた可能性が高い。

2．第2面（古代末期～中世前期）

本面からは11世紀から14世紀中頃にかけての集落跡が検出されている。遺物は、宮田編年Ⅰ～Ⅲ期〔宮田1997〕に比定される中世土師器を中心に、白磁、龍泉窯系青磁、珠洲などが出土している。検出された遺構は、出土遺物および遺構の切り合い関係から時期差があることが判明している。ここでは、検出された遺構をⅠ～Ⅳ期に時期区分し、その概要を述べる。

Ⅰ期（第10図）

本期は11世紀から12世紀中頃の時期を想定した。遺構は、掘立柱建物SB402、土坑SK119・124、溝SD203・225・228・231・245、小ピットSP923・925がある。掘立柱建物SB402は、2間×2間の側柱建物で、西側に直線的な両切り溝SD245をともなう。遺物の出土はないが、東側に並行して延びる溝SD225との位置関係などから本期に属するものと判断した。溝SD203と溝SD225は、谷底を横断するかたちで南北方向へ延

びる大規模な溝である。出土遺物からみて、溝SD203が溝SD225に先行するものと考えられるが、端部を方形につくるなど共通した意図が窺える。区画溝あるいは谷上部からの流水を防ぐための溝と考えられる。

II期（第11図）

12世紀後半から13世紀前半の時期を想定した。遺構は、掘立柱建物SB401、溝SD224・241・243・246、自然流路SD244がある。掘立柱建物SB401は、5間×4間の総柱建物で、周囲に「コ」の字状に廻る雨切り溝SD243・246をともなう。出土遺物から12世紀後半の建物と考えられる。溝SD224と溝SD241は、端部を方形につくるなど、前述した溝203・225と同様の傾向がみえる。また、自然流路SD244は、溝SD225を切って流下していることから、同溝が埋没したのちに形成されたものと考えられる。II～IV期の建物は、いずれも自然流路SD244を避けるようなかたちで山裾側に構築されている。

III期（第12図）

13世紀後半から14世紀前半の時期を想定した。遺構は、掘立柱建物SB403・406、土坑SK103・104・116、自然流路SD244がある。掘立柱建物SB403と掘立柱建物SB406は、ほぼ棟通りを揃えて直列に配置されているものである。その規模と位置関係からみて、主要建物（総柱建物）と付属舎（側柱建物）といった組み合わせが想定される。掘立柱建物SB403の北側には、建物と主軸方位を揃えるかたちで土坑SK104が位置している。同土坑からは、総数206点にもおよぶ大量の箸状木製品が出土している。共伴した炭化米をもとにAMS法による年代測定を行ったところ、14世紀頃という測定結果が得られている（第5章参照）。遺構の性格は不明であるが、出土遺物に鎬連弁文青磁をともなうことから14世紀前半頃の遺構と推定される。

IV期（第13図）

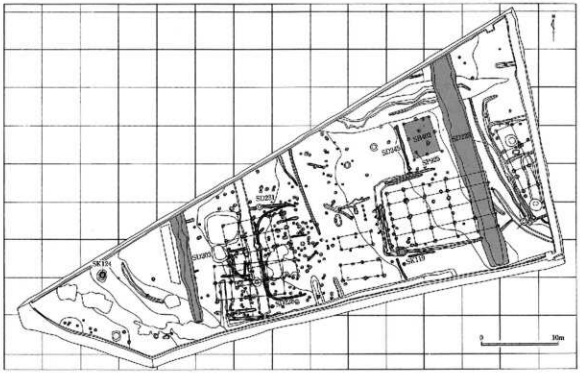
III期に後続する時期として14世紀中頃を想定した。遺構は、掘立柱建物SB404・407、自然流路SD244がある。掘立柱建物SB404と掘立柱建物SB406は、III期の建物と同様、ほぼ直列に配置されているものである。時期を特定できる遺物の出土はないが、前述した土坑SK104を切っていることから、掘立柱建物SB403より新しいものと判断した。

本面から検出された遺物のうち、中世土師器については細片のため時期が判然としないものもあるが、越前や瀬戸などの時期の新しい遺物が出土していないことから、概ね本期をもって、本集落跡は一旦途絶えるものと考えられる。

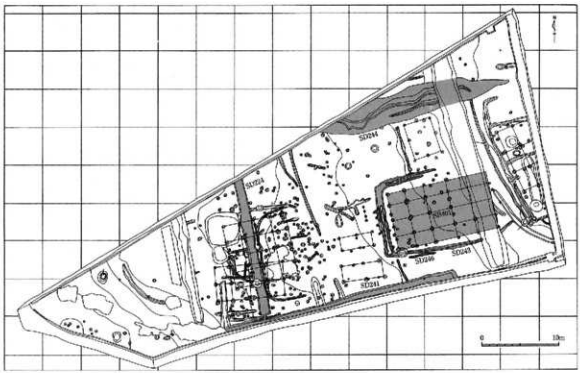
3. 第3面（古代）

本面からは、古墳時代から奈良時代を中心とする時期の遺構が検出されている。遺構は全体に希薄であるが、調査区西側の山際から井戸、土坑、溝などの遺構がまとまって検出されている。これらの遺構は、調査区中央から東側にかけて大規模な自然流路SD268が存在することから、これを避けるかたちで構築されたものと考えられる。

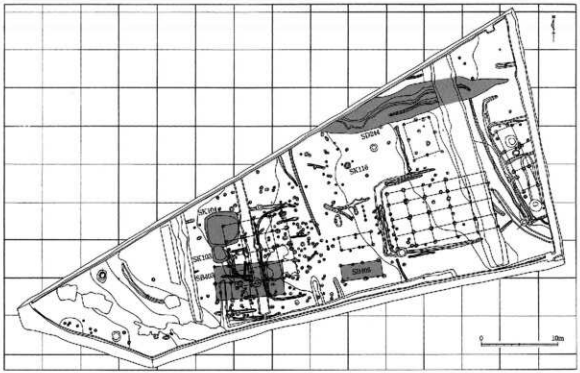
なお、参考資料として、隣接するB・C地区の調査成果を加えた遺跡全体の時期別遺構分布図を第14～17図に示した。同地区の詳細については、『間尽遺跡調査報告III』として報告書の刊行が予定されている。



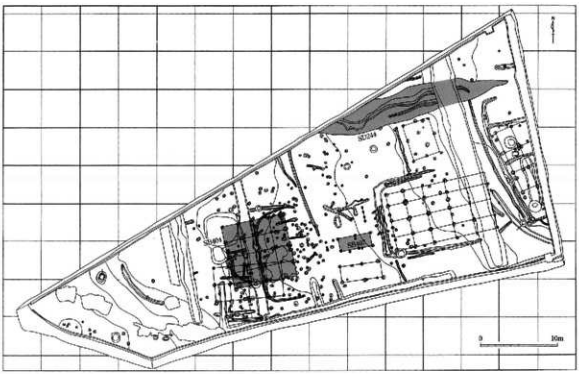
第10図　第２面Ⅰ期の遺構配置図（１/500）



第11図　第２面Ⅱ期の遺構配置図（１/500）



第12図　第２面Ⅲ期の遺構配置図（１/500）



第13図　第２面Ⅳ期の遺構配置図（１/500）

引用・参考文献

石川県立埋蔵文化財センター　1986　『漆町遺跡Ⅰ』

池野正男　1996　「越中における９世紀代の土器様相」『北陸の９世紀代の土器様相』第77回北陸古代土器研究会例会　北陸古代土器研究会

宇野隆夫　1982　「井戸考」『史林』第65巻５号　史学研究会

越前慎子　1996　「柳原胡摩堂遺跡出土中世土師器皿の編年」『柳原胡摩堂遺跡発掘調査報告書（遺物編）』　富山県文化振興財団

神奈川考古同人会　1986　「シンポジウム古代末期～中世における在地系土器の諸問題」神奈川考古第21号

加賀真樹　1997　「珠洲窯」『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』　桂書房

九州近世陶磁学会　2000　『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会10周年記念－』

佐々木幹雄　1981　「三輪山及びその周辺出土の子持勾玉」『古代』第71号　早稲田大学考古学会

静岡県菊川町教育委員会　1999　『横地城跡－総合調査報告書－』

鈴木公雄　1999　『出土銭貨の研究』　東京大学出版社

高岡市教育委員会　1988　『越中国府関連遺跡調査概報Ⅲ』

高岡市教育委員会　1991　『越中国府関連遺跡調査概報Ⅴ』

高岡市教育委員会　1994　『越中国府関連遺跡調査概報Ⅵ』

高岡市教育委員会　1996　『越中国府関連遺跡調査概報Ⅶ』

高岡市教育委員会　2000　『開尽遺跡調査報告』高岡市埋蔵文化財調査報告第５冊

高岡市教育委員会　2002　『倉谷古墳群調査報告』高岡市埋蔵文化財調査報告第９冊

富山考古学会　1999　『富山平野の出現期古墳』富山考古学会創立50周年記念シンポジウム

永井久美男編　1994　『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』　兵庫埋蔵銭調査会

中扇克彦　1994　「加賀における近江系土器について。『庄内式土器研究』Ⅵ　庄内式土器研究会

永井久美男編　1996　『日本出土銭総覧』1996年版　兵庫県埋蔵銭調査会

福光町教育委員会　2001　『富山県福光町在房遺跡Ⅰ』

北陸中世土器研究会　1988　『北陸における中世土師器・陶磁器・漆器』

北陸中世土器研究会　1991　『城館遺跡出土の土器・陶磁器・漆器』

北陸中世土器研究会　1993　『中世北陸の家・屋敷・暮らしぶり』

北陸中世土器研究会　1994　『中世北陸の寺院と墓地』

北陸古代土器研究会　1997　『北陸の10・11世紀代の土器様相』第83回北陸古代土器研究会例会

北陸古代土器研究会　1999　『須恵器貯蔵具を考える１　つぼとかめ』北陸古代土器研究第８号

北陸古代土器研究会　2001　『須恵器貯蔵具を考えるⅡ　つぼとかめのつくり方』北陸古代土器研究第９号

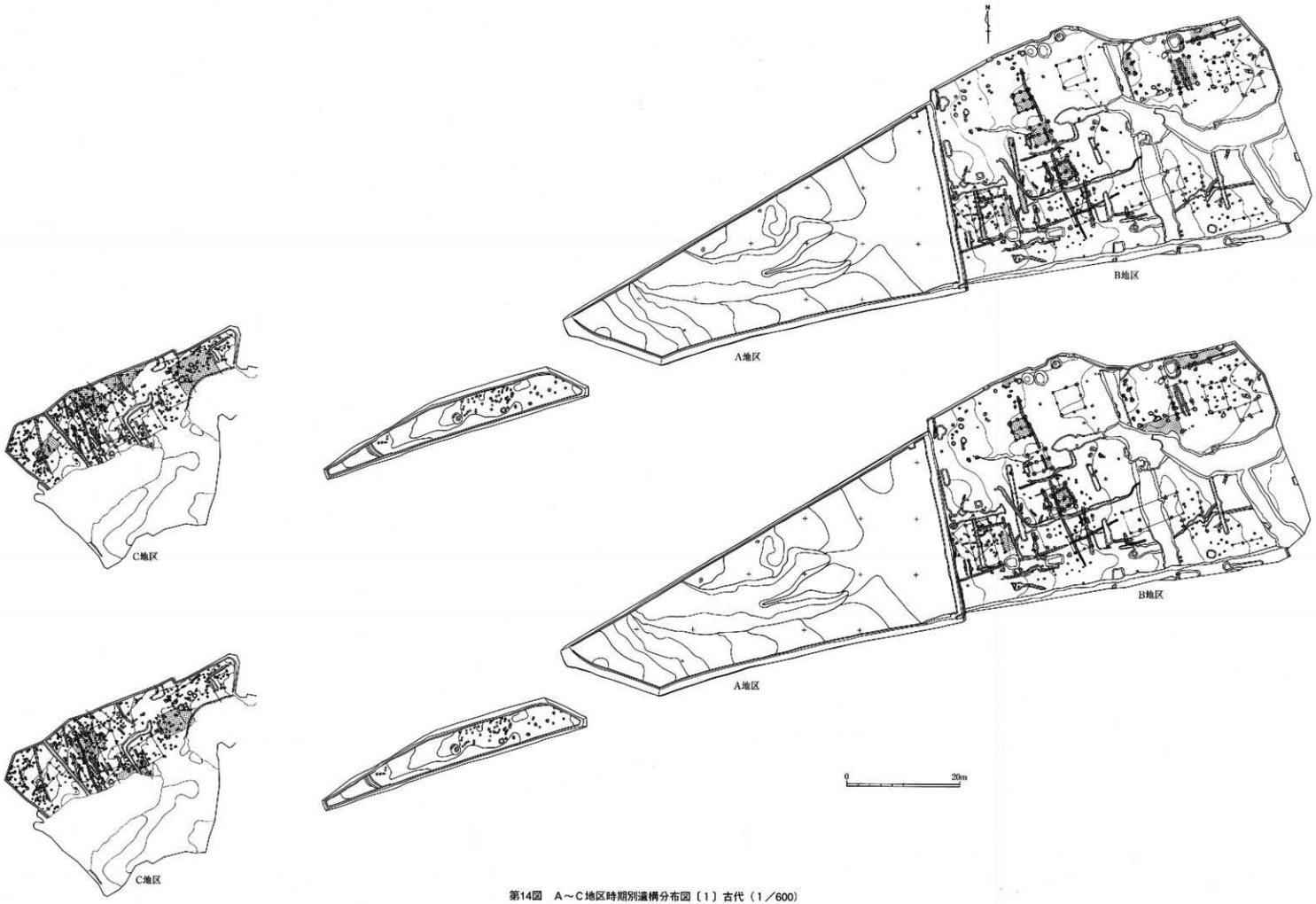
宮田進一　1992　「越中における中世土師器の編年」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』　北陸中世土器研究会

宮田進一　1997　「越中国における土師器の編年」『中・近世の北陸－考古学が語る社会史－』　桂書房

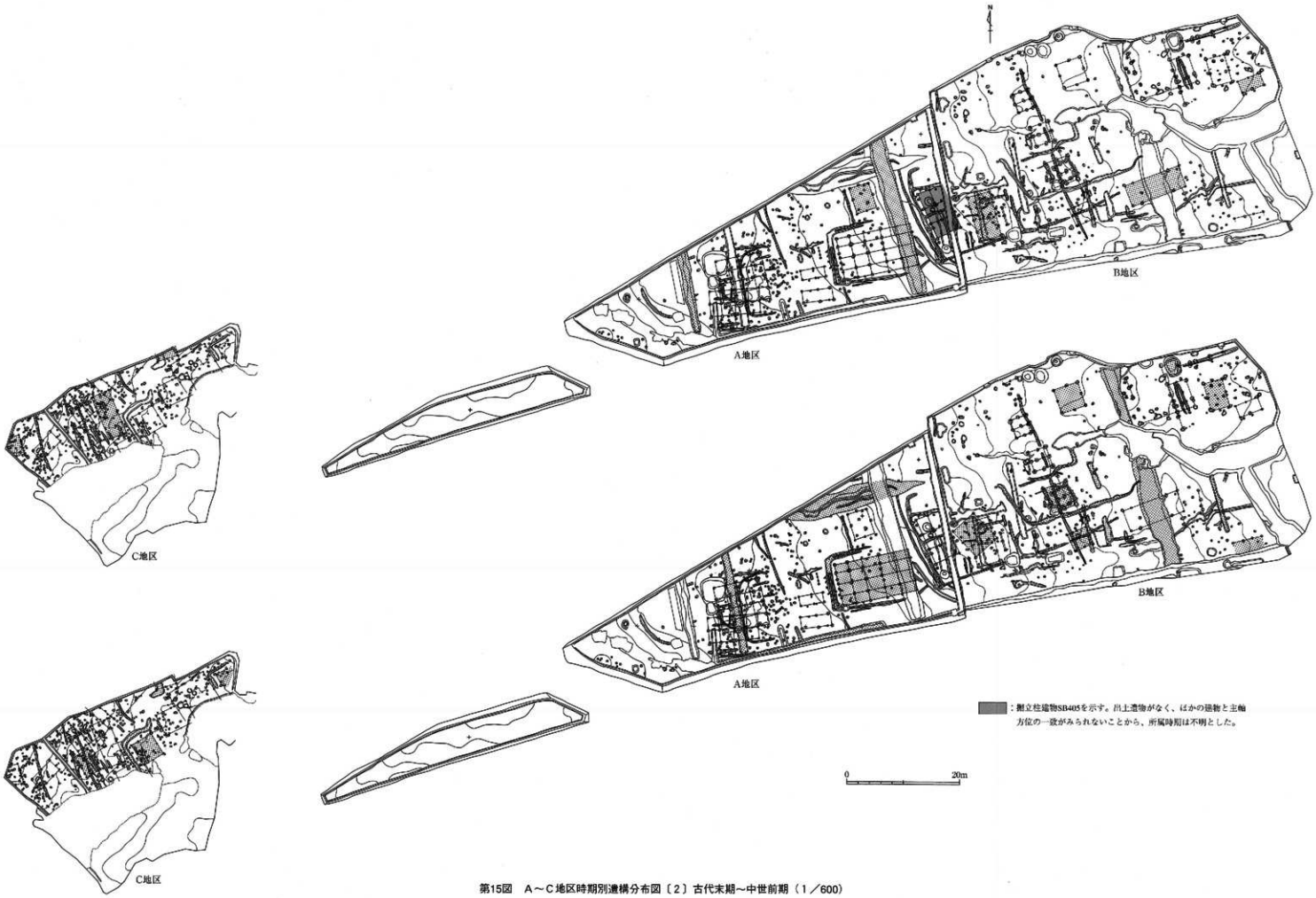
奈良文化財研究所編　2003　『古代の官衙遺跡Ⅰ遺構編』　奈良文化財研究所

吉岡康暢　1994　『中世須恵器の研究』　吉川弘文館

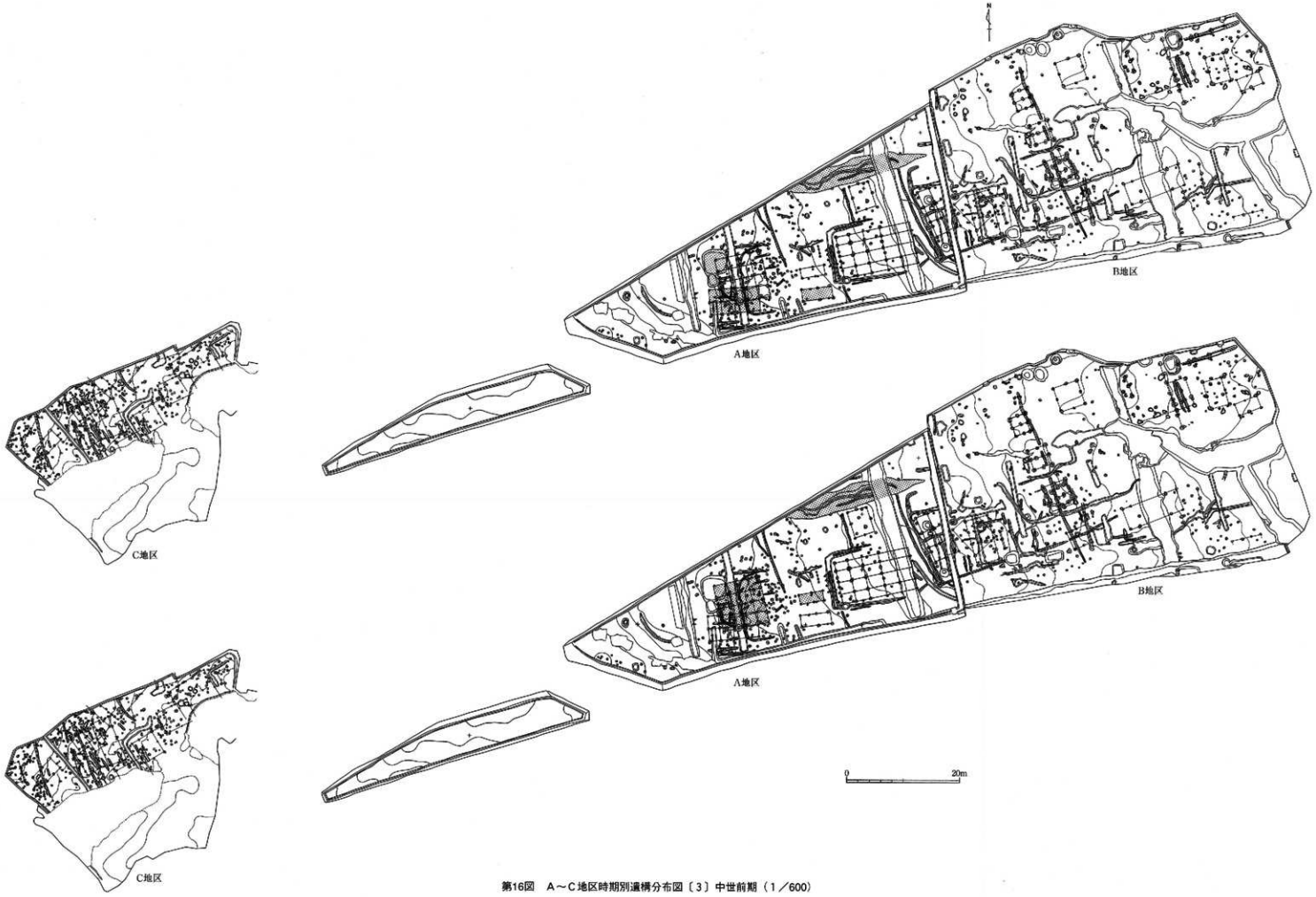
横田賢次郎・森田　勉　1978　「大宰府出土の輸入陶磁器について－型式分類と編年を中心として－」『九州歴史資料館研究論集』４　九州歴史資料館審及会



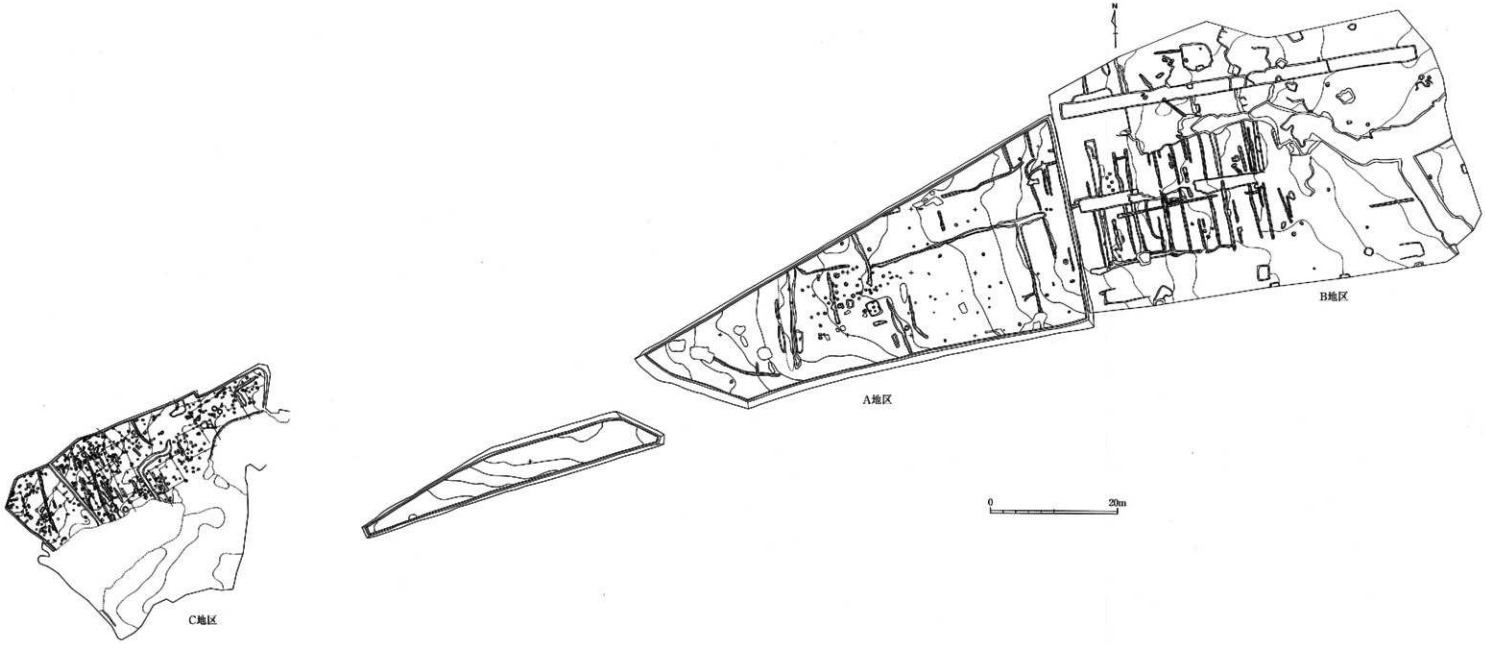
第14図　A～C地区時期別遺構分布図〔1〕古代（1／600）



第15図　A～C地区時期別遺構分布図〔2〕古代末期～中世前期（1／600）



第16図　A～C地区時期別遺構分布図〔3〕中世前期（1／600）



第17図　A～C地区時期別遺構分布図〔4〕近世（1／600）

別表1　掘立柱建物柱穴規模表

遺構番号		長径	短径	深さ	出土遺物
SB401	P1	0.50	0.40	0.60	
	P2	0.50	0.46	0.34	
	P3	0.36	0.31	0.27	
	P4	0.54	0.44	0.33	
	P5	－	－	－	
	P6	－	－	－	
	P7	0.51	0.42	0.46	
	P8	0.71	0.61	0.56	
	P9	0.55	0.36	0.42	甘クロ土師器小皿1
	P10	0.44	0.37	0.32	
	P11	－	－	－	
	P12	0.96	0.71		
	P13	0.42	0.37	0.43	赤ロクロ土師器皿1
	P14	0.68	0.42	0.36	赤ロクロ土師器皿1
	P15	0.54	0.48	0.38	
	P16	0.48	0.39	0.34	
	P17	－	－	－	
	P18	－	－	－	
	P19	0.39	0.38	0.38	
	P20	0.48	0.42	0.40	
	P21	0.52	0.47	0.47	
	P22	0.49	0.39	0.56	
	P23	0.44	0.38	0.29	
	P24	0.27	0.25		
	P25	0.57	(0.53)	0.52	
	P26	0.48	0.41	0.40	
	P27	0.49	0.38	0.38	赤ロクロ土師器皿1
	P28	0.36	0.34	0.58	
	P29	(0.34)	(0.29)	0.40	
	P30	0.31	0.26	0.40	
SB402	P1	0.30	0.25	0.19	
	P2	0.38	0.36	0.40	
	P3	0.26	0.24	0.19	
	P4	0.33	0.28	0.29	
	P5	0.34	0.30	0.22	
	P6	0.27	0.23	0.17	
	P7	0.28	0.27	0.24	
	P8	0.30	0.28	0.22	
SB403	P1	0.31	0.25	0.28	
	P2	0.41	0.32	0.53	柱根1(スギ)
	P3	0.52	0.28	0.17	柱根1(クリ)
	P4	0.34	0.33	0.38	
	P5	0.31	0.25	0.25	柱根1(クリ)
	P6	0.46	0.34	0.34	
	P7	0.41	0.32	0.44	柱根1(スギ)
	P8	0.43	0.28	0.26	柱根1(スギ) 管状土錘1
	P9	0.40	0.25	0.07	
	P10	0.27	0.19	0.43	
	P11	0.67	0.55	0.38	
	P12	0.56	0.46	0.38	柱根1(スギ)
	P13	0.62	0.52	0.32	
	P14	0.42	0.34	0.42	
	P15	0.30	0.26	0.34	

遺構番号		長径	短径	深さ	出土遺物
SB404	P1	0.36	0.31	0.10	
	P2	0.28	0.22	0.12	
	P3	0.65	0.25	0.11	
	P4	0.40	0.36	0.33	
	P5	0.58	0.38	0.24	木製硬盤2(クリ・ハンノキ属ハンノキ亜属)
	P6	0.46	0.40	0.47	丸木1(クリ)
	P7	0.46	(0.27)	0.60	木製硬盤1
	P8	0.54	0.45	0.21	木製硬盤1
	P9	0.34	0.31	0.37	笠状土錘7
	P10	0.56	0.50	0.17	木製硬盤1(ニガキ)
	P11	(0.42)	0.40	0.21	木製硬盤1(クリ)
	P12	0.96	0.71	0.33	木製硬盤2(クリ)、柱根1(クリ)
	P13	0.63	0.56	0.34	木製硬盤1
	P14	0.51	0.41	0.51	
	P15	0.77	0.68	0.34	木製硬盤3(クリ)
	P16	0.55	0.54	0.38	木製硬盤1
	P17	0.31	0.23	0.25	
	P18	0.43	0.34	0.43	
	P19	－	－	－	
	P20	0.56	0.50	0.28	
	P21	0.48	0.36	0.59	
	P22	0.36	(0.48)	0.42	
	P23	0.53	0.46	0.38	
	P24	0.28	0.20	0.42	
	P25	0.34	0.32	0.44	
SB405	P1	0.40	0.34	0.23	
	P2	0.40	0.31	0.20	
	P3	0.47	0.40	0.52	
	P4	0.94	0.66	0.07	
	P5	0.44	0.41	0.25	
	P6	0.46	0.33	0.14	
	P7	0.49	0.38	0.44	
	P8	0.36	0.26	0.23	
SB406	P1	0.32	0.28	0.37	
	P2	0.37	0.35	0.26	
	P3	0.41	0.40	0.36	
	P4	0.40	0.33	0.37	
	P5	0.42	0.38	0.27	
	P6	0.48	0.41	0.36	
SB407	P1	0.33	0.26	0.41	
	P2	0.35	0.33	0.49	
	P3	0.31	0.24	0.37	
	P4	0.32	0.28	0.33	
	P5	0.30	0.28	0.31	
	P6	0.36	0.31	0.30	

(単位：m)

別表2　遺物観察表

※（ ）は復元推定値、〔 〕は残存値を表す。単位：cm。

図番	図版	遺物番号	R番号	検出面	遺構番号	出土位置	種別	器種	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ(g)	遺存率	成・整形、技法等の特徴	色調	樹種石材	時期・備考
27	32	1	R208	第1面	SD213	1層	肥前磁器	碗	(11.0)	(4.0)	5.0	-	1/4	波佐見系、染付、体部外面と見込に丸文、蛇ノ目釉剥ぎ	-	-	18C後
27	32	2	R658	第2面	SD401	P9	土師器	小皿	(8.7)	6.0	2.3	-	1/6	ロクロ成形、底径が大きく体部は直線的に短く開く	灰白色	-	
27	32	3	R694	第2面	SB401	P27	土師器	皿	(15.0)	-	3.1	-	1/4	非ロクロ成形、二段ナデ、口縁端部は弱く外反する、底部ナデ、型起こし、内外面に油煙付着、灯明皿	浅黄橙色	-	
27	32	4	R692	第2面	SD401	P14	土師器	皿	(15.2)	-	-	-	1/4	非ロクロ成形、二段ナデ、口縁端部は弱く外反する、底部ナデ、型起こし、内外面に油煙付着、灯明皿	灰白色	-	
27	32	5	R502	第2面	SD403	P8	土製品	管状土錘	長さ7.0、最大径5.6、孔径1.4			158	ほぼ完形	断面梯形を呈する	浅黄橙色	-	
27	32	6	R822	第2面	SB403	P2	木製品	柱根	〔64.1〕	15.3	12.6	-	上端欠損	断面三角形状の割り材、下端は平坦な切断痕	-	スギ	
27	32	7	R924	第2面	SB403	P3	木製品	柱根	〔34.5〕	〔12.5〕	〔7.6〕	-	大半欠損	丸木ヵ	-	クリ	
27	32	8	R911	第2面	SB403	P5	木製品	柱根	〔49.8〕	16.4	13.0	-	上端欠損	丸木、下端は鈍く尖る粗い切断痕	-	クリ	
27	32	9	R921	第2面	SB403	P7	木製品	柱根	〔36.8〕	10.7	10.2	-	上端欠損	断面方形状の割り材、下端は平坦な切断痕	-	スギ	
27	32	10	R923	第2面	SB403	P8	木製品	柱根	〔27.7〕	14.9	11.0	-	上端欠損	断面方形状の割り材、下端は平坦な切断痕	-	スギ	
28	32	11	R922	第2面	SB403	P12	木製品	柱根	〔46.5〕	14.6	9.6	-	上端欠損	断面長方形状の割り材、下端は平坦な切断痕	-	スギ	
28	32	12	R140-6	第2面	SB404	P9	土製品	管状土錘	長さ6.1、最大径5.1、孔径1.7			134	完形	断面梯形を呈する	浅黄橙色	-	
28	32	13	R140-5	第2面	SB404	P9	土製品	管状土錘	長さ5.9、最大径5.0、孔径1.6			115	完形	断面梯形を呈する	にぶい橙色	-	
28	32	14	R140-7	第2面	SB404	P9	土製品	管状土錘	長さ5.9、最大径5.1、孔径1.7			114	完形	断面梯形を呈する	にぶい橙色	-	
28	32	15	R140-3	第2面	SB404	P9	土製品	管状土錘	長さ5.1、最大径5.3、孔径1.6			102	完形	土玉状を呈する	浅黄橙色	-	
28	32	16	R140-4	第2面	SB404	P9	土製品	管状土錘	長さ4.8、最大径5.0、孔径1.8			91	完形	土玉状を呈する	浅黄橙色	-	
28	32	17	R140-1	第2面	SB404	P9	土製品	管状土錘	長さ4.7、最大径4.7、孔径1.5			79	完形	土玉状を呈する	浅黄橙色	-	
28	32	18	R140-2	第2面	SB404	P9	土製品	管状土錘	長さ4.4、最大径5.0、孔径1.8			74	完形	土玉状を呈する	浅黄橙色	-	
28	33	19	R891-1	第2面	SB404	P12	木製品	礎盤	31.5	18.7	7.5	-	一部欠損	板状の割り材を利用、長辺断面形は台形状を呈する	-	-	
28	33	20	R913	第2面	SB404	P7	木製品	礎盤	28.6	20.4	4.2	-	完形	板状の割り材を利用、長辺断面形は台形状を呈する	-	-	
28	33	21	R892	第2面	SB404	P13	木製品	礎盤	〔31.3〕	9.1	3.2	-	片端欠損	板状の割り材を利用	-	-	
29	33	22	R891-2	第2面	SB404	P12	木製品	礎盤	20.1	11.2	6.3	-	完形	板状の割り材を利用、長辺断面形は台形状を呈する	-	クリ	
29	33	23	R914	第2面	SB404	P8	木製品	礎盤	17.9	11.9	5.0	-	完形	板状の割り材を利用、長辺断面形は台形状を呈する	-	-	
29	33	24	R893	第2面	SB404	P16	木製品	礎盤	14.5	13.0	6.0	-	完形	板状の割り材を利用、長辺断面形は台形状を呈する	-	-	
29	33	25	R894	第2面	SB404	P8	木製品	礎盤	11.6	8.8	7.9	-	完形	角材状の割り材を利用、長辺断面形は台形状を呈する	-	-	
29	33	26	R916	第2面	SB404	P10	木製品	礎盤ヵ	〔14.9〕	〔8.9〕	〔5.2〕	-	大半欠損	腐朽著しい	-	ニガキ	
29	33	27	R890	第2面	SB404	P11	木製品	礎盤	27.6	17.0	10.0	-	完形	丸木の半截材を利用、長辺断面形は台形状を呈する	-	クリ	
29	33	28	R912	第2面	SB404	P5	木製品	礎盤	22.3	14.8	10.0	-	完形	丸木の半截材を利用、長辺断面形は台形状を呈する	-	クリ	
29	33	29	R920	第2面	SB404	P5	木製品	礎盤	〔26.3〕	〔11.9〕	〔8.7〕	-	上端欠損	丸木の多截材を利用、長辺断面形は台形状を呈する	-	ハンノキ属ハンノキ亜属	
29	33	30	R919	第2面	SB404	P15	木製品	礎盤	31.2	10.3	5.1	-	完形	丸木の半截材を利用、長辺断面形は台形状を呈する	-	-	
29	33	31	R918	第2面	SB404	P15	木製品	礎盤	26.7	10.5	6.3	-	一部欠損	丸木の半截材を利用、長辺断面形は台形状を呈する	-	クリ	
30	33	32	R917	第2面	SB404	P15	木製品	礎盤	〔20.0〕	〔10.3〕	〔6.7〕	-	片端欠損	丸木の多截材を利用	-	-	
30	33	33	R891-3	第2面	SB404	P12	木製品	柱根	〔26.1〕	15.8	10.6	-	上端欠損	心持材、全体に腐朽	-	クリ	

図面	図版	遺物番号	R番号	検出面	遺構番号	出土位置	種別	器種	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ(g)	遺存率	成・整形、技法等の特徴	色調	樹種石材	時期・備考
30	33	34	R823	第2面	SB404	P6	木製品	丸木	25.6	10.0	8.6	-	完形	樹皮付きの丸木、両端鉈状工具による切断痕	-	クリ	
30	33	35	R1077	第2面	SK103		珠洲	片口鉢	-	-	-	-	体部片	卸し目は直線で施入は後、一単位幅2.0cm／8H、吉岡編年Ⅲ～Ⅳ1期ヵ	灰色	-	13C中～14C第1ヵ
30	33	36	R309・1075	第2面	SK103		珠洲	片口鉢	-	(10.0)	-	-	底部1/2	内面は磨耗により卸し目はみえない、底部静止糸切り痕	灰白色	-	
30	33	37	R209-200	第2面	SK104	3層	土師器	小皿	-	4.0	-	-	底部片	ロクロ成形、底部は低い柱状高台を呈する、内黒	にぶい黄橙色	-	
30	33	38	R193	第2面	SK104	6層	土師器	小皿	(7.2)	-	1.7	-	1/4	非ロクロ成形、一段ナデ、口縁端部はつまみ上げて断面三角形状に面取る、内面ハケ状工具痕、型起こし	にぶい黄橙色	-	
30	33	39	R209-177・209-185	第2面	SK104	3層	土師器	小皿	(8.4)	-	1.7	-	1/2	非ロクロ成形、一段ナデ、口縁端部はつまみ上げて断面三角形状に面取る、内面ハケ状工具痕、型起こし	にぶい橙色	-	
30	33	40	R211	第2面	SK104		青磁	碗	-	-	-	-	体部片	龍泉窯系、鎬蓮弁文、青磁碗Ⅰ－5類	オリーブ灰色	-	13C後～14C前
30	34	41	R153①	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	30.2	0.6	0.5	-	完形	断面多角形	-	-	
30	34	42	R209-122	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	24.2	0.6	0.5	-	完形	断面多角形	-	-	
30	34	43	R209-65	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	24.2	0.6	0.5	-	完形	断面多角形	-	-	
30	34	44	R209-186	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	23.9	0.7	0.5	-	完形	断面多角形	-	-	
30	34	45	R209-192	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	23.7	0.6	0.5	-	完形	断面多角形	-	-	
30	34	46	R209-170	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	23.6	0.6	0.4	-	完形	断面扁平な多角形	-	-	
30	34	47	R209-98	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	22.7	0.6	0.3	-	完形	断面扁平な多角形	-	-	
31	34	48	R209-126	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	22.6	0.4	0.5	-	完形	断面多角形	-	-	
31	34	49	R209-100	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	22.4	0.4	0.4	-	完形	断面多角形	-	-	
31	34	50	R209-99	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	22.1	0.6	0.4	-	完形	断面扁平な多角形	-	-	
31	34	51	R209-116	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	22.1	0.6	0.5	-	完形	断面多角形	-	-	
31	34	52	R209-167	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	21.9	0.7	0.4	-	完形	断面扁平な多角形	-	-	
31	34	53	R209-113	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	21.8	0.7	0.5	-	完形	断面多角形	-	-	
31	34	54	R209-3	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	21.8	0.6	0.5	-	完形	断面多角形	-	-	
31	34	55	R209-141	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	21.8	0.5	0.4	-	完形	断面多角形	-	-	
31	34	56	R209-164	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	21.8	0.6	0.4	-	完形	断面扁平な多角形	-	-	
31	34	57	R209-156	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	21.8	0.8	0.5	-	完形	断面扁平な多角形	-	スギ	
31	34	58	R209-44	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	21.7	0.7	0.5	-	完形	断面多角形	-	-	
31	34	59	R209-26	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	21.6	0.7	0.5	-	完形	断面多角形	-	-	
31	35	60	R209-16	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	21.6	0.6	0.4	-	完形	断面扁平な多角形	-	スギ	
31	35	61	R209-123	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	21.6	0.7	0.6	-	完形	断面多角形	-	-	
31	35	62	R209-59	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	21.5	0.5	0.3	-	完形	断面扁平な多角形	-	-	
31	35	63	R209-137	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	21.5	0.5	0.4	-	完形	断面多角形	-	-	
31	35	64	R209-166	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	21.4	0.5	0.5	-	完形	断面多角形	-	-	
31	35	65	R209-86	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	21.3	0.7	0.4	-	完形	断面扁平な多角形	-	-	
31	35	66	R209-120	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	21.3	0.6	0.5	-	完形	断面多角形	-	-	
31	35	67	R209-89	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	21.1	0.5	0.5	-	完形	断面多角形	-	-	
32	35	68	R200-66	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	21.1	0.5	0.4	-	完形	断面多角形	-	-	

図面	図版	遺物番号	R番号	検出面	遺構番号	出土位置	種別	器種	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ(g)	遺存率	成・整形、技法等の特徴	色調	胎土石材	時期・備考
32	35	69	R209-137	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	21.1	0.6	0.3	-	完形	断面扁平な多角形	-	-	
32	35	70	R209-175	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	21.1	0.5	0.4	-	完形	断面多角形	-	-	
32	35	71	R156	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	21.1	0.5	0.3	-	完形	断面扁平な多角形	-	-	
32	35	72	R209-198	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	21.1	0.5	0.4	-	完形	断面多角形	-	-	
32	35	73	R209-189	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	20.9	0.6	0.5	-	完形	断面多角形	-	-	
32	35	74	R209-101	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	20.8	0.6	0.6	-	完形	断面多角形	-	-	
32	35	75	R209-83	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	20.8	0.6	0.4	-	完形	断面扁平な多角形	-	-	
32	35	76	R209-56	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	20.7	0.6	0.4	-	完形	断面扁平な多角形	-	-	
32	35	77	R209-163	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	20.7	0.5	0.5	-	完形	断面多角形	-	-	
32	35	78	R209-107	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	20.7	0.5	0.6	-	完形	断面多角形	-	-	
32	35	79	R209-160	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	20.7	0.5	0.5	-	完形	断面多角形	-	-	
32	36	80	R209-45	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	20.6	0.5	0.6	-	完形	断面多角形	-	-	
32	36	81	R209-169	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	20.5	0.7	0.4	-	完形	断面扁平な多角形	-	-	
32	36	82	R209-110	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	20.4	0.5	0.6	-	完形	断面多角形	-	-	
32	36	83	R209-60	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	20.4	0.6	0.5	-	完形	断面多角形	-	-	
32	36	84	R209-29	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	20.4	0.8	0.3	-	完形	断面扁平な多角形	-	-	
32	36	85	R209-46	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	20.4	0.5	0.4	-	完形	断面多角形	-	-	
32	36	86	R209-127	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	20.2	0.7	0.5	-	完形	断面多角形	-	-	
32	36	87	R209-34	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	20.1	0.5	0.5	-	完形	断面多角形	-	-	
33	36	88	R209-25	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	20.0	0.6	0.6	-	完形	断面多角形	-	-	
33	36	89	R209-13	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	20.0	0.7	0.3	-	完形	断面扁平な多角形	-	-	
33	36	90	R209-91	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	19.9	0.4	0.3	-	完形	断面多角形	-	-	
33	36	91	R209-162	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	19.6	0.7	0.5	-	完形	断面多角形	-	-	
33	36	92	R155①	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	19.5	0.4	0.7	-	完形	断面扁平な多角形	-	-	
33	36	93	R209-58	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	19.2	0.6	0.5	-	完形	断面多角形	-	-	
33	36	94	R209-81	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	19.2	0.6	0.5	-	完形	断面多角形	-	-	
33	36	95	R209-111	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	19.1	0.6	0.5	-	完形	断面多角形	-	-	
33	36	96	R209-33	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	18.9	0.6	0.4	-	完形	断面扁平な多角形	-	-	
33	36	97	R209-74	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	18.7	0.6	0.4	-	完形	断面扁平な多角形	-	-	
33	36	98	R209-109	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	18.6	0.6	0.5	-	完形	断面多角形	-	-	
33	36	99	R209-118	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	18.2	0.6	0.3	-	完形	断面扁平な多角形	-	-	
33	37	100	R209-7	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	18.0	0.7	0.4	-	完形	断面扁平な多角形	-	-	
33	37	101	R209-78	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	17.0	0.7	0.3	-	完形	断面扁平な多角形	-	-	
33	37	102	R209-36	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	16.8	0.6	0.5	-	完形	断面多角形	-	-	
33	37	103	R209-102	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	16.7	0.4	0.5	-	完形	断面多角形	-	-	
33	37	104	R209-182	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	15.4	0.7	0.5	-	完形	断面多角形	-	-	
33	37	105	R156	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(29.7)	1.2	0.8	-	片端欠損	断面扁平な多角形大形品	-	-	
33	37	106	R209-172	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(22.1)	0.6	0.4	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	

図番	図版	遺物番号	X番号	検出面	遺構番号	出土位置	器種	器種	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ(g)	遺存率	成・整形、技法等の特徴	色調	使用石材	時期・備考
33	37	107	B209-101	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(21.8)	0.6	0.4	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
34	37	108	B209-73	第2面	SK104	3層	木製品	杭状木製品	(21.6)	0.7	0.4	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
34	37	109	B209-6	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(21.4)	0.5	0.5	-	片端欠損	断面多角形	-	スギ	
34	37	110	B209-112	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(21.3)	0.6	0.5	-	片端欠損	断面多角形	-	-	
34	37	111	B209-158	第2面	SK104	3層	木製品	杭状木製品	(21.3)	0.6	0.5	-	片端欠損	断面多角形	-	-	
34	37	112	B209-96	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(21.3)	0.6	0.4	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
34	37	113	B209-90	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(20.9)	0.5	0.5	-	片端欠損	断面多角形	-	-	
34	37	114	B209-179	第2面	SK104	3層	木製品	杭状木製品	(20.8)	0.7	0.6	-	片端欠損	断面多角形	-	-	
34	37	115	B209-10	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(20.8)	0.7	0.4	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
34	37	116	B209-76	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(20.7)	0.5	0.6	-	片端欠損	断面多角形	-	-	
34	37	117	B209-155	第2面	SK104	3層	木製品	杭状木製品	(20.6)	0.6	0.2	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
34	37	118	B209-187	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(20.5)	0.7	0.3	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
34	37	119	B209-17	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(20.3)	0.6	0.4	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
34	38	120	B209-128	第2面	SK104	3層	木製品	杭状木製品	(20.2)	0.6	0.4	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
34	38	121	B209-168	第2面	SK104	3層	木製品	杭状木製品	(20.0)	0.6	0.4	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
34	38	122	B209-64	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(19.9)	0.6	0.5	-	片端欠損	断面多角形	-	-	
34	38	123	B209-57	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(19.6)	0.7	0.5	-	片端欠損	断面多角形	-	-	
34	38	124	B209-171	第2面	SK104	3層	木製品	杭状木製品	(19.5)	0.6	0.5	-	片端欠損	断面多角形	-	-	
34	38	125	B209-97	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(19.4)	0.4	0.3	-	片端欠損	断面多角形	-	-	
34	38	126	B209-139	第2面	SK104	3層	木製品	杭状木製品	(19.1)	0.7	0.5	-	片端欠損	断面多角形	-	-	
34	38	127	K1537	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(18.6)	0.5	0.4	-	片端欠損	断面多角形	-	-	
35	38	128	B209-188	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(18.5)	0.7	0.4	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
35	38	129	B209-41	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(18.4)	0.5	0.5	-	片端欠損	断面多角形	-	-	
35	38	130	B209-8	第2面	SK104	3層	木製品	杭状木製品	(18.3)	0.6	0.3	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
35	38	131	B209-132	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(18.2)	0.5	0.5	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
35	38	132	B209-108	第2面	SK104	3層	木製品	杭状木製品	(18.1)	0.6	0.4	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
35	38	133	B209-94	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(18.0)	0.5	0.5	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
35	38	134	B209-97	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(18.0)	0.8	0.5	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
35	38	135	B209-75	第2面	SK104	3層	木製品	杭状木製品	(17.9)	0.5	0.5	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
35	38	136	B209-87	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(17.5)	0.6	0.5	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
35	38	137	B209-173	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(17.5)	0.6	0.4	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
35	38	138	B209-77	第2面	SK104	3層	木製品	杭状木製品	(17.3)	0.6	0.5	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
35	38	139	B209-124	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(17.2)	0.6	0.4	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
35	39	140	B209-135	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(16.8)	0.7	0.4	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
35	39	141	B209-54	第2面	SK104	3層	木製品	杭状木製品	(16.5)	0.5	0.4	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
35	39	142	B209-142	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(16.2)	0.5	0.4	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
35	39	143	B209-49	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(16.1)	0.6	0.5	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
35	39	144	B209-181	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(16.0)	0.6	0.5	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	スギ	

図版	図版	遺物番号	主番号	検出面	遺構番号	出土位置	種別	器種	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ(g)	遺存率	成・整形、技法等の特徴	色調	胎土	焼成	時期・備考
35	39	145	R209-28	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	[15.9]	0.5	0.4	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	-	
35	39	146	R209-104	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	[15.8]	0.6	0.4	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	-	
35	39	147	R209-152	第2面	SK104	3層	木製品	芳状木製品	[15.6]	0.7	0.3	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	-	
36	39	148	R209-47	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	[15.6]	0.5	0.5	-	片端欠損	断面多角形	-	-	-	
36	39	149	R209-61	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	[15.5]	0.5	0.5	-	片端欠損	断面多角形	-	-	-	
36	39	150	R209-55	第2面	SK104	3層	木製品	芳状木製品	[15.5]	0.5	0.5	-	片端欠損	断面多角形	-	-	-	
36	39	151	R209-32	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	[14.5]	0.6	0.5	-	片端欠損	断面多角形	-	-	-	
36	39	152	R209-152	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	[14.5]	0.5	0.4	-	片端欠損	断面多角形	-	-	-	
36	39	153	R209-63	第2面	SK104	3層	木製品	芳状木製品	[14.4]	0.5	0.4	-	片端欠損	断面多角形	-	-	-	
36	39	154	R209-70	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	[14.4]	0.5	0.4	-	片端欠損	断面多角形	-	-	-	
36	39	155	R209-20	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	[14.3]	0.5	0.5	-	片端欠損	断面多角形	-	-	-	
36	39	156	R209-129	第2面	SK104	3層	木製品	芳状木製品	[14.3]	0.7	0.5	-	片端欠損	断面多角形	-	-	-	
36	39	157	R209-92	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	[13.8]	0.6	0.5	-	片端欠損	断面多角形	-	-	-	
36	39	158	R209-42	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	[13.6]	0.6	0.4	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	-	
36	39	159	R209-95	第2面	SK104	3層	木製品	芳状木製品	[13.2]	0.6	0.5	-	片端欠損	断面多角形	-	-	-	
36	39	160	R209-105	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	[12.7]	0.7	0.5	-	片端欠損	断面多角形	-	-	-	
36	39	161	R209-43	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	[12.7]	0.5	0.4	-	片端欠損	断面多角形	-	-	-	
36	39	162	R209-133	第2面	SK104	3層	木製品	芳状木製品	[12.6]	0.6	0.4	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	-	
36	39	163	R209-178	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	[12.6]	0.6	0.5	-	片端欠損	断面多角形	-	-	-	
36	39	164	R209-82	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	[12.4]	0.5	0.6	-	片端欠損	断面多角形	-	-	-	
36	39	165	R209-146	第2面	SK104	3層	木製品	芳状木製品	[12.4]	0.5	0.3	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	-	
36	39	166	R209-68	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	[12.4]	0.5	0.3	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	-	
36	39	167	R209-197	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	[12.3]	0.7	0.4	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	-	
36	39	168	R209-194	第2面	SK104	3層	木製品	芳状木製品	[11.7]	0.4	0.4	-	片端欠損	断面多角形	-	-	-	
36	39	169	R209-136	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	[11.5]	0.5	0.4	-	片端欠損	断面多角形	-	-	-	
36	40	170	R209-143	第2面	SK104	3層	木製品	芳状木製品	[11.4]	0.6	0.3	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	-	
36	40	171	R209-31	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	[11.4]	0.6	0.4	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	-	
36	40	172	R209-88	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	[11.2]	0.4	0.2	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	-	
36	40	173	R209-171	第2面	SK104	3層	木製品	芳状木製品	[11.1]	0.5	0.4	-	片端欠損	断面多角形	-	-	-	
36	40	174	R155②	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	[11.1]	0.6	0.5	-	片端欠損	断面多角形	-	-	-	
36	40	175	R209-134	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	[11.0]	0.5	0.5	-	片端欠損	断面多角形	-	-	-	
36	40	176	R209-21	第2面	SK104	3層	木製品	芳状木製品	[10.9]	0.6	0.5	-	片端欠損	断面多角形	-	-	-	
36	40	177	R209-184	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	[10.9]	0.5	0.3	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	-	
37	40	178	R209-12	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	[10.9]	0.6	0.3	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	-	
37	40	179	R209-9	第2面	SK104	3層	木製品	芳状木製品	[10.5]	0.5	0.6	-	片端欠損	断面多角形	-	-	-	
37	40	180	R209-35	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	[10.3]	0.4	0.3	-	片端欠損	断面多角形	-	-	-	
37	40	181	R209-62	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	[10.2]	0.6	0.3	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	-	
37	40	182	R209-30	第2面	SK104	3層	木製品	芳状木製品	[9.8]	0.6	0.4	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	-	

図面	図版	遺物番号	登録番号	検出面	遺構番号	出土位置	種別	器種	口径（長さ）	底径（幅）	器高（厚さ）	重さ（g）	遺存率	成・整形、技法等の特徴	色調	胎土・石材	時期・備考
37	40	183	R209-52	第2面	SK104	3層	木製品	笹状木製品	(9.6)	0.6	0.3	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
37	40	184	R209-195	第2面	SK104	3層	木製品	笹状木製品	(8.9)	0.5	0.3	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
37	40	185	R209-196	第2面	SK104	3層	木製品	笹状木製品	(8.7)	0.6	0.3	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
37	40	186	R209-203	第2面	SK104	3層	木製品	笹状木製品	(7.9)	0.4	0.3	-	片端欠損	断面多角形	-	-	
37	40	187	R209-51	第2面	SK104	3層	木製品	笹状木製品	(7.5)	0.5	0.3	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
37	40	188	R209-130	第2面	SK104	3層	木製品	笹状木製品	(7.2)	0.6	0.3	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
37	40	189	R209-205	第2面	SK104	3層	木製品	笹状木製品	(6.1)	0.6	0.3	-	片端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
37	40	190	R209-144	第2面	SK104	3層	木製品	笹状木製品	(21.6)	0.6	0.4	-	両端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
37	40	191	R209-161	第2面	SK104	3層	木製品	笹状木製品	(20.1)	0.5	0.4	-	両端欠損	断面多角形	-	-	
37	40	192	R209-121	第2面	SK104	3層	木製品	笹状木製品	(20.0)	0.5	0.6	-	両端欠損	断面多角形	-	-	
37	40	193	R209-39	第2面	SK104	3層	木製品	笹状木製品	(19.6)	0.6	0.5	-	両端欠損	断面多角形	-	-	
37	40	194	R209-151	第2面	SK104	3層	木製品	笹状木製品	(18.3)	0.5	0.4	-	両端欠損	断面多角形	-	-	
37	40	195	R209-180	第2面	SK104	3層	木製品	笹状木製品	(17.8)	0.4	0.3	-	両端欠損	断面多角形	-	-	
37	40	196	R209-155	第2面	SK104	3層	木製品	笹状木製品	(17.2)	0.6	0.4	-	両端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
37	40	197	R209-159	第2面	SK104	3層	木製品	笹状木製品	(17.1)	0.5	0.3	-	両端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
37	40	198	R209-93	第2面	SK104	3層	木製品	笹状木製品	(16.9)	0.7	0.4	-	両端欠損	断面多角形	-	-	
37	40	199	R209-106	第2面	SK104	3層	木製品	笹状木製品	(16.8)	0.6	0.4	-	両端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
37	41	200	R209-115	第2面	SK104	3層	木製品	笹状木製品	(16.5)	0.4	0.4	-	両端欠損	断面多角形	-	-	
37	41	201	R209-176	第2面	SK104	3層	木製品	笹状木製品	(16.2)	0.4	0.3	-	両端欠損	断面多角形	-	-	
37	41	202	R209-150	第2面	SK104	3層	木製品	笹状木製品	(15.9)	0.7	0.5	-	両端欠損	断面多角形	-	-	
37	41	203	R209-157	第2面	SK104	3層	木製品	笹状木製品	(15.8)	0.6	0.5	-	両端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
37	41	204	R209-2	第2面	SK104	3層	木製品	笹状木製品	(15.4)	0.6	0.3	-	両端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
37	41	205	R153(2)	第2面	SK104	3層	木製品	笹状木製品	(14.8)	0.7	0.3	-	両端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
37	41	206	R209-69	第2面	SK104	3層	木製品	笹状木製品	(14.3)	0.5	0.4	-	両端欠損	断面多角形	-	-	
37	41	207	R209-11	第2面	SK104	3層	木製品	笹状木製品	(14.0)	0.6	0.3	-	両端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
37	41	208	R209-119	第2面	SK104	3層	木製品	笹状木製品	(13.9)	0.6	0.3	-	両端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
37	41	209	R209-165	第2面	SK104	3層	木製品	笹状木製品	(13.5)	0.5	0.3	-	両端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
38	41	210	R209-19	第2面	SK104	3層	木製品	笹状木製品	(13.4)	0.3	0.2	-	両端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
38	41	211	R209-85	第2面	SK104	3層	木製品	笹状木製品	(13.3)	0.5	0.5	-	両端欠損	断面多角形	-	-	
38	41	212	R209-27	第2面	SK104	3層	木製品	笹状木製品	(13.2)	0.5	0.4	-	両端欠損	断面多角形	-	スギ	
38	41	213	R209-50	第2面	SK104	3層	木製品	笹状木製品	(13.0)	0.4	0.4	-	両端欠損	断面多角形	-	-	
38	41	214	R209-1	第2面	SK104	3層	木製品	笹状木製品	(12.8)	0.6	0.4	-	両端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
38	41	215	R209-103	第2面	SK104	3層	木製品	笹状木製品	(12.4)	0.7	0.5	-	両端欠損	断面多角形	-	-	
38	41	216	R209-9	第2面	SK104	3層	木製品	笹状木製品	(11.8)	0.7	0.3	-	両端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
38	41	217	R209-183	第2面	SK104	3層	木製品	笹状木製品	(11.7)	0.5	0.4	-	両端欠損	断面多角形	-	-	
38	41	218	R209-140	第2面	SK104	3層	木製品	笹状木製品	(11.6)	0.6	0.5	-	両端欠損	断面多角形	-	-	
38	41	219	R209-38	第2面	SK104	3層	木製品	笹状木製品	(11.6)	0.4	0.3	-	両端欠損	断面多角形	-	-	
38	41	220	R209-117	第2面	SK104	3層	木製品	笹状木製品	(10.7)	0.5	0.4	-	両端欠損	断面多角形	-	-	

図面	図版	遺物番号	R番号	検出面	遺構番号	出土位置	種別	器種	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ(g)	遺存率	成・整形、技法等の特徴	色調	樹種石材	時期・備考
38	41	221	R135②	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(10.3)	0.6	0.5	-	両端欠損	断面多角形	-	-	
38	41	222	R209-48	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(10.3)	0.5	0.3	-	両端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
38	41	223	R209-201	第2面	SK104	3層	木製品	串状木製品	(9.9)	0.4	0.2	-	両端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
38	41	224	R209-84	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(9.6)	0.7	0.5	-	両端欠損	断面多角形	-	-	
38	41	225	R209-145	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(9.3)	0.6	0.5	-	両端欠損	断面多角形	-	-	
38	41	226	R209-18	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(9.0)	0.6	0.6	-	両端欠損	断面多角形	-	-	
38	41	227	R209-114	第2面	SK104	3層	木製品	串状木製品	(8.8)	0.5	0.3	-	両端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
38	41	228	R209-190	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(8.7)	0.6	0.4	-	両端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
38	41	229	R209-5	第2面	SK104	3層	木製品	串状木製品	(8.0)	0.5	0.3	-	両端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
38	42	230	R209-4	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(8.0)	0.6	0.3	-	両端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
38	42	231	R209-154	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(7.6)	0.5	0.4	-	両端欠損	断面多角形	-	-	
38	42	232	R209-149	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(7.6)	0.6	0.5	-	両端欠損	断面多角形	-	-	
38	42	233	R209-93	第2面	SK104	3層	木製品	串状木製品	(7.1)	0.6	0.4	-	両端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
38	42	234	R209-9	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(7.1)	0.7	0.2	-	両端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
38	42	235	R209-22	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(7.0)	0.6	0.3	-	両端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
38	42	236	R209-125	第2面	SK104	3層	木製品	串状木製品	(6.6)	0.6	0.3	-	両端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
38	42	237	R209-72	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(6.6)	0.5	0.2	-	両端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
38	42	238	R209-40	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(6.1)	0.4	0.3	-	両端欠損	断面多角形	-	-	
38	42	239	R209-202	第2面	SK104	3層	木製品	串状木製品	(5.5)	0.6	0.3	-	両端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
38	42	240	R209-131	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(4.0)	0.5	0.3	-	両端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
38	42	241	R209-131	第2面	SK104	3層	木製品	串状木製品	(3.2)	0.6	0.3	-	両端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
38	42	242	R209-204	第2面	SK104	3層	木製品	串状木製品	(2.5)	0.6	0.5	-	両端欠損	断面多角形	-	-	
38	42	243	R209-204	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(2.4)	0.4	0.3	-	両端欠損	断面多角形	-	-	
38	42	244	R209-204	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(2.4)	0.5	0.4	-	両端欠損	断面多角形	-	-	
38	42	245	R209-202	第2面	SK104	3層	木製品	串状木製品	(1.6)	0.6	0.3	-	両端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
38	42	246	R209-202	第2面	SK104	3層	木製品	箸状木製品	(1.5)	0.6	0.3	-	両端欠損	断面扁平な多角形	-	-	
39	42	247	R209-148	第2面	SK104	3層	木製品	円形曲物	(31.8)	(8.3)	0.8	-	1/3	底板	-	ヒノキ科	
39	42	248	R209-207	第2面	SK104	3層	木製品	円形曲物	(19.6)	(7.9)	0.8	-	1/2	底板	-	スギ	
39	42	249	R209-37	第2面	SK104	3層	木製品	円形曲物	(19.6)	(6.5)	0.5	-	1/3	蓋板ヵ、中心線上に小孔2箇所あり、片端焼焦げ	-	ヒノキ	
39	42	250	R727	第2面	SK116		木製品	串状木製品	22.7	0.7	0.4	-	完形	断面扁平な多角形	-	-	
39	42	251	R793	第2面	SK117		木製品	板材	(40.5)	6.1	2.0	-	大半欠損	板状を呈する	-	-	
39	42	252	R792-3	第2面	SK119		土師器	小皿	8.8	4.4	2.2	-	口縁部1/4欠損	ロクロ成形、体部下端で僅かに外反し、体部は内湾気味に開く	灰白色	-	
39	42	253	R792-1	第2面	SK119		土師器	小皿	9.4	4.6	2.3	-	完形	ロクロ成形、体部下端で僅かに外反し、体部は内湾気味に開く、内外面に油煙付着、灯明皿	灰白色	-	
39	42	254	R792-5	第2面	SK119		土師器	小皿	(10.4)	11.2	2.2	-	1/4	ロクロ成形、底径が大きく体部はほぼ直線的に短く開く	黄灰色	-	
39	42	255	R792-9	第2面	SK119		土師器	椀	13.4	7.0	3.8	-	口縁部1/3欠損	ロクロ成形、体部は内湾して開く	褐灰色	-	
39	42	256	R792-8	第2面	SK119		土師器	椀	(15.0)	(7.8)	3.9	-	1/8	ロクロ成形、体部下端で僅かに外反し、体部はほぼ直線的に開く	灰白色	-	

図面	図版	遺物番号	R番号	検出面	遺構番号	出土位置	種別	器種	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ(g)	遺存率	成・整形、技法等の特徴	色調	樹種石材	時期・備考
39	42	257	R792-2	第2面	SK119		土師器	椀	(13.2)	5.5	4.2	-	1/10	ロクロ成形、体部下端で強く外反し、体部は内湾して開く、口縁端部は弱く外反する、底部は厚く平高台状となる	灰白色	-	
39	42	258	R792-4	第2面	SK119		土師器	皿	(14.2)	-	3.1	-	1/2	非ロクロ成形、二段ナデ、口縁端部は弱く外反する、内外面に油煙付着、灯明皿	灰白色	-	
39	42	259	R792-6	第2面	SK119		土製品	管状土錘	長さ6.3、最大径5.6、孔径1.9			142	完形	断面紡錘形を呈する	灰白色	-	
39	42	260	R664-7	第2面	SK119		木製品	曲物	(6.5)	3.2	0.3	-	大半欠損	側板の綴合せ部分の破片	-	-	
39	42	261	R792-10	第2面	SK119		木製品	杭	(28.3)	3.0	2.9	-	両端欠損	細い丸木、片端を半面だけ削って尖らせる、上端は腐朽	-	-	
40	43	262	R895	第2面	SK124		土師器	小皿	(8.4)	(4.6)	2.0	-	1/3	ロクロ成形、体部は直線的に開く	灰白色	-	
40	43	263	R953	第2面	SK124		土師器	椀	13.8	4.4	4.3	-	口縁部1/3欠損	ロクロ成形、体部は内湾して開く、内外面に油煙付着、灯明皿	浅黄橙色	-	
40	43	264	R895・953・954	第2面	SK124		土師器	椀	14.4	4.8	4.4	-	1/2	ロクロ成形、体部は内湾して開く	にぶい黄橙色	-	
40	43	265	R696-1	第2面	SP923		土師器	高台椀	13.7	6.0	5.8	-	口～体部1/3欠損	ロクロ成形、体部は内湾して立ち上がり、口縁部は弱く外反する、高台は細く短い、体部外面上半に強いロクロナデ、下半ロクロナデ、内面ヘラ磨き+、内黒	にぶい黄橙色	-	
40	43	266	R724・742	第2面	SP925		土師器	小皿	10.1	4.8	2.6	-	口縁部一部欠損	ロクロ成形、体部は内湾気味に開き、口縁部は外反する、体部内面に籾殻圧痕	にぶい橙色	-	
40	43	267	R146	第2面	SD203		土師器	高台椀	15.5	6.0	6.6	-	2/3	ロクロ成形、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は弱く外反する、高台は断面三角形状で肉厚、口縁端部を除き体部外面上半～内面上位にかけて強いロクロナデ、体部内面横位ヘラ磨き、内黒、体部外面に籾殻圧痕	灰白色	-	
40	43	268	R584	第2面	SD224		珠洲	甕又は壺	-	-	-	-	胴部片	平行叩打、内面押圧具痕	灰色	-	
40	43	269	R862	第3面	SD224	O26-SW	木製品	用途不明品	(36.7)	(7.4)	2.1	-	大半欠損	折敷に似るが全体に腐朽して本来の形状は不明、片面焼焦げ	-	スギ	
40	43	270	R798-11	第2面	SD225		白磁	椀	-	5.4	-	-	底部	高台の削り出しは僅かである、高台部露胎、白磁碗IV－1・a類	灰白色	-	11C後～12C
40	43	271	R607	第2面	SD225		珠洲	甕又は壺	-	-	-	-	胴部片	右下がりの平行叩打、内面押圧具痕	灰白色	-	
40	43	272	R605	第2面	SD225		珠洲	甕	-	-	-	-	胴部片	綾杉状の縦列叩打、内面押圧具痕	灰白色	-	
41	43	273	R798-13	第2面	SD225		木製品	連歯下駄	25.0	19.1	10.5	-	完形	未成品、半截した樹皮付きの丸木を素材とする、274と一組	-	クリ	
41	44	274	R798-16	第2面	SD225		木製品	連歯下駄	24.0	20.0	12.3	-	完形	未成品、半截した樹皮付きの丸木を素材とする、273と一組	-	クリ	
42	44	275	R798-14	第2面	SD225		木製品	差歯下駄	6.7	13.0	1.7	-	完形	差歯下駄の歯、下縁接地面は磨耗する	-	スギ	
42	44	276	R798-10	第2面	SD225		木製品	用途不明品	45.4	3.6	2.2	-	完形	断面楕円形となる棒状の製品で片端は「く」の字状に屈曲する	-	カエデ属	
42	44	277	R798-8	第2面	SD225		木製品	部材	(38.8)	4.4	4.3	-	片端欠損	断面方形の角材で片側を薄く作り出す、片端焼焦げ	-	スギ	
42	44	278	R608	第2面	SD225	O32-NW	木製品	部材	(31.9)	(2.1)	1.8	-	両端欠損	断面方形の細い角材で中央に小孔を1箇所穿つ、片端焼焦げ	-	-	
42	44	279	R604	第2面	SD225	N32-NW	木製品	折敷ヵ	(30.7)	(2.4)	0.5	-	両端欠損	薄く細長い板状を呈する	-	-	
42	44	280	R798-3	第2面	SD225		木製品	折敷ヵ	(14.0)	4.8	0.5	-	片端欠損	薄く細長い板状を呈する	-	スギ	
42	44	281	R798-9	第2面	SD225		木製品	丸木	28.7	5.9	8.1	-	完形	樹皮付きの丸木、両端切断痕、片端は斜めに切断する	-	マツ属複維管束亜属	
42	44	282	R601	第2面	SD225	N32-NW	木製品	削り材	(26.6)	4.6	3.7	-	両端欠損	断面三角形となる棒状を呈する、一部加工痕あり、片端焼焦げ	-	ヤマグワ	
42	44	283	R586	第2面	SD227		土師器	小皿	-	(5.6)	-	-	底部片	ロクロ成形	浅黄橙色	-	
42	44	284	R790	第2面	SD228	P26-SE	土師器	小皿	(9.7)	3.6	2.1	-	1/2	ロクロ成形、体部は内湾気味に開き、口縁部は弱く外反する	浅黄橙色	-	
42	45	285	R588	第2面	SD231		土師器	小皿	(8.6)	(6.0)	1.9	-	1/3	ロクロ成形、体部は内湾気味に開き、口縁部は弱く外反する	浅黄橙色	-	
42	45	286	R588・794-3	第2面	SD231		土師器	小皿	9.3	4.5	2.2	-	口縁部一部欠損	ロクロ成形、体部は内湾し、口縁端部は丸くおさめる、体部内外面に油煙付着、灯明皿	浅黄橙色	-	

図面	図版	遺物番号	R番号	検出面	遺構番号	出土位置	種別	器種	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ(g)	遺存率	成・整形、技法等の特徴	色調	樹種石材	時期・備考
42	45	287	R794-4・795	第2面	SD231		土師器	有台椀	(14.3)	(6.0)	5.8	-	1/3	ロクロ成形、体部は内湾して立ち上がり、口縁部は弱く外反する、高台は細く低い、体部外面ロクロナデ、内面横位ヘラ磨き、内黒	浅黄橙色	-	
42	45	288	R794-2	第2面	SD231		土師器	有台椀	-	6.2	-	-	底部	ロクロ成形、高台は断面三角形状を呈して肉厚である、内黒	浅黄橙色	-	
42	45	289	R794-1	第2面	SD231		土師器	有台椀	(14.6)	7.8	5.5	-	2/3	ロクロ成形、体部は内湾して浅く立ち上がり、口縁部は外反する、高台径が大きい、内外面ロクロナデ	明褐灰色	-	
43	45	290	R896	第2面	SD232		土製品	管状土錘	長さ5.4、最大径5.0、孔径2.0			112	完形	断面梯形を呈する	灰白色	-	
43	45	291	R590	第2面	SD236		土製品	管状土錘	長さ5.6、最大径4.2、孔径1.5			85	完形	断面梯形を呈する	浅黄橙色	-	
43	45	292	R590	第2面	SD236		土製品	管状土錘	長さ4.9、最大径4.9、孔径1.9			90	完形	土玉状を呈する	灰白色	-	
43	45	293	R590	第2面	SD236		土製品	管状土錘	長さ4.8、最大径5.1、孔径1.7			85	完形	土玉状を呈する	灰白色	-	
43	45	294	R627	第2面	SD241	R26-NE	珠洲	片口鉢	-	-	-	-	注口部片	卸し目は曲線文と思われる、吉岡編年I～II期か	灰色	-	12C中～13C前か
43	45	295	R628	第2面	SD241	P27-NW	珠洲	壺	-	-	-	-	胴部片	綾杉状の擬列叩打、内面押圧具痕	灰色	-	
43	45	296	R675-1	第2面	SD243		土師器	小皿	8.5	4.7	2.0	-	完形	ロクロ成形、体部下半で外反し、体部は内湾気味に開く、口縁端部は細くおさめる、底部は厚く平高台状となる	浅黄橙色	-	
43	45	297	R676-2	第2面	SD243		土師器	小皿	(8.9)	(4.5)	2.2	-	1/6	ロクロ成形、体部は直線的に短く開く、口縁端部は細くおさめる	にぶい橙色	-	
43	45	298	R682-1	第2面	SD246		土製品	用途不明品	-	-	-	-	底部片か	内面に輪積痕が残る、胎土は粗く礫と砂を多く含む	にぶい橙色	-	
43	45	299	R737	第2面	SD244		縄文土器	深鉢形土器	-	-	-	-	胴部片	単節縄文を施文する	明赤褐色	-	縄文
43	45	300	R797-1	第2面	SD244		土師器	小皿	(9.9)	4.6	2.5	-	1/2	ロクロ成形、体部は外反気味に開く	浅黄橙色	-	
43	45	301	R654	第2面	SD244		土師器	小皿か	-	6.0	-	-	底部	ロクロ成形、柱状高台	灰白色	-	
43	45	302	R733	第2面	SD244	L29-SW	土師器	小皿	(8.2)	-	1.4	-	1/4	非ロクロ成形、一段ナデ、口縁端部は丸くおさめる	浅黄橙色	-	
43	45	303	R679・796-1	第2面	SD244	L30	白磁	皿	9.8	(3.0)	2.7	-	1/2	体部上位で内湾する、体部内面中位に沈線状の段あり、底部やや上げ底状、白磁皿VI-1類	灰白色	-	11C後～12C
43	46	304	R632	第2面	SD244	L30-SE	珠洲	甕	-	-	-	-	肩部片	右下がりの平行擬列叩打、内面押圧具痕、頸部内面に凹線あり	灰色	-	
43	46	305	R735	第2面	SD244		土製品	用途不明品	-	-	-	-	底部片か	内面に輪積痕が残る、胎土は粗く礫と砂を多く含む	黄灰色	-	
44	46	306	R736	第2面	SD244		土製品	用途不明品	-	-	-	-	底部片か	内面に輪積痕が残る、胎土は粗く礫と砂を多く含む	橙色	-	
44	46	307	R657	第2面	SD244		土製品	管状土錘	長さ4.0、最大径1.3、孔径0.4			5	完形	断面細長い紡錘形を呈する	浅黄橙色	-	
44	46	308	R681	第2面	SD244		土製品	管状土錘	長さ5.7、最大径5.9、孔径1.6			(125)	一部欠損	土玉状を呈する	浅黄橙色	-	
44	46	309	R457	-	第1包	M28-SE	土師器	壺形土器	(19.0)	-	-	-	口縁部1/4	有段口縁、口縁部に2個一対の円形貼付文	灰色	-	古墳
44	46	310	R301・386	-	第1包	P29-NE	須恵器	無台杯	(11.0)	(6.6)	3.0	-	1/2	平底、底部回転ヘラ切り後周縁部ナデ	灰色	-	
44	46	311	R618	-	第1包	N31-NW	須恵器	無台杯	(12.0)	(8.1)	3.0	-	1/3	平底、底部回転ヘラ切り後周縁部ナデ	灰色	-	
44	46	312	R502	-	第1包	K32-SW	須恵器	無台杯	-	6.0	-	-	1/4	平底、底部回転ヘラ切り後周縁部ナデ、底部外面にヘラ記号「-」、暗褐色を呈する漆状の付着物あり	灰色	-	
44	46	313	R100・497	-	第1包	J32-SW J32-SE	須恵器	無台杯	(13.5)	7.4	3.0	-	1/3	平底、厚底で体部は大きく開く、底部回転ヘラ切り後周縁部ナデ	褐灰色	-	
44	46	314	R575	-	第1包	J33-NE	須恵器	有台杯	11.8	7.7	4.3	-	2/3	底部回転ヘラ切り、高台部は内端接地	灰色	-	
44	46	315	R242	-	第1包	Q21-NE	須恵器	有台杯	(11.6)	(7.4)	4.0	-	1/4	底部回転ヘラ切り、高台部は内端接地、314とほぼ同器形	灰色	-	
44	46	316	R702	-	第1包	N26-NW	須恵器	杯蓋	(12.4)	-	3.6	-	1/6	口縁端部は僅かに折れる、扁平な擬宝珠状摘まみ、天井部回転ヘラ削り後ナデ	灰白色	-	
44	46	317	R386	-	第1包	P30-SW	須恵器	短頸壺	(8.3)	-	-	-	ロ～肩部1/4	口縁部は短く直立する	灰色	-	
44	46	318	R610	-	第1包	K32-SW	須恵器	短頸壺	(8.3)	-	-	-	ロ～肩部片	口縁部は内傾気味に短く立ち上がる、体部外面はカキ目	灰色	-	

図面	図版	遺物番号	R番号	検出面	遺構番号	出土位置	種別	器種	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ(g)	遺存率	成・整形、技法等の特徴	色調	材料石材	時期・備考
44	46	319	R430・500・501・609・610・743	-	第1包	K31-NE K32-NE K32-NW J32-SW	須恵器	短頸壺	-	17.8	-	-	体～底部 1/4	肩部が張る器形、高台は「ハ」の字に大きく開く、明瞭な内端接地、肩部には2条一組の凹線が2列巡る、体部内外面はロクロナデによる成形の後、目の粗い木口状の工具によって調整が施される	灰白色	-	
45	47	320	R495	-	第1包	J31-SE	須恵器	壺又は瓶類	-	(9.0)	-	-	体～底部片	高台は短く「ハ」の字に大きく開く、明瞭な内端接地	灰色	-	
45	47	321	R160・240・456	-	第1包	O27 P28-NW	須恵器	双耳瓶	-	-	-	-	体部片	肩部に断面四角形となる突帯を2条巡らし、小振りの摘まみを付加する、摘まみは上から小孔を穿ち、正面には櫛描沈線状の刻み目を施す	灰色	-	
45	47	322	R277	-	第1包	O24-NW	須恵器	甕	(16.4)	-	-	-	口縁部1/6	外面平行叩き、内面同心円状当て具痕	灰色	-	
45	47	323	R309	-	第1包	Q27-NE	須恵器	甕	(19.2)	-	-	-	口縁部1/6	外面平行叩き、内面当て具痕不明瞭	灰色	-	
45	47	324	R460	-	第1包	J32-SW	須恵器	甕	21.1	-	-	-	口縁部1/4	外面平行叩き、内面同心円状当て具痕	灰白色	-	
45	47	325	R440	-	第1包	K32-SW	須恵器	甕	(24.4)	-	-	-	口縁部1/6	外面平行叩き、内面同心円状当て具痕	灰色	-	
45	47	326	R89・376	-	第1包	O31-NE P30-SW	須恵器	甕	(37.2)	-	-	-	口縁部1/8	頸部には単沈線による波状文が巡る	灰白色	-	
46	47	327	R216・717	-	第1包	P25-NW P25-NE	土師器	有台椀	(16.6)	-	-	-	口～体部1/4	ロクロ成形、体部は内湾して立ち上がり、口縁端部は弱く外反する、体部外面上位強いロクロナデ、下半ロクロナデ、内面横位ヘラ磨き、内黒	灰白色	-	
46	47	328	R257・259	-	第1包	N31-SW N31-NW	土師器	有台椀	-	6.0	-	-	体～底部	ロクロ成形、体部に内湾して立ち上がる、内面ヘラ磨きα、内黒	浅黄橙色	-	
46	47	329	R442	-	第1包	L30-NE	土師器	有台椀	-	(6.2)	-	-	底部1/2	ロクロ成形	にぶい橙色	-	
46	47	330	R456	-	第1包	P28-NW	土師器	有台椀	-	5.4	-	-	底部	ロクロ成形、体部は内湾して立ち上がる、器肉厚い	にぶい橙色	-	
46	47	331	R69	-	第1包	O27-NW	土師器	有台椀	-	5.2	-	-	底部	ロクロ成形、足高高台、高台の高さは1.6cm	浅黄橙色	-	
46	47	332	R160	-	第1包	O27	土師器	有台椀	-	5.4	-	-	底部	ロクロ成形、足高高台、高台の高さは1.6cm	浅黄橙色	-	
46	47	333	R293	-	第1包	O26-NE	土師器	有台椀	-	6.6	-	-	体～底部	ロクロ成形、足高高台、高台の高さは1.7cm	浅黄橙色	-	
46	47	334	R470	-	第1包	M30-SE	土師器	有台椀	-	(7.0)	-	-	体～底部	ロクロ成形、足高高台、高台の高さは2.8cm	灰白色	-	
46	47	335	R715	-	第1包	O28-NE	土師器	椀	(14.6)	5.4	4.8	-	1/2	ロクロ成形、体部下半で僅かに外反し、体部は内湾気味に開く、口縁端部は弱く外反する	浅黄橙色	-	
46	47	336	R237	-	第1包	P27-NW	土師器	椀	-	4.8	-	-	体～底部	ロクロ成形、体部下端で僅かに外反し、体部は内湾気味に開く	浅黄橙色	-	
46	47	337	R712	-	第1包	O26-SE	土師器	小皿	(10.1)	(5.4)	3.0	-	1/6	ロクロ成形、底部には低い高台が付き、体部は直線的に開く、底部内面ハケ状工具痕	にぶい黄橙色	-	
46	48	338	R428	-	第1包	M30-NE	土師器	小皿	(9.2)	4.3	2.6	-	1/3	ロクロ成形、体部は内湾気味に開き、口縁部は外反する	浅黄橙色	-	
46	48	339	R233	-	第1包	P24-SW	土師器	小皿	(9.3)	(4.0)	2.2	-	1/3	ロクロ成形、体部は直線的に開く	浅黄橙色	-	
46	48	340	R381・456	-	第1包	P28-NW	土師器	小皿	(9.9)	(4.8)	2.4	-	1/2	ロクロ成形、体部は直線的に開き、口縁端部は細くおさめる	にぶい黄橙色	-	
46	48	341	R299	-	第1包	P25-SW	土師器	小皿	10.0	5.0	2.5	-	2/3	ロクロ成形、体部は直線的に開く	浅黄橙色	-	
46	48	342	R476	-	第1包	O23-SE	土師器	小皿	8.7	4.0	2.0	-	1/4	ロクロ成形、体部は直線的に開く	灰白色	-	
46	48	343	R230	-	第1包	O27-NW	土師器	小皿	(9.3)	(4.0)	2.5	-	1/4	ロクロ成形、体部は内湾して開き、口縁端部は細くおさめる	灰白色	-	
46	48	344	R475	-	第1包	N31-SE	土師器	小皿	(9.7)	(6.7)	2.2	-	1/6	ロクロ成形、底径が大きい、体部は直線的に短く開く	灰白色	-	
46	48	345	R363	-	第1包	N30-SW	土師器	小皿	(9.9)	(7.0)	2.4	-	1/4	ロクロ成形、底径が大きい、体部は直線的に短く開く、底部内面ハケ状工具痕	灰白色	-	
46	48	346	R492	-	第1包	Q27-NW	土師器	小皿	10.1	3.6	2.2	-	ほぼ完形	ロクロ成形、体部下半で小さく外反し、体部は内湾気味に開く、口縁端部は弱く外反する、底部は僅かに平高台状となる、内外面に油煙付着、灯明皿	灰白色	-	
46	48	347	R722	-	第1包	Q25-SE	土師器	小皿	(10.1)	(4.2)	2.4	-	1/2	ロクロ成形、体部下半で小さく外反し、体部は内湾気味に開く	灰白色	-	

図面	図版	遺物番号	R番号	検出面	遺構番号	出土位置	種別	器種	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ(g)	遺存率	成・整形、技法等の特徴	色調	胎土石材	時期・備考
46	48	348	R240	-	第1包	P28-NW	土師器	小皿	(10.4)	(4.5)	2.3	-	1/4	ロクロ成形、体部下半で小さく外反し、体部は内湾気味に開く	浅黄橙色	-	
46	48	349	R482	-	第1包	O27-NE	土師器	小皿	(11.8)	(5.7)	2.4	-	1/2	ロクロ成形、体部は内湾気味に開く	浅黄橙色	-	
46	48	350	R408	-	第1包	O30-NE	土師器	小皿	(9.0)	(5.4)	2.0	-	1/6	ロクロ成形、体部下半で外反し、体部は内湾気味に短く開いて、口縁端部は直立気味につまみ上げて細くおさめる、底部は厚く平高台様となる	浅黄橙色	-	
46	48	351	R351	-	第1包	M31-SW	土師器	小皿b	-	4.3	-	-	底部	ロクロ成形、柱状高台	浅黄橙色	-	
46	48	352	R388	-	第1包	P31-NW	土師器	小皿b	-	4.8	-	-	体～底部	ロクロ成形、柱状高台、底部内面中央は凹む	浅黄橙色	-	
47	48	353	R236	-	第1包	P26-SE	土師器	小皿b	-	(5.6)	-	-	体～底部片	ロクロ成形、柱状高台	浅黄橙色	-	
47	48	354	R305	-	第1包	Q26-NE	土師器	小皿	9.7	3.8	2.6	-	ほぼ完形	ロクロ成形、柱状高台、体部はほぼ水平に開く	にぶい橙色	-	
47	48	355	R302	-	第1包	P30-SW	土師器	小皿b	-	3.9	-	-	底部	ロクロ成形、柱状高台	にぶい橙色	-	
47	48	356	R499	-	第1包	K21-NE	土師器	小皿b	-	4.2	-	-	底部	ロクロ成形、柱状高台	にぶい橙色	-	
47	48	357	R717	-	第1包	P23-NE	土師器	小皿b	-	5.0	-	-	体～底部	ロクロ成形、柱状高台、体部は内湾気味に伸びる	浅黄橙色	-	
47	48	358	R81	-	第1包	P26-SW	土師器	小皿b	-	5.6	-	-	底部	ロクロ成形、柱状高台	浅黄橙色	-	
47	48	359	R351・428	-	第1包	M30-NE M31-SW	土師器	小皿b	-	6.0	-	-	体～底部	ロクロ成形、柱状高台、体部は内湾気味に伸びる	浅黄橙色	-	
47	48	360	R492	-	第1包	Q27-NW	土師器	小皿	9.4	-	2.1	-	完形	非ロクロ成形、二段ナデ、口縁端部は僅かに外反する、型起こし、内面に油煙付着、灯明皿	浅黄橙色	-	
47	49	361	R389	-	第1包	P31-NE	土師器	小皿	(9.4)	-	-	-	1/4	非ロクロ成形、二段ナデ、口縁端部は丸くおさめる	浅黄橙色	-	
47	49	362	R420	-	第1包	K30-SE	土師器	小皿	(11.5)	-	-	-	1/4	非ロクロ成形、二段ナデ、口縁端部は丸くおさめる	灰白色	-	
47	49	363	R380	-	第1包	P31-NE	土師器	皿	(14.0)	-	-	-	1/6	非ロクロ成形、二段ナデ、口縁端部は丸くおさめる	灰白色	-	
47	49	364	R322	-	第1包	K30-SW	土師器	皿	(14.8)	-	2.9	-	1/2	非ロクロ成形、二段ナデ、口縁端部は丸くおさめる、型起こし	灰白色	-	
47	49	365	R417	-	第1包	P33-SW	土師器	小皿	8.4	-	-	-	1/2	非ロクロ成形、一段ナデ、体部は内湾する、口縁端部は丸くおさめる、内外面に油煙付着、灯明皿	浅黄橙色	-	
47	49	366	R441	-	第1包	K32-SE	土師器	小皿	(8.4)	-	-	-	1/4	非ロクロ成形、一段ナデ、体部は内湾する、口縁端部は丸くおさめる	浅黄橙色	-	
47	49	367	R332	-	第1包	L30-NW	土師器	小皿	(8.8)	-	-	-	1/4	非ロクロ成形、一段ナデ、体部は内湾する、口縁端部は丸くおさめる	褐灰色	-	
47	49	368	R582	-	第1包	P25-NW	白磁	碗	(16.8)	-	-	-	口縁部1/12	口縁部小さい玉縁、釉色は白濁して黄味がかる、白磁碗Ⅱ類	灰白色	-	11C後～12C
47	49	369	R86	-	第1包	P28-NW	白磁	碗	(15.4)	-	-	-	口縁部1/12	口縁部小さい玉縁、釉に貫入がみられる、白磁碗Ⅱ類	灰白色	-	11C後～12C
47	49	370	R242	-	第1包	Q21-NE	白磁	碗	(16.1)	-	-	-	口縁部1/12	口縁部玉縁、白磁碗Ⅳ類	灰白色	-	11C後～12C
47	49	371	R131	-	第1包	N31-SE	白磁	碗	(14.5)	-	-	-	口縁部1/12	口縁部玉縁、白磁碗Ⅳ類	灰白色	-	11C後～12C
47	49	372	R388	-	第1包	P31-NW	白磁	碗	(13.4)	-	-	-	口縁部1/10	口縁部玉縁、白磁碗Ⅳ類	灰白色	-	11C後～12C
47	49	373	R428	-	第1包	M30-NE	白磁	碗	-	-	-	-	口縁部片	口縁部玉縁、白磁碗Ⅳ類	灰白色	-	11C後～12C
47	49	374	R442	-	第1包	L30-NE	白磁	碗	-	-	-	-	口縁部片	口縁部玉縁、白磁碗Ⅳ類	灰白色	-	11C後～12C
47	49	375	R53	-	第1包	N29-SW	白磁	碗	-	5.8	-	-	底部1/2	細く直立する高台をもつ、内底見込みに段を有する、白磁碗Ⅴ類	灰白色	-	11C後～12C
47	49	376	R47	-	第1包	M30-SE	白磁	碗	-	-	-	-	底部片	内底見込みに劃花文を施文、白磁碗Ⅴ－4・b類	灰白色	-	11C後～12C
47	49	377	R316	-	第1包	T16-SE	白磁	碗	-	(3.8)	-	-	底部1/4	内底見込みの釉を輪状に掻きとる、高台部露胎、白磁碗Ⅷ類	灰白色	-	11C後～12C
47	49	378	R300	-	第1包	Q27-NE	白磁	碗	(10.6)	-	-	-	口縁部1/8	口縁部内面を面取り口禿とする、白磁碗Ⅸ類	明オリーブ灰色	-	13C後～14C前
47	49	379	R375・388	-	第1包	O31-NW P31-NW	白磁	皿	(10.4)	(3.9)	3.0	-	1/4	体部上位で内湾し、その屈曲部の内面に沈線状の段を有する、底部やや上げ底状、白磁皿Ⅵ－1・a類	灰白色	-	11C後～12C

図面	図版	遺物番号	R番号	検出面	遺構番号	出土位置	種別	器種	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ(g)	遺存率	成・整形、技法等の特徴	色調	樹種石材	時期・備考
47	49	380	R181	-	第1包	N27	白磁	皿	(9.8)	-	-	-	口～体部1/12	体部上位で内湾し、その屈曲部の内面に沈線状の段を有する、白磁皿Ⅵ－1・a類	灰白色	-	11C後～12C
47	49	381	R97	-	第1包	Q28-NW	白磁	皿	(9.8)	-	-	-	口～体部1/10	体部中位に沈線状の段を有する、白磁皿Ⅵ－1・b類	灰白色	-	11C後～12C
47	49	382	R311	-	第1包	Q29-NW	白磁	皿	-	(3.2)	-	-	体～底部片	底部やや上げ底状、白磁皿Ⅵ－1類	灰白色	-	11C後～12C
47	49	383	R38	-	第1包	R23-NW	白磁	合子	-	-	-	-	蓋片	外面に印花文、釉色はややオリーブ灰色がかる	灰白色	-	
47	49	384	R341	-	第1包	M28	青磁	椀	-	-	-	-	口縁部片	龍泉窯系、口縁部は僅かに外反する、内外面無文、青磁椀Ⅰ－1類	オリーブ灰色	-	12C
47	49	385	R462	-	第1包	L31-SE	青磁	椀	-	(4.8)	-	-	体～底部1/2	龍泉窯系、細く尖る高台をもつ、高台端部は露胎、体部は無文、釉はやや厚く露胎との境は赤色に発色する、青磁椀Ⅲ－1類	オリーブ灰色	-	13C後～14C前
48	49	386	R128	-	第1包	M34-NW	青磁	椀	(13.4)	-	-	-	口～体部1/12	龍泉窯系、幅広い鎬蓮弁文、青磁椀Ⅲ－2類	オリーブ灰色	-	13C後～14C前
48	50	387	R251・394・1064	-	第1包	Q27-NW R27-NE	青磁	椀	(17.0)	-	-	-	口～体部1/8	龍泉窯系、鎬蓮弁文、青磁椀Ⅰ－5類	灰オリーブ色	-	13C後～14C前
48	50	388	R445	-	第1包	L32-NW	青磁	椀	(14.4)	-	-	-	口～体部1/12	龍泉窯系、鎬蓮弁文、青磁椀Ⅰ－5類	灰オリーブ色	-	13C後～14C前
48	50	389	R334	-	第1包	L31-NW	青磁	椀	-	5.0	-	-	体～底部	龍泉窯系、断面四角の高台をもつ、高台端部から内部は露胎、高台端部には細み目状の傷が全周する、鎬蓮弁文、青磁椀Ⅰ－5類	灰オリーブ色	-	13C後～14C前
48	50	390	R305	-	第1包	Q26-NE	青磁	椀	-	(5.0)	-	-	体～底部1/3	龍泉窯系、断面四角の高台をもつ、高台端部から内部は露胎、鎬蓮弁文、青磁椀Ⅰ－5類	オリーブ灰色	-	13C後～14C前
48	50	391	R84	-	第1包	P27-SW	青磁	椀	-	5.0	-	-	底部1/4	龍泉窯系、断面四角の高台をもつ、高台端部から内部は露胎、青磁椀Ⅰ－5類	オリーブ灰色	-	13C後～14C前
48	50	392	R230	-	第1包	O27-NW	青磁	椀	-	-	-	-	口～体部片	龍泉窯系、鎬蓮弁文、青磁椀Ⅰ－5類	オリーブ灰色	-	13C後～14C前
48	50	393	R353	-	第1包	N32-SW	青磁	椀	-	-	-	-	体部片	龍泉窯系、鎬蓮弁文、青磁椀Ⅰ－5類	明るい緑灰色	-	13C後～14C前
48	50	394	R307	-	第1包	Q26-SE	青磁	椀	-	-	-	-	体部片	龍泉窯系、鎬蓮弁文、青磁椀Ⅰ－5類	オリーブ灰色	-	13C後～14C前
48	50	395	R561	-	第1包	P27-SE	青磁	杯	11.0	-	-	-	口縁部1/8	龍泉窯系、口縁部は外反し端部は短く直立する、青磁杯Ⅲ－3類	オリーブ灰色	-	13C後～14C前
48	50	396	R53	-	第1包	N29-SW	青磁	小杯	(10.0)	-	-	-	口縁部1/10	龍泉窯系、鎬蓮弁文	緑灰色	-	13C後～14C前
48	50	397	R485	-	第1包	P26-SE	珠洲	片口鉢	(35.2)	-	-	-	口縁部1/12	口縁端部は方頭におさめる	灰色	-	
48	50	398	R429	-	第1包	M31-NE	珠洲	片口鉢	-	-	-	-	胴部片	卸し目は縦位流水状の波状文、一単位幅1.9cm／12目、吉岡編年Ⅱ期	灰色	-	13C前
48	50	399	R305・485	-	第1包	P30-SE Q26-NE	珠洲	片口鉢	-	(12.6)	-	-	体～底部	卸し目は直線で施入は疎、一単位幅2.4cm／9目、底部静止糸切り痕、吉岡編年Ⅲ～Ⅳ期＊	灰色	-	13C中～14C第1＊
48	50	400	R72	-	第1包	O28-NW	珠洲	中甕	(36.4)	-	-	-	口縁部1/8	口縁部を水平に挽き出し、端部は方頭におさめる、吉岡編年Ⅱ期	灰白色	-	13C前
49	50	401	R712	-	第1包	O26-SE	珠洲	甕又は壺	-	-	-	-	胴部片	右下がりの平行叩打、内面押圧具痕の上から縦位指撫で	灰色	-	
49	50	402	R394	-	第1包	R27-NE	珠洲	小壺	-	-	-	-	肩部1/8	胴上半部に刻文あり	灰色	-	
49	50	403	R482	-	第1包	O27-NW	土製品	管状土錘	長さ6.8	最大径3.2	孔径1.5	103	完形	断面樽形を呈する	浅黄橙色	-	
49	50	404	R482	-	第1包	O27-NW	土製品	管状土錘	長さ6.3	最大径4.2	孔径1.8	99	完形	断面樽形を呈する	灰白色	-	
49	50	405	R481	-	第1包	O27-NW	土製品	管状土錘	長さ6.2	最大径3.9	孔径1.4	82	完形	断面樽形を呈する	灰白色	-	
49	50	406	R451	-	第1包	N29-NE	土製品	管状土錘	長さ6.0	最大径4.6	孔径1.4	102	完形	断面樽形を呈する	橙色	-	
49	51	407	R468	-	第1包	M30-NW	土製品	管状土錘	長さ5.0	最大径6.4	孔径1.7	171	完形	土玉状を呈する	灰白色	-	
49	51	408	R499	-	第1包	K31-NE	土製品	管状土錘	長さ5.9	最大径4.2	孔径1.3	124	完形	断面樽形を呈する	浅黄橙色	-	
49	51	409	R446	-	第1包	L32-NE	土製品	管状土錘	長さ5.8	最大径5.5	孔径2.0	122	完形	土玉状を呈する	橙色	-	
49	51	410	R308	-	第1包	Q27-NW	土製品	管状土錘	長さ5.7	最大径5.5	孔径1.8	134	完形	土玉状を呈する	灰白色	-	
49	51	411	R404	-	第1包	N33-NW	土製品	管状土錘	長さ3.4	最大径5.7	孔径1.8	134	完形	土玉状を呈する	灰白色	-	

図面	図版	遺物番号	R番号	検出面	遺構番号	出土位置	種別	器種	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ(g)	遺存率	成・整形、技法等の特徴	色調	樹種心材	時期・備考
49	51	412	R481	-	第1包	O27-NW	土製品	管状土錘	長さ5.4、最大径4.3、孔径1.8			73	完形	断面棒形を呈する	灰白色	-	
49	51	413	R336	-	第1包	O30-NW	土製品	管状土錘	長さ5.3、最大径5.8、孔径1.6			134	完形	土玉状を呈する	灰白色	-	
49	51	414	R514	-	第1包	R26-NE	土製品	管状土錘	長さ5.3、最大径4.6、孔径1.7			(91)	一部欠損	断面棒形を呈する	浅黄橙色	-	
49	51	415	R20	-	第1包	O25-NE	土製品	管状土錘	長さ5.1、最大径4.1、孔径1.8			84	完形	断面棒形を呈する	浅黄橙色	-	
49	51	416	R481	-	第1包	O27-NW	土製品	管状土錘	長さ5.0、最大径5.2、孔径1.5			96	完形	土玉状を呈する	灰白色	-	
49	51	417	R362	-	第1包	N30-NE	土製品	管状土錘	長さ5.0、最大径4.7、孔径1.4			78	完形	土玉状を呈する	橙色	-	
50	51	418	R342	-	第1包	M29-NW	土製品	管状土錘	長さ4.9、最大径5.4、孔径1.9			123	完形	土玉状を呈する	浅黄橙色	-	
50	51	419	R293	-	第1包	O26-NE	土製品	管状土錘	長さ4.8、最大径4.8、孔径1.8			94	完形	土玉状を呈する	浅黄橙色	-	
50	51	420	R558	-	第1包	O26-SE	土製品	管状土錘	長さ4.6、最大径4.7、孔径1.5			73	完形	土玉状を呈する	灰白色	-	
50	51	421	R457	-	第1包	Q28-NW	土製品	管状土錘	長さ4.6、最大径5.4、孔径1.4			100	完形	土玉状を呈する	灰白色	-	
50	51	422	R481	-	第1包	O27-NW	土製品	管状土錘	長さ4.5、最大径4.8、孔径1.7			74	完形	土玉状を呈する	灰白色	-	
50	51	423	R453	-	第1包	O27-NW	土製品	管状土錘	長さ4.4、最大径4.9、孔径1.6			74	完形	土玉状を呈する	浅黄橙色	-	
50	51	424	R311	-	第1包	O29-NW	土製品	管状土錘	長さ4.3、最大径4.8、孔径2.0			73	完形	土玉状を呈する	浅黄橙色	-	
50	51	425	R454	-	第1包	O28-SW	土製品	管状土錘	長さ4.2、最大径4.7、孔径1.6			70	完形	土玉状を呈する	灰白色	-	
50	51	426	R575	-	第1包	J33-NE	土製品	管状土錘	長さ4.2、最大径4.1、孔径1.4			90	完形	土玉状を呈する	浅黄橙色	-	
50	51	427	R454	-	第1包	O28-SW	土製品	管状土錘	長さ4.1、最大径3.8、孔径1.4			48	完形	断面棒形を呈する	橙色	-	
50	51	428	R354	-	第1包	M32-SE	土製品	管状土錘	長さ3.9、最大径3.3、孔径1.1			32	完形	断面棒形を呈する	橙色	-	
50	51	429	R26	-	第1包	O28-NW	土製品	管状土錘	長さ3.6、最大径4.4、孔径1.8			39	完形	土玉状を呈する	浅黄橙色	-	
50	51	430	R249	-	第1包	Q24-NE	土製品	管状土錘	長さ3.6、最大径4.6、孔径2.0			39	完形	土玉状を呈する	灰白色	-	
50	51	431	R35	-	第1包	Q27-NE	銭貨	北宋銭	銭径2.54×2.54、内径2.07×2.06、銭厚0.14			2.30	ほぼ完形	明道元宝、真書	-	-	明道元年（1032年）初鋳
50	51	432	R161	-	第1包	P32-SW	銭貨	北宋銭	銭径2.45×・、内径1.97×1.96、銭厚0.14			(1.40)	一部欠損	皇宋通宝、真書	-	-	宝元元年（1038年）初鋳
50	52	433	R84	-	第1包	P27-SW	銭貨	北宋銭	銭径2.50×2.49、内径2.03×2.01、銭厚0.14			1.90	ほぼ完形	熙寧元宝、真書	-	-	熙寧元年（1068年）初鋳
50	52	434	R186	-	第1包	O31-SW	鉄製品	用途不明品	-	-	-	-	大半欠損	平坦な面から方形に突き出た茎込口のような部位が確認できる	-	-	
50	52	435	R24	-	第1包	O26-SE	鉄滓	鉄滓	5.7	6.9	3.1	104	完形	多孔質	-	-	
50	52	436	R95	-	第1包	Q27-NE	鉄滓	鉄滓	5.1	5.8	2.7	110	完形	多孔質	-	-	
50	52	437	R304	-	第1包	K33-NW	鉄滓	鉄滓	5.0	6.2	2.4	78	完形	多孔質	-	-	
50	52	438	R327	-	第1包	K32-SE	鉄滓	鉄滓	4.4	6.6	3.0	91	完形	多孔質	-	-	
51	52	439	R1052	第3面	SE501		須恵器	甕	-	-	-	-	胴部片	外面擬格子叩き、内面同心円状当て具痕	灰色	-	
51	52	440	R1073	第3面	SE501	基底部	木製品	方形曲物	長さ42.5、幅36.0、高さ19.5、厚さ0.7			-	底板欠損	平面形はやや台形状に歪む。側板は一重巻きで綴合せは1箇所、1列外10段綴じ、底板を抜いて井戸の木枠として再利用されている	-	カヤ	
51	52	441	R1068-1	第3面	SE501	2層	木製品	板材	(91.4)	12.4	4.6	-	片端欠損	細長い板状の部材、両側面に浅い切り込み加工あり、井戸材＊	-	スギ	
52	52	442	R1069-2	第3面	SE501	2層	木製品	板材	(60.0)	9.7	2.0	-	片端欠損	細長い板材、井戸材＊	-	-	
52	52	443	R1070-3	第3面	SE501	2層	木製品	板材	(54.7)	7.1	2.0	-	片端欠損	細長い板材、井戸材＊	-	-	
52	52	444	R1072	第3面	SE501	2層	木製品	角材	51.5	4.8	4.4	-	完形	両端を平坦に切断、井戸材＊	-	-	
52	52	445	R1072	第3面	SE501	2層	木製品	角材	40.6	4.5	3.5	-	完形	片端を断面鈍い三角形状に切断、井戸材＊	-	-	
52	52	446	R1072	第3面	SE501	2層	木製品	角材	42.3	4.2	3.0	-	完形	両端を断面鈍い三角形状に切断、井戸材＊	-	-	

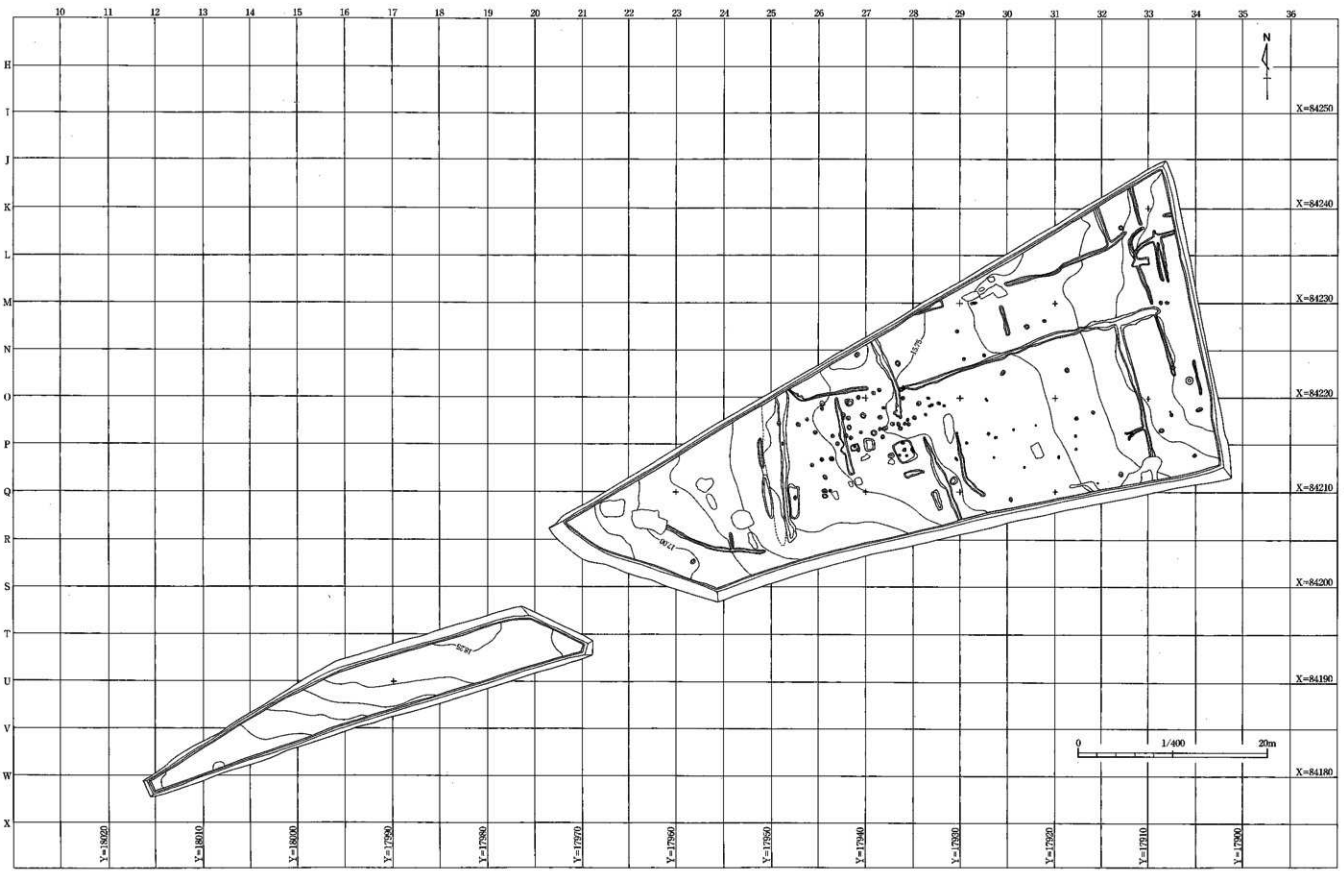
図面	図版	遺物番号	R番号	検出面	遺構番号	出土位置	種別	器種	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ(g)	遺存率	成・整形、技法等の特徴	色調	樹種石材	時期・備考
52	52	447	R1072	第3面	SE501	2層	木製品	角材	40.6	44.4	3.6	-	完形	片端を断面鈍い三角形状に切断、井戸材ヵ	-	-	
52	52	448	R1071-4	第3面	SE501	2層	木製品	角材	(29.8)	2.0	1.6	-	両端欠損	断面長方形となる細い角材	-	-	
52	53	449	R864	第3面	SD268	P23-NW	弥生土器	甕形土器	-	-	-	-	口縁部片	口唇部に櫛歯状工具による刻み目、外面ハケ目、小松式	灰白色	-	弥生中期
52	53	450	R564	第3面	SD268	P24-NW	弥生土器	甕形土器	(37.0)	-	-	-	口縁部1/10	有段口縁、口縁帯に擬凹線文を施す、肩部に斜行刺突文、胴部内面はヘラ削り、法仏式	にぶい黄橙色	-	弥生後期
52	53	451	R865・901	第3面	SD268	P23-NE	土師器	甕形土器	12.4	-	-	-	口縁部2/3	細い体部にほぼ直立して伸びる口縁部をもつ、内外面ハケ目、体部内面はナデ、弥生期の長頸壺の系譜を引くものヵ	にぶい黄橙色	-	古墳
52	53	452	R975	第3面	SD268	P25-NW	土師器	甕形土器	(15.4)	-	-	-	口縁部1/3	有段口縁、口縁帯に擬凹線文を施す	にぶい黄橙色	-	古墳
53	53	453	R958・964	第3面	SD268	O25-SW P26-NW	土師器	甕形土器	15.8	-	-	-	口縁部2/3	有段口縁、口縁帯はヨコナデ、胴部外面ハケ目、内面ヘラ削り	浅黄橙色	-	古墳
53	53	454	R959	第3面	SD268	O25-SE	土師器	甕形土器	(14.0)	-	-	-	口～胴部1/4	有段口縁、口縁帯はヨコナデ、胴部内外面ハケ目	にぶい橙色	-	古墳
53	53	455	R1019	第3面	SD268	O27-SW	土師器	甕形土器	(16.0)	-	-	-	口縁部1/4	有段口縁、口縁帯はヨコナデ	にぶい橙色	-	古墳
53	53	456	R984	第3面	SD268	P26-NW	土師器	甕形土器	(16.4)	-	-	-	口縁部1/4	有段口縁、口縁帯はヨコナデ、胴部内外面ハケ目	にぶい黄橙色	-	古墳
53	53	457	R903	第3面	SD268	P23-SW	土師器	甕形土器	(16.2)	-	-	-	口縁部1/6	有段口縁、口縁帯はヨコナデ、胴部内面ハケ目	にぶい橙色	-	古墳
53	53	458	R1037	第3面	SD268	P26-NE	土師器	甕形土器	19.0	-	-	-	口縁部1/6	有段口縁、口縁帯はヨコナデ、胴部内面横位ヘラ削り	にぶい黄橙色	-	古墳
53	53	459	R972	第3面	SD268	P23-NE	土師器	甕形土器	(15.2)	-	-	-	口縁部1/4	山陰系、口縁帯下端に断面三角形状の鋭い稜をもつ、胴部内外面ハケ目	褐灰色	-	古墳
53	53	460	R1036	第3面	SD268	P26-NW	土師器	甕形土器	(16.6)	-	-	-	口縁部1/4	山陰系、口縁帯下端に断面三角形状の鋭い稜をもつ、胴部外面ハケ目、内面ヘラ削り	にぶい黄橙色	-	古墳
53	53	461	R1000	第3面	SD268	P27-SE	土師器	甕形土器	(17.2)	-	-	-	口縁部1/4	山陰系、口縁帯下端に断面三角形状の鋭い稜をもつ、胴部外面ハケ目、内面ヘラ削り	にぶい黄橙色	-	古墳
53	53	462	R1087	第3面	SD268	P25-SW	土師器	甕形土器	(14.6)	-	-	-	口～胴部1/4	能登形、口唇部をつまみ上げ狭い口縁帯をつくる、胴部内外面ハケ目	にぶい黄橙色	-	古墳
53	53	463	R1035	第3面	SD268	P25-NE	土師器	甕形土器	(16.8)	-	-	-	口～胴部1/3	能登形、口唇部をつまみ上げ狭い口縁帯をつくる、胴部内外面ハケ目	明赤褐色	-	古墳
53	53	464	R1087	第3面	SD268	P25-SW	土師器	甕形土器	18.8	-	-	-	口縁部2/3	能登形、口唇部をつまみ上げ狭い口縁帯をつくる、胴部内外面ハケ目	にぶい黄橙色	-	古墳
53	54	465	R1040	第3面	SD268	P28-NE	土師器	甕形土器	(16.0)	-	-	-	口縁部1/6	能登形、口唇部をつまみ上げ狭い口縁帯をつくる、胴部内外面ハケ目	にぶい橙色	-	古墳
54	54	466	R1000	第3面	SD268	P27-SE	土師器	甕形土器	(17.0)	-	-	-	口縁部1/12	能登形、口唇部をつまみ上げ狭い口縁帯をつくる	橙色	-	古墳
54	54	467	R565	第3面	SD268		土師器	甕形土器	19.4	-	-	-	口縁部1/3	能登形、口唇部を面取りする、胴部内面ヘラ削り	にぶい黄橙色	-	古墳
54	54	468	R984	第3面	SD268	P26-NW	土師器	甕形土器	(18.4)	-	-	-	口縁部1/4	能登形、口唇部を面取りする	橙色	-	古墳
54	54	469	R864・973	第3面	SD268	P23-NW	土師器	甕形土器	19.4	-	-	-	口～胴部1/4	「く」の字口縁、口唇部は丸くおさめる	橙色	-	古墳
54	54	470	R897	第3面	SD268	O26-SW	土師器	甕形土器	(15.2)	-	-	-	口縁部1/6	「く」の字口縁、頸部は緩く屈曲する、口唇部に連続指押さえを施す、内外面ハケ目、近江系（長浜甕）ヵ	にぶい黄橙色	-	古墳
54	54	471	R1036	第3面	SD268	P26-NW	土師器	甕形土器	(16.6)	-	-	-	口～胴部1/4	「く」の字口縁、頸部は緩く屈曲する、口唇部に連続指押さえを施す、内外面ハケ目、近江系（長浜甕）ヵ	にぶい黄褐色	-	古墳
54	54	472	R1000	第3面	SD268	P27-SE	土師器	高杯形土器	(28.8)	-	-	-	杯部1/3	大形品、杯部下半に稜を有し、口縁部は外反して大きく開く	橙色	-	古墳
54	54	473	R831	第3面	SD268	O24-SE	土師器	高杯形土器	-	-	-	-	杯～脚部片	大形品、杯部下半に稜を有する		-	古墳
54	54	474	R1043	第3面	SD268	N29-SW	土師器	高杯形土器	(14.8)	-	-	-	杯～脚部1/4	杯部は途中で屈曲して開く、脚部は細長い	にぶい橙色	-	古墳
54	54	475	R902	第3面	SD268	P23-SW	土師器	高杯形土器	-	-	-	-	脚部片	脚部は細長く、裾部で屈曲外反する、脚部内面横位ヘラ削り	灰白色	-	古墳

図面	図版	遺物番号	R番号	検出面	遺構番号	出土位置	種別	器種	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ(g)	遺存率	成・整形、技法等の特徴	色調	樹種石材	時期・備考
54	54	476	R946	第3面	SD268	P24-SW	土師器	高杯形土器	-	-	-	-	脚部片	脚部はやや「ハ」の字状に開き、裾部で屈曲外反する	橙色	-	古墳
54	54	477	R1015	第3面	SD268	O28-SE	土師器	高杯形土器	-	-	-	-	杯～脚部片	脚部は細く、裾部で屈曲外反する	にぶい橙色	-	古墳
54	54	478	R904・835	第3面	SD268	P23-NE	土師器	高杯形土器	-	(13.0)	-	-	脚部片	脚部は「ハ」の字状に開き、裾部で屈曲外反する、脚部外面縦位ヘラ削り、内面横位ヘラ削り、赤彩。	にぶい橙色	-	古墳
54	54	479	R981	第3面	SD268	P25-NE	土師器	高杯形土器	-	-	-	-	脚部片	脚部は「ハ」の字状に開く、脚部外面縦位ヘラ磨き、内面下半ハケ目、中位に円孔あり	灰白色	-	古墳
54	55	480	R909	第3面	SD268	P27-SE	土師器	鉢形土器	(12.0)	(4.4)	7.4	-	1/3	上げ底状となる平底をもち、体部は「ハ」の字状に開く、口縁部は折り返して有段口縁状を呈する、体部外面ハケ目、内面ナデ	橙色	-	古墳
55	56	481	R959	第3面	SD268	O25-SE	土師器	鉢形土器	(16.7)	-	-	-	1/6	体部は「ハ」の字状に開き、口縁部は内側へ僅かに「く」の字状に屈曲する、体部内外面ハケ目	にぶい黄橙色	-	古墳
55	55	482	R969	第3面	SD268	O26-SW	土師器	有孔鉢形土器	-	3.4	-	-	底部	底部に小孔を1箇所穿つ	にぶい黄橙色	-	古墳
55	55	483	R566	第3面	SD268		土師器	甑形土器	(22.4)	-	-	-	口縁部1/4	器高が高い長胴の形態をもつと思われる、内外面粗いハケ目	にぶい橙色	-	古墳
55	55	484	R872	第3面	SD268	P24-NW	土師器	甑形土器	-	-	-	-	把手部	角状把手	にぶい橙色	-	古墳
55	55	485	R1000	第3面	SD268	P27-SE	土師器	鉢形土器	(13.6)	3.0	4.0	-	1/4	丸底の底部に浅い体部をもち、口縁部は内湾気味に短く直立する、底部外面中央には高杯と同じ出臍状の突起が付く、内外面ナデ、底部ヘラ削り、製作時に高杯から転用したものか	赤褐色	-	古墳
55	55	486	R996	第3面	SD268	O28-SE	土師器	小型土器	-	2.4	-	-	胴部3/4	壺形、平底気味の底部に球形の体部をもつ	浅黄橙色	-	古墳
55	55	487	R1036	第3面	SD268	P26-NW	土師器	小型土器	(9.6)	-	-	-	口～胴部1/4	甕形、胴部で「く」の字に屈曲して口縁部は短く外反する、体部外面横位ヘラ削り、内面ナデ	にぶい黄褐色	-	古墳
55	55	488	R999・1018	第3面	SD268	O27-SW P27-SE	土師器	ミニチュア土器	5.1	4.0	6.0	-	4/5	コップ状の器形を呈する、手づくね成形、内外面輪積痕	にぶい橙色	-	古墳
55	55	489	R957	第3面	SD268	O25-SW	須恵器	杯	-	-	-	-	1/3	丸底、たちあがりを欠く、底部粗い回転ヘラ削り、板状圧痕	灰色	-	
55	55	490	R992・996・997・1000・1016	第3面	SD268	O27-SE O27-NW O28-SE O28-SW P27-SE	須恵器	無台杯	13.2	6.4	3.5	-	2/3	平底、底部回転ヘラ切り後周縁部ナデ	灰白色	-	
55	55	491	R870	第3面	SD268	P23-SW	須恵器	無台杯	(13.4)	(8.0)	3.4	-	1/4	平底、底部回転ヘラ切り後周縁部ナデ	灰白色	-	
55	55	492	R1027	第3面	SD268	P24-NE	須恵器	有台杯	-	(8.6)	-	-	体～底部1/4	底部回転ヘラ切り、高台部は内端接地	灰白色	-	
55	55	493	R957	第3面	SD268	O25-SW	須恵器	杯蓋	12.6	-	2.4	-	口縁部1/2欠損	口縁端部は短く折れる、扁平な擬宝珠状摘まみ、天井部回転ヘラ削り後ナデ	灰色	-	
55	55	494	R994	第3面	SD268	O28-NW	須恵器	杯蓋	(13.4)	-	-	-	1/4	口縁端部は短く折れる、天井部回転ヘラ削り、内面に僅かな摩耗と墨痕あり、転用硯か	灰色	-	
55	55	495	R1045	第3面	SD268	O28-SW	須恵器	杯蓋	(14.4)	-	2.2	-	1/4	口縁端部は短く折れる、扁平な擬宝珠状摘まみ、天井部回転ヘラ削り、内面に摩耗と墨痕あり、転用硯か	灰色	-	
55	55	496	R870・872	第3面	SD268	P24-NW	須恵器	高杯	-	-	-	-	脚部片	脚部中位に2条一組の凹線が廻る	灰色	-	
55	56	497	R517	第3面	SD268		須恵器	𤭯	-	-	-	-	体部1/4	肩部に2条一組の凹線が廻り、直下に細かな櫛歯波状文を施文	灰色	-	
55	56	498	R545	第3面	SD268		須恵器	短頸	-	-	-	-	胴部片	肩が張る器形、肩部に凹線を廻らし併走して刺み目列を施文する、体部外面カキ目、内面ロクロナデ	灰白色	-	
56	56	499	R1027・1032	第3面	SD268	P24-NE P25-NW	須恵器	横瓶	(13.8)	27.0	24.8	-	一部欠損	片側閉塞、胴部はロクロナデ成形、底部側面付近は回転ヘラ削り、閉塞後、胴部全面に細いカキ目を施す、口縁部は直線的に開く開き、口縁部直下に2条一組の凹線が廻る	灰白色	-	

図面	図版	遺物番号	R番号	検出面	遺構番号	出土位置	種別	器種	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ(g)	遺存率	成・整形、技法等の特徴	色調	樹種石材	時期・備考
56	56	500	R864・870	第3面	SD268	P23-NW P23-SW	須恵器	横瓶	-	-	-	-	胴部側面部片	胴部外面はカキ目、内面は同心円状の当て具痕	灰色	-	
56	56	501	R864	第3面	SD268	P23-NW	須恵器	横瓶	-	-	-	-	底部側面部片	胴部外面はカキ目、底部側面の外面は回転ヘラ削り、内面はロクロナデ	暗青灰色	-	
56	56	502	R864・865・685・871・872・900・965・973	第3面	SD268	P23-NE P23-NW P23-SE P24-NW	須恵器	甕	(27.2)	-	48.6	-	部分欠損	丸底、口縁部は「く」の字状に外反して開き、口唇部は断面三角形を呈して下方へ尖る、胴部外面は平行叩きの後カキ目、内面は2種類の同心円状当て具痕がみえる	灰色	-	
57	57	503	R863・877・878・990・1010・1018	第3面	SD268	O24-SE O27-SE O27-SW P25-NW P25-NE	須恵器	甕	(23.2)	-	-	-	口～胴部片	外面平行叩き、内面同心円状当て具痕	灰色	-	
57	57	504	R877・976・1032・1033	第3面	SD268	P25-NW	須恵器	甕	(16.2)	-	-	-	口～胴部片	外面平行叩き、内面同心円状当て具痕	灰白色	-	
57	57	505	R881・902・971	第3面	SD268	P22-SE P23-NW P23-SW	須恵器	甕	(14.6)	-	-	-	口縁部1/3	外面平行叩き、内面同心円状当て具痕	灰色	-	
57	57	506	R875	第3面	SD268	P24-NW	石製品	砥石	7.4	6.5	(2.2)	(162)	一部欠損	正・両側・下面の4面に使用痕あり	-	凝灰岩	
57	57	507	R867	第3面	SD268	P23-NW	自然石	磨石ヵ	11.8	5.4	3.5	230	完形	細長い自然石	-	石英斑岩	
57	57	508	R867	第3面	SD268	P23-NW	自然石	磨石ヵ	13.2	4.6	3.5	342	完形	細長い自然石	-	花崗岩	
57	57	509	R867	第3面	SD268	P23-NW	自然石	磨石ヵ	14.8	6.3	4.8	521	完形	細長い自然石	-	石英斑岩	
57	57	510	R907	第3面	SD268	P25-NE	木製品	削り材	18.4	6.7	5.7	-	完形	両端鉋状工具による切断痕	-	-	
58	57	511	R907	第3面	SD268	P25-NE	木製品	削り材	18.1	8.8	7.1	-	完形	両端鉋状工具による切断痕	-	-	
58	57	512	R1067	第3面	SD269		土師器	甕形土器	17.1	-	-	-	口縁部1/4	「く」の字口縁、頸部の屈曲は緩い、口縁端部は細くおさめる	にぶい黄橙色	-	古墳
58	57	513	R1067	第3面	SD269		土師器	高杯形土器	-	10.8	-	-	脚部片	脚部はやや「ハ」の字状に開き、裾部で屈曲外反する、裾部横位ヘラ磨き	にぶい黄橙色	-	古墳
58	57	514	R1067	第3面	SD269		土師器	鉢形土器	28.2	-	-	-	口～体部1/8	丸底となる深い体部をもち、口縁部は僅かに「く」の字状に屈曲して外半する、内外面ハケ目、外面の一部にヘラ磨きを施す	橙色	-	古墳
58	58	515	R1067	第3面	SD269		土師器	有孔鉢形土器	16.7	3.9	10.6	-	3/4	砲弾状の体部をもち、口縁端部は細くおさめる、底部に小孔（1.4×1.6cm）を穿つ、体部外面ナデ、内面上半ハケ目、下半粗いナデ	にぶい黄橙色	-	古墳
58	58	516	R1067	第3面	SD269		土師器	小型土器	9.2	3.6	5.6	-	1/3	鉢形、丸みを帯びた平底をもち、体部は内湾気味に開く	にぶい黄橙色	-	古墳
58	58	517	R789	-	第2包	W12-NW	縄文土器	深鉢形土器	-	-	-	-	胴部片	半節縄文を施文する	橙色	-	縄文
58	58	518	R760	-	第2包	U15-SE	土師器	甕形土器	(16.0)	-	-	-	口～胴部1/3	「く」の字口縁、口縁部は外反して開き、端部は方頭状におさめる、胴部外面ハケ目	橙色	-	古墳
58	58	519	R847	-	第2包	U15-SE	土師器	壺形土器	10.2	-	-	-	口～胴部	有段口縁、口縁部はヨコナデ	橙色	-	古墳
58	58	520	R849	-	第2包	M29-SW	土師器	壺形土器	10.9	-	-	-	口縁部	口唇部をつまみ上げて面取りする	橙色	-	古墳
58	58	521	R927	-	第2包	J33-SW	土師器	壺形土器	(13.2)	-	-	-	口～胴部1/4	「く」の字口縁、口縁部は直立気味に開く、胴部外面ハケ目、内面ナデ・輪積痕	浅黄橙色	-	古墳
59	58	522	R774	-	第2包	V14-SW	土師器	壺形土器	-	6.8	-	-	底部	底部外面を含め全面にハケ目	浅黄橙色	-	古墳
59	58	523	R1062	-	第2包	V13-NE	土師器	壺形土器	-	-	-	-	一部欠損	直口壺、丸底の底部に球形の体部をもつ、体部外面上半ナデ、下半ヘラ削り、内面ナデ	橙色	-	古墳

図面	図版	遺物番号	R番号	検出面	遺構番号	出土位置	種別	器種	口径(長さ)	底径(幅)	器高(厚さ)	重さ(g)	遺存率	成・整形、技法等の特徴	色調	樹種石材	時期・備考
59	58	524	R787	-	第2包	V15-NE	土師器	高杯形土器	-	(10.5)	-	-	脚部片	脚部は「ハ」の字状に大きく開く	橙色	-	古墳
59	58	525	R856	-	第2包	N29-NW	土師器	高杯形土器	-	(10.5)	-	-	脚部片	脚部は「ハ」の字状に開き、裾部で屈曲外反する	橙色	-	古墳
59	58	526	R854	-	第2包	N28-SE	土師器	高杯形土器	-	(11.4)	-	-	脚部片	脚部は「ハ」の字状に開き、裾部で屈曲外反する	橙色	-	古墳
59	58	527	R856	-	第2包	N29-NW	土師器	高杯形土器	-	(10.0)	-	-	脚部片	脚部は「ハ」の字状に開き、裾部で緩く外反する	にぶい橙色	-	古墳
59	58	528	R785	-	第2包	V13-NE	土師器	高杯形土器	-	-	-	-	脚部片	脚部はやや膨らみをもつ	にぶい橙色	-	古墳
59	59	529	R856	-	第2包	N29-NW	土師器	椀形土器	14.3	-	4.8	-	一部欠損	浅い椀形の体部をもち、口縁端部は細くおさめる、器肉の厚みが一定せず、特に内面は指ナデによる粗い整形となる	橙色	-	古墳
59	59	530	R781	-	第2包	T17-SW	土師器	椀形土器	(13.0)	-	-	-	体部1/4	浅い椀形の体部をもち、口縁部端部は僅かに外反する、口縁部外面ヨコナデ、体部外面横位ヘラ削り、内面黒色処理	橙色	-	古墳
59	59	531	R1063	-	第2包	V15-NW	土師器	小型土器	-	2.6	-	-	1/2	壺形、平底気味の底部に球形の体部をもつ、体部外面ハケ目、内面ナデ・赤彩	浅黄橙色	-	古墳
59	59	532	R842	-	第2包	L31-SW	土師器	小型土器	-	2.3	-	-	口縁部欠損	壺形、平底気味の底部に球形の体部をもつ、体部外面上半ハケ目、下半横位ヘラ削り、内面上半ナデ・輪積痕、下半ハケ目	にぶい橙色	-	古墳
59	59	533	R845	-	第2包	M28-SE	須恵器	杯	(10.6)	-	-	-	1/6	丸底、たちあがりは内傾して短く伸びる	灰色	-	
59	59	534	R851	-	第2包	N28-NW	須恵器	無台杯	12.2	9.0	3.5	-	1/2	平底、底部回転ヘラ切り後周縁部ナデ	灰白色	-	
59	59	535	R840	-	第2包	L30-SE	須恵器	有台杯	-	6.6	-	-	底部片	底部回転ヘラ切り、高台部は内端接地	灰色	-	
59	59	536	R777	-	第2包	V16-NW	須恵器	有台杯	(11.6)	7.0	3.9	-	1/2	底部回転ヘラ切り、高台部は外端接地	灰色	-	
59	59	537	R1060	-	第2包	U17-SW	須恵器	有台杯	(14.2)	(8.0)	5.8	-	1/3	大振り、底部回転ヘラ切り、高台部は内端接地	灰色	-	
59	59	538	R777	-	第2包	V16-NW	須恵器	杯蓋	12.4	-	3.1	-	一部欠損	口縁端部は短く折れる、扁平な擬宝珠状摘まみ、天井部回転ヘラ削り	灰色	-	
60	59	539	R696	-	第2包	K33-NE	土製品	管状土錘	長さ6.0、最大径4.3、孔径1.6			(73)	一部欠損	断面楕形を呈する	灰白色	-	
60	59	540	R938	-	第2包	O26-SE	土製品	管状土錘	長さ5.9、最大径5.2、孔径1.8			134	完形	断面楕形を呈する	灰白色	-	
60	59	541	R938	-	第2包	O26-SE	土製品	管状土錘	長さ5.8、最大径4.4、孔径1.6			90	ほぼ完形	断面楕形を呈する	浅黄橙色	-	
60	59	542	R696	-	第2包	K33-NE	土製品	管状土錘	長さ5.2、最大径4.5、孔径1.6			100	ほぼ完形	断面楕形を呈する	浅黄橙色	-	
60	59	543	R932	-	第2包	O36-SE	土製品	管状土錘	長さ4.8、最大径4.6、孔径1.6			84	完形	土玉状を呈する	灰白色	-	
60	59	544	R832	-	第2包	N28-NE	石製品	子持勾玉	(7.6)	(4.6)	1.5	(35)	一部欠損	親勾玉の断面形は扁平となる	-	滑石	古墳
60	59	545	R888	-	第2包	P24-NW	自然石	叩石＊	11.4	4.8	3.6	291	完形	細長い自然石	-	石英斑岩	
60	59	546	R888	-	第2包	P24-NW	自然石	叩石＊	10.9	4.6	4.5	424	完形	細長い自然石	-	石英斑岩	

図　　面

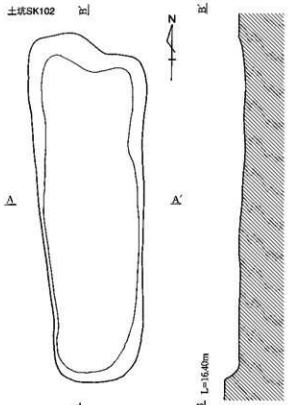


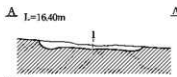
A地区第１面全体図

縮尺１／400

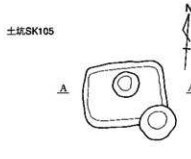
A地区第1面遺構配置図

縮尺1／200

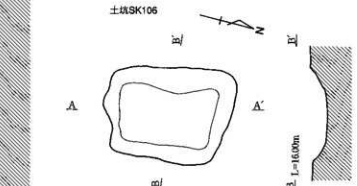


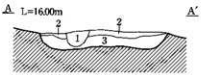


SK102
1．灰黄褐色砂質土　炭化物φ２～３mm中量。

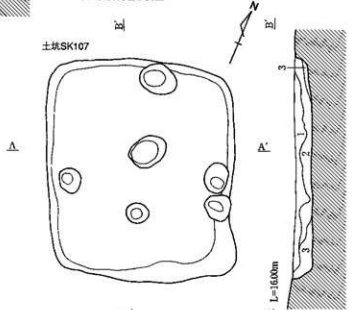


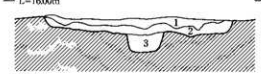
SK105
1．黒褐色粘質土　炭化物φ20～30mm多量。
明黄褐色砂質土ブロックφ５～10mm多量。
2．黒褐色粘質土　炭化物φ10～20mm多量。



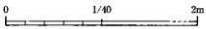


SK106
1．黒色粘質土　炭化物φ２～３mm中量。
灰黄褐色砂質土ブロックφ２～３mm多量。
2．黒褐色粘質土　炭化物φ２～３mm中量。
灰黄褐色砂質土ブロックφ２～３mm多量。
3．灰黄褐色砂質土



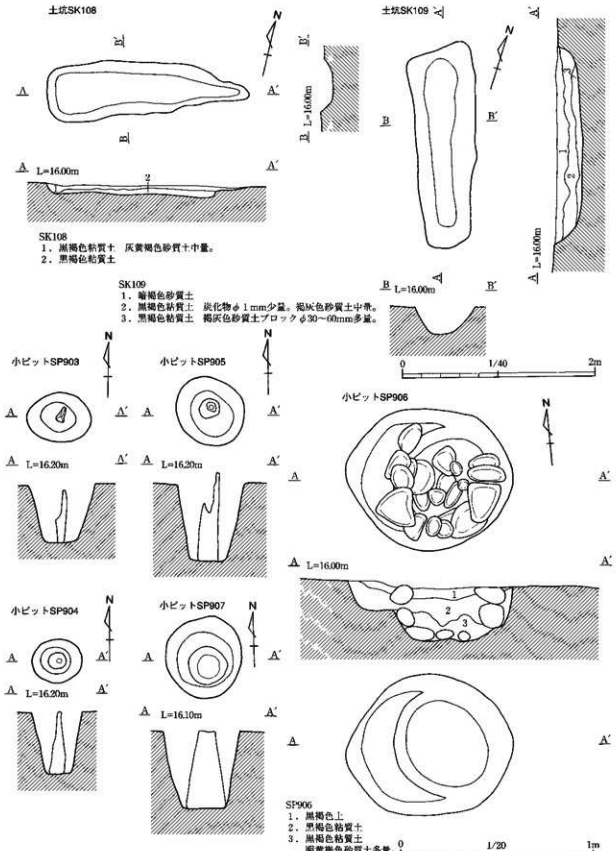


SK107
1．褐色砂質土　黒色粘質土ブロックφ100～150mm少量。
2．黒色粘質土　炭化物φ２～３mm中量。灰黄褐色砂質土少量。
3．灰黄褐色砂質土

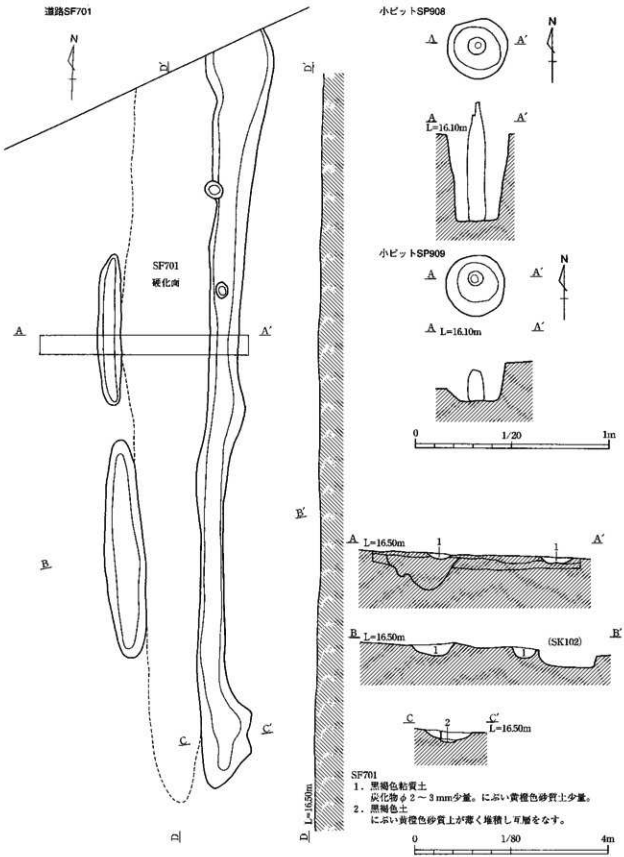


土坑SK102・105～107実測図

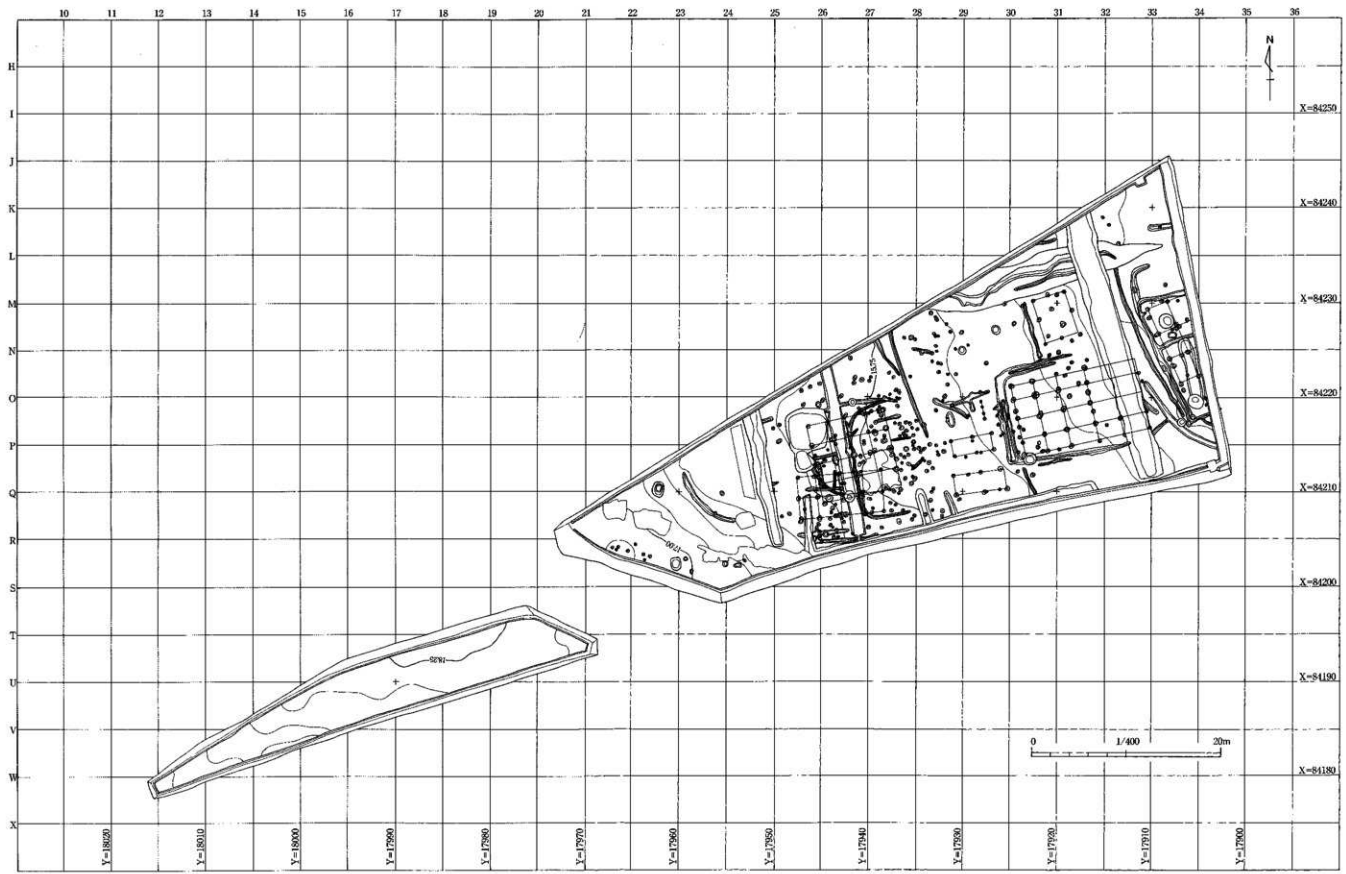
縮尺１／40



土坑SK108・109実測図、小ピットSP903～907実測図　　縮尺1／40、1／20



小ピットSP908・909実測図、道路SF701実測図　　縮尺1／20、1／80

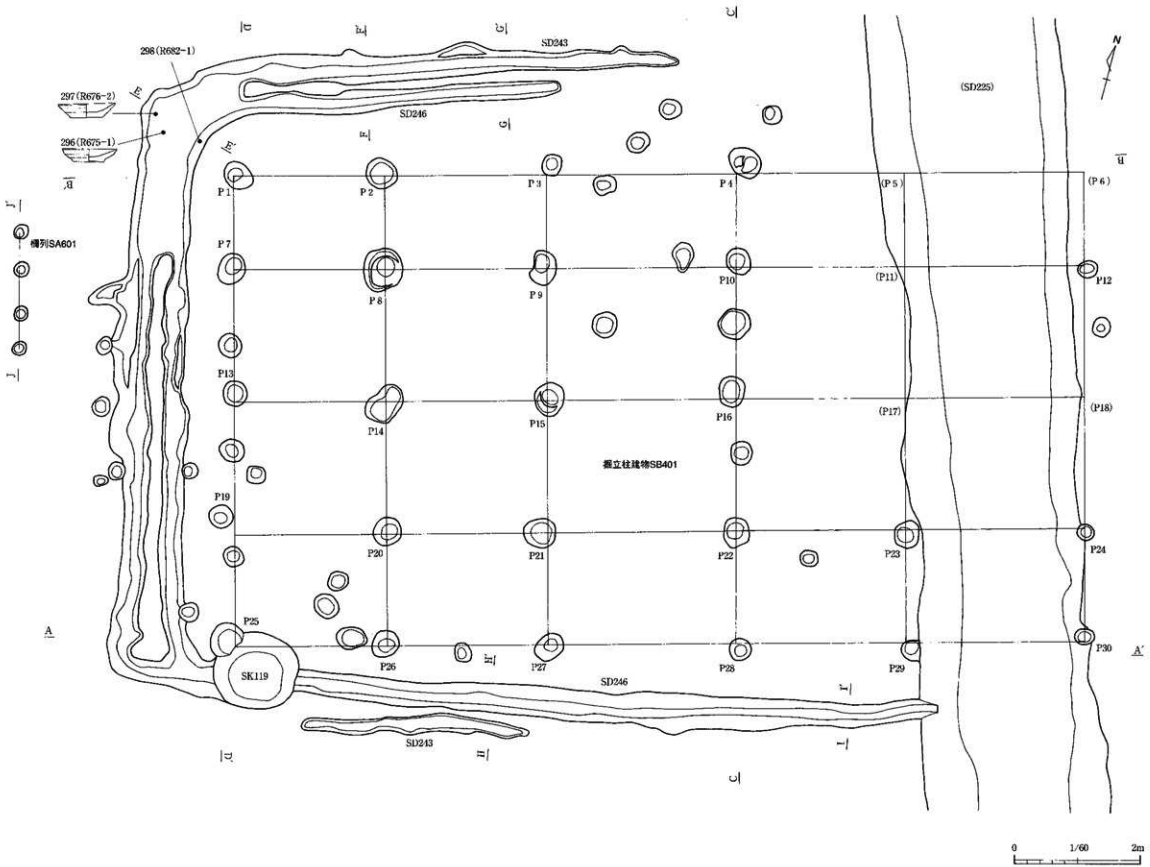


A地区第２面全体図

縮尺１／400

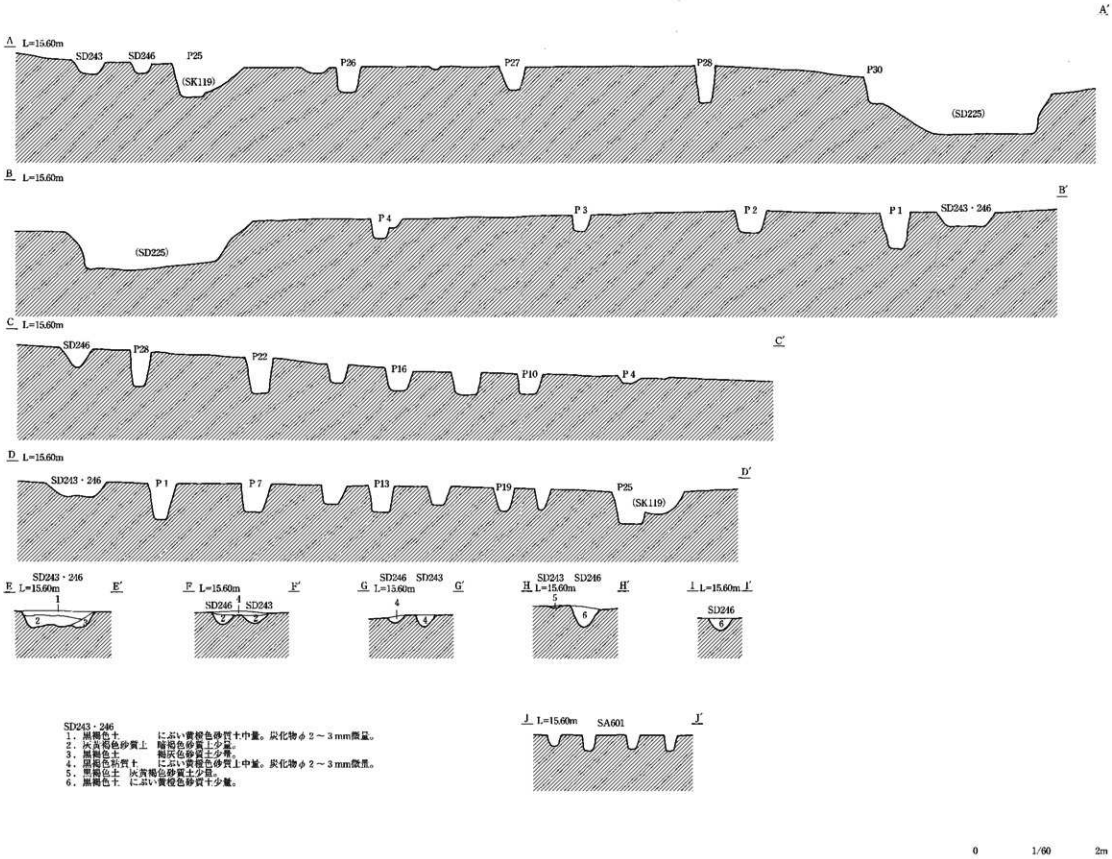
A地区第２面遺構配置図

縮尺１／200



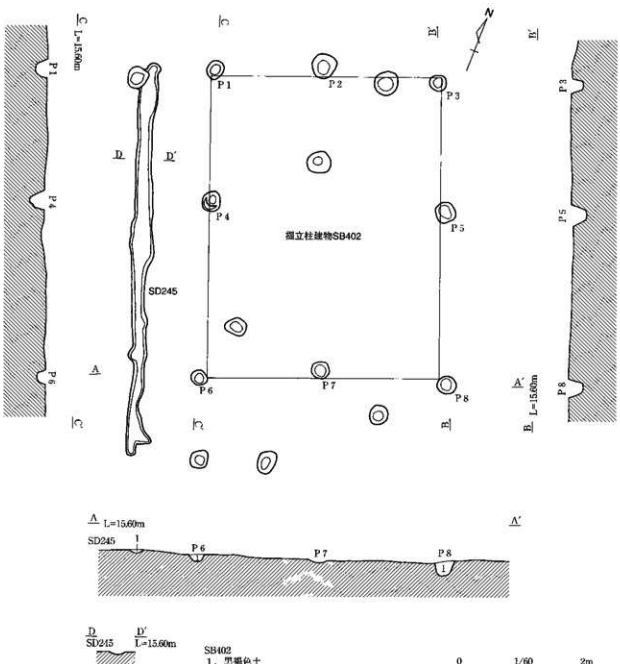
掘立柱建物SB401実測図、柵列SA601実測図

縮尺1／60



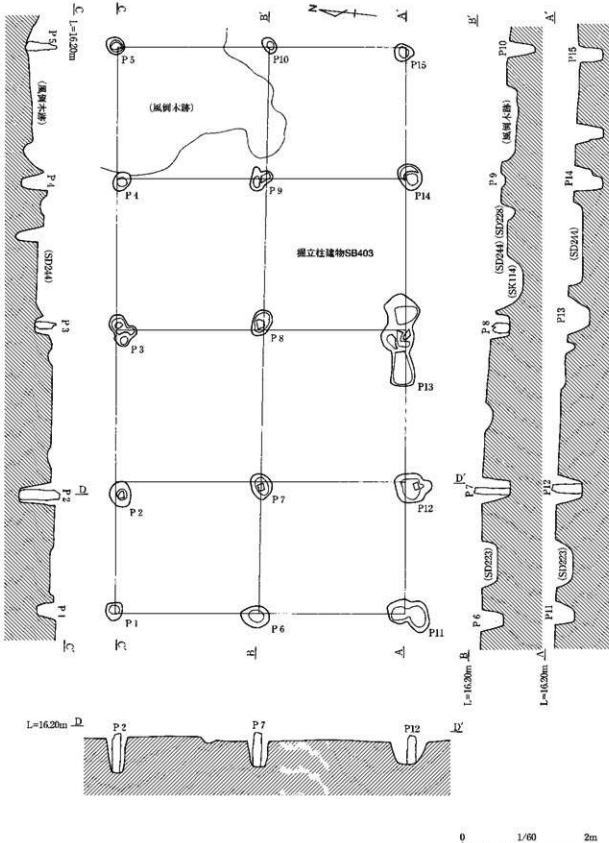
掘立柱建物SB401実測図、構列SA601実測図

縮尺1／60



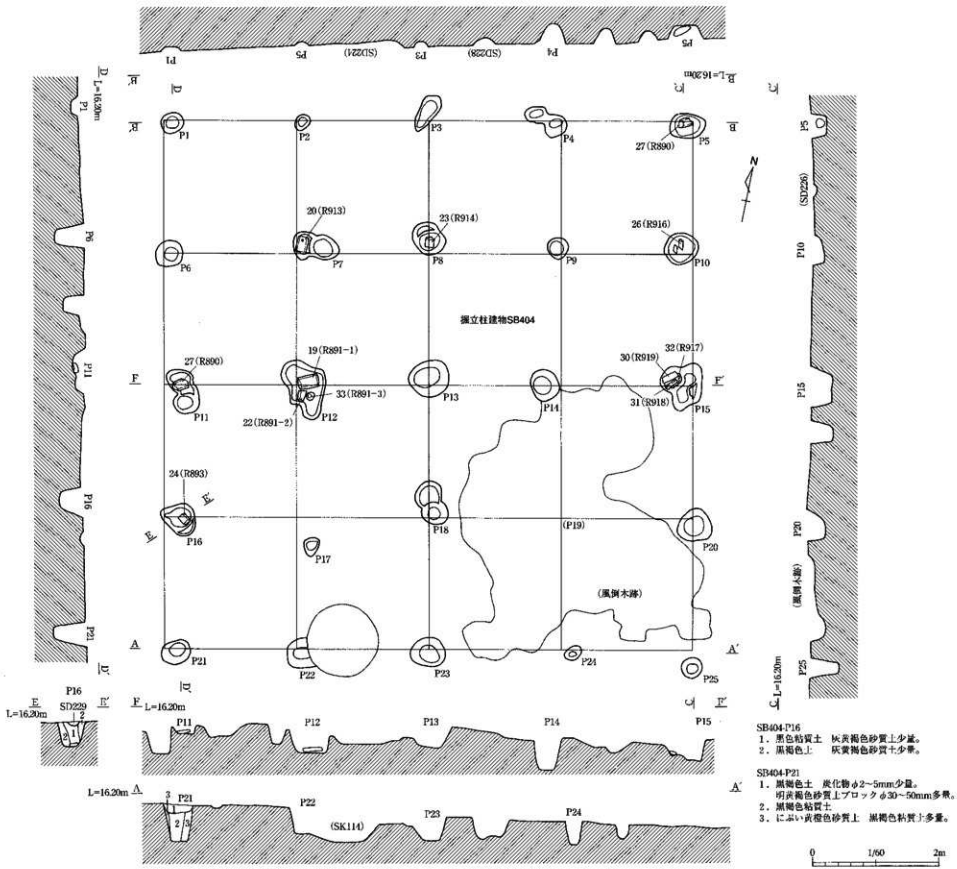
掘立柱建物SB402実測図

縮尺1／60



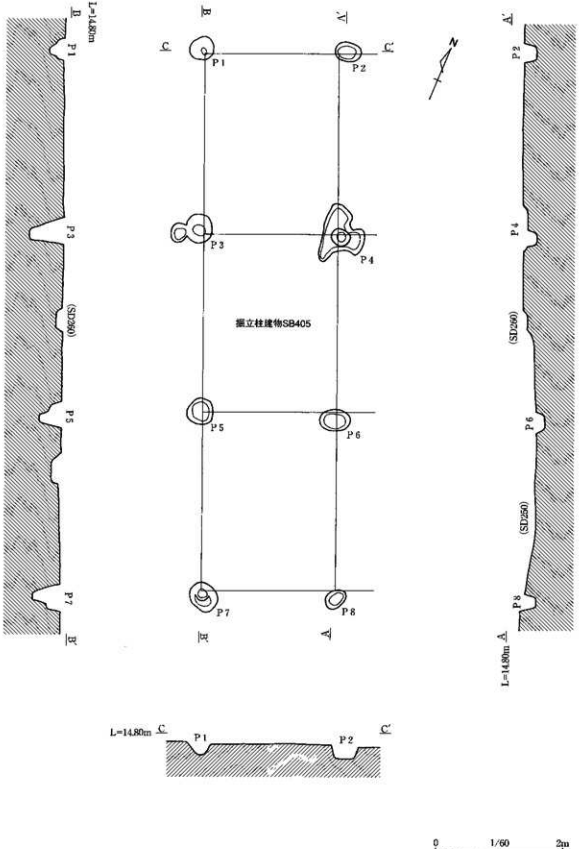
掘立柱建物SB403実測図

縮尺 1／60



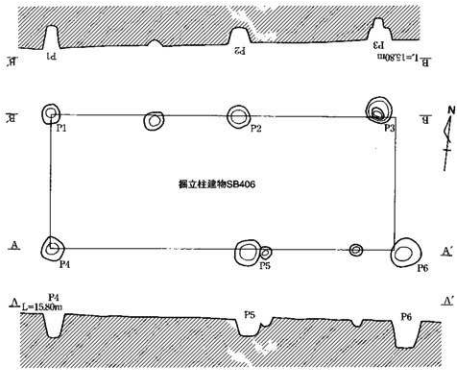
掘立柱建物SB404実測図

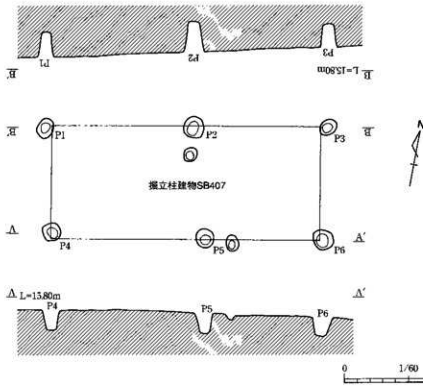
縮尺1／60



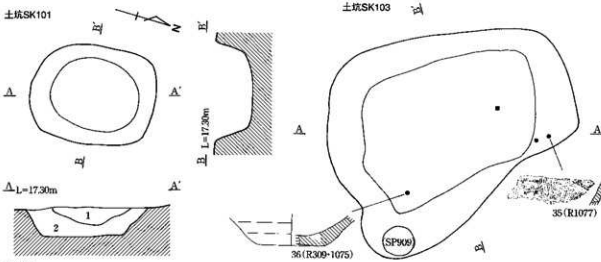
掘立柱建物SB405実測図

縮尺1／60



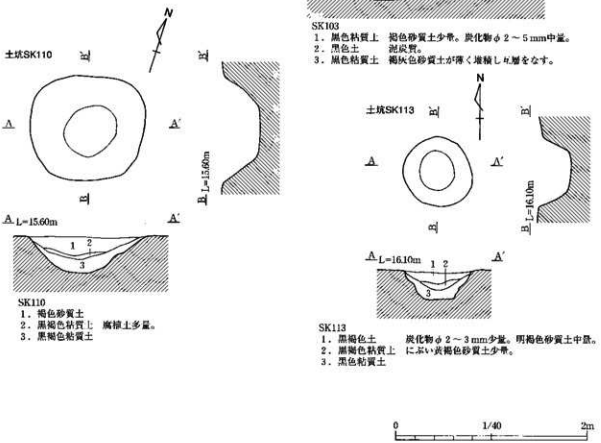


掘立柱建物SB406・407実測図　　縮尺１／60



SK101
1．黒褐色土　　明黄褐色砂質土ブロックφ5～10mm多量。
2．褐灰色砂質土　炭化物φ2～3mm少量。

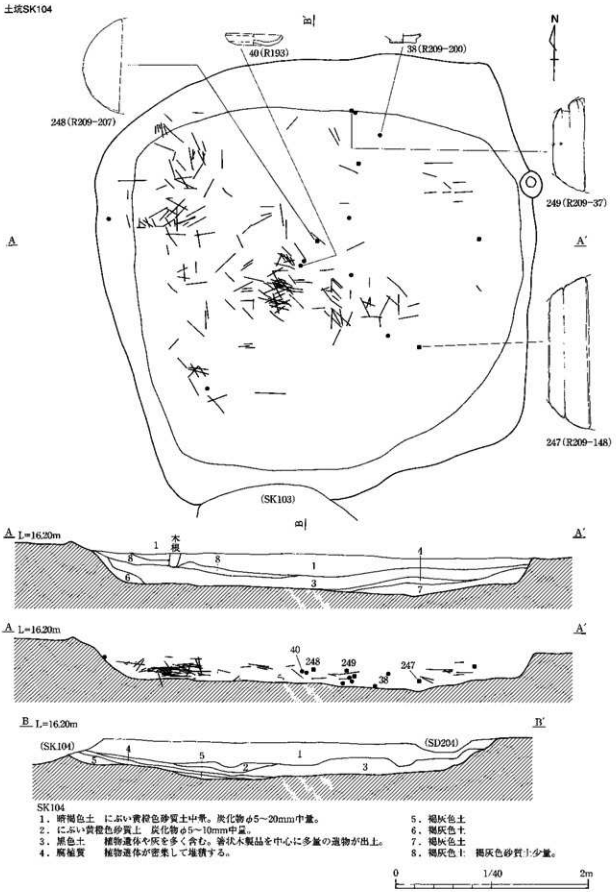
SK103
1．黒色粘質土　褐色砂質土少準。炭化物φ2～5mm中量。
2．黒色土　　泥炭質。
3．黒色粘質土　褐灰色砂質土が薄く堆積しレンズをなす。



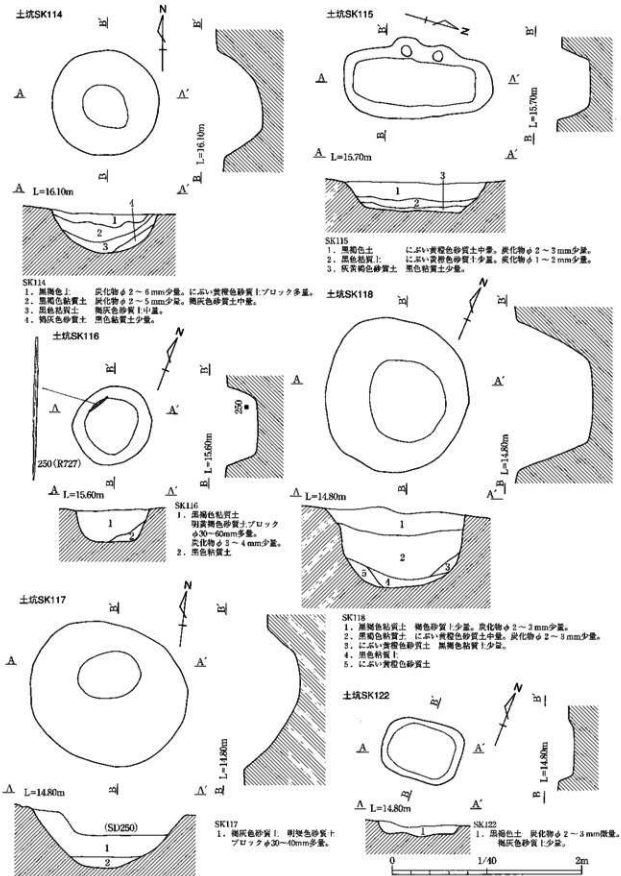
SK110
1．褐色砂質土
2．黒褐色粘質土　腐植土多量。
3．黒褐色粘質土

SK113
1．黒褐色土　　炭化物φ2～3mm少量。明褐色砂質土中量。
2．黒褐色粘質土　に近い黄褐色砂質土少準。
3．黒色粘質土

0　1/40　2m

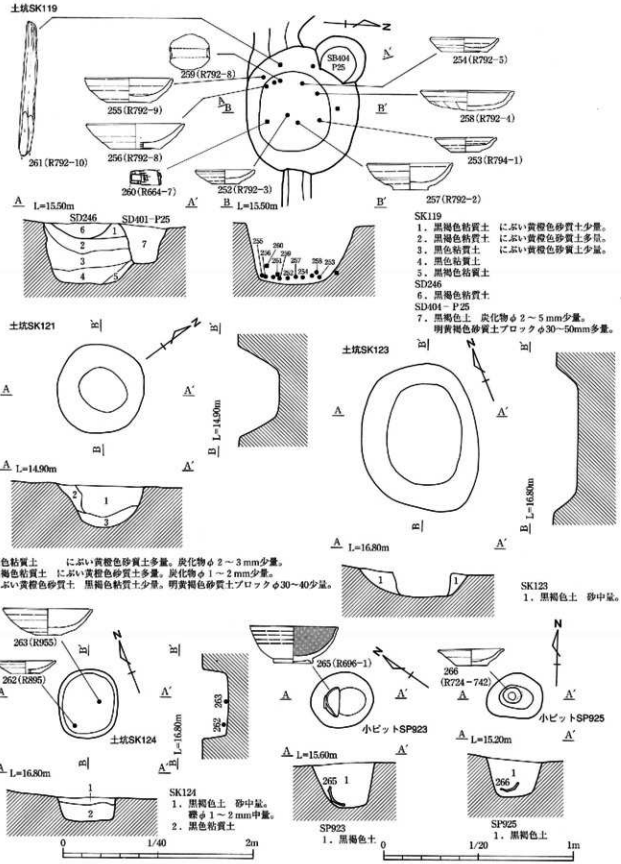


土坑SK104実測図　　縮尺１／40



上坑SK114～118・122実測図

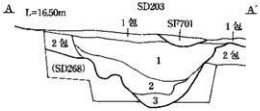
縮尺1／40

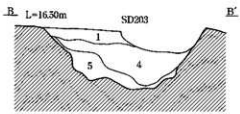


土坑SK119・121・123・124実測図、小ピットSP923・925実測図　　縮尺1／20、1／40

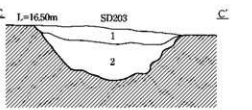
図面一九　遺構実測図

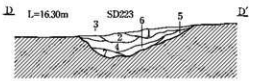
縮尺1／300



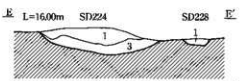


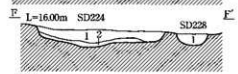
SD203
1．黒褐色粘質土　にぶい黄褐色砂質土中量。
2．黒褐色粘質土　にぶい黄褐色砂質土少量。
3．灰色砂質土　黒褐色粘質土中量。
4．黒褐色土　礫φ50～100mm少等。
5．黒褐色粘質土　明黄褐色砂質土ブロック
φ20～60mm多量。





SD223
1．黒褐色土　灰黄褐色砂質土少量。
2．黒褐色粘質土　灰黄褐色砂質土が薄く堆積し互層をなす。
3．黒褐色粘質土　灰黄褐色砂質土少量。
4．黒褐色粘質土　灰黄褐色砂質土中量。
5．黒褐色粘質土　黄褐色砂質土中量。
6．褐灰色土　灰黄褐色砂質土多量。
7．黒色粘質土

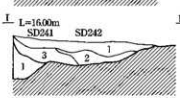




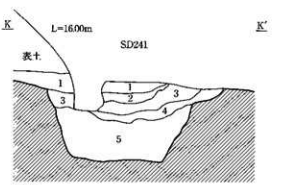
SD224
1．黒褐色土　明褐色砂質土中量。
2．黒褐色粘質土
3．褐灰色土　明褐色砂質土多量。
SD228
1．黒色土　炭化物φ2～3mm少量。
灰黄褐色粘質土中量。

SD228
1．黒色土　炭化物φ2～3mm少量。灰黄褐色砂質土中量。
SD231
1．黒褐色粘質土　炭化物φ2～3mm少量。
2．黒褐色土　灰黄褐色砂質土少量。

SD248
1．黒褐色土
灰黄褐色砂質土中量。



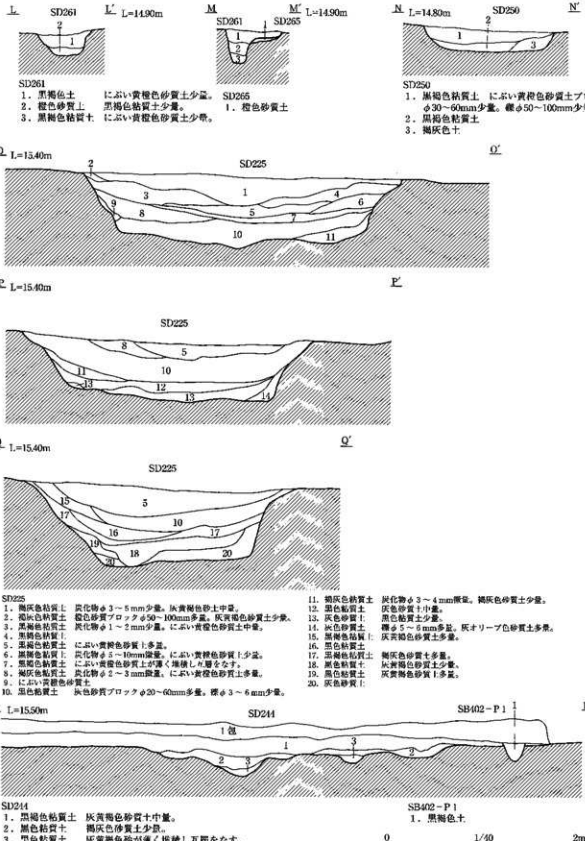
SD241
1．黒色粘質土　褐灰色砂質土が薄く堆積し互層をなす。
SD242
1．黒褐色土
2．黒色粘質土
3．黒褐色土　礫φ20～60mm少量。にぶい黄橙色砂質土少量。



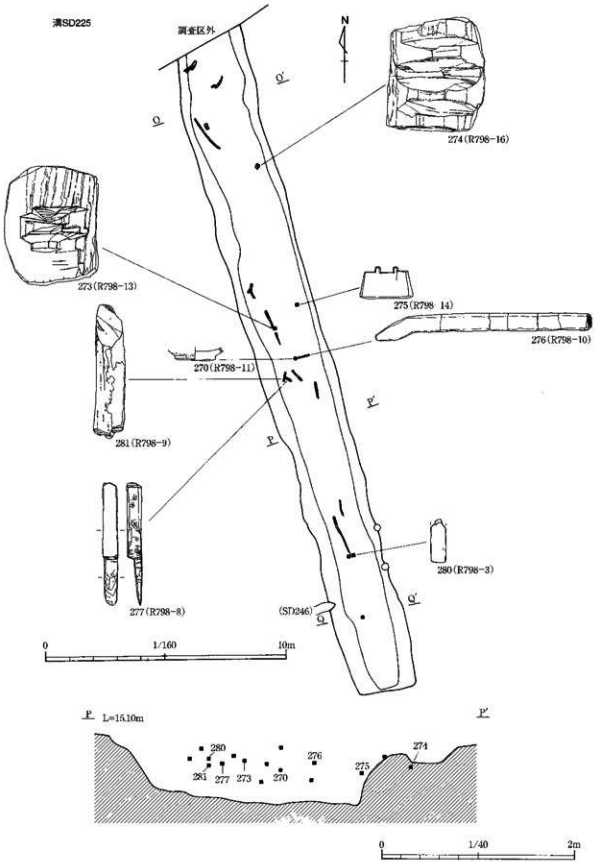
SD241
1．黒褐色土　灰黄褐色砂質土が薄く堆積し互層をなす。
2．にぶい黄橙色砂質土
3．黒色粘質土
4．にぶい黄褐色砂質土
5．黒色粘質土　褐灰色砂質土が薄く堆積し互層をなす。

0　1/40　2m

溝SD203・223・224・228・231・241・242・248実測図　縮尺1／40

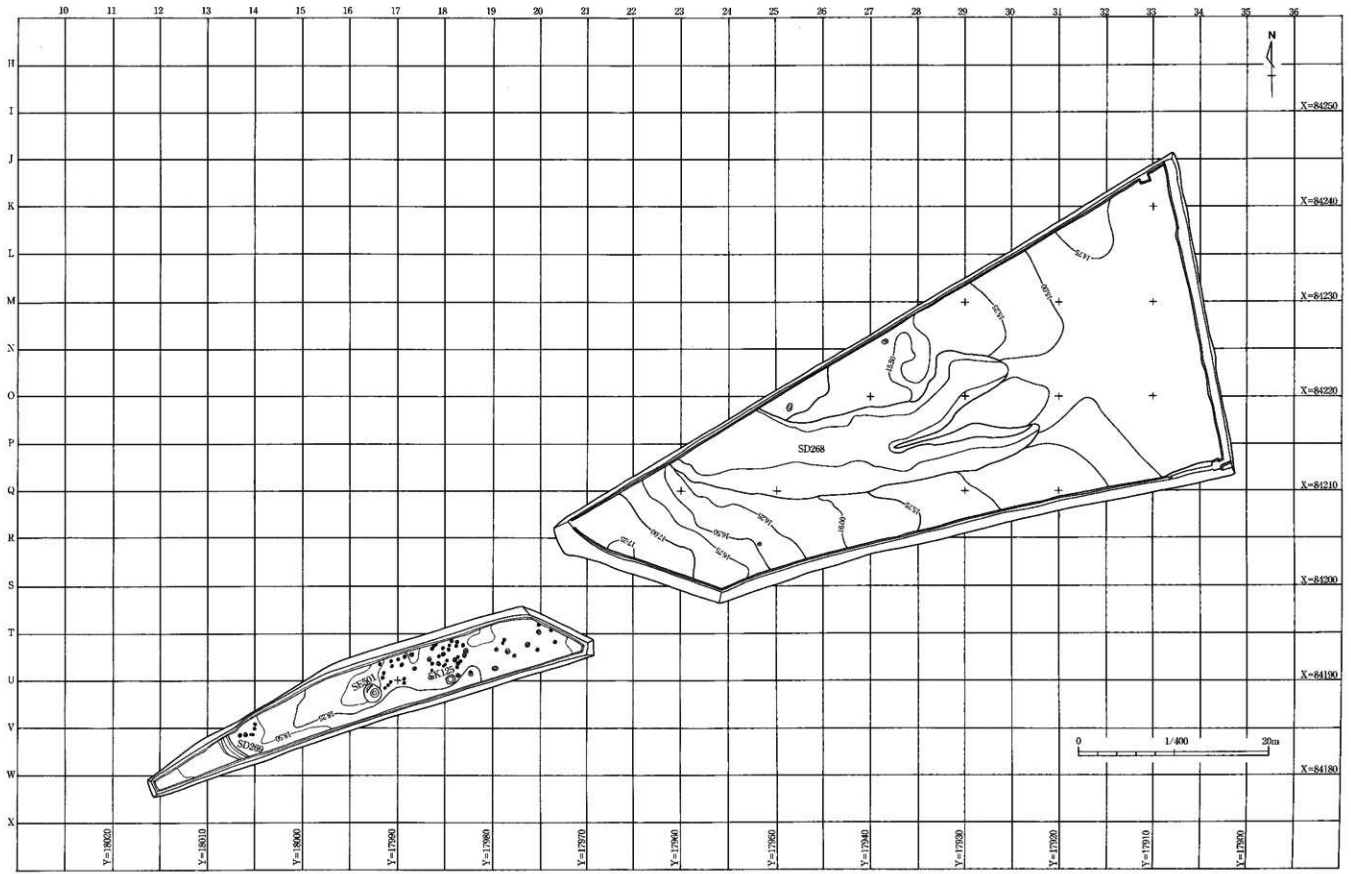


溝SD225・250・261・265実測図、自然流路SD244実測図　　縮尺1／40



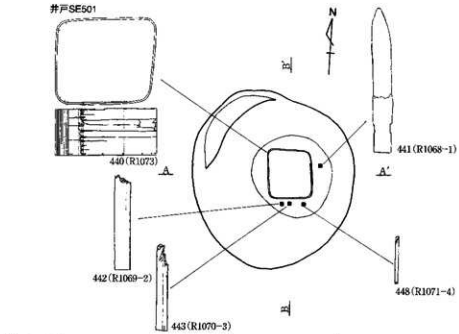
溝SD225実測図

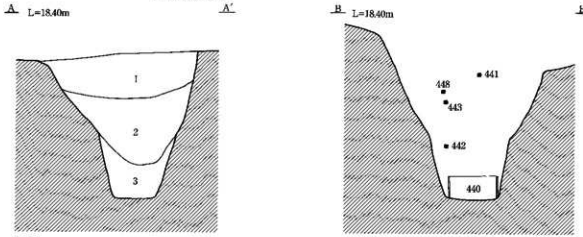
縮尺1／40、1／160



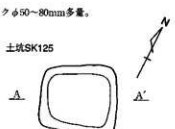
A地区帯3面全体図

縮尺1／400





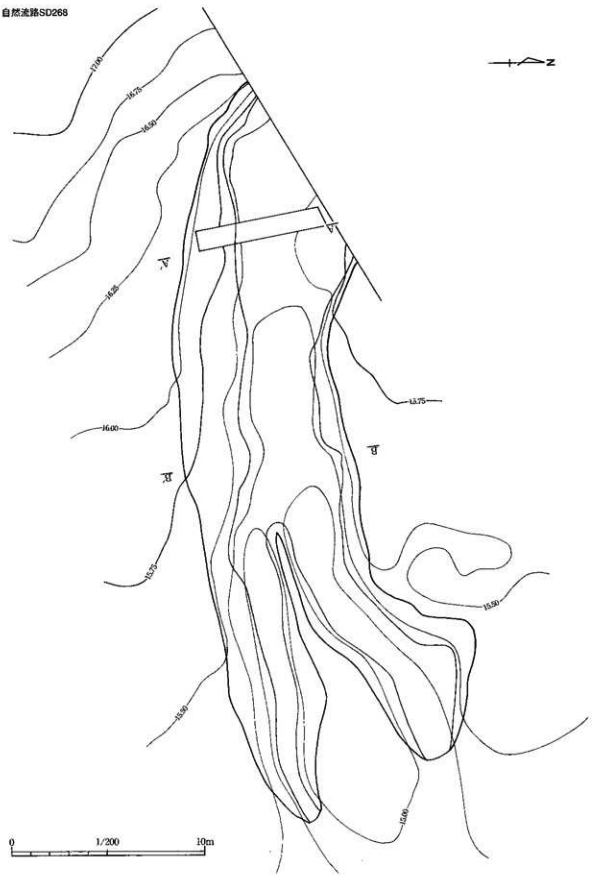
SE501
1．暗青灰色シルト
2．暗青灰色シルト　明青灰色シルトブロックφ50～80mm多量。
3．暗青灰色シルト



SK125
1．褐灰色粘質土　黄褐色粘質土ブロックφ10～30mm少量。

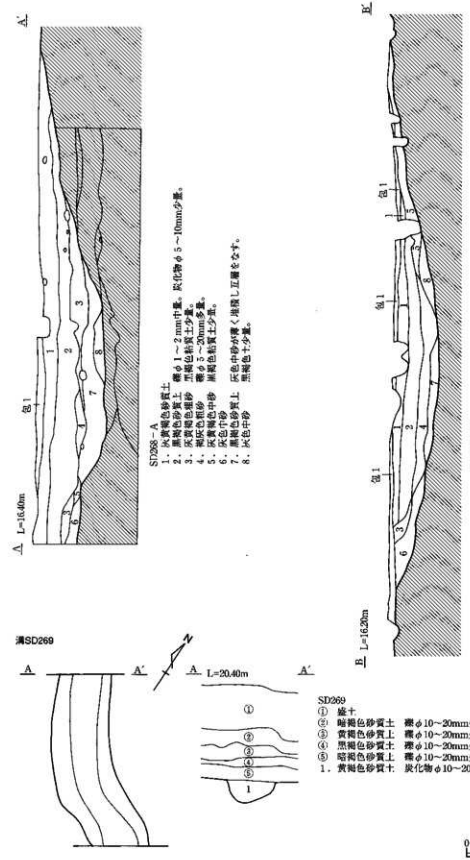
井戸SE501実測図、土坑SK125実測図

縮尺1／40



自然流路SD268実測図

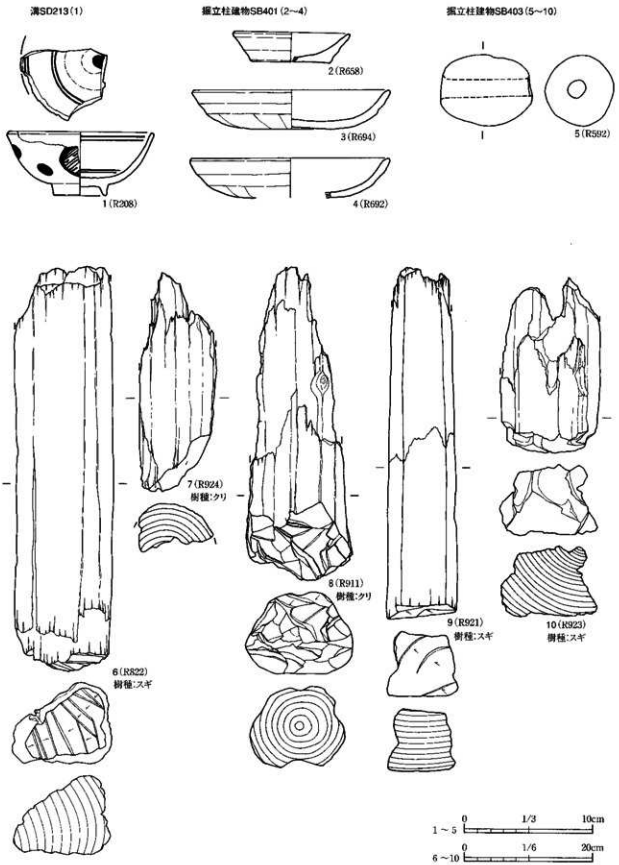
縮尺 1／200



自然流路SD268実測図、溝SD269実測図

縮尺1／60

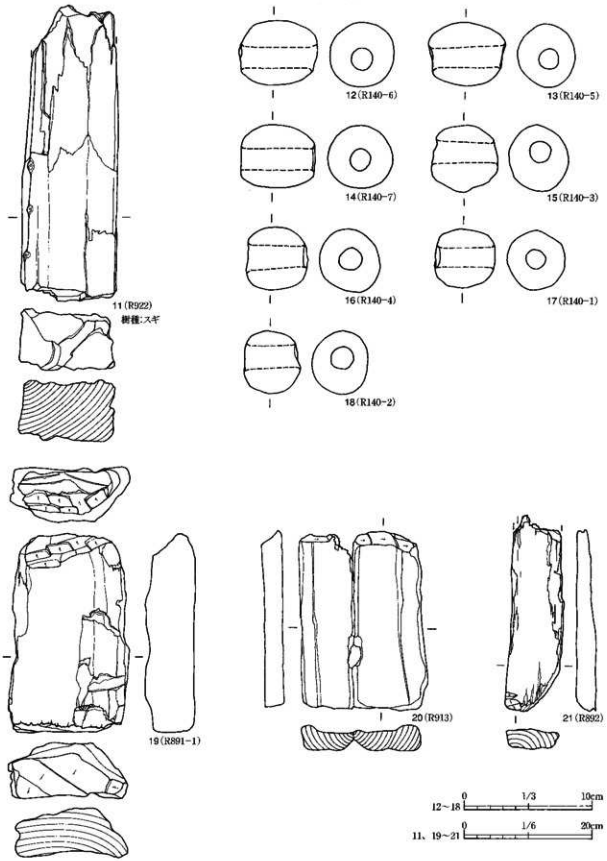
図面二七　遺物実測図



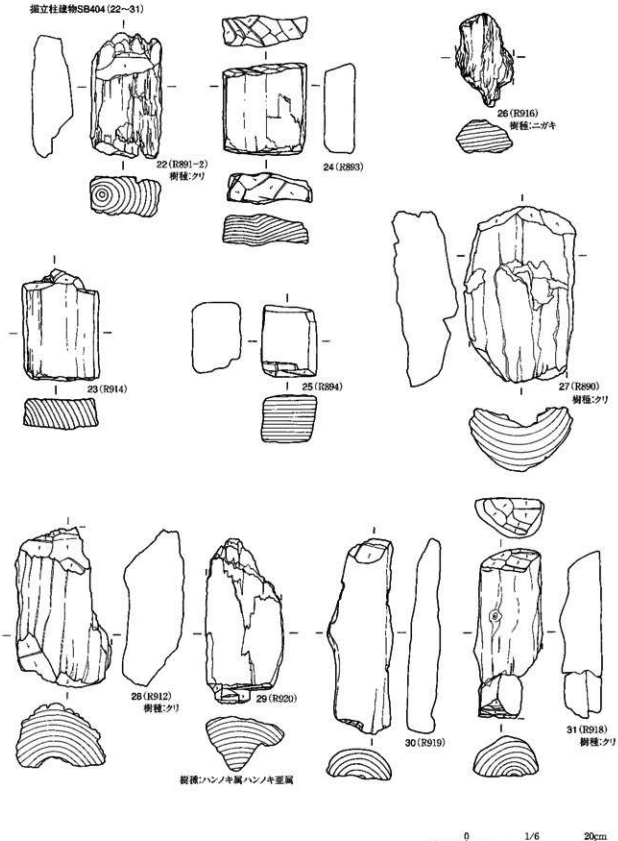
溝SD213、掘立柱建物SB401、掘立柱建物SB403

掘立柱建物SB403(11)

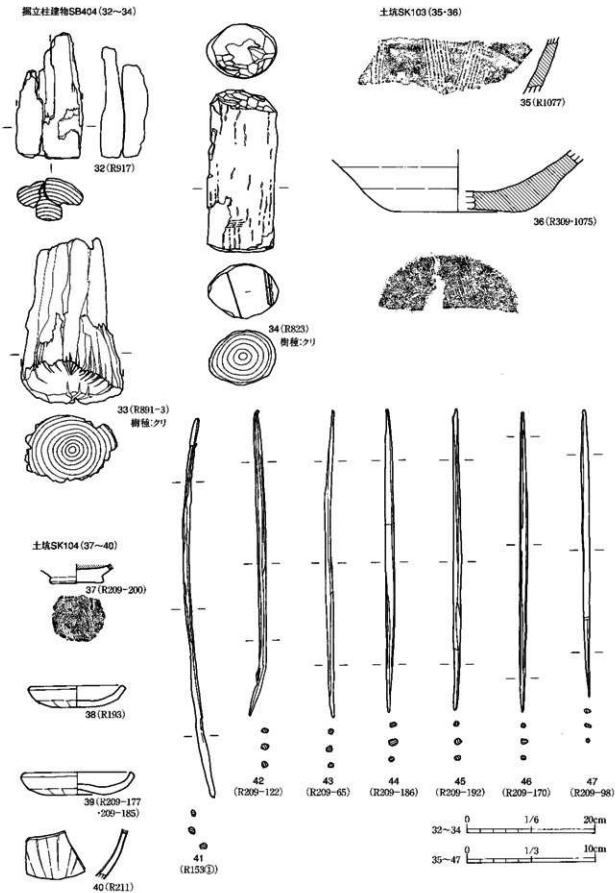
掘立柱建物SB404(12～21)



掘立柱建物SB403、掘立柱建物SB404

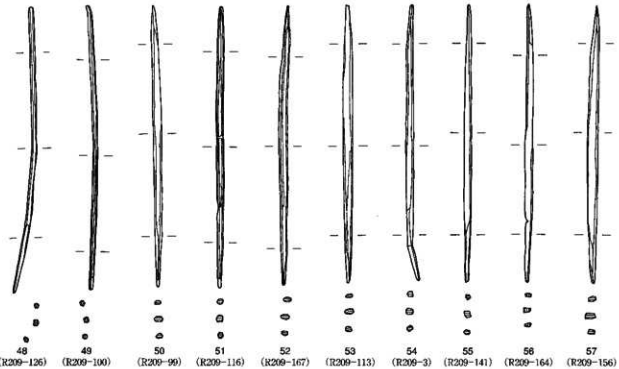

掘立柱建物SB404(22~31)
22(R891-2)
樹種:クリ
24(R893)
26(R916)
樹種:ニガキ
23(R914)
25(R894)
27(R890)
樹種:クリ
28(R912)
樹種:クリ
29(R920)
30(R919)
31(R918)
樹種:クリ
樹種:ハンノキ属ハンノキ亜属
22~31
0
1/6
20cm

掘立柱建物SB404

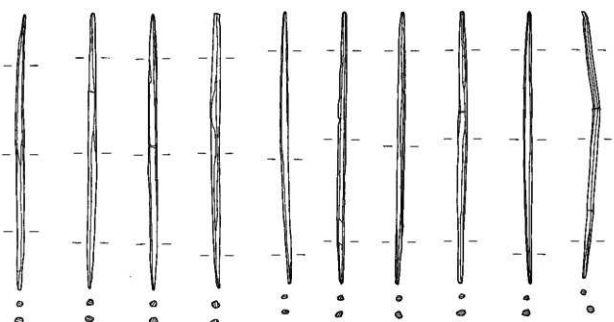


掘立柱建物SB404、土坑SK103、土坑SK104

土坑SK104(48～67)



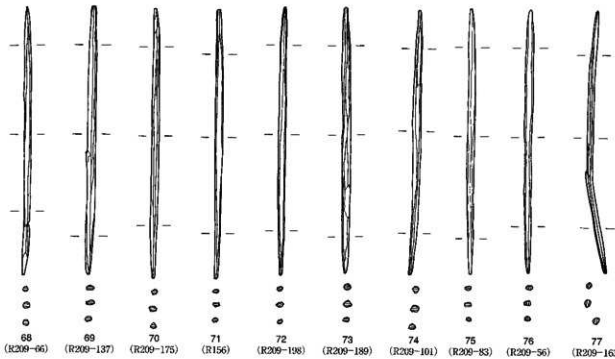
48 (R209-126)　49 (R209-100)　50 (R209-99)　51 (R209-116)　52 (R209-167)　53 (R209-113)　54 (R209-3)　55 (R209-141)　56 (R209-164)　57 (R209-156) 樹種:スギ



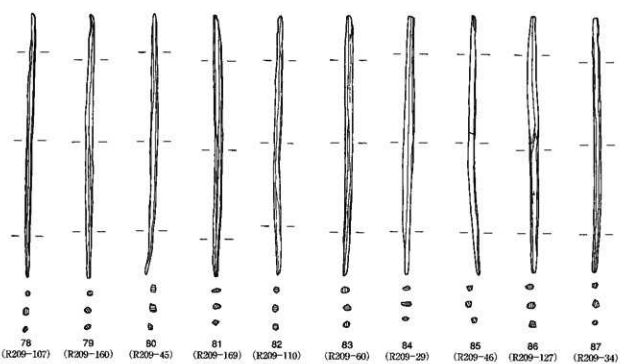
58 (R209-44)　59 (R209-26)　60 (R209-16) 樹種:スギ　61 (R209-123)　62 (R209-59)　63 (R209-137)　64 (R209-166)　65 (R209-86)　66 (R209-120)　67 (R209-89)

48～67　0　1/3　10cm

土坑SK104(68～87)



68 (R209-66)　69 (R209-137)　70 (R209-175)　71 (R156)　72 (R209-198)　73 (R209-189)　74 (R209-101)　75 (R209-83)　76 (R209-56)　77 (R209-163)

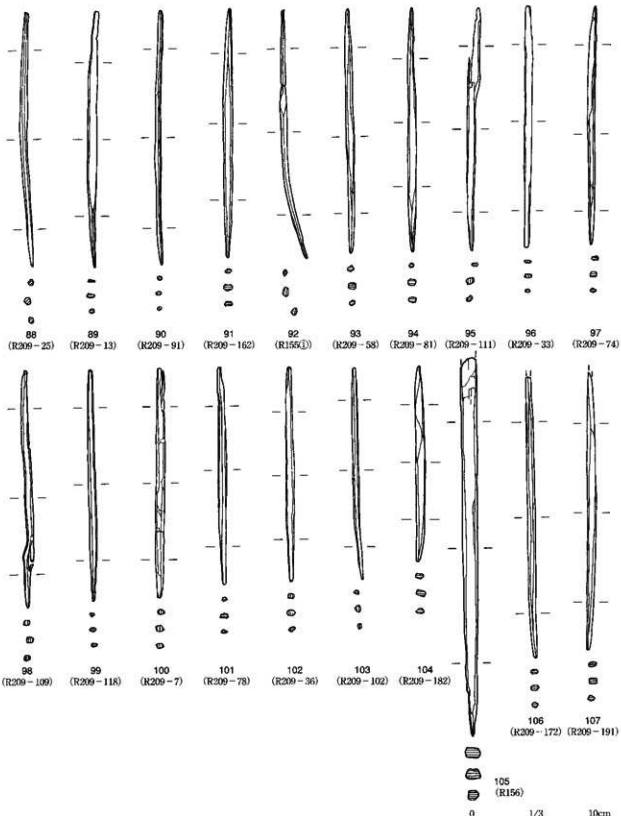


78 (R209-107)　79 (R209-160)　80 (R209-45)　81 (R209-169)　82 (R209-110)　83 (R209-60)　84 (R209-29)　85 (R209-46)　86 (R209-127)　87 (R209-34)

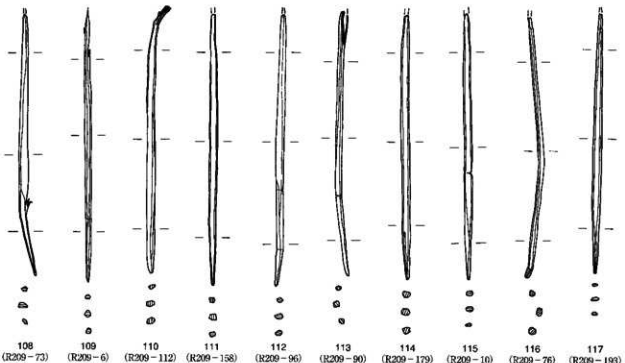
68～87　0　1/3　10cm

土坑SK104

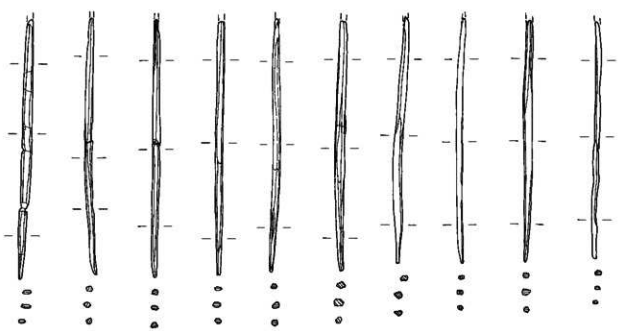
土坑SK104(88～107)



土坑SK104(108～127)



108 (R209－73)　109 (R209－6) 桐種ニスギ　110 (R209－112)　111 (R209－158)　112 (R209－96)　113 (R209－90)　114 (R209－179)　115 (R209－10)　116 (R209－76)　117 (R209－193)

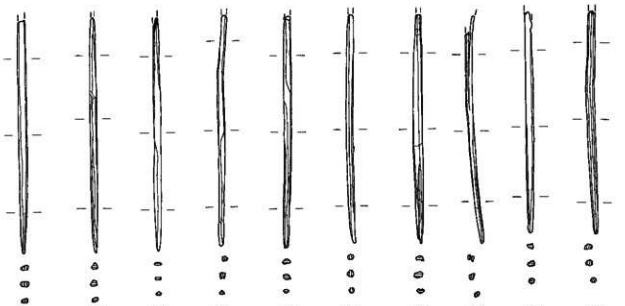


118 (R209－187)　119 (R209－17)　120 (R209－128)　121 (R209－168)　122 (R209－64)　123 (R209－57)　124 (R209－174)　125 (R209－67)　126 (R209－139)　127 (R153㊣)

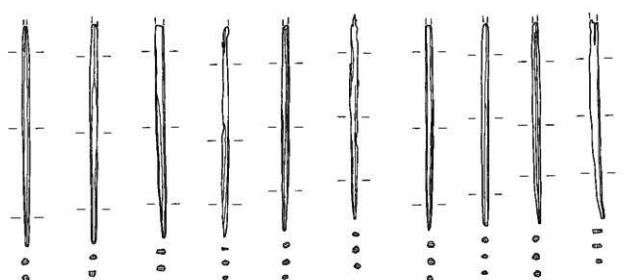
108～127　0　1/3　10cm

図面三五　遺物実測図

土坑SK104(128～147)



128 (R209－188)　129 (R209－41)　130 (R209－8)　131 (R209－132)　132 (R209－108)　133 (R209－94)　134 (R209－97)　135 (R209－75)　136 (R209－87)　137 (R209－173)

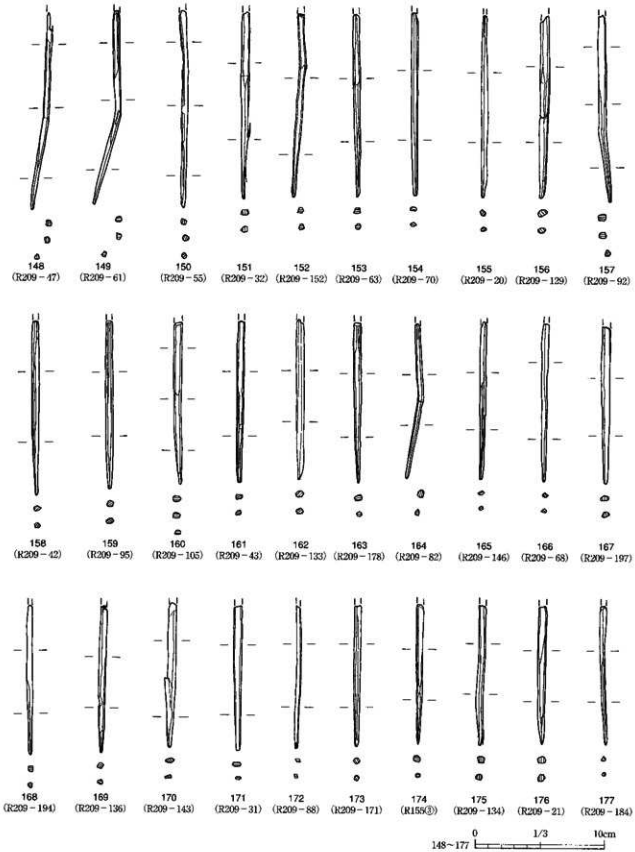


138 (R209－77)　139 (R209－124)　140 (R209－135)　141 (R209－54)　142 (R209－142)　143 (R209－49)　144 (R209－181) 樹種:スギ　145 (R209－28)　146 (R209－104)　147 (R209－153)

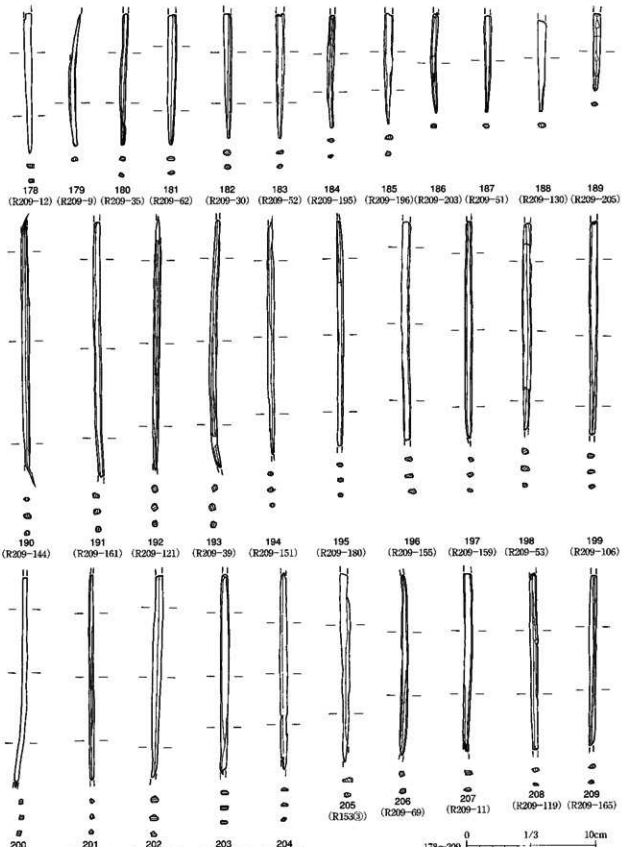
128～147　0　1/3　10cm

土坑SK104

土坑SK104(148～177)

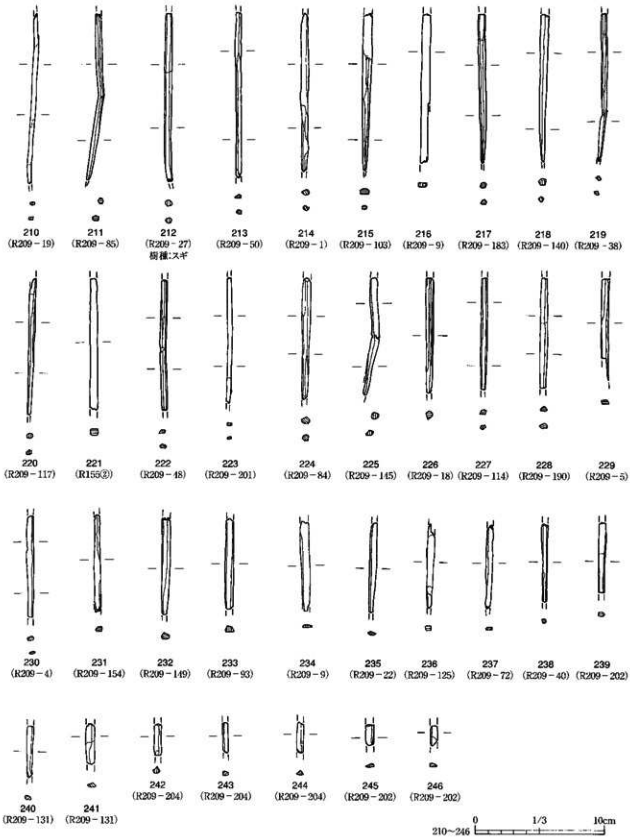


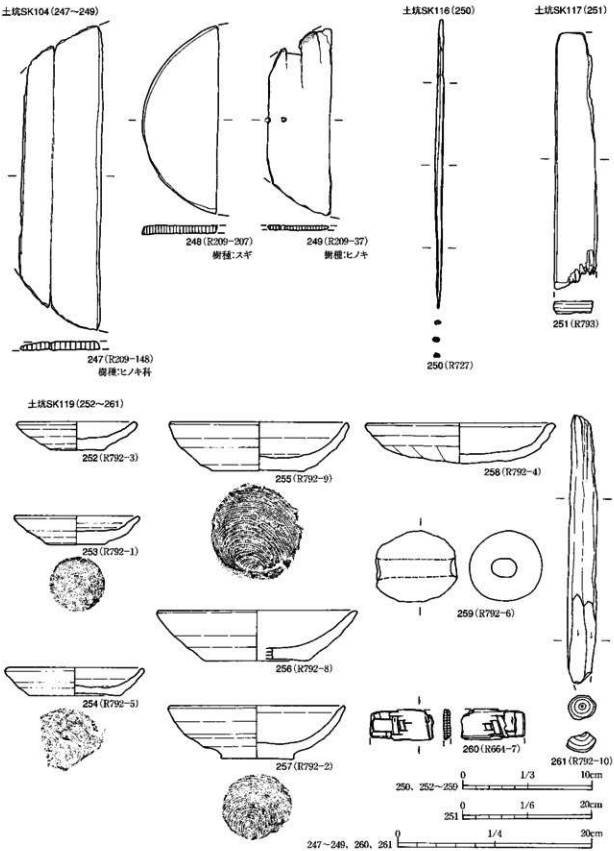
土坑SK104(178～209)



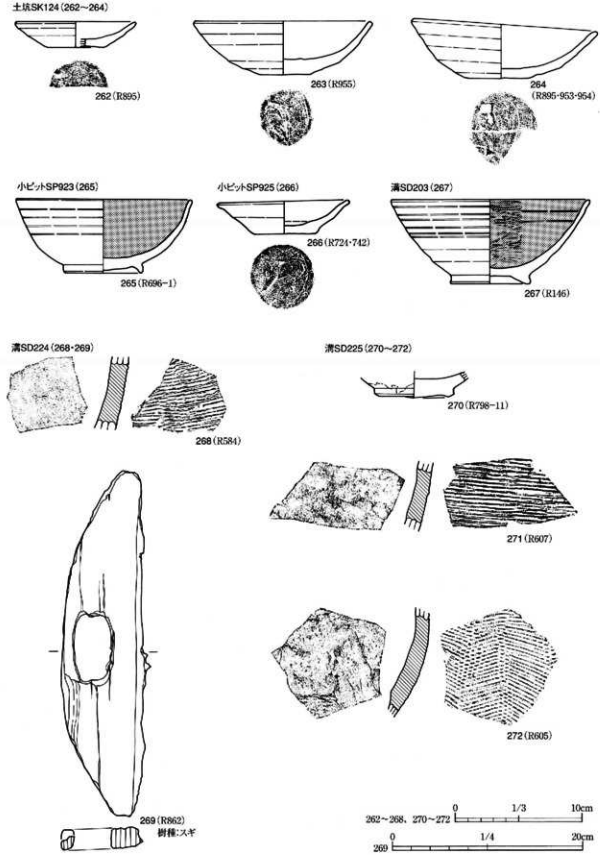
土坑SK104

土坑SK104(210～246)

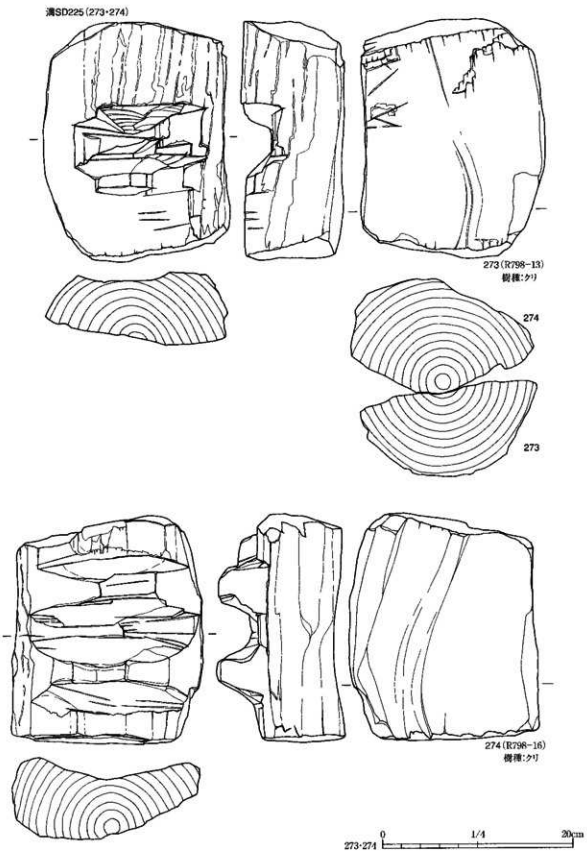




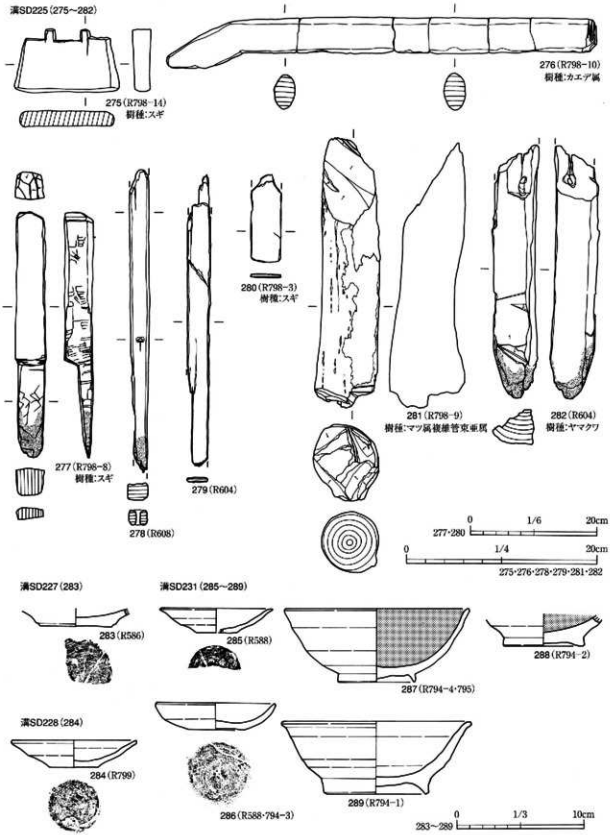
土坑SK104、土坑SK116、土坑SK117、土坑SK119



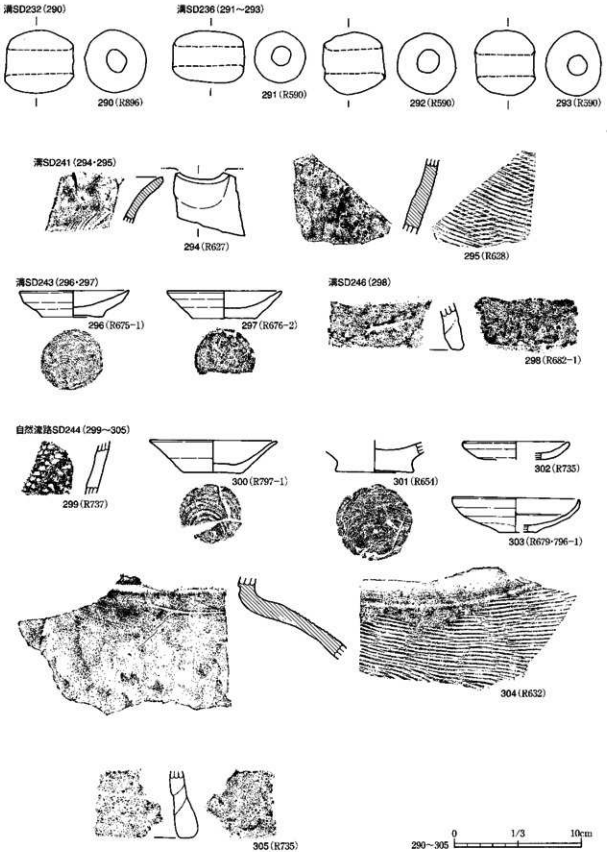
土坑SK124、小ピットSP923、小ピットSP925、小ピットSP203、溝SD224、溝SD225


溝SD225(273・274)
273(R798-13)
樹種:クリ
274
273
274(R798-16)
樹種:クリ
273・274
0
1/4
20cm

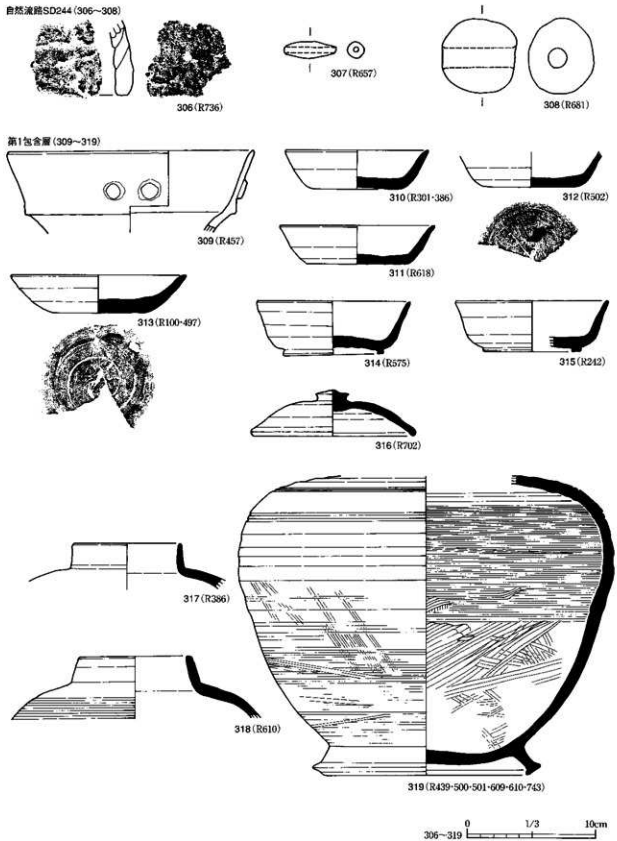
溝SD225



溝SD225、溝SD227、溝228、溝SD231

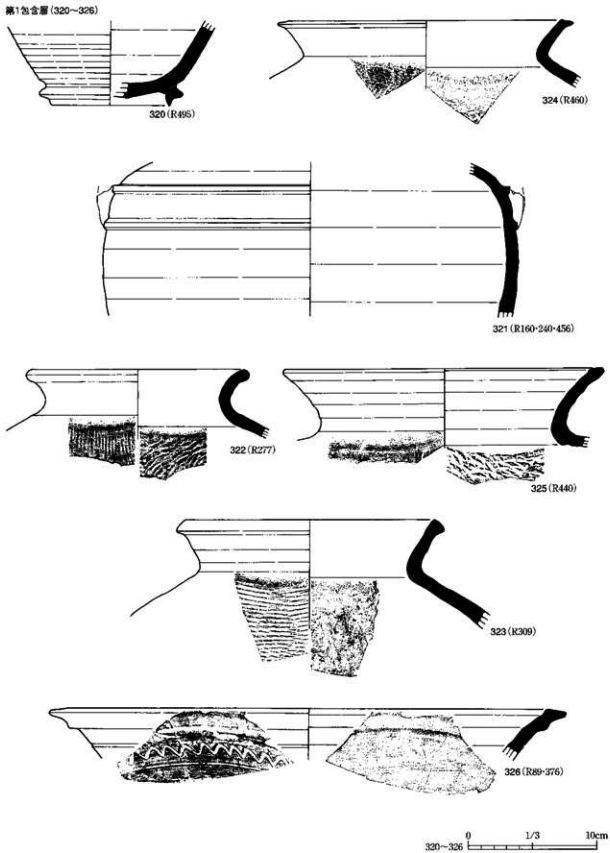


溝SD232、溝SD236、溝SD241、溝SD243、溝SD246、自然流路SD244

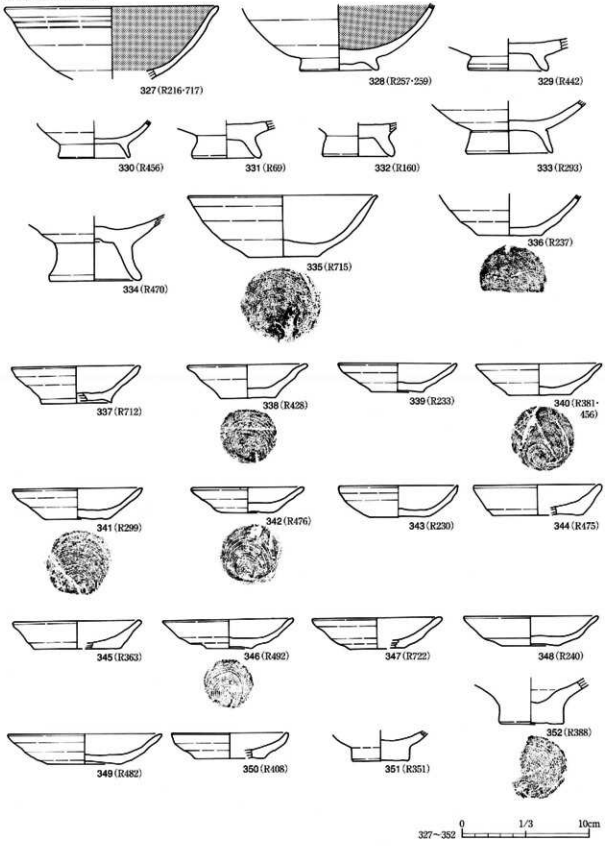


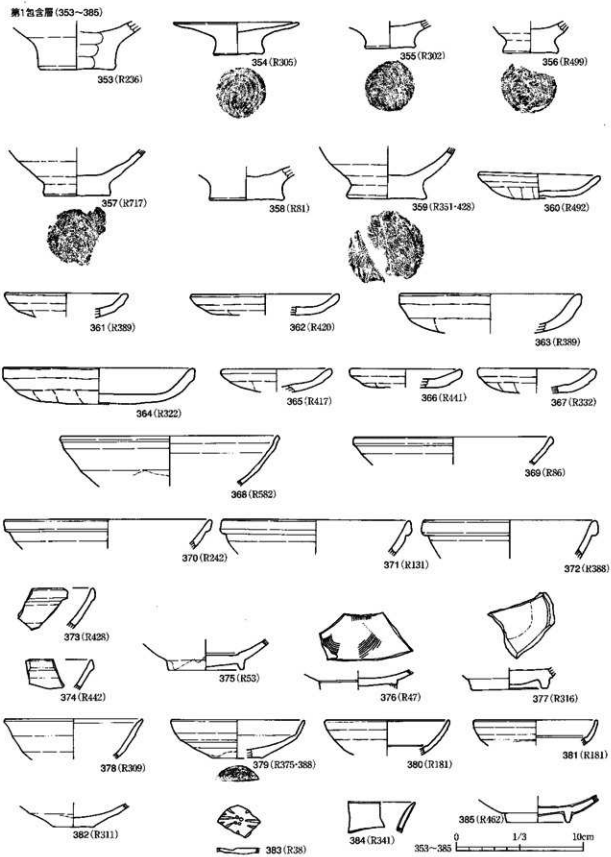
自然流路SD244、第1包含層

図面四五　遺物実測図

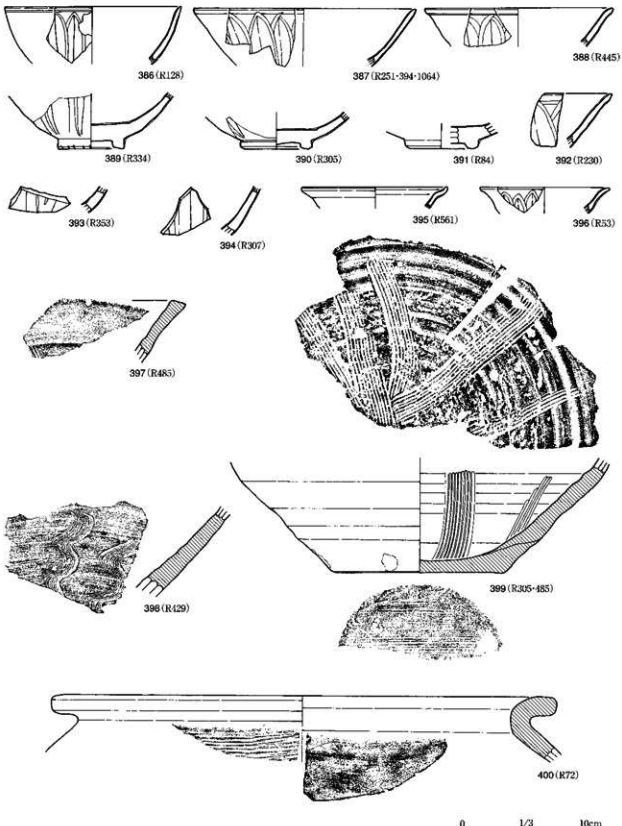

第1包含層(320~326)
320(R495)
324(R460)
321(R160·240·456)
322(R277)
325(R440)
323(R309)
326(R89·376)
320~326
0
1/3
10cm

第1包含層(327～352)

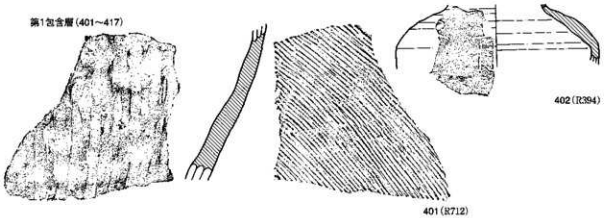


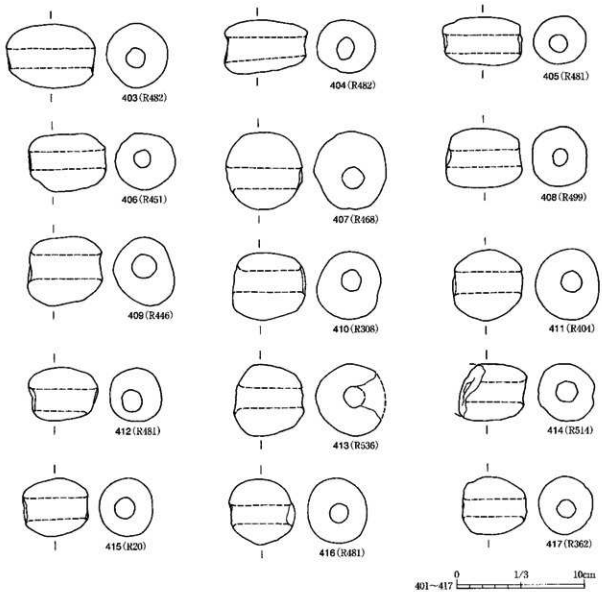

第1包含層(353~385)
353(R236)
354(R305)
355(R302)
356(R499)
357(R717)
358(R81)
359(R351·428)
360(R492)
361(R389)
362(R420)
363(R389)
364(R322)
365(R417)
366(R441)
367(R332)
368(R582)
369(R86)
370(R242)
371(R131)
372(R388)
373(R428)
374(R442)
375(R53)
376(R47)
377(R316)
378(R309)
379(R375·388)
380(R181)
381(R181)
382(R311)
383(R38)
384(R341)
385(R462)
0 1/3 10cm
353~385

第1包含層（386～400）

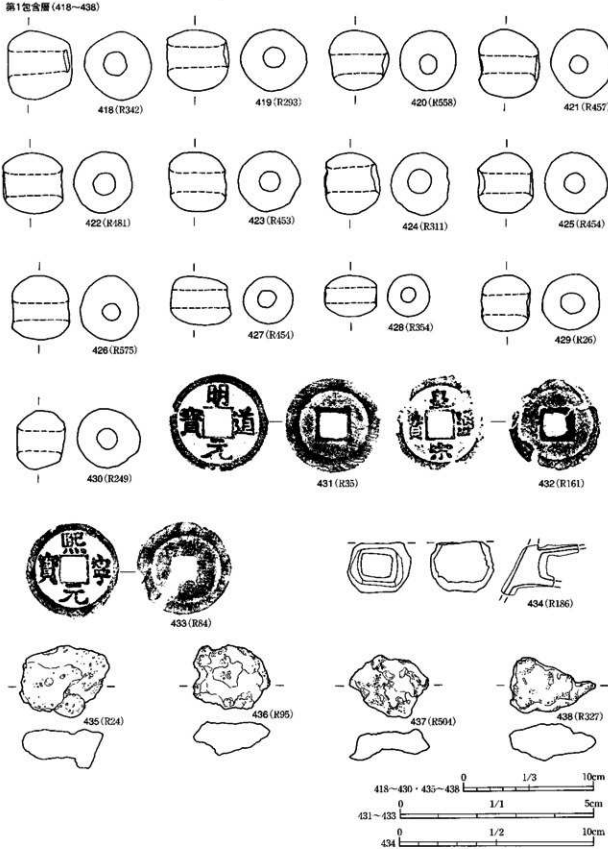


第1包含層(401～417)



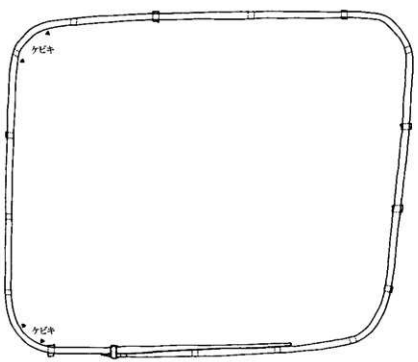


第1包含層（418～438）



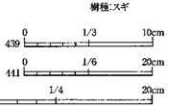
井戸SE501（439〜441）

439（R1052）

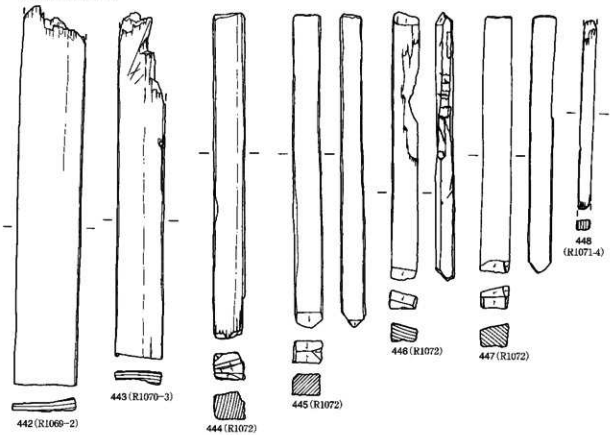


440（R1073）
樹種：カヤ

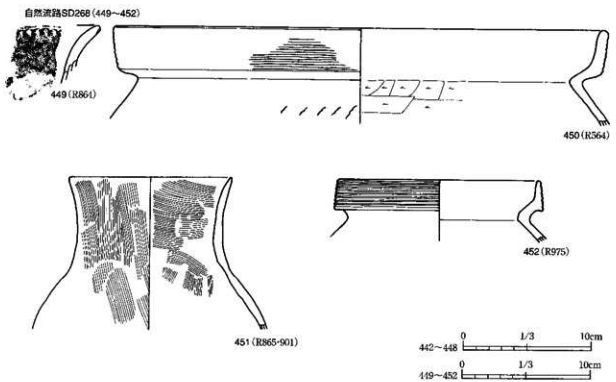
441（R1068−1）
樹種：スギ



井戸SE501（442～448）

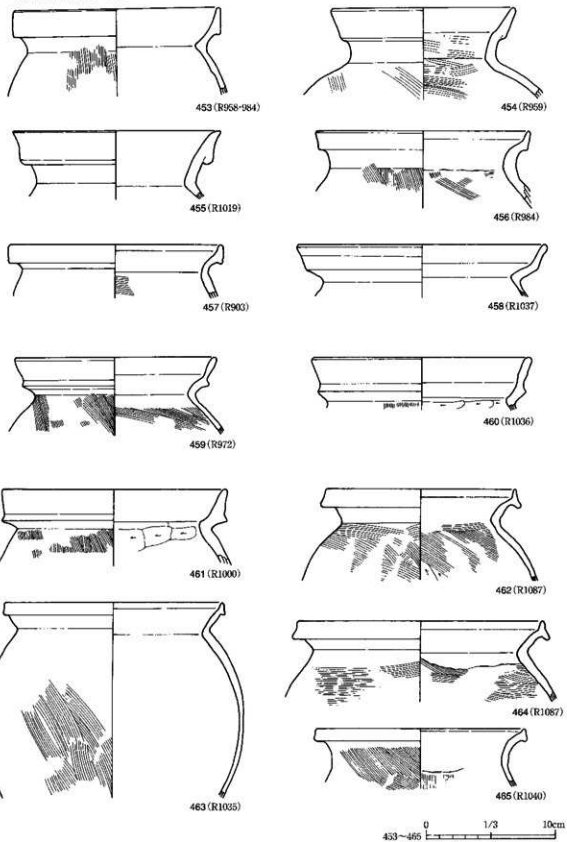


自然流路SD268（449～452）



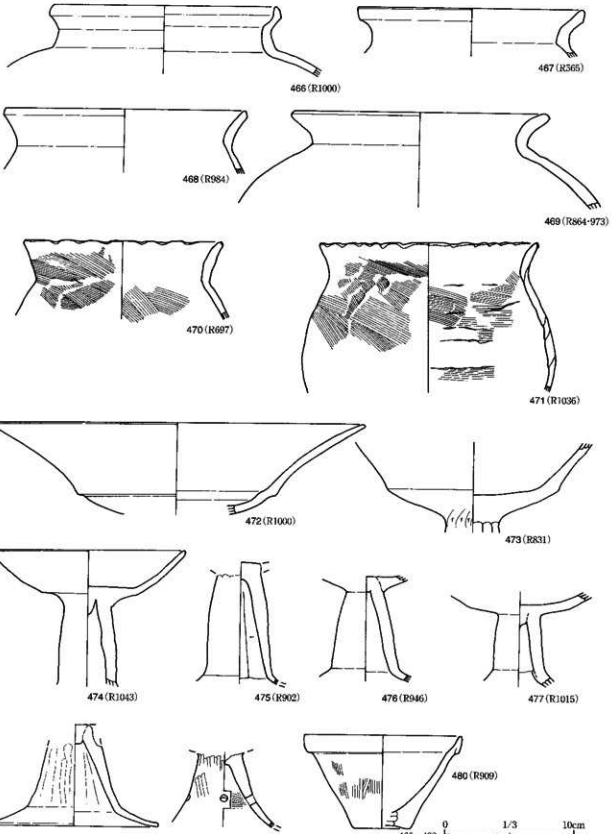
井戸SE501、自然流路SD268

自然流路SD268（453～465）



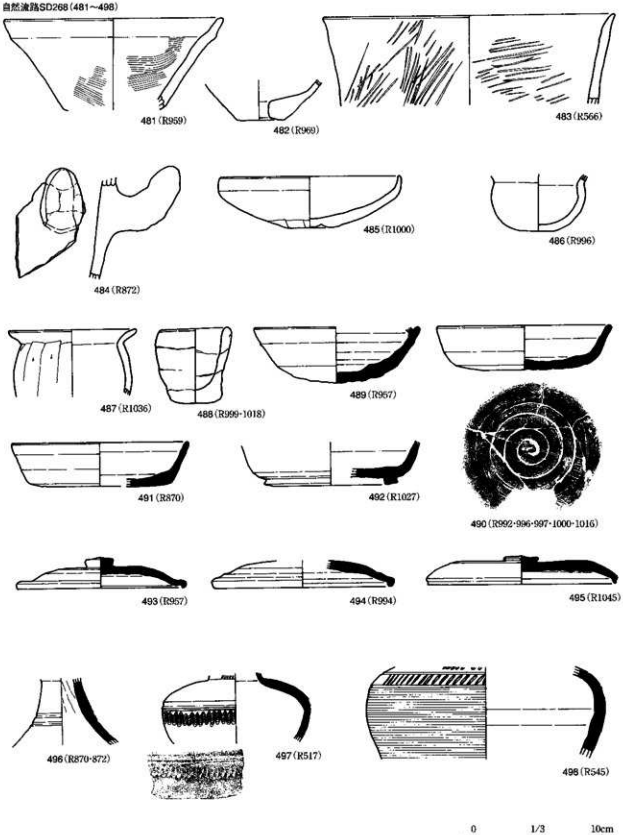
自然流路SD268

自然流路SD268（466～480）

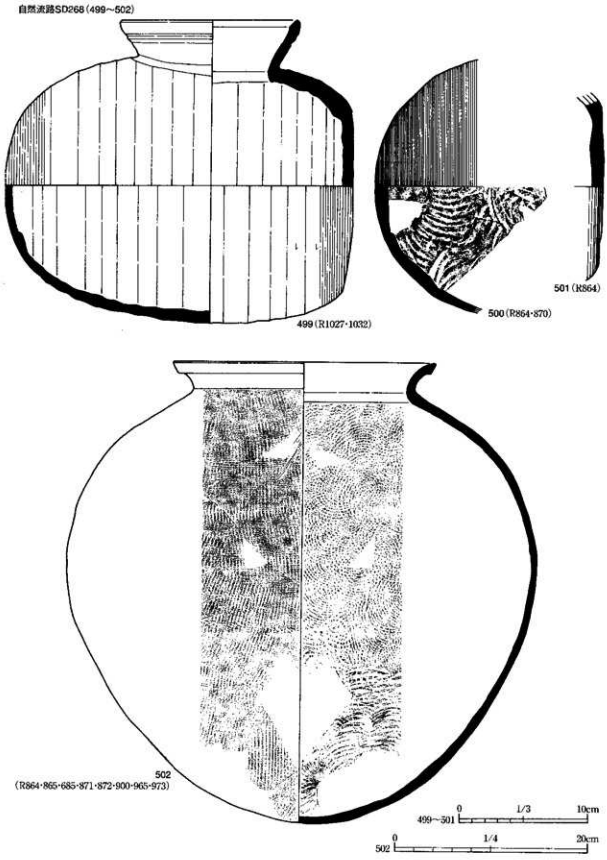


自然流路SD268

自然流路SD268(481～498)

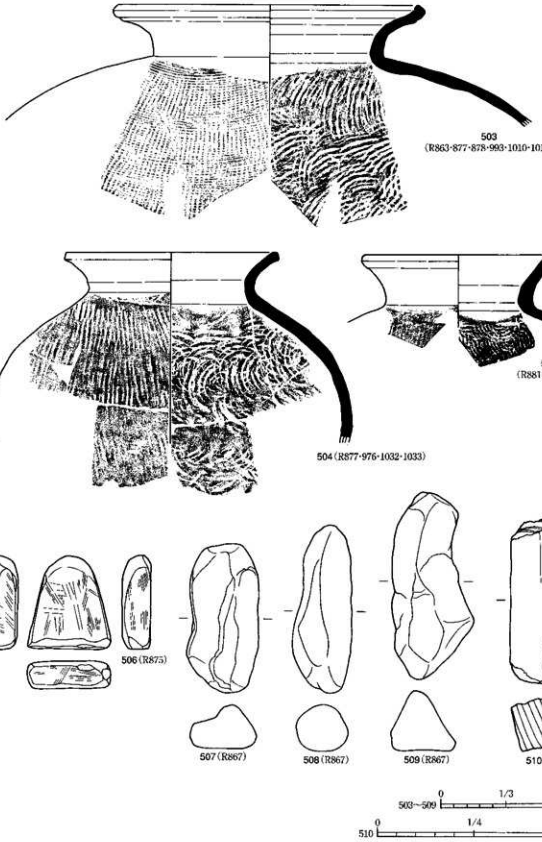


自然流路SD268

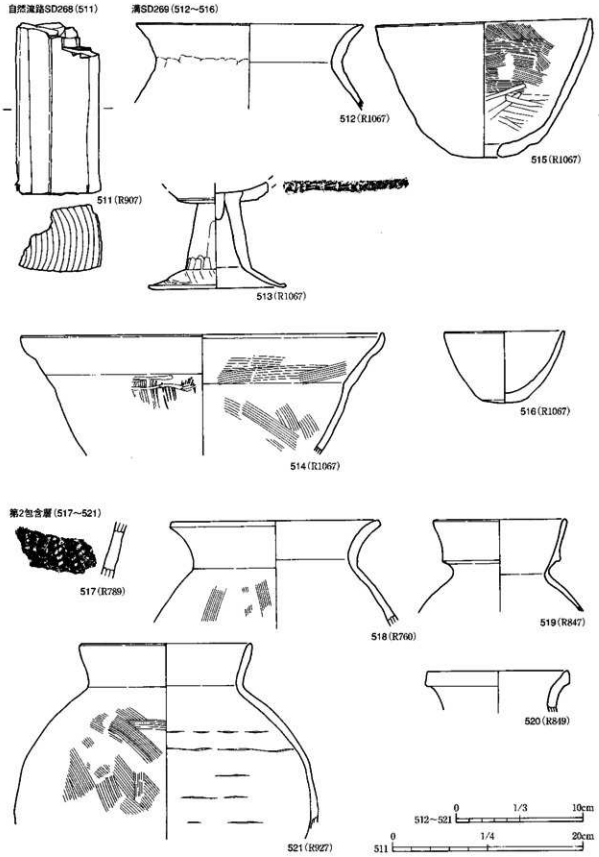

自然流路SD268(499～502)
499(R1027・1032)
500(R864・870)
501(K864)
502
(R864・865・685・871・872・900・965・973)
499～501
0
1/3
10cm
502
0
1/4
20cm

自然流路SD268

自然流路SD268（503～510）

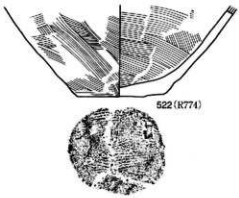


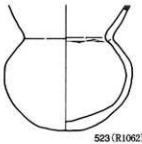
自然流路SD268



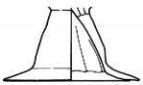
自然流路SD268、溝SD269

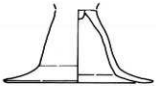
第2包含層(522～538)

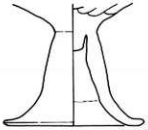

522(R774)

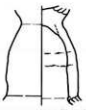

523(R1062)

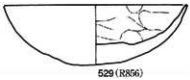
524(R787)

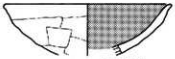

525(R856)


526(R854)


527(R856)


528(R785)


529(R856)


530(R781)

531(R1063)

532(R842)

533(R845)

534(R851)

535(R840)

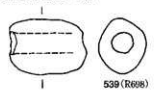
536(R777)

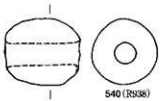
537(R1060)

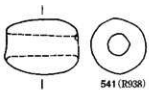
538(R777)

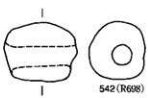
522～538　0　1/3　10cm

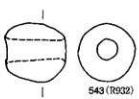
第2包含層（539～546）


539（R698）


540（R938）

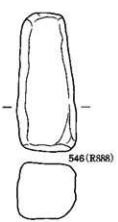

541（R938）


542（R698）


543（R932）

544（R852）

545（R888）


546（R888）

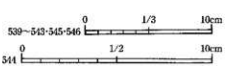
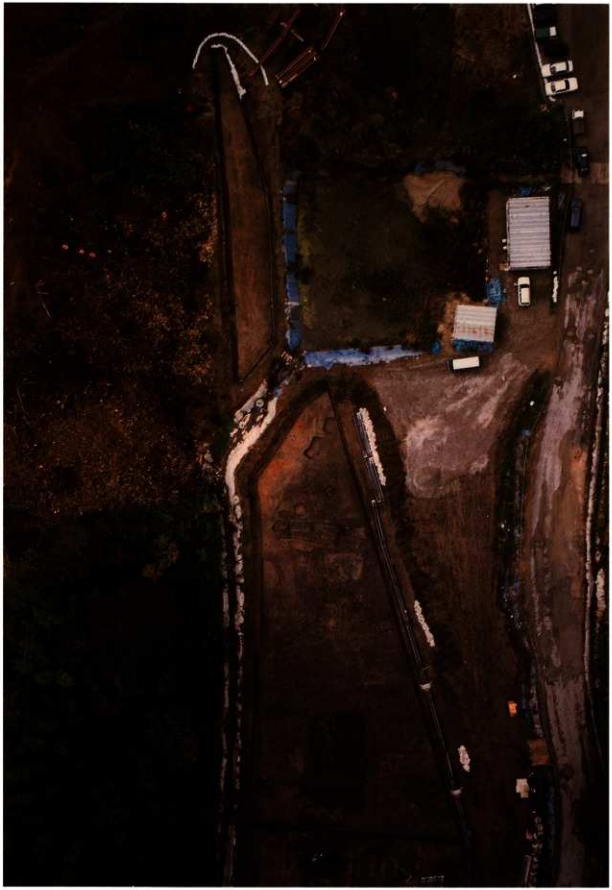


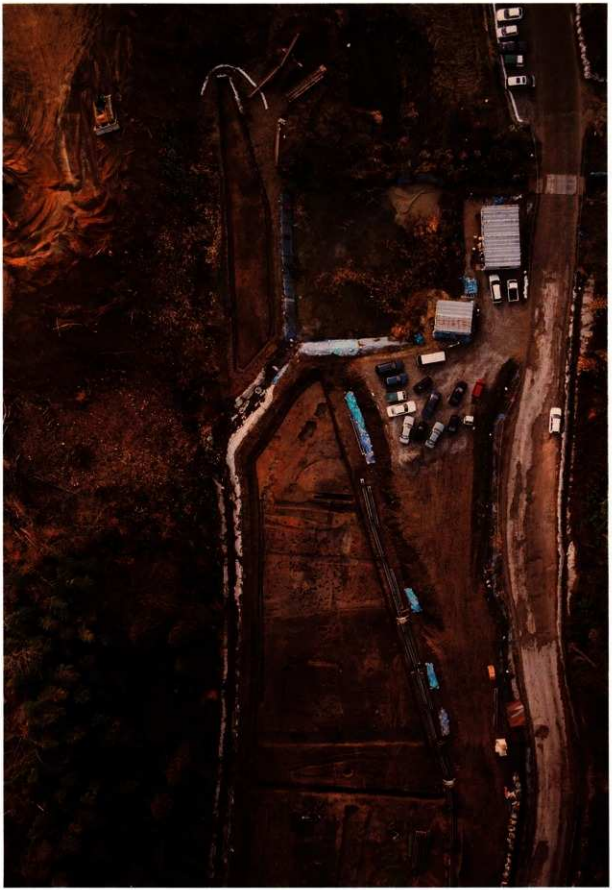
図　　版

1．調査前遺跡遠景（東上空から）

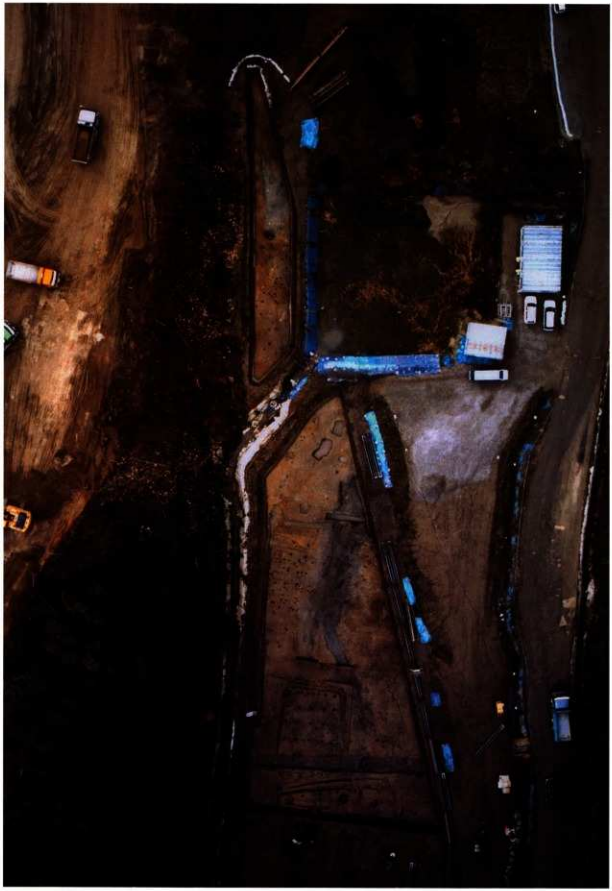
2．調査前遺跡遠景（西上空から）



1．調査区全景／第1面（真上から、図版右が北方向）



1．調査区全景／第２面（真上から、図版右が北方向）



1．調査区全景／第３面（真上から、図版右が北方向）

1．調査区東壁土層断面
（南西から）

2．調査区東壁土層断面
（北西から）

3．調査区東壁土層断面（西から）

1．調査区全景／第１面（東上空から）

2．調査区全景／第１面（西上空から）

1．土坑 SK102 完掘（南から）

2．土坑 SK105 完掘（北から）

3．土坑 SK106 完掘（東から）

1．土坑 SK107 完掘（南から）

2．土坑 SK108 完掘（南から）

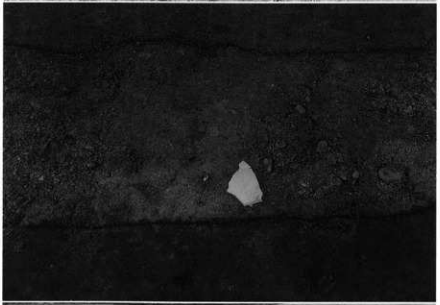
3．土坑 SK109 完掘（西から）

1．小ピットSP906 根固め石
出土状況（北から）

2．小ピットSP906 完掘（北から）

3．小ピットSP907 柱根
出土状況（南から）

1．小ピットSP909 柱根
出土状況（南から）

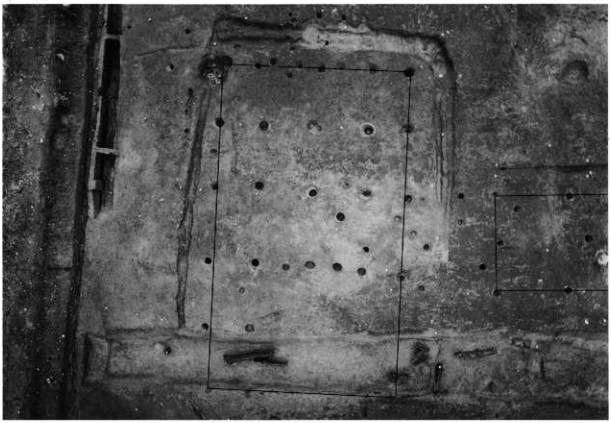


2．溝 SD213-No.1 遺物出土状況
（南から）

3．道路SF701 完掘（北から）

1．調査区全景／第２面（東上空から）

2．調査区全景／第２面（西上空から）

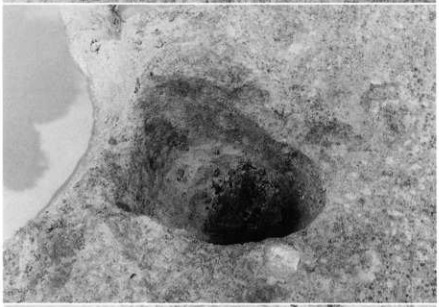


1．掘立柱建物 SB401・402、溝 SD243・246 付近全景（真上から、図版右が北方向）

2．掘立柱建物 SB403・404 付近全景（北から）

1．掘立柱建物 SB403・404・406・407 付近全景（真上から、図版右が北方向）

1．掘立柱建物 SB403-P7 柱根
出土状況（南から）



2．掘立柱建物 SB403-P8 柱根
出土状況（北から）

3．掘立柱建物 SB403-P12 柱根
出土状況（北から）

1．掘立柱建物 SB404-P7 礎盤
出土状況（南から）

2．掘立柱建物 SB404-P8 礎盤
出土状況（西から）

3．掘立柱建物 SB404-P9 土師
出土状況（東から）

1．掘立柱建物 SB404-P12 礎盤出土状況（東から）

2．掘立柱建物 SB404-P15 礎盤出土状況（東から）

3．掘立柱建物 SB404-P16 礎盤出土状況（北から）

1．掘立柱建物 SB406・407 全景（南から）

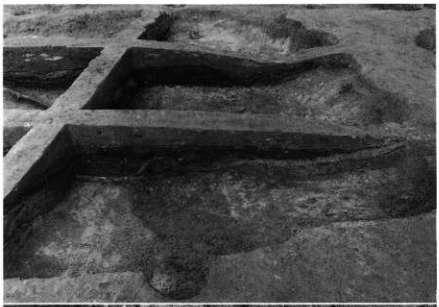
2．土坑 SK101 完掘（南から）

3．土坑 SK103 完掘（東から）

1．土坑 SK104 完掘（北から）

2．土坑 SK104 第３・４層
検出状況（北から）

3．土坑 SK104 土層断面（東から）



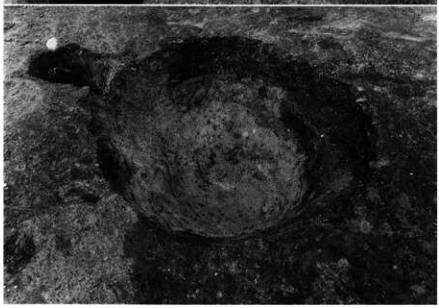
1．土坑 SK104 土層断面
（東から）

2．土坑 SK104 箸状木製品
出土状況

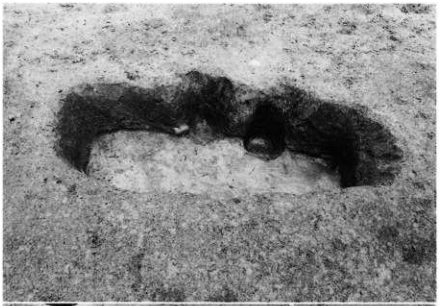
3．土坑 SK104 箸状木製品
出土状況

1．土坑 SK110 完掘（西から）

2．土坑 SK113 完掘（南から）

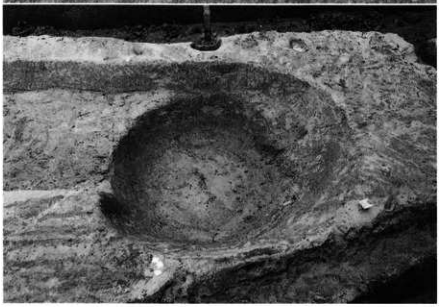


3．土坑 SK114 完掘（南から）



1．土坑 SK115 完掘（東から）

2．土坑 SK116 全景（南東から）

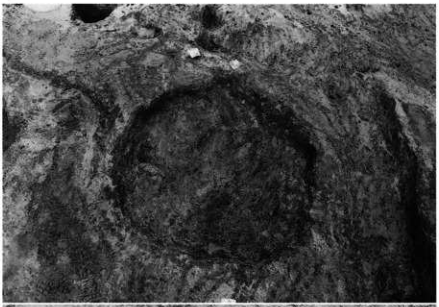


3．土坑 SK117 完掘（西から）

1．土坑 SK118 完掘（北から）

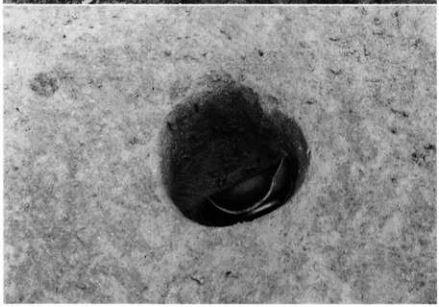
2．土坑 SK119 全景（南東から）

3．土坑 SK121 完掘（西から）



1．土坑 SK122 完掘（西から）

2．土坑 SK123 完掘（北東から）



3．小ピット SP923 全景（北から）

1．溝 SD203 完掘（南から）

2．溝 SD223 完掘（南から）

3．溝 SD224 完掘（南から）

1．溝 SD225 全景（南から）

2．溝 SD225 遺物出土状況
（南東から）

3．溝 SD225 Qセクション
土層断面（南から）

1．溝 SD231 全景（西から）

2．溝 SD231 遺物出土状況（北から）

3．溝 SD234 完掘（北から）

1．溝 SD236 土層断面（西から）

2．溝 SD241 全景（東から）

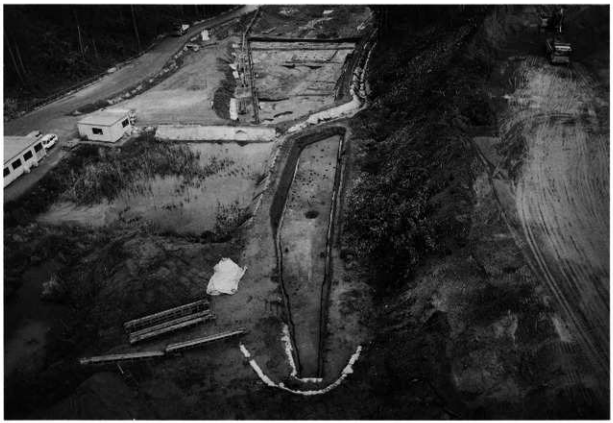
3．溝 SD243・246 遺物出土状況

1．溝 SD247 完掘（西から）

2．溝 SD259・265 付近全景（南から）

3．自然流路 SD244 全景（北西から）

1．調査区全景／第３面（東上空から）



2．調査区全景／第３面（西上空から）

1．井戸 SE501 全景（北から）

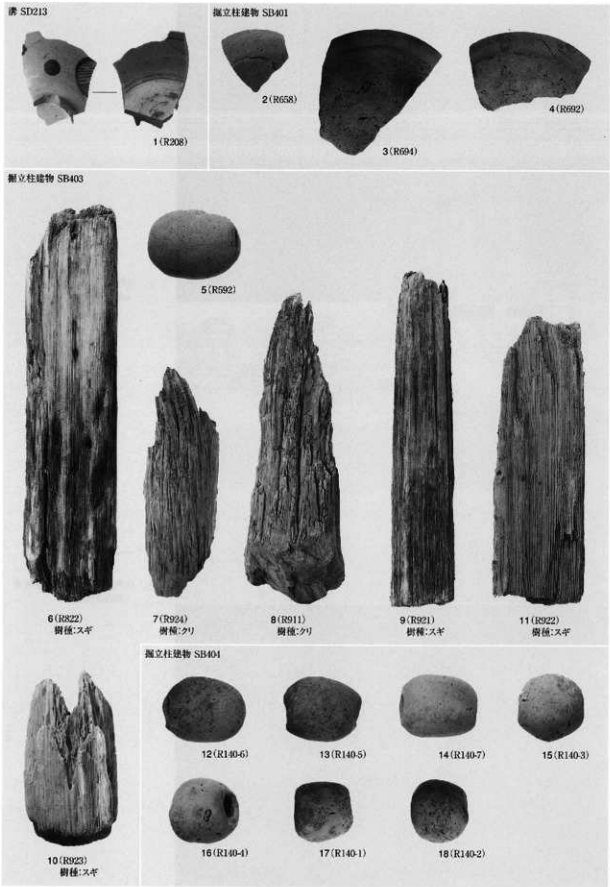
2．井戸 SE501 水溜検出状況（北から）

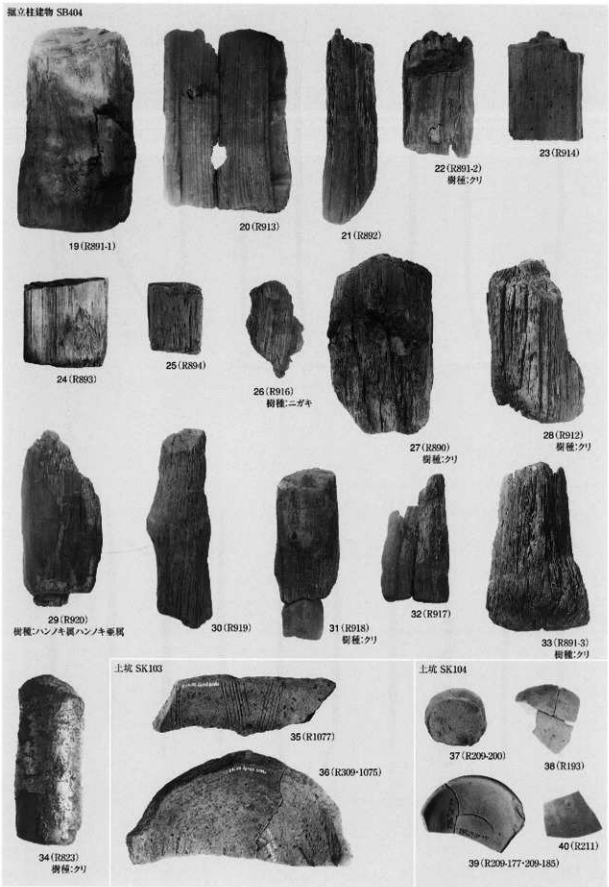
3．土坑 SK125 完掘（北から）

1．自然流路 SD268 全景
（北西から）

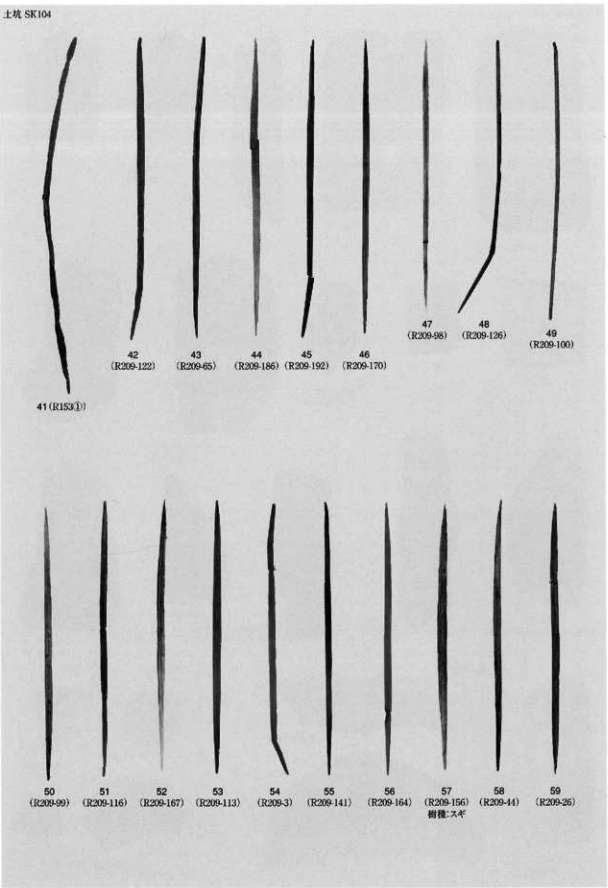
2．自然流路 SD268 土層断面
（南西から）

3．溝 SD269 完掘（南から）

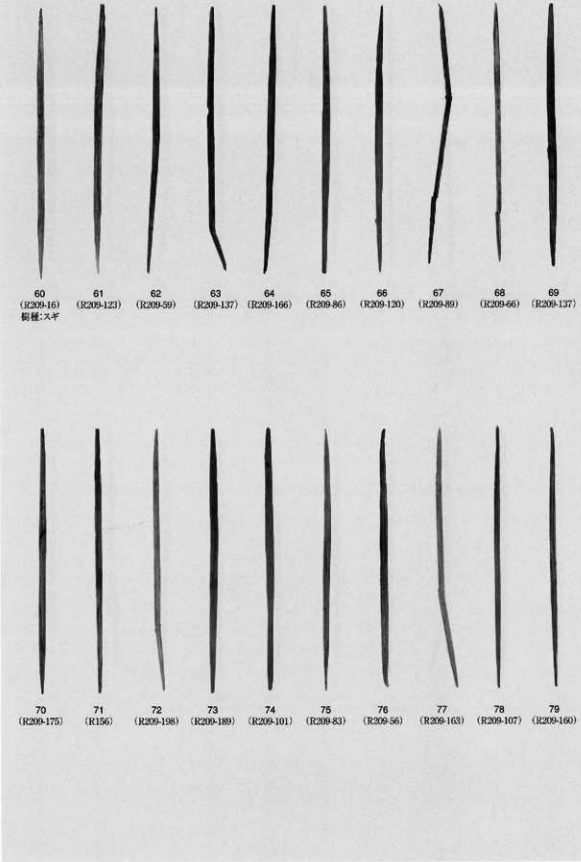

溝 SD213
1(R208)
掘立柱建物 SB401
2(R658)
3(R694)
4(R692)
掘立柱建物 SB403
5(R592)
6(R822)
樹種:スギ
7(R924)
樹種:クリ
8(R911)
樹種:クリ
9(R921)
樹種:スギ
11(R922)
樹種:スギ
掘立柱建物 SB404
10(R923)
樹種:スギ
12(R140-6)
13(R140-5)
14(R140-7)
15(R140-3)
16(R140-4)
17(R140-1)
18(R140-2)


掘立柱建物 SB404
19(R891-1)
20(R913)
21(R892)
22(R891-2)
樹種:クリ
23(R914)
24(R893)
25(R894)
26(R916)
樹種:ニガキ
27(R890)
樹種:クリ
28(R912)
樹種:クリ
29(R920)
樹種:ハンノキ属ハンノキ亜属
30(R919)
31(R918)
樹種:クリ
32(R917)
33(R891-3)
樹種:クリ
34(R823)
樹種:クリ
土坑 SK103
35(R1077)
36(R309-1075)
土坑 SK104
37(R209-200)
38(R193)
40(R211)
39(R209-177・209-185)

土坑 SK104

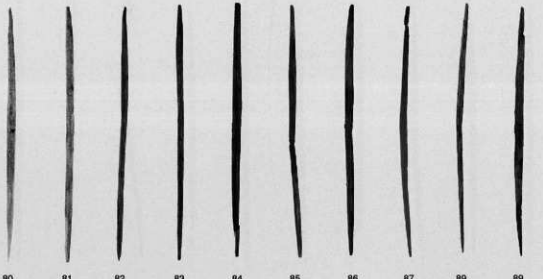

41 (R153①)
42 (R209-122)
43 (R209-65)
44 (R209-186)
45 (R209-192)
46 (R209-170)
47 (R209-98)
48 (R209-126)
49 (R209-100)
50 (R209-99)
51 (R209-116)
52 (R209-167)
53 (R209-113)
54 (R209-3)
55 (R209-141)
56 (R209-164)
57 (R209-156) 樹種:スギ
58 (R209-44)
59 (R209-26)

土坑 SK104

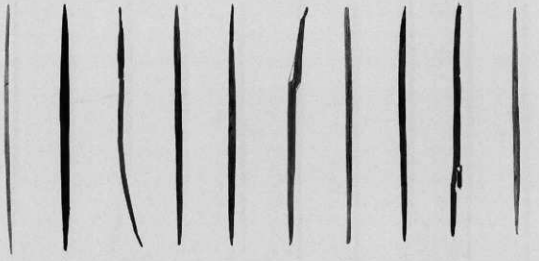


60 (R209-16) 樹種:スギ
61 (R209-123)
62 (R209-59)
63 (R209-137)
64 (R209-166)
65 (R209-86)
66 (R209-120)
67 (R209-89)
68 (R209-66)
69 (R209-137)
70 (R209-175)
71 (R156)
72 (R209-198)
73 (R209-189)
74 (R209-101)
75 (R209-83)
76 (R209-56)
77 (R209-163)
78 (R209-107)
79 (R209-160)

土坑 SK104

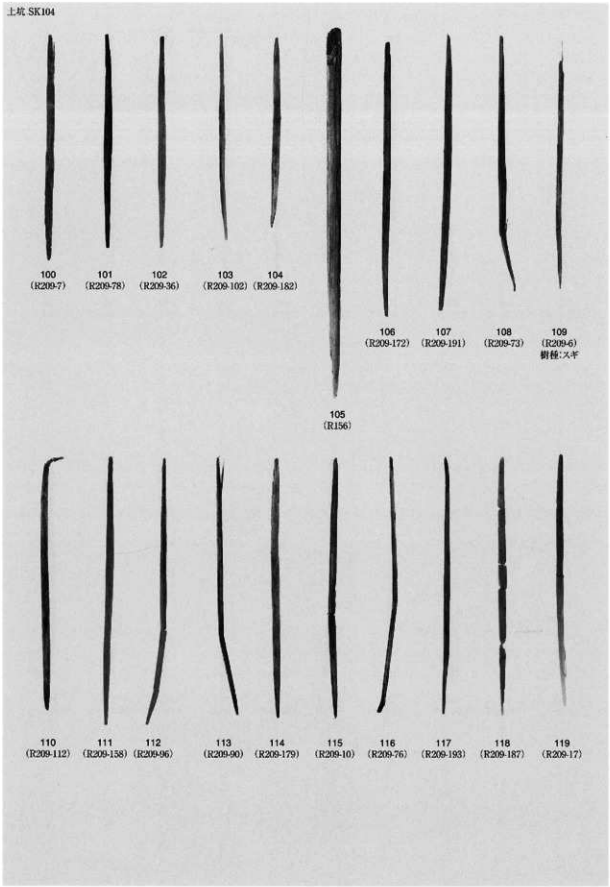


80 (R209-45)　81 (R209-169)　82 (R209-110)　83 (R209-60)　84 (R209-29)　85 (R209-46)　86 (R209-127)　87 (R209-34)　89 (R209-25)　89 (R209-13)

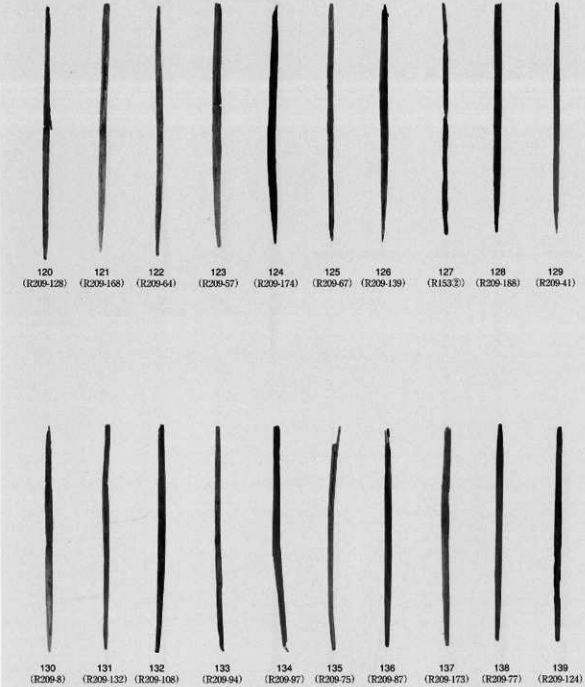


90 (R209-91)　91 (R209-162)　92 (R155-1)　93 (R209-58)　94 (R209-81)　95 (R209-111)　96 (R209-33)　97 (R209-74)　98 (R209-109)　99 (R209-118)

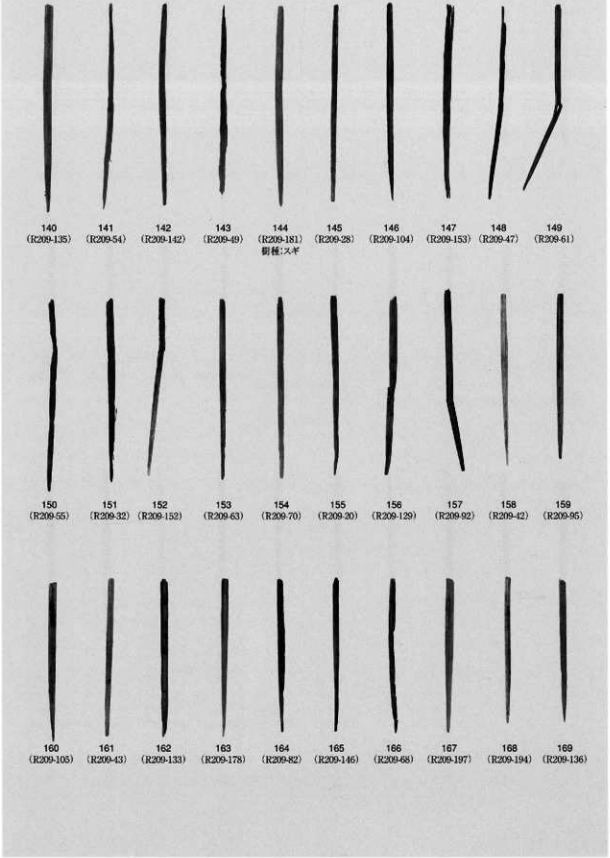
上坑 SK104


100 (R209-7)
101 (R209-78)
102 (R209-36)
103 (R209-102)
104 (R209-182)
105 (R156)
106 (R209-172)
107 (R209-191)
108 (R209-73)
109 (R209-6) 樹種:スギ
110 (R209-112)
111 (R209-158)
112 (R209-96)
113 (R209-90)
114 (R209-179)
115 (R209-10)
116 (R209-76)
117 (R209-193)
118 (R209-187)
119 (R209-17)

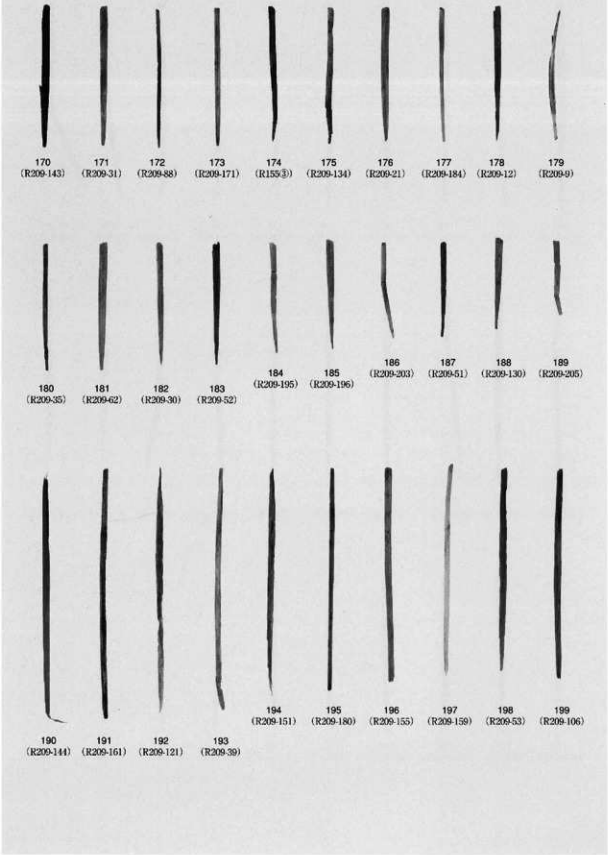
土坑 SK104


120 (R209-128)
121 (R209-168)
122 (R209-64)
123 (R209-57)
124 (R209-174)
125 (R209-67)
126 (R209-139)
127 (R153②)
128 (R209-188)
129 (R209-41)
130 (R209-8)
131 (R209-132)
132 (R209-108)
133 (R209-94)
134 (R209-97)
135 (R209-75)
136 (R209-87)
137 (R209-173)
138 (R209-77)
139 (R209-124)

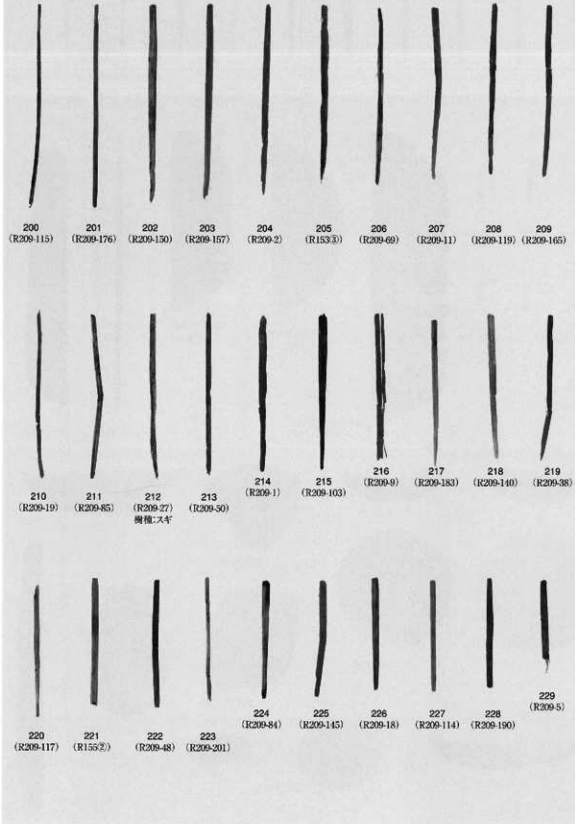
土坑 SK104

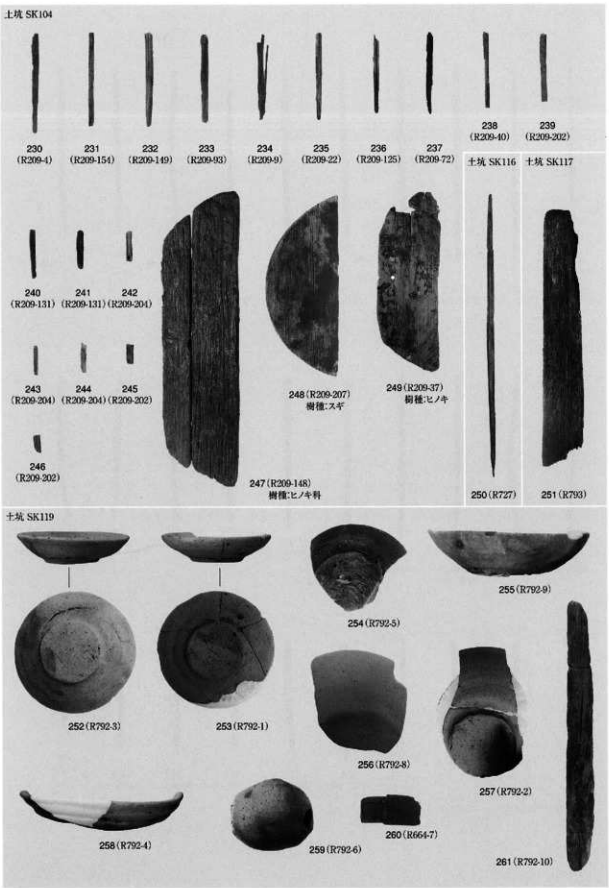

140 (R209-135)
141 (R209-54)
142 (R209-142)
143 (R209-49)
144 (R209-181) 樹種:スギ
145 (R209-28)
146 (R209-104)
147 (R209-153)
148 (R209-47)
149 (R209-61)
150 (R209-55)
151 (R209-32)
152 (R209-152)
153 (R209-63)
154 (R209-70)
155 (R209-20)
156 (R209-129)
157 (R209-92)
158 (R209-42)
159 (R209-95)
160 (R209-105)
161 (R209-43)
162 (R209-133)
163 (R209-178)
164 (R209-82)
165 (R209-146)
166 (R209-68)
167 (R209-197)
168 (R209-194)
169 (R209-136)

土坑 SK104


170 (R209-143)
171 (R209-31)
172 (R209-88)
173 (R209-171)
174 (R155③)
175 (R209-134)
176 (R209-21)
177 (R209-184)
178 (R209-12)
179 (R209-9)
180 (R209-35)
181 (R209-62)
182 (R209-30)
183 (R209-52)
184 (R209-195)
185 (R209-196)
186 (R209-203)
187 (R209-51)
188 (R209-130)
189 (R209-205)
190 (R209-144)
191 (R209-161)
192 (R209-121)
193 (R209-39)
194 (R209-151)
195 (R209-180)
196 (R209-155)
197 (R209-159)
198 (R209-53)
199 (R209-106)

土坑 SK104


200 (R209-115)
201 (R209-176)
202 (R209-150)
203 (R209-157)
204 (R209-2)
205 (R153③)
206 (R209-69)
207 (R209-11)
208 (R209-119)
209 (R209-165)
210 (R209-19)
211 (R209-85)
212 (R209-27) 樹種:スギ
213 (R209-50)
214 (R209-1)
215 (R209-103)
216 (R209-9)
217 (R209-183)
218 (R209-140)
219 (R209-38)
220 (R209-117)
221 (R155②)
222 (R209-48)
223 (R209-201)
224 (R209-84)
225 (R209-145)
226 (R209-18)
227 (R209-114)
228 (R209-190)
229 (R209-5)


土坑 SK104
230 (R209-4)
231 (R209-154)
232 (R209-149)
233 (R209-93)
234 (R209-9)
235 (R209-22)
236 (R209-125)
237 (R209-72)
238 (R209-40)
239 (R209-202)
土坑 SK116
土坑 SK117
240 (R209-131)
241 (R209-131)
242 (R209-204)
243 (R209-204)
244 (R209-204)
245 (R209-202)
246 (R209-202)
247 (R209-148) 樹種:ヒノキ科
248 (R209-207) 樹種:スギ
249 (R209-37) 樹種:ヒノキ
250 (R727)
251 (R793)
土坑 SK119
252 (R792-3)
253 (R792-1)
254 (R792-5)
255 (R792-9)
256 (R792-8)
257 (R792-2)
258 (R792-4)
259 (R792-6)
260 (R664-7)
261 (R792-10)

土坑 SK124

262（R895）

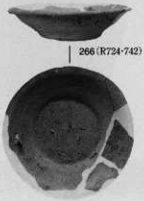
263（R955）

264（R895·953·954）

小ピット SP923

265（R696-1）

小ピット SP925



266（R724·742）

溝 SD203

267（R146）

溝 SD224

268（R584）

269（R862）
樹種：スギ

溝 SD225

270（R798-11）

271（R607）

272（R605）

273（R798-13）
樹種：クリ

溝 SD225

274(R798-16)
樹種:クリ

275(R798-14)
樹種:スギ

276(R798-10)
樹種:カエデ属

277(R798-8)
樹種:スギ

278(R608)

279(R604)

280(R798-3)
樹種:スギ

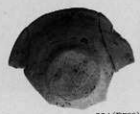
281(R798-9)
樹種:マツ属複維管束亜属

282(R604)
樹種:ヤマグワ

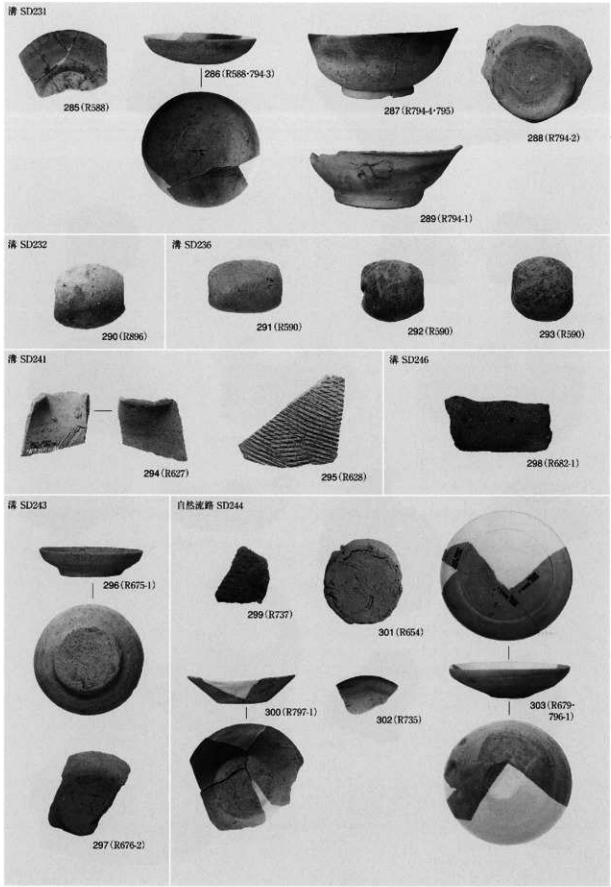
溝 SD227

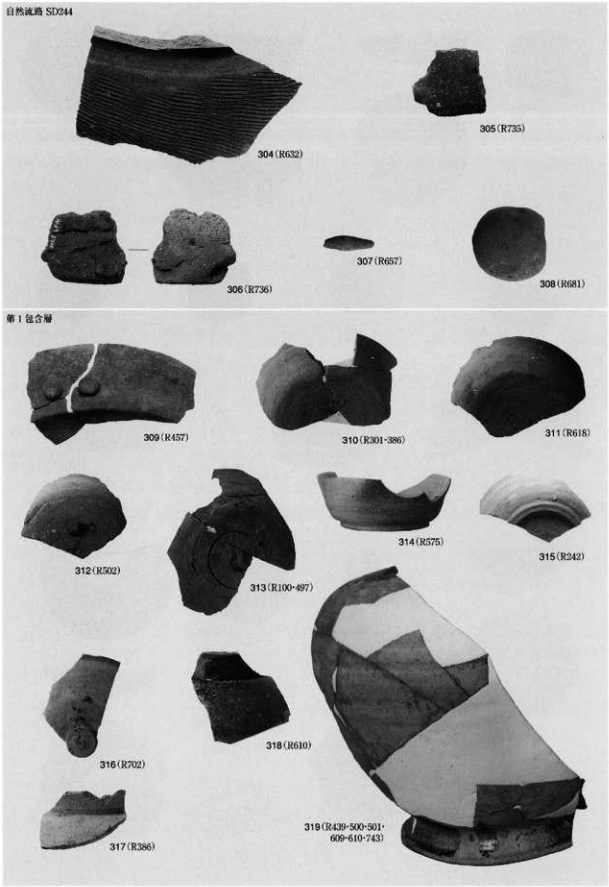
283(R586)

溝 SD228

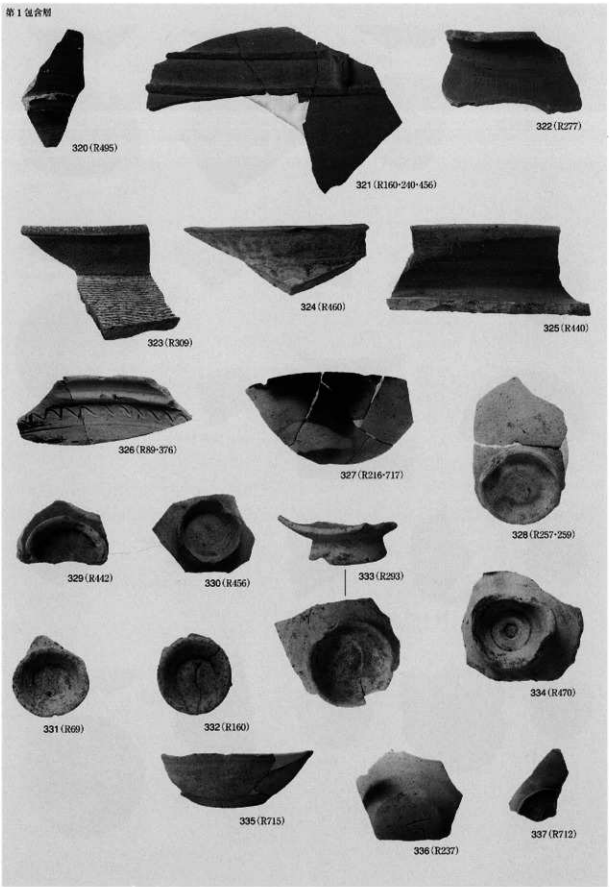


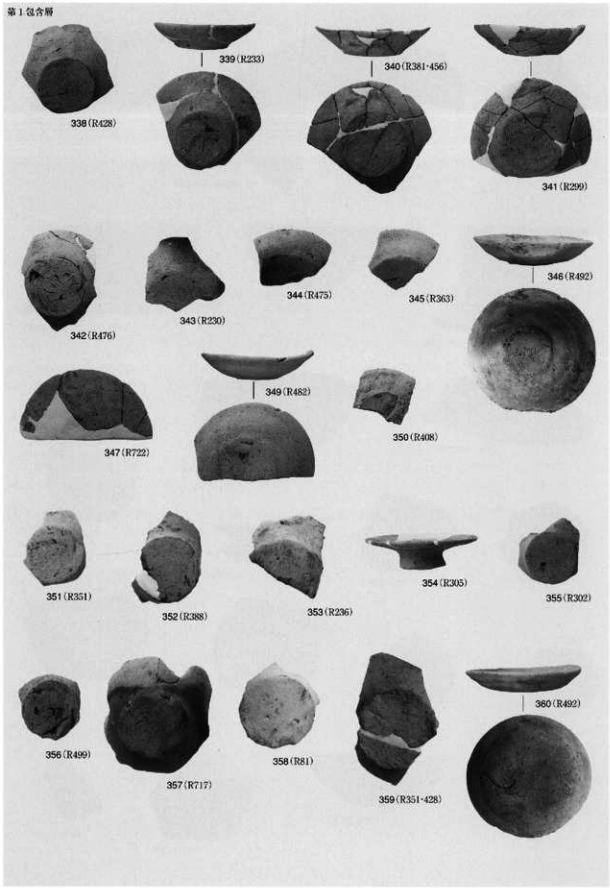
284(R799)

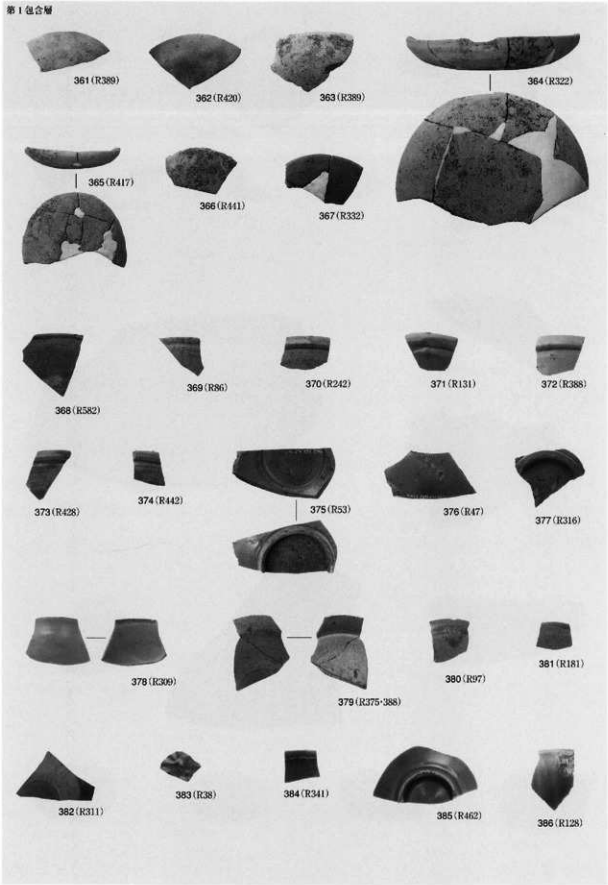

溝 SD231
285(R588)
286(R588・794-3)
287(R794-4・795)
288(R794-2)
289(R794-1)
溝 SD232
290(R896)
溝 SD236
291(R590)
292(R590)
293(R590)
溝 SD241
294(R627)
295(R628)
溝 SD246
298(R682-1)
溝 SD243
296(R675-1)
297(R676-2)
自然流路 SD244
299(R737)
300(R797-1)
301(R654)
302(R735)
303(R679-796-1)

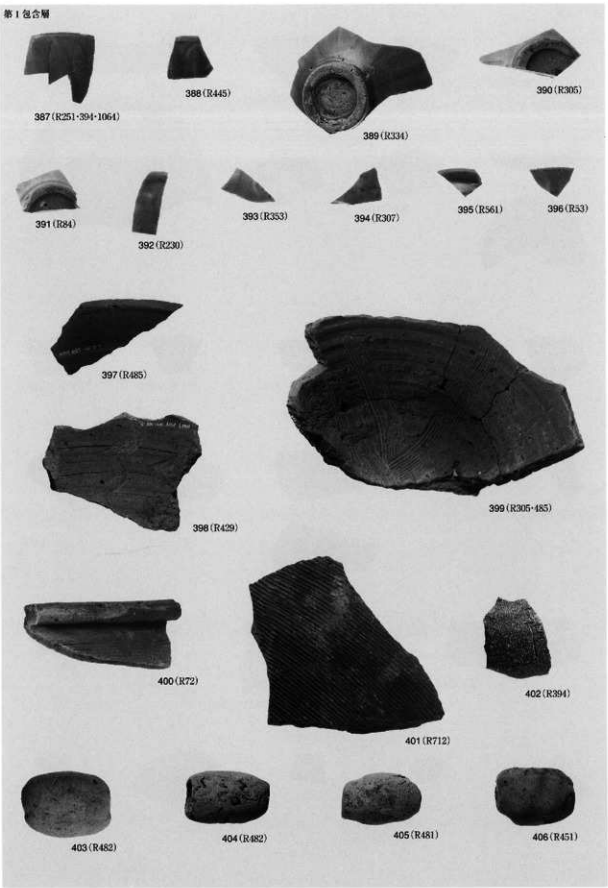

自然流路 SD244
304(R632)
305(R735)
306(R736)
307(R657)
308(R681)
第1包含層
309(R457)
310(R301・386)
311(R618)
312(R502)
313(R100・497)
314(R575)
315(R242)
316(R702)
317(R386)
318(R610)
319(R439・500・501・
609・610・743)

第1包含層

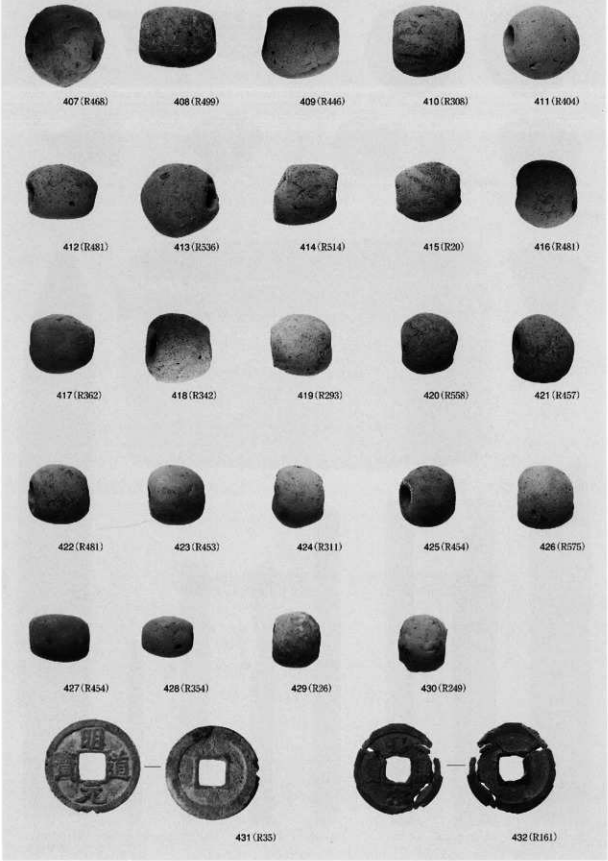

320(R495)
321(R160·240·456)
322(R277)
323(R309)
324(R460)
325(R440)
326(R89·376)
327(R216·717)
328(R257·259)
329(R442)
330(R456)
333(R293)
331(R69)
332(R160)
334(R470)
335(R715)
336(R237)
337(R712)


第1包含層
338(R428)
339(R233)
340(R381・456)
341(R299)
342(R476)
343(R230)
344(R475)
345(R363)
346(R492)
347(R722)
349(R482)
350(R408)
351(R351)
352(R388)
353(R236)
354(R305)
355(R302)
356(R499)
357(R717)
358(R81)
359(R351・428)
360(R492)


第1包含層
361(R389)
362(R420)
363(R389)
364(R322)
365(R417)
366(R441)
367(R332)
368(R582)
369(R86)
370(R242)
371(R131)
372(R388)
373(R428)
374(R442)
375(R53)
376(R47)
377(R316)
378(R309)
379(R375·388)
380(R97)
381(R181)
382(R311)
383(R38)
384(R341)
385(R462)
386(R128)


第Ⅰ包含層
387（R251・394・1064）
388（R445）
389（R334）
390（R305）
391（R84）
392（R230）
393（R353）
394（R307）
395（R561）
396（R53）
397（R485）
398（R429）
399（R305・485）
400（R72）
401（R712）
402（R394）
403（R482）
404（R482）
405（R481）
406（R451）

第1包含層


407(R468)
408(R499)
409(R446)
410(R308)
411(R404)
412(R481)
413(R536)
414(R514)
415(R20)
416(R481)
417(R362)
418(R342)
419(R293)
420(R558)
421(R457)
422(R481)
423(R453)
424(R311)
425(R454)
426(R575)
427(R454)
428(R354)
429(R26)
430(R249)
431(R35)
432(R161)

第1包含層

433(R84)

434(R186)

435(R24)

436(R95)

437(R504)

438(R327)

井戸 SE501

439(R1052)

440(R1073)
樹種:カヤ

441(R1068-1)
樹種:スギ

442(R1069-2)

443(R1073-3)

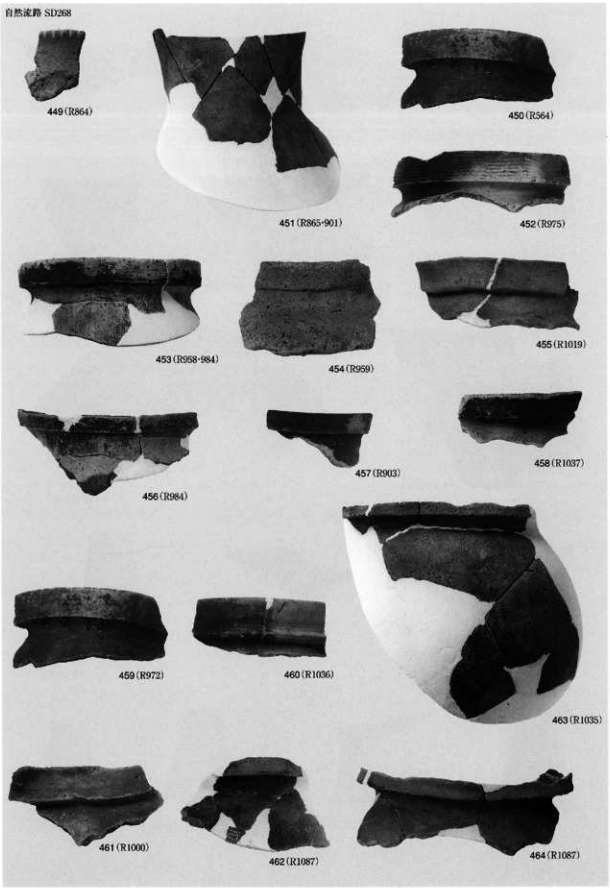
444(R1072)

445(R1072)

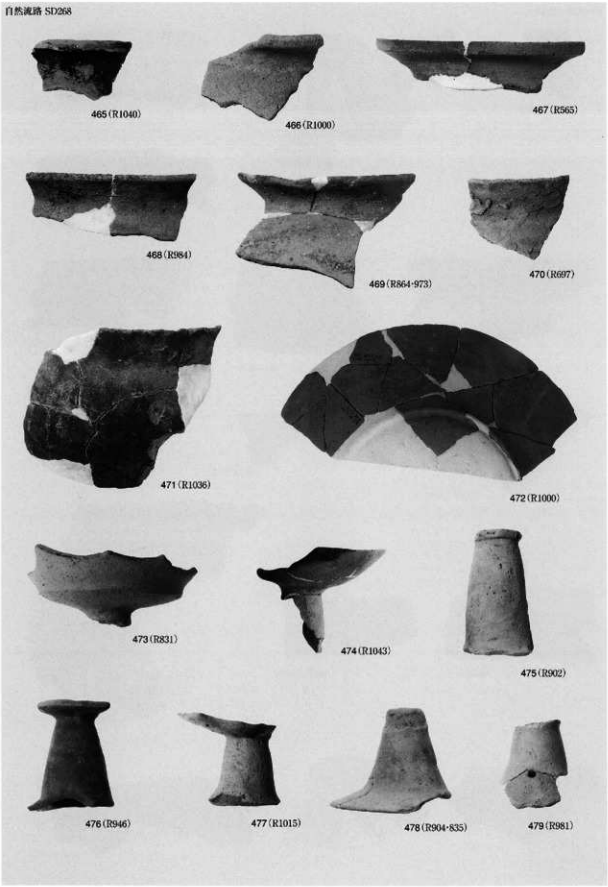
446(R1072)

447(R1072)

448(R1071-4)


自然流路 SD268
449(R864)
451(R865・901)
450(R564)
452(R975)
453(R958・984)
454(R959)
455(R1019)
456(R984)
457(R903)
458(R1037)
459(R972)
460(R1036)
463(R1035)
461(R1000)
462(R1087)
464(R1087)

自然流路 SD268


465(R1040)
466(R1000)
467(R565)
468(R984)
469(R864-973)
470(R697)
471(R1036)
472(R1000)
473(R831)
474(R1043)
475(R902)
476(R946)
477(R1015)
478(R904-835)
479(R981)

自然流路 SD268

480（R909）

481（R959）

482（R969）

483（R566）

484（R872）

485（R1000）

486（R996）

487（R1036）

488（R999-1018）

489（R957）

490（R992-996-997-1000-1016）

491（R870）

492（R1027）

493（R957）

494（R994）

495（R1045）

496（R870-872）

自然流路 SD268

497(R517)

498(R545)

499(R1027·1032)

500(R864·870)

501(R864)

502(R864·865·685·871·872·900·965·973)

自然流路 SD268

503（R863・877・878・993・1010・1018）

504（R877・976・1032・1033）

505（R881・902・971）

506（R875）

507（R867）

508（R867）

509（R867）

510（R907）

511（R907）

溝 SD269

512（R1067）

513（R1067）

514（R1067）

溝 SD269

515(R1067)

516(R1067)

第2包含層

517(R789)

518(R760)

519(R847)

520(R849)

521(R927)

522(R774)

523(R1062)

524(R787)

525(R856)

526(R854)

527(R856)

528(R785)

第2包含層

529（R856）

530（R781）

531（R1063）

532（R842）

533（R845）

534（R851）

535（R840）

536（K777）

537（R1060）

538（R777）

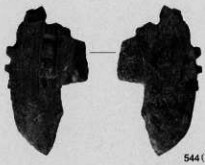
539（R698）

540（R938）

541（R938）

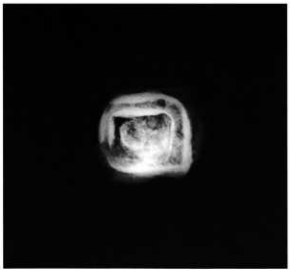
542（R698）

543（R932）


544（R852）

545（R888）

546（R888）



434(R186) X線写真

報告書抄録

ふりがな	まづくしいせきちょうさほうこくII
書名	間尽遺跡調査報告II
副書名	平成13年度、能越自動車道十砂採取関連事業に伴う調査（A地区）
巻次	
シリーズ名	高岡市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第11冊
編著者名	太田浩司、湯原勝美、パリノ・サーヴェイ株式会社
編集機関	有限会社 山武考古学研究所 〒286-0045　千葉県成田市並木町221番地
発行機関	高岡市教育委員会 〒933-0057　富山県高岡市広小路7番50号
発行年月日	西暦　2004年3月31日

ふりがな 所収遺跡	所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
間尽遺跡 （まづくしいせき）	富山県高岡市 （とやまけんたかおかし） 手洗野 （とらいの）	016202	202073	36度 45分 32秒	136度 57分 57秒	20010827 ～ 20011226	2,250㎡	能越自動車 道土砂採取 関連事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
間尽遺跡 （まづくしいせき）	集落跡	古墳～中世前期	掘立柱建物7棟、柵列1基、井戸1基、土坑23基、小ピット9基、溝60条、自然流路2条、道路1条	土師器、須恵器、中世土師器、白磁、青磁、珠洲、子持勾玉、北宋銭、木製品	

高岡市埋蔵文化財調査報告第11冊

間尽遺跡調査報告Ⅱ

2004年3月31日

発行者　高岡市教育委員会
富山県高岡市広小路7番50号

印刷所　株式会社文化総合企画
千葉県富里市日吉台1－23－12

この報告書は、環境にやさしい大豆油インキを使用しています。SOY INK